

日本永代藏 卷五

目録

① 廻り遠きは時斗細工

長崎にかくれなき思案者  
火を喰鳥も身をしりぬ

② 世渡りは淀鯉のはたらき

山崎にうち出の小槌  
水車は仕合を待やら

③ 大豆一粒の光り堂

大和にかくれなき木綿屋  
借錢の書置めづらし

④ 朝の塩籠夕の油桶

常陸にかくれなき金分限

人はそれ／＼の願ひに叶ふ

⑤ 三匁五分 曙のかね

作州にかくれなき倍氣姫  
藏合といふは九つの藏持



第一 廻り遠きは時計細工

唐土人は心静にして世の翺もいそがす。琴基詩酒に暮して秋は月見る浦に出。春は海棠の咲山をなかめ三月の節句節共しらぬは身過かまはぬ唐人の風俗中、和朝にて此まねする人愚なり。年中工夫にかゝり昼夜の枕にひどく時計の細工。仕掛置しに其子大かたに仕継其跡孫の手にわたりてやうく三代目に成就して今世界の重寶とはなれり。去ながら口過にはあはぬ算用ぞかし。こまかに心を付てみしに是も南京より渡せし菓子。金餅糖の仕掛色くせんさくすれ共終に成がたく。唐目卷斤銀五匁つゝにして調へけるに。近年下直なる事長崎にて女の手業に仕出し。今は上方にも是をならひて引りける初の程は都の菓子屋さまく心を碎きしに。胡麻粒を種として此ごとくなれる事をしらざりき。是をそもく智恵付しは長崎に纏なる町人。二年あまり心をつくし唐人に尋しに更に覺えたる人あらずして氣をなやませける。律義なる他國にもよき事は深く秘すとみへたり。胡椒粒にも沸湯を懸て渡しければ其木つき見た人もな何程か蒔てもはへ出る事なし。有時高野山にて何院とかやに一度に三石蒔れしに。此内より二本根ざし蔓て今世上に多し。此金餅糖も種のなきにや胡麻より砂糖をかけて。次第にまろめければ第一胡麻の仕掛に大事あらんと思案しすましまづ胡麻を砂糖にて煎じ幾日もほし乾て後煮鍋へ蒔てぬくもりのゆくにしたかひごまより砂糖を吹出し自から金餅糖となりぬ胡麻を升を種にして金餅糖式百斤になりける。卷斤四分にて出来し物五匁に賣ける程に年もかさわぬ内にはにて式百貫目仕出しぬ。後には是を見習ひ家毎に女の仕事となせば。此男菓子をばやめて小間物見せを出しなを才覺の花をかざり商賣に身をなし。其一代に千貫目持とはなりぬ。日本富貴の寶の津秋舟入ての有さま糸巻物藥物鮫伽羅諸道具の入れ年々大分の物なるに是をあまます。たとへば神鳴の犢鼻褌鬼の角細工何にても買取世界の廣き事思ひしられぬ。國の商人爰に集る中に京大坂江戸堺の利發者共萬を中くりにして雲をしるしの異國船になげか

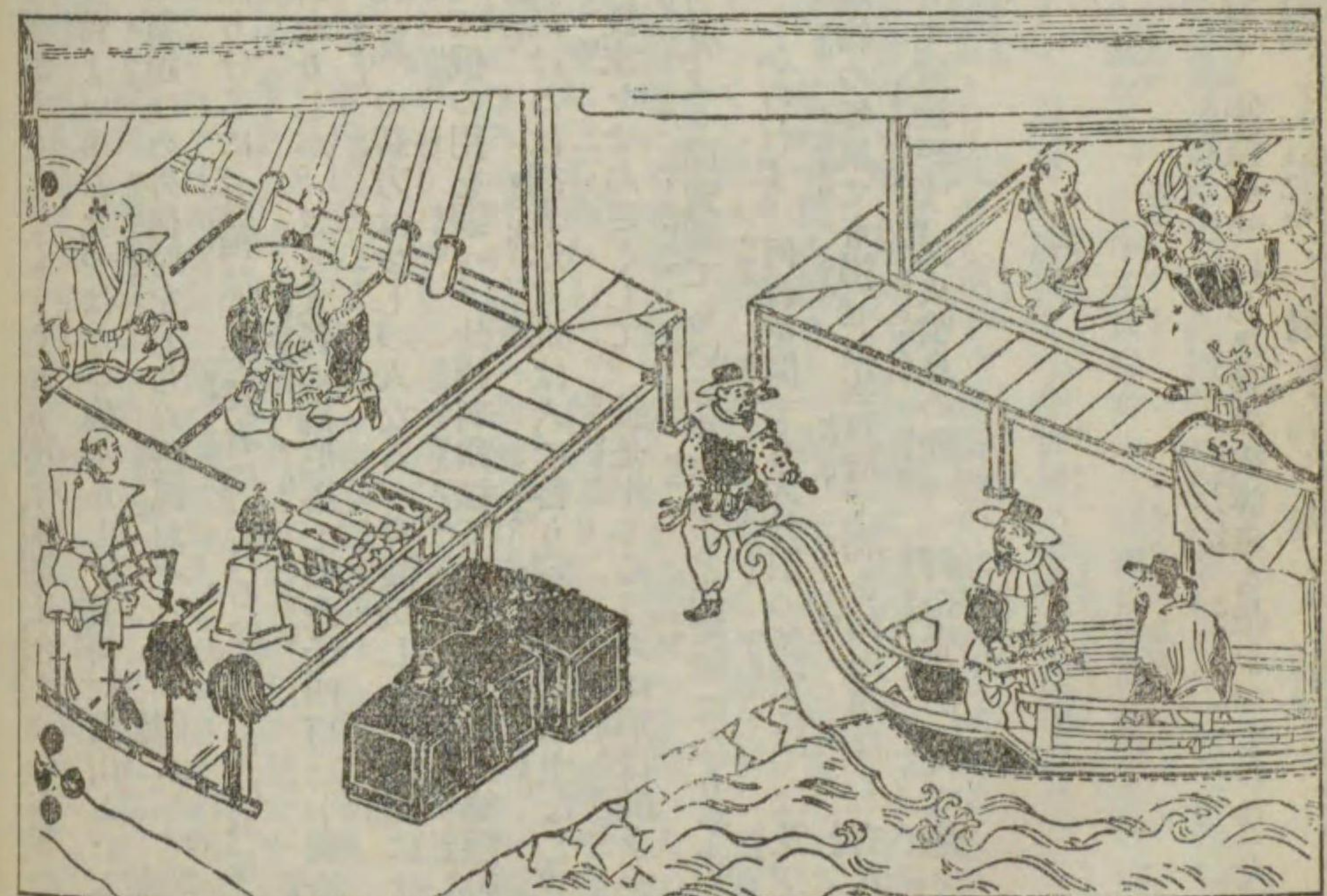
ねも捨らずそれの道にかしこく。目利をしるにたがはず金銀すぐれてもうくる手代は算用は合てつかふ事にかしこく律義に構て始末過たる若ひ者は利を得る事にうとし。寛角よい事ふたつはない物ぞかし。長崎に丸山といふ所なくば。上がたの金銀無事に歸宅すべし。爰通ひの商ひ海上の氣遣ひの外何時をしらぬ戀風おそろし。雨ふりて物淋しき夕暮に人の手代あまた寄會銘の親方分限のなりたてを語りけるに。其種なくて長者になれるは独りもなかりき。先江戸手代の咄しけるは。我らか主人は傳馬町にて纏なる身躰なりしが。さる大名の御厄落しの金子四百三十兩拾ひしより段々大銀持になられしとかや。又京の手代の語りけるは。私の親方は少しの人なるが世渡かしこく世間にせぬ事ならてはと葬礼のかし色あぼし白小袖紋なしの袴駕籠も拵て俄の用を調へ。此損料銀積て程なく東山に樂隠居を構へ人の目に三千貫目との差圖さのみ違ふまじ。擬大坂の手代云けるは拙者が旦那は人に替り定る女房家主なし。是内證の物入をかんがへ持給はぬかと思へばそれには非ず。一代後家をせんさくして。彼是年ふるうちに形は醜きをかまはず。むかし長持ひとつの思ひ入案のごとく臍くり銀三十貫目はより商賣替てちいさき紙屋も生薬屋になりやすく。今式千貫目のふり廻し其時の家の風たかうふかすも出世の町人しかられず。何れを聞ても大分限の始常にては及びがたし。皆一子細つゝ各別の替り有。此所唐物の買置勝て安き相場物の年累ても損せぬ物買置て利を得ぬ事なし。有人龍の子の式尺餘り成を金子廿兩に求めはや十年も過て少。違なりて氣遣絶す。又火喰鳥の卵一つ判金壹枚に買て是を復させ炭を喰事疑なし。いかに珍敷とて此買置國土の費なり

第二 世渡りには淀鯉のはたらき

人の翺は早川の水車のごとく夜昼の流れも七十五里につもり有て。年波のせはしき世の事筭者も是をつもれり。大節季の闇事は秋の比の月夜よりしれたる事を人皆さし當りて是を驚きぬ。前廉より商人は氣を働らかせ職人はそれく



の細工を取りそげ共必ず日敷延て當所の違ふ物ぞかし。又賣掛もたとへは十貫目の物みつ巻ふんにして三貫目と請払ひすれば世間に尾を見せず狐よりは化すまして世をわたる事人の才覚也。商ひ功者なる人のいへり。掛銀は取よきから集る事なり。いつにても手の物にして残し置。思ひの外の際入あるひは留守とてたび／＼足をはこびぬ。惣して掛乞の無常を觀する事なかれ。入相の鐘袋に心玉を籠て言葉つき奇麗に顔愧しく作りて。席敷の中程に腰掛てたばこ吸ず茶吞ず。内義笑顔して咄し仕懸るにも聞ぬふりして。看掛の鯛雉子に目を付て當年のお仕舞は庭に三石地米と見えました。いつもよりはやく餅つき鍋の蓋迄も新敷なりお娘子の正月小袖紫の飛鹿子に紅裏是てこそ春なれ私らは盆のごとく胸が踊りて松原越て門飴りの山草一葉數子ひとつ今に調もせず忪子が去年の手織嶋の袷にせめて木綿入てと思ふさへ成がたきに。こなたを見る時は長者といふて外になし。此やうなる御仕舞江戸にはしらず京にも有まじと家の宜しき事ばかり申て六かしうかゝれば。外をさし置それから濟す物ぞかし。折ふしの寒きとて掛乞箱にて酒を吞湯漬飲をくふ事必ずせぬ事といへり。又借銀の測をわたり付て幾度か年の



この押畫前項に入るべきもの

瀬越をしたる人のいへり。世の習ひにて買掛する事互に合点づくなり。たとへば新米を石六拾目の相場の時も六十五匁にしてしかも下米をわたしぬ。油も巻升式匁の折から式匁三分に仕掛られ此外味噌酒麴萬をかくのごとくなれば。年中人奉公して勝手迷惑するにつもりぬ。扱ひ方はすこしの物から濟し大分の所を明置物なり。手前に銀子のたまり有共大年の夜に入て渡すべし大かた退屈して松の内と云断りを聞届。錢の仕かけ銀のかる目もかまはず。拾ふた物の心ちして手に握ながら門にはしり出。扱もうたてや此家へ重て商いたさじと心警効立ても。商賣のならひとて年明れは又忘れた昔になりぬ。是本意にはあらず内證のならぬより思ひの外なる悪心もおこりし。爰に山城の淀の里に山崎屋とて身業の種は親代からの油屋なりしが。家職の樋の音を嫌ひ。無用の奇麗好此家の福の神は塵にまじはり給ひしに。竹箒に恐て出させ給ふにや。次第に淋しくなりて毎年銀高へりて自ら樋確の音も聞ぬやうにいつとなくともし油も絶ぬ。俄に昔の寶寺を祈る甲斐なく。手と身になりての思案何共埒の明ぬ世渡り。小橋の下に魚はあれど網なふて測を覗き弥陀次郎か跡たれて發心もならざれば。菟角身を捨てかせがば遅牛も淀車の廻り合せよくは二度家の榮へ行事もと。商の道替て鯉鮒荷ふて京通小淀の川魚名物とて。殊更に賣払ひ人も面を見しりて。淀の釈迦次郎と異名を呼て用ある方には此者をまつ程になりてから。淀の里より手振て行て丹波近江より都にはこぶ鯉鮒請て一日にかぎりもなく賣ける程に風味各別といひなして同じ鯉鮒を外の者のは買ざりき。商人は只しにせが大事ぞかし。其後さしみを作りて盛買に五分三分にても自由調へければ京は臺所の事せちかしこく人振舞にも是にて埒を明。次第に時花は其程なく分限になりて。金銀蒔ちらして兩替の見せを出しあまたの手代を抱へ此家繁昌の時昔の鯉賣の事はいひ出す人もなく。風俗も自から都めきて新在家衆の衣裳をうつし。油屋絹の諸織をけんぼう染の紋付袖口薄綿にしてみつ重ね小妻高からず裾長く。同じ羽織ゆたかに見えて曆とはいははでしれける。たとへば公家のおとし子大名の筋目あればとて昔の劔の賣喰運は天に具足は質屋に有ては時の役には立がたし。只智恵才覺といふも世わたりの外はなし。



一年の暮程世上の極として愧しき物はなし。それを油断して十二月中比過よりの分別はをそし。何となき宮寺さへ御祈念の守ふだ年玉扇の用意するなど。まして工商の家に十三月なる良つきかまへ貧乏花盛待は今の事成べし。大かた成年を越てこそ春になりての心もよけれ。薬代は覚えながらやらずに小者が布子に手染の薄色仕立て着る程せはしき内證我世なればとて面白からず京の町も様々の年の暮初春の哥案じけるなど石流玉城の風俗なれ共。かく豊なる人は稀にして悲しき渡世の人數多なり。鯉やが手代自分商に少しの米見せ出して纏五貫目の元銀大豆粉にくたきたるやうに方々に賣懸是を取集けるに小家かちなる世帯をみれば無常の發りぬ。はや極月も廿八日然も小の晦日なるにけふと明日との物前さもいそがはしき片手に下機に櫛一端是を織蔵して正月仕舞の百品にも心當。又有家に行ば古鉄買を呼入鏡臺の金物銅網の鼠取禁中能手老本爪をれの五徳ひとつ取集めてから錢百三十に直段付捨て行。夫婦人の聞共しらず借錢の分は始から濟する心入にあらず。錢五百天から降がなゆるりと取年男と哀やいたけ比の娘今いくつねてから正月じやと云を米の有時が正月よと白眼形のおそろしく門口より掛も乞ずに立歸り。又有家に入ば公事たくみなる女うすき脣を動し。こなたから米の銀さいくの御使。かるも世の習ひなるに扱もむごひ言葉つかひ。首引ぬいても今取といはれしを聞れましてから。亭主は震つかれまして今に枕あがりませぬ。四匁五分で首をぬかるゝは口惜き事と大聲あげて啼ば。とやかく論もむつかしければ随分養生めされ命があらば春のせんさくと云捨にして歸り又さる家に行ば。淺黄の上を千種に色あげて袖下につきのあたりし布子に御三寸進じて悦び。是はかみのかたき着物かな。此十七八年も冬中は人の藏に有て爰へもどりて正月をする事めたいと云所へ行かゝりて算用しませうといへば。拾八匁二分の書出しに老奴六分數ひとつと書付して然もつきの悪き銀をこなたへ懸て置ましたいやならいやになされと猫の蛋見てあしらひもせねば。是もせひなくとらぬがそんと歸る。それより又有方に行に。男は宿を出て十人並なる女髪かしら常よりは見よげに帯も不斷を仕替薄雪伊勢物語の草紙取廣げ掛をあたたと打まじり。春はどの芝居はやるべ

しと。扱もゆるりとしたる有様是の主は何かたへと問ば年寄女房が氣にいらぬとて置去にしてゆかれましてと別して笑ひかゝる。暇とらしやれ請取手は我の人のとじやれて懸帳は心に消て歸る。人程賢て愚なる者はなし。借錢の宿にも様々の仕掛者有。油断する事なかれたとは萬の賣掛する共其人と次第に念比にならぬやうに常住の心入商人のひみつ也。親敷成て能事もあれとそれは稀なり。敷銀にして物を賣共前より殘銀かさむ時は見切て是を捨べし。それにひかれて後は大分の損をする事みな人先の見えぬ欲からなり。此米屋も當座銀にして俵なしにはかり賣の四五年は仕合のかさなりけるに。有時西陣の絹織屋へ俵米賣初置替の約束も年々かさみて算用はあひなからその銀ふさかりて手まはしなりかたく。後は碓の音たえて釣掛升のみ残り。掛商ひには分別有へし

第三 大豆一粒の光り堂

鑛の土割手づからに知うち女は麻布を織延。足引の大和機を立東あかりの朝日の里に川ばたの九介とて小百性ありしが。牛さへ持ずして角屋作りの淺ましく住なし幾秋か老石二斗の御年貢をはかり五十餘迄同じ良にて年越の夜に入てちいさき窓も世間並に鯛の首柁をさして。目に見えぬ鬼に恐れて心祝ひの豆うちはやしける。夜明て是を拾ひ集め。其中の一粒を野に埋てもし煮豆に花の咲事もやと待しに物は諍ふまじき事ぞかし。其夏あをくと枝茂りて秋は自から突入て。手一合にあまるを溝川に蒔捨毎年かり時を忘れず次第にかさみて。十年も過て八十八石になりぬ是にて大きなる灯籠を作らせ初瀬海道の闇を照し今に豆灯籠とて光りを残せり。諸事の物つもれば大願も成就する也。此九助此心から次第に家榮へ田島を買求め。程なく大百性となれり折ふしの作り物に肥汗を仕掛間の草取水を掻ければ自から稻に突のりの房振よく木綿に蝶の數見えて人より徳を取事是天性にはあらず。朝暮油断なく鋤鎌の禿程はたらくが故ぞかし。萬に工夫のふかき男にて世の重寶を仕出しける鉄の爪をならべ細纒といふ物を拵へ土をくたくに



是程人のたすけになる物はなし。此外唐箕千石通し麥こく手業もとけしなかりしに。銚竹をならべ是を後家倒と名付。古代は二人して穂先を扱けるに力も入ずしてしかも一人して手廻りよく是をはじめける。其後女の綿仕事まだるく殊更打綿の弓やうく一日に五斤ならては粉馴ぬ事を思ひめぐらし。もろこし人の仕業を尋ね唐弓といふ物はしめて作り出し。世の人に秘して横槌にして打ける程に。一日に三貫目づゝ雪山のこたく線綿を買込あまたの人を抱へ打綿幾丸か江戸に廻し四五年のうちに大分限になりて大和に隠れなき綿商人と成平野村大坂の京橋富田屋錢や天王寺屋何れも綿問屋に毎日何百貫目と云限りもなく攝河兩國の木綿買取秋多少の間に毎年利を得て三十年餘りに千貫目の書置して其身一代は樂と云事もなく子孫の爲によき事をして八十八にて空しくなりぬ。死光りして折しも十月十五日淨土は願ひのまゝに野邊の煙になして。それ百ヶ日も過行ば遺言の通りに有原寺の法師を證據に御非時の上にてゆつり狀の箱を開て見しに。有銀一千七百貫目一子九之助に相渡しなを家屋敷諸道具の義は書載に及ばず。扱親類のかたへそれの所務分の書付讀しに三輪の里の姨の方へ手織の筭くつしの櫛拾ひとつ袖地の首巻桑の木の鐘木杖菅本吉野の生平の帷子添てとらすべし。同姪に病中下した敷たる立嶋の蒲團中柑子の革足袋一足。是は縫ぢめてはくべし。唐竹の煙管筒日野絹の頭巾此二色は藥師の中林道伯老へ形見なり。柿染の夏羽織袖の鼠喰を見えぬやうに継を當。寺同行の仁左衛門殿へ進ずべし。家久敷手代二人有けるに老人には置ふるびし十露盤壺とらせける。又老人にはつかひなれし秤壺丁譲りける。書置見ぬうちは頼もしく何れも開くを待兼しに。いかなく金銀の事は老父書付なくてをのを飽果手前より親類も錢銀の便りにはならぬ物と今迄酒せし涙をやめて此家を見限り我里に歸りぬ千七百貫目の銀は一代の始末にて舒しければ一門はしがれはとて沢山にやる筈もなし。此九助一生絹物肌に着ざる印は此度の改めにてしれぬ。四十二の厄年に繼の下帯一筋はじめて買れしが。少しも汚れめつかず其まゝに有ける。親仁の身の廻

りとして右の通りの外なく藤巻柄に胡桃の目貫の相口一腰熟革横ひだの巾着に。鹿の角の根付長門練の無地の印籠是ならては世間道具ひとつもなかりし。九之助是を淺ましく思ひ。はや遺言狀を背き親類手代迄もそれ／＼に銀子を分とらせけるを親とは各別の心ざしと人皆悦び出入申。むかしに替らず商賣するうちに有時多武峯の麓里二玉堂と云所に。京大坂の飛子の隠家をするべの人にそゝのかされ。爰にかよふ事つりて戀の二道をかけ奈良木辻狂ひも程なくいやになりて今の都の和國もろこし迄も引舟まかせに買つめやむ事なきを母親の歎きて。十市の里より色よき娘よびむかへしに。分里の美形を見なれたる目なれば中／＼是にてとまらぬ事を思ひとなり。母人も終に果られし後。異見云人もなくて萬事を捨て年久敷さはぎぬ。其後は下／＼迄も見かきりて。奉公外になしける。され共夫婦の中にいつ共なふ男子三人有て。家繼は氣遣ひなかりしに。いよ／＼九之助酒煙のふたつに身をせめ八九年のうちに頼みすくなき身となつて。三十四の年に頓死驚くに甲斐なく無常野に送りける九之助も身の程は覺悟して兼て書置した／＼め置しを。手代共あつまり若年の人ゝなれば跡の事共心もとなし金銀はいづれもの中へ預りかた／＼御成長の時分相渡し申べしと心底残らぬ内談石流むかしのよしみと所の人ゝ是を感じ先々書置開て見しに。皆々横手をうちける社道理なれ。有銀千七百貫目はつかひくづし。是は借銀の書置興を覺しける。京井筒屋吉三郎殿小判式百五十兩かり有。是は悪所に金子の入事俄なれば。借用して恥をすゝぎければ。義理のかり金なり。是は惣領九太郎成人の後随分かせぎ出し濟すべし大坂の道頓堀にての遊興の分の立ぬ事一つ書にしてあるなれば。是は九二郎濟すべし此外所々買かゝり纏三十貫目ばかりなれば。是は九三郎寄々に濟べし。家屋敷諸道具は所のさし引に分散して相渡すべし跡の弔ひは後家にさすべし書置仍而如件

第四 朝の塩籠夕の油桶



是やこなたへ御免なりましよ鹿嶋大明神さまの御宣託に人の身袋は動ともよもやぬけじの要石商神のあらんかざりはとの御詠哥の心は惣じて産業の道翺くに追付貧乏なしと言觸がいふてまはりしに正直の耳にはさみて悉々の銭をもあだにする事なかれ。むかし青砥左衛門が松炬にて鎌倉川をさがせしも世の重寶の朽捨る事を惜ての思案ふかし。それは西明寺の御時にて松櫻梅を切て薪やをしても爪取のある世なり。今は銀がかねを設る時節なれば中々油断して渡世はなりがたし。爰に常陸の國に其身一代のうちの分限十萬兩の鑊が原と云所に日暮の何がして棟高く屋作りして人馬あまた抱へ田はた百町にあまり家業て不足なし。すゑの里人を憐慈悲ふかく此人所の寶と村の草木もなびきける。始は纏なる笹薺に住て夕の煙細く朝の米糶もなく、着類も春夏のわかちなく只律義千萬に身をはたらき夫婦諸共にうき時を過しぬ朝は酢醬油を賣。昼は。塩籠を荷ひ夕ぐれは油の桶に替り夜は香を作りて馬かたに商ひ。若き時より一刻も徒居をせず。毎年内證よろしくなりて五十余迄に錢三十七貫延しける。此男商賣に取付て此かた一錢も損をしたる例なく年々に利得を求めたれ共元すこしの事なれば金子百兩になる事中へむつかしく漸百兩に積てそれより次第に東長者となりぬ。然も男子ばかり四人ありて何に不足もなし。此所は江戸より程ちかければ此人の頼もしき事を聞及び。長浪人の身を隠しかね。筋目有かたより狀を添られ鑊の里に行てひたすら頼みけるに此男心ざし深く藥賣の庵を渡して扶持を分置けるに。後は七八人も有て物かしましたけれど。牽人うれかたき世なればいづれも是非なく里の月日をかさねぬ。此中に森嶋權六といふ男すこしこびたる者にて學力あれば。道を忘れずかくやつかいになれる恩賞にせめてはと思ひ。四人の子共に四書の素讀をさせけるは殊勝なり。又木塚新左衛門といふ男は中むす子を進め三野色道をおしへ大分の金銀をつかはせける。宮口半内と云男は小刀細工きければ卯木の耳擗鼠の作り物仕出して明暮油断なく情に入。江戸の通り町に遣はし五六年に銀子ためけるは此時にいたりての才覺人なり。又大浦甚入といふ者は小舞小舞に氣を移し。後には自から拍子きりて人の爲程の事習ひ得ずといふ事なし。又岩根番左衛門と云

人は其さますぐれて大男鬚生て眼すさまじく。使役にしても三百石が物は見えたり。然れ共此人形に似せぬ心入。佛の道にかしこく身をせよる蚤を殺さず足下の蜆を踏す正直の頭ばかりは恐ろし。又赤堀宇左衛門と云男は此身に成ても鉄炮を殘し置。無用の盜鳥野山の狼を殺し鞘各武勇達。年中我まをふるまひける。それの人心かく替り有こそ浮世なれとかくまへ置し主は此善惡をたゞさず置しに世の牽人改めに皆く所を送りける其後つらく世上を見るに色々に成行さまこそおかしけれ書物好の權六は神田の筋違橋にて太平記の勸進讀。好色の新左衛門は十面新吉と名をよばれて田町に茶屋して日比きいたる口三味線太鼓持となれり。細工利の半内は芝の神明の前にて遊紙敷ての小間物賣。今に編笠おかし。音曲好の甚八は又九郎が芝居に入てやうく口の世で抱へられ朝から晩まで尤役につかはれ身をそれになしける。武士顔をやめざる宇左衛門は心のごとく乗馬に十数石をもたせ先知五百石の時にあひぬ。又後生ねがひの番左衛門はいつしか墨染の袖となりおのが姿も大佛のあたりにて我と心せぬ念仏申てもく口惜き身の行すゑ皆知行も取し者の死れぬ命なればはかりける。是を思ふに銘家業を外になして諸藝ふかく好める事なれば。是らも常々思ふ所の身とはなりぬ。かならず人にすぐれて器用といはるゝは其身の怨なり。公家は敷嶋の道武士は弓馬。町人は算用こまかに針口の違はぬやうに手まめに當座帳付べし。と。金の有徳人のあまたの子ともに申わたされける

第五 三夕五分曙のかね

万年曆のあふもふしぎあはぬもおかし。近代の縁組は相生形にもかまはず。付ておこす金性の娘を好む事世の習ひとはなりぬ。さるに依て今時の仲人先敷銀の穿鑿して跡にて其娘子は片輪ではないかと尋ねけるむかしとは各別欲ゆへ人のねがひも替れり澗瀨に流るゝ戀の川上に久米の更山さら世帯より。年月次第に長者となり美作にかくれもなき



藏合に立つどきて人のしらぬ大分限萬屋と云者有。一代にのぼしたる銀の山夜は此精うめき渡れど貧者の耳に人事に非ず然も奢をやめて棟も世間並に元日にも穿入の時仕立たる麻袴にして四十年此かた礼義を勤めける。世は何染何嶋が時花共かまはず。淺黄の七つ星小紋に黒餅着物は花色より外は紅葉も藤色もしらず。幾春をか送りぬ。藏合といへる家は藏の數九つ持て富貴なれば是又國のかざりぞかし萬屋はひそかなる手前者独り子に吉太郎とて有しが。十三才の時鼻紙に小杉入しを見て勘當切播州の網干に姨有しが。此許に遣はし置那波屋殿と云分限を見ならへと我子は捨て其後妹が一子を見立二十五迄も手代並にはたらかせけるに其始末すたれる草履迄も拾ひ集め。瓜種の用に里へ送るを見て氣に入。是を子分にして家を渡し相應の賑を尋ねけるに。世間と替り成程悋氣つよき女房ならば我娘にとりたきとの願ひ。世は廣し。思ふまゝなる娘有て縁組をすまし。夫婦は隠居をかまへ残らず渡されけるに。此跡取金銀有に任て少し取出手掛者を聞立。旅子狂ひを心ざしけるに彼婢約束のごとく悋氣仕出し。驛山立れば。世間憚り自から色遊びやめて酒吞て宵から寢より外はなし。亭主内を出ねばまして手代共灯の影に座を下て慰みに帳面をくり小者は地算置ならひ家の調事ばかりなり。始の程笑ひし御内義の悋氣のよき事皆思ひあたれり。惣じて親の子にゆるかせなるは家を乱すものとひなり。随分嚴敷仕かけても大かたは母親ひとつになりてぬけ道をこしらへ其身に過る程の惡遣ひする事ぞかし烈しきは其子がため温きは怨なり。此萬屋の夫婦相果られし後。婢伊勢參宮して下向に京大坂の遊山のしやれたる風俗をみならひ姿を移せば心もそれになりて悋氣いふ事初心とたしなみければ。亭主此時と騒ぎ出作病をかまへ所の養生思はしからずと上がたにのぼり若女の二道にそまりて日毎に蒔ける程にいつとなく戀にほころび針を藏に積つてもたまらず。久敷此家に住なれし金銀に憎まれ。内藏の福の神お留主なりし時やう／＼夢覺て驚き。商賣大駄に代て兩替屋に見せ付廣く。人の金銀かぎりもなく預り。あなたこなたと手まはして二度昔の身袋に取續くべき年の暮。人の内證は張物大晦日の挑灯おそろ敷。講拂も今宵一夜を越ば。明日よりは自由なりと一錢も残らず

濟帳付て算用仕舞は七つの鐘の鳴時いかな／＼ちやんが一奴なくて。若多びす賣呼込たれ共えぼしきぬ夷ならば買とて戻ける。それより間もなく門を叩て兵庫屋といへる人草袋持せきて。小判千五百兩有。來年預たしと取出し先程の利銀の内。三匁五分の豆板悪銀と出しける。此替なくて身代顯ける



日本永代藏卷六

目録

① 銀のなる木は門口の柵  
越前にかくれなき年越屋

② 見立て養子の利發

武州にかくれなき一文よりの錢屋

③ 買置は世の心やすい時

泉州にかくれなき小刀屋の薬代

④ 身体かたまる淀河の漆

山城にかくれなき與三右か水車

⑤ 智恵をはかる八十八の升極

今の都にかくれなき三夫婦をいふ

第一 銀のなる木は門口の柵

唐土文王の園は七十里四方あるとやいへり其内の千草万木の詠めも一間四方の圃地に柵を本植て見るも。我屋敷と思へは樂む心のかはる事なし爰に越前の國敦賀の大湊に年越屋の何がしとて。有徳人所に久敷住なれて味噌醬油をつくりはじめはわづかなる商人なるが次第に家榮ける。世の方にかしこく。分限に成をもくは。山家へ毎日賣ぬる味噌をいづれにても小桶俵を拵へ此費かぎりなし。時に此親仁工夫仕出して七月玉祭の棚をくづして。桃柿瀨を流る川岸に行て捨れる蓮の葉を拾ひ集め。一年中の小賣味噌を包めり。この利發世上に見習ひ。是につまぬ國もなし。程なく大屋敷を買もとめ其庭木にも花咲実をながめ。生垣も枸杞五加木を茂らせ萩は根びきに風車は十八さげに植替おなじ蔓にも取得の有物を好めり。海月桶のすたるにも蓼穂を値目にかゝる程の事ひとつも愚なる仕業なし。むかし植たる柵後には大木となつて。其家の目しるしとなる。年越屋をしらぬ人なし節分の夜も鬼の目つこは是を用ひ。一錢づゝの事も一代をかんがへ巷萬三千兩持まで取齊やねの軒のひくきに住しが惣領に幸の姫ありて。約束するに中立の人すゝめて内義とうなづきあひて京より今風の衣裳巻物を調へ。世間に笑はぬ程の頼み樽二十五人肩を拵ておくりける。親仁には角樽一荷に塩鯛一掛銀幣枚。云人の祝義おくと見せけるに。大義なる貞つきして銀幣枚よりは。かさだかにして見よきに錢三貫と申されし。是程に世間をしらね共只正直にしていま六十余歳まで暮されける。此家より頼を香のはじめとして此たび表屋づくりの普請を望めど子共のいふ事中く親仁合点せざるを。念比なる町衆を頼み又は二世までの同行衆寺の長老様まで頼みまはり。やうく願ひ叶ひ作事に取つき所にては天晴棟高くおもひのままに作り立。以前に各別かはりて毎日洗ひ琢きにひかりわたり。近在山家の柴賣百姓の出入絶て商賣俄にやみて。作り込し味噌のすて所なく。醬油ながす川もなく。手前よりあまたの賣手をこしらへむかしかはらぬ風味を出せど。



人みな悪敷いひなし是も賣とまればおから商賣かへて仕つけぬ事はあやうく。年々大分金銀へらして。買置すればさがりを請。金山のそん銀ほどなくいゑばかりになりぬ此家屋敷やうく三十五貫目に人の物にする事親仁なげき給へは。忤子いふやうは時節のよきをりから家普請をして置たればこそ此たび賣に仕合と是に無用の自慢なり親仁翔いたして四十年の分限男子六年にみなになしぬ。されば金銀はもふけがたくてへりやすし。朝夕十露盤に油断する事なかれ。惣じて見せ付のよしあし。鮫書物香具絹布かやうの花車商ひは。かざりの手廣きがよし。質屋のかまへ喰物の商賣はちいさき内の自墮落なるがよしといへり。久しく仕なれ人の出入仕つけたる商人の家普請する事なかれと徳ある長者のことばなり。かの味噌屋敦賀にてよびむかへし女房はさりて濱手にすこしの見せを出し。是にも世帯人なくてはと其所より女ばうよびしに。吉日を見て頼みをつかはしける時。角樽一荷鯛二枚錢壹貫多はおくる。世に有とてき親仁に見せける頼みの事今思ひあはせり。人々心得の有べき世わたりぞかし

第二 見立て養子が利發

和國の商ひ口とて利徳をとらぬと空誓文をたつれば是に氣をゆるし。何によらず買求むる世のならはしなり。神田の明神の前に俗性歴々の浪人身を隠して年も家も杖つく比なれば。さのみ主とりの望みもなく。小者一人つかふて一代のたくはへ有て世をなりはひにくらし徒居を外よりのとがめをうたてく。瀬戸物見せかけばかり出し置。ねだんとふものあれば百の物を百とありのまゝにいひければ。是をねざれどまげず。そもくより摺鉢九つさかな鉢十三。皿四十五枚天目二十。徳利七つ油さし二つ。三年あまりにひとつも賣ず。是を思ふに商ひ上手はあるべき事也年中の誓文を十月廿日のゑびすかうにさらりとしまふ事あり。其日は諸商人万事をやめて我分限におうしいろく魚鳥を調へ。一家あつまりて濁くみかはし亭主作りきげんに下さいさみて小番漸るり江戸中の寺社芝居其外遊山所のはんじやうな

り。上がたとちがひし事は白銀は見えず。巻歩の花をふらせける。秤いらすに是程よき物はなし人みな大腹中にして諸事買物大名風にやつて見事なる所あり。けふのゑびす講は万人看を買はやらかし自然と海も荒て常より生物をきらし。殊に鯛の事巻歩の代金巻歩つづ。しかも尾かしらにて巻尺二三寸の中鯛なり。是を町人のふんとして内證りやうりにつかふ事今お江戸にすむ商人なればこそ喰はすれ京の室町にて鯛巻歩を式匁四五分にて買取五つにわけて杜秤にかけて取などは是に見合都の事おかし。爰に通町中橋の邊に錢見せ出して若いものあまたつかへる人有。日來はし末第一の人なれど一兩式歩の鯛を調てゑびすの祝義をわたしけるに。いづれも何心もなふ夕飯を祝ひぬ大勢のわか

い者の中に。此程伊勢の山田のものとて十年切て抱へたる十四になる小者すはりし膳を二三度いたとき。食くはぬ先に十露盤置て御江戸へ來りて奉公をいたせばこそかゝる活計にあふ事よとひとりつぶやきて是をよるこぶ風情主人の目にかゝりて子細をたづねられしに。されば今日の鯛の焼物巻歩にて宵切十一なれば。ひとときのあたひ七匁九分入りんづゝにあたるなり小判は五十八匁五分の相場に仕る。算用してからは銀ををかむやうなる物なり塩鯛干鯛もむかしは生なればいはふ心は同じ事けふのはらも常にかはらぬ事と申せば亭主横手をうつてさりとは利發もの分別さかりの手代ともさへ何のわきまへもなく。箸は右の手にもつ物とばかり心えて主の恩をもしらざるにいまだ若年にして物の道理をしる事天理にかなふべきものなりと親類中をよびよせ段々物がたりして。此者を養子ふんにして我家をゆづるべしと一筋に夫婦共に思ひ入て伊勢の親もとへ相談の人つかはしける時。小者其中へまかり出いまだおなじみもなきうちに御心入の程はかたじけなし。然れども國もとへの御つかひは御無用なり。首尾せぬ時はそれほどの費なり殊に御内證の事世ははり物なれば。手まはしばかりにて大分の借金の有もそんせすよく見とゞけ申さぬうちに養子のけいやくは成がたしと申せば。なを此いひぶんをかんじ其方が心もとなき事尤なり。さりながら一錢も人の物をからずと毎年の勘定帳を見せければ有金式千八百兩としらせ。此外金子百兩女はう後寺參り金に此五年前にの

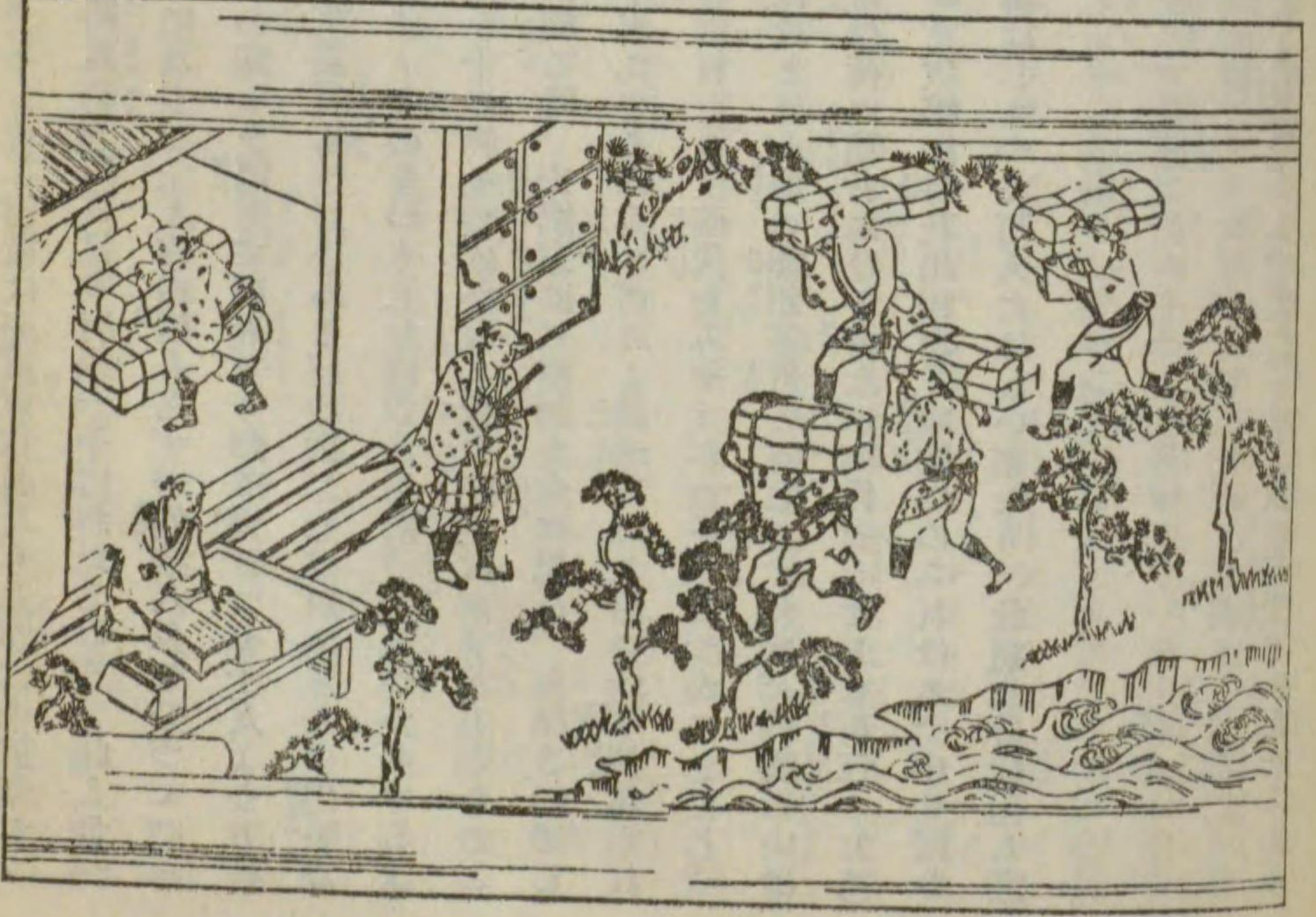


けて置けると包みながら封じ目に年月日書付置ぬ小者はをみてさても、商ひ下手なり。包み置たる金子は壹兩もおほくはなるまじ利發なる小判を長櫃の底に入置年久敷世間を見せ給はぬは商人の形氣にあらず。此心から大分限になり給はず。かしらのはけるまで此御江戸に居ながら。やう／＼三千兩の身躰是を大きな良つきあそはしける。わたくし養子になさるゝからは四五年のうち江戸三番ぎりの兩替になる事長生して見給へ。まづ夫婦衆はけふより毎日談義ある寺参りし給ひ。其下向に納所坊主にちかより散錢有程買給へ。世帯仏法ふたつのとくあり。供のてつちは道の間の外聞なれば。浮世山椒を受て小袋に入行。法談はしまらぬさきに諸人のねふりさましに是を賣べし。さてまた供つれぬ参り衆の笠杖さうりを談義はつるまで壹錢づゝにて預かれといひつかはしけるに。毎日錢まうけて主人の供もつとめける。かくのごとく万事に氣を付後には思ひのほかなる智恵を出して舟つきの自由させる行水舟をこしらへ刻昆布して目にかけて賣出し。ちやんぬりの油かはらけしほかみのたばこ入外の人をせぬ事に十五年たゝぬうちに。三万兩の分限になつて靈巖嶋に隠居してふたりの養親に孝をつくしける。いかにはんじやうの所なればとて常のはたらきにて長者には成がたし三文字屋といへる人むかし懐中合羽を仕出し。それより馬道具の仕込次第にさかへて本朝の織絹から物を調へ毛類は猩々緋の百間つゞき虎の皮千枚にても黄らしや紫羅沙都にもないものをもちまる長者とされたせられ。中橋に九つ藏とてかくれなし。これらは各別の一代分限。親よりゆづりなくてはすぐれてふうきにはなりがたし。京の室町れき／＼人の男子何も商賣なしに善五郎などを頼み大分の銀がして世をわたり此利銀毎日式百三十五匁づゝのつもりに入れるに何やうにかつかひ果しける十五年がうちに此財寶みななし江戸へかせきにくだりける。此男の器ようさ。誦は三百五十番覺え。基二つと申鞠はむらさき腰をゆるされ。楊弓は金書くらひ小荷は本手の名しん。淨るりは山本角太夫とかたりくらべ。茶の湯は利休がながれをくみ。灸作には神樂願齋もはだしてにげ枕がへしなどはいにしへ傳内に横手をうたせ連講も當流の行かたを覚え。香を利事京にもならひなし人中にて長口上もいひ

かねず。目安も自筆に書かねす何にひとつくらからねど身過の大事をしらす當所もなく江戸にくだりて奉公するに銀見るか弄用かといへは。さしあつて口おしく諸藝此時の用に立す二たび京都にのぼりてとかくすみなれし所よしと年月したしみの友をたのみて。調鞍の指南してやう／＼身ひとつくらし。不斷の不自由を松はやしの時質うけて又おく事やすし。此ふんに通るべきや人間の身はわづらひある物と老さきの事あんじける。もつ共六十年はおくりて六日の事くらしがたし。是を思ふにそれぞれの家業油斷する事なかれとさる長者のかたりぬ

第三 買置は世の心やすい時

毎年元日に書置して四十以後死をわきまへ正直に世わたりするに自然と分限になつて泉州堺に小刀屋とて長崎商人有。此津は長者のかくれ里根のしれぬ大金持其救をしらず殊更名物の諸道具から物唐織先祖より五代このかた買置して内藏におさめ置人も有。又寛永年中より年々取込金銀今に一度も出さぬ人も有。又内義十四の埋入して敷銀五十貫目其時の箱入封のまゝかさね置其娘縁に付時是をもたせておくりける人も有。外よりはこま





かにして内證手廣き所ならひ此歴々に立ならぶ分限にはあらねど。そも書置は三貫五百目なりしが二十五年がうちに。ひとりの利發にして仕出し。年々書置かきみて既にかぎりの時八百五拾貫目の有銀一子にわたしける。此人世間によく思はれ分限になるはじめは其比唐船かすゝ入て糸綿下直になりて上々吉の縛りんず一袋拾八匁五分づゝにあたり前後かやうの事は又有まじきと思ひ入。念比なる友に商ひの望みを語りて老人より銀五貫目つゝ十人より五拾貫目借て此りんずを買置けるに。その明の年大分の利を得て三十五貫目もうけよるこびの折ふし。只ひとりの男子万事かぎりにわづらひける。身躰にかへて養生するにげんきなくさまゝ心をつくしなげくうちに。人のかたりけるは歩行醫者ながら療治よくせらるゝとて引あはされ。あぶなき病人を十の物七つばかりも仕立此上はかゝしからぬとて一門の相談にて名醫に替てみしに。めたゝと悪敷なり死病に極る時。夫婦前前の薬師を念に思ひ。あひさつせし人に面目かへり見ず頼み。今は世にない物にして又薬をあたへ半年あまりに鬼のごとく達者になし給ひ此手柄かくれなし。親の身にして嬉しさのあまりに彼醫者取次のかたへ行今日吉日なれば薬代をみやうがのためにつかはしたし。こなたより頼むとあれば取次せし夫婦此事をさたして是から遣はせとは一廉の禮銀五枚とさしづすれば。内義のいはくそれは何として銀三枚と論するのちに先銀百枚眞綿二十把斗樽荷に箱看思ひの外なる薬代。くすしも再三のしんしやく取次の人も力を添銀百枚借て此醫者に家屋敷をもとめさせ。次第に時花出程なく乗物にのられける。申せばわづかの事ながら四十貫目にたらぬ身躰にて銀百枚の薬代せしは堺はじまつて町人にはない事なり。此氣大分仕出し家さかへしとなり

第四 身躰かたまる淀川のうるし

人の脚は早川の氷車のごとく常仕油断する事なけれ。瀬の流れも昼夜七十五里につもり。水の行未さへかぎりある

なれば人間一生長うおもふて短かきほどなく老の瀧立流の里に與三右衛門といへる人。はじめはわづかの家業なりしが自然の仕合見えしは。有時ふりつゞきたる五月雨の比長堤も高浪越て里人太靴をひびかせ人足を集め、此水をふせぐに小橋はつねさへ淵なるにけふのけしきのすさまじく阿波の鳴門を目前に渦のさかまく其中より。小山程なるくろき物びつとさき出。行水につれてながれしを。見る人鳥羽の車牛ならんと指さしけるに牛には大きすぎたるに心を付是を跡よりしたひ行に。渚の岸根なる松にかゝりて留りけるを立より見れば。としゝ四十八川の谷より流れかたまりし漆なり。是天のあたへとよろこびくだきて上荷舟にて取よせ。ひそかに賣ける程に此ひとつのかたまり千貫目にあまり。此里の長者とは成ぬ。これらは才覺の分限にはあらずてんせいのおのづと金がかねまうけして其名を世上にふれける。或は親よりのゆづりをうけ又は博奕業にて勝を得たり。似せ物商ひ後家を見立て入聲高野山の銀をまはし人しらはとてえたむらへこしをかめ。手前のよろしきは嬉しからず。常に分限になる人こそまことなれ。人のしはきを笑ふ事は非なり。それは面々の覺悟に有事なり。手を出して物はとらねど其心に違はざる非道の人世にまぎれて住めり。たとへは借銀かさみ次第にふりつまりさまゝ調義をするにたりがたく。自然と其家をつぶし毛頭内證に偽りなく委細に勘定を立。其上の分さんはその銀するに懸ます今時の商人おのれが身躰に應ぜざる奢を皆人の物にて昼夜を明し大年の暮におどろき工みてたふるゝ拵へして世間の見せかけよく隣を買添軒をつゞけ町の衆を舟あそびにさそひ琴引女をよびせ女ばう一門をいため松茸大和柿のはじめをねだんにかまはず見せのはしにて買取茶の湯は出さねど口切前に露路をつくり久七に明暮たゞき土をさせて奥深に金屏をひからし。外よりこのしからせ頼て賣家なるに千年もすむやうにおもはせ内井戸石の井筒に取かへ。人の物からるゝ程は取こみ。ひそかに田地を買置一生の身業を拵らへ。其外子どもを仕付銀まで取て置惣高筆用して三分半にまはる程に仕がけ戻せかたにわたしけるに。のちは我人たいくつしておのづからに濟し其當座はかなしき貞つきして木綿きる物にて通りしが。はや此



さむざわすれて風をいとはぬかさね小袖雨ふつて地かたまる長柄のさしかけ傘に竹つえのもつたいらしく。むらさきのづきんして小判は賣しゆんかと相場聞などさなからのけがねのやうに思はれける。さてもおそろしの世やうかとかし銀ならず仲人まかせに娘もやられず。念を入れてさへそん銀おほし。むかし大津にて千貫目のさし引を世界になき事とさせしに。近年京大坂に三千五百貫目四千貫目の分算もさのみ大分といふ人なく。其時代にて物こと手廣くなりぬ。以前にかはり世間に金銀おほくなつてもうけもつよしそんも有。商のおもしろきは今なり随分世わたりにそりやくをする事なけれ。有長者の詞にほしき物をかはずおしき物を賣とぞ此心のごとくかせぎて密をやむればよきに極る事なりされば商の心ざしは根をおさめてふとくもつ事かんようなり。此淀の京都の榮花を見ならひ大川を泉水に仕かけ京よりあまたのたくみをよび寄不斷の水車客をまつやらくるゝと。椀家具の音伏見までひびき。濱焼のかけり橋本葛葉にかよひ。茶はうぢに人はしをかけ酒のしたどり松の尾まで流れ此繁昌いつかつくる世あらじと見しに。有時石清水八幡宮を申おろしてあんごのとうを執行れ目出度事山となりしに。此行事はその亭主の心持大事なり。万の義をおしきと思へは忽ちむそくする事成しに。此家破滅御告にや大釜の下より大束の葎もへしざりしに。あまた人庭に有ながら是をさしくべる人もなくてあるし心にかけしより幾程なく此家絶て其名は踊哥に残り

第五 智慧をはかる八十八の升搔

世界のひろき事今思ひ當れり。万の商事がないとて我人年々くやむ事およそ四十五年なり世のつまりたるといふうちに丸裸にて取付歴々に仕出しける人あまた有。米菖石を拾四匁五分の時も乞食はあるぞかし。つらつら人の内證をみるに其家それゝに諸道具を次第にこしらへむかしよりはおしなべて物こと十分になりぬ。尤家をやぶる人もあれど。家とゝのへる人まさされり其ためしは京にかざらす江戸大坂のはしゝ明地野原まですこしの明所もなく人家

に立つゝき何して世をわたる共見えねど。五人三人の子共に正月きるもの締入て。盆は踊ゆかたも拵へはしかの子の後帯ひとしほ見よげなり亭主は日用とり或は釣瓶繩屋又は童子すかしの猿松の風車をするなどやうゝ一日に丸とりにしてから三十七八文四十五六匁五十迄の仕事するかせぬうちに。四五人口を過ていづれも身のさむからぬは是みな母のはたらきなり。同じ五人口にて一日に三匁五分づゝ入も有又は六匁つゝ入もあり。世帯の仕かた程各別に違ふ物はなし。人の渡世はさまゝに替れり。やうゝふの友すきしかねるもあれば菅人のはたらきにて大勢をすこすは町人にても大かたならぬ出世其身の發明なる徳なり。一切の人間目有鼻あり手あしもかはらず生れ付て貴人高人よろづの藝者は各別常の町人金銀の有徳ゆへ世上に名をしらるゝ事是を思へは若き時よりかせぎて分限の其名を世に残さぬは口をし。俗姓筋目にもかまはず只金銀が町人の氏系圖になるぞかしたとへば。大しよはんの系あるにしてから町屋住の身は貧なれば猿まはしの身にはおとりなりとかく大福をねかひ。長者となる事肝要なり。其心山のごとくにして。分限はよき手代有事第一なり難波の津にも江戸酒つくりはじめて一門さかゆるも有。又銅山にかゝりて俄ぶけんになるも有よし野うるし屋して人のしらぬ埋み金有人もあれば。小早作り出して舟問屋に名をとるも有。家質の銀借して富貴になるも有鉄山の請山して次第分限の人も有。これらは近代の出来商人三十年此かたの仕出したり。人のすみかも三ヶの津に極まれり遠國に分限あまたあれど其さたせざる人多しもつ共都の長者は金銀の外世の寶と成諸道ぐを待傳へたり龜屋といへる家の茶入ひとつを銀三百貫目に糸屋へもらふ事有。式拾万兩のさし引を年歩にて済す兩替屋も有。とかく都のさたは外にて成がたし。むかしの長者絶れば新長者の見えわたり。はんじやうは次第まさりなり。人は堅固にて其ぶんざいさうおうに世をわたるは大福長者にもなまさりぬ。家さかへても屋継なく又は夫妻にはなれあひ。物ことふそくなる事は世のならひなり。爰に京の北山の里かくれもなき三夫婦とて人のうらやむ人あり。そもゝ祖父祖母無事にしてその子に煙をとり又此孫成人して煙をよひ同じ家に夫婦三組しかもおさな



馴身にてかたらひをなしける事ためしもなき仕合なり。此親仁八十八。其つれあひ八十一。男子五十七其女ばう四十九。此子二十六女は十八。一生すこしのわづらひなく殊更いづれもあひさつよく其上身躰も百姓の願ひのまゝに田島牛馬男女のめしつかひ者棟をならべ作り取同前の世の中萬を心にまかせ神をまつり佛を信しんふかくおのづから其徳そなはりて八十八歳の年のはじめに誰かいひ出して升摺をきらせけるに。すなほなる竹のはやしも切絶るばかり京都の諸商人是をのぞみけるに商賣に仕合あつていよくもてはやして三夫婦の升かきとて俵物はかるにこぼれさいわひあり上京の長者此升かきにて白銀をはかりわけて三人の子ともわたりしけるとなり。金銀有所にはある物かたり聞傳へて日本大福帳にしるしすゑ久しく是を見る人のためにも成ぬべしと永代藏におさまる時津御國静なり

此跡ヨリ

人へ一代名は末代

甚 忍 記

全部八册

仁之部

義之部

礼之部

智之部

信之部

板行仕い

京

書林

二条通鉄屋町

金屋長兵衛

神田新革屋町

西村梅風軒

江戸

貞享五戊辰年正月吉日

大坂

北御堂前

森田庄太郎刊板

武家義理物語



それ人間の一心万人ともに替れる事なし。長刀させば武士。烏帽子をかづけは神主。黒衣を着すれば出家。鉄を握れば百姓。手斧つかひて職人十露盤をきて商人をあらはせり。其家業面々一大事をしるべし。弓馬は侍の役目たり。自然のためにし。知行をあたへ置れし主命を忘れ。時の喧嘩。口論自分の事に一命を捨るは。まどある武の道にはあらず義理に身を果せるは。至極の所古今その物がたりを聞つたへて。其類を是に集る物ならし。

貞享五戊辰年樓月吉祥日

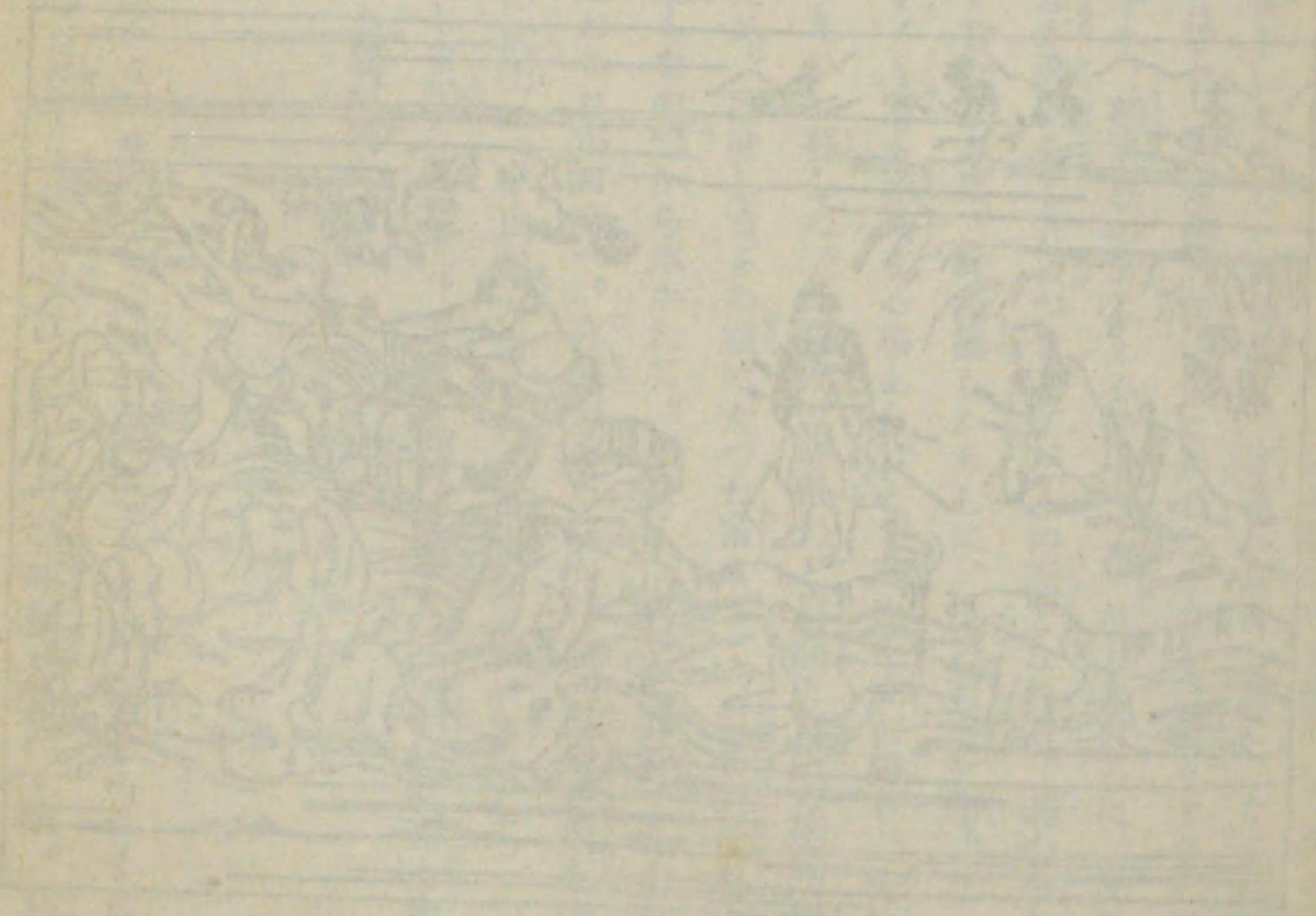
永鶴

壽松



- 五 死しなば同おなじ浪なみ枕まくらとや  
大井川おおいがわは命いのちのわたり  
一度いちどに六人むにん俄坊主にがはま

古ふるき瓢ひょうがいきてはたらく



武家義理物語 卷一

目録

- 一 我物わがものゆへに裸川はだか  
一歎い惜はみの百ひゃくしらず  
夜よるのたいまつは心の光
- 二 猿さる子こはむかしの面影おもかげ  
跡あとがさきとは妹いもうとの縁組えんぐみ  
疱瘡かそうの神かみもうらみず
- 三 衆道しゆどうの友ともよぶ衛ゑいの香炉かうろ  
都みやこを山居さんきよにする親仁おやぢ  
頼たのまれて心の外けんじやの念者ねんじや
- 四 神かみのとがめの榎木屋敷えのきやしき  
つよき人ひとにはふる狸ねこ

武家義理物語



○ 我物ゆへに裸川

口の虎身を喰。舌の劔命を断は。人の本情に非 憂るものは。富貴にして愁。樂む者は貧にして樂む。嵐は雲ふき晴て。名月院の詠。鎌倉山の秋の夕くれをいそぎ。青砥左衛門尉藤綱。駒をあゆませて滑川を渡りし時。聊用の事ありて。火打袋を明るに。十銭にたらざるを。川浪に取落し。向ひの岸根にあがり。里人をまねき。わづかの錢を。三貫文あたへて。是をたづねさせけるに。あまたの人足明松を手毎に。水は夜の錦と見へ。人の足手は。しがらみとなつて瀬を立切さがしけるに。一錢も手にあたらずして。難義する事しばらくなり。たとへ地を割。龍宮までも是非にたづねて取出せと下知する時。ひとりの人足仕合と。一度に三銭さがしあたり。其所を替す。又は一錢二錢づゝ。十銭ばかり取出せば。青砥左衛門勘定あはせて。よろこぶ事かぎりなく。其男には外に褒美をとらせ。これ其まゝ捨置ば。國士の重寶朽なん事はいなし。三貫文は。世にとどまりて人のまはり持と下人に語て通ける。此 勘聞ながら。一飯をしみの百しらずとぞ笑ひしは。智恵の淺淵を渡る下ゝが心ぞか



し。驚仰は夜のまふけに。おもひよらざる事なれば。今宵の月に集錢酒呑んと。各いさみをなせり其中に。物の才覺らしき男のいへるは。いづれもに心よく酒事さすは。我に礼をいふべし。其子細は。青砥が落せし錢に。たづね當べき事は不定なり。時にそれがしが理発にて。此方の錢を手まはしして。左衛門程。世にかしこき者を。偽りすましかるといひければ。皆く横手をうつて。扱は其方がはたらきゆへ。樂遊びのおもしろやと。盃はじめけるに。又ひとりの男。興を覺して。これ更に青砥が心ざしにかなはず。汝が發明らしき良つきして。人の鑑となれる。其心を曇せけるは。ならびなき曲者。天命をもをろし。我老母をはごくむたよりに。此錢嬉しかりしに。今の有増を聞。なんぞこれを取べし其上。母此事聞は。まともをもつて。養とも。中々常も満足する事あらじと。其座を立て歸り。母に語るまでもなく。朝にとく起て。馬の香を作りて。けふをなりあひに暮しぬ。此男は。いはねど自然と青砥左衛門聞て。其人足をとらへて。きひしく横目を付。身を丸裸にあらため。落せしまとの錢にたづね當るまで。毎日過代をいひ付けるに。秋より冬川になる迄。いかばかり難義して。世間ものをづから水かれて。やうく眞砂に成時。九十七日めに彼錢残らず。さがし出し。あやうき命をたすかりぬ。是おのれが口ゆへ。非道をあらはしける。其後正道を申せし人足の事を。ひそかに尋られしに。千馬之介が筋目。歴々の武士にて千馬孫九郎といへる者なるが。子細あつて。二代まで身を隠し。民家にまぎれて住ける。石流侍のこゝろざしを深く感じて。青砥左衛門此事を。時頼公に言上申て。首尾よく。召出されて。二たび武家のほまれちとせをいはふ鶴が岡に住ぬ

○ 癩子はむかしの面影

明智日向守の已前は。十兵衛といひて。丹州龜山の城主につかへて。やうく廣間の番組に入 外様のつとめをせしが。朝暮心ざし常の人には。各別替りて。奉公にわたくしなき事。自然と天理に叶ひ。ほどなく弓大將に仰付られ。同



心廿五人預り。武家の面目。此時具足金。拾兩有しに。はや一國の大名にも成ぬべき願ひ。生れつきての大氣。其身の徳也十兵衛今に妻のなき事を見をよび。息女持たる人。乞望の望み。彼是内證をいひ入けるに。妻は近江の國沢山。何がしに羨なる娘の兄弟ありて。いづれか花紅葉色くらべのすぐれて。あねの見よげなれば。十一の年よりいひかはして。身軀極りて。是をむかへる約束。それよりは七とせあまりも過ぬれば。世の哀れ人の情もしるべき程なり。近々呼むかへんと妻女の親のもとへ状態いたせしに。世には移り替れる歎あり兄弟の娘。一度に抱瘡の山をあけしに美なる姿の姉むすめ。白いやしげに。ざりとむかしと替りぬ。妹娘は。已前にすこしもかはらず。面影うつくしくそだちぬ十兵衛に約束せし。姉が形の各別になれば。是を人中におくりて。醜き形を耻させ。我が娘と沙汰せらるゝもよしなしと。夫婦内談して。いまだ妹は何方へも契約なければ。何となく是をつかはし申べしと。此事を語れば。更に身の事を歎かず。自此姿にて。十兵衛殿にまみゆる事は。思ひもよらず。まして此形を。堪忍すべき者あればとて。外に男を持へき心底にあらず。妹は我等がむかしに風俗もかはらず。よろづにかしこく。心ざしもしほらしく。生れつきぬれば。何國に行ても二親の御名はくださし。是を十兵衛殿へおくらせ給へ。我等は兼て出家の願ひ。諸佛をかけて。偽なしと手馴し唐の鏡をうちくだきて。浮世を捨る誓ひを立しを聞て。父も母も感涙袖にあまりて。しばらく思案せしが。角いひ出して。歸らぬ事ぞと妹に何の子細もなく。龜山におくる。縁付の事を申渡せば。何とも合点まいらず。姉君より先立て。道の遠へる所なり。姉の御身かたづきて。後ともかくもと申あげける。尤至極。それは世間の順義ながら。姉はつね々々出家の心ざし深く。思ひこめしゆへ。菟角は望みにまかせ。近々に南都の法花寺につかはしける。そのかたは龜山におくる也女にうまれても。其身の仕合有。明智十兵衛といへるはまづ武藝人すぐれて。殊更理にくらからねば諸事に埒明にして。一生つれ添。夫妻の楽しみ深し。しかも次第に出世の侍なれば。我々老後のたよりとも成ぬべき人ぞと。さまざまいひ聞せるに女ごゝろに嬉しく。親達の仰に

まかせ。吉祥日をあらひ相應よりは美く敷仕たて。龜山におくられる。十兵衛も縁のはじめを祝ひ。松竹の臺の物を調へ救の盃事までも。振分髪に見し姉むすめとおもひしが。其後寢間のともし火ちかく。互に面を見合せし時。十兵衛むかしの脇貞に氣をつけて。其時は此女にとがむる程にはあらぬ。瘡子ひとつありしがおとなしく成て。それもぢぢて取うせけるかと。いはずして。耳のほとりをみしに。娘もはや心を付て是にほくろのましますは。わたくしの姉君なり。うるはしき御姿瘡瘡にてかはらせ給ひ。ざりと女の身にしては。御いとほしき事なり。さし置て自の縁組は逆なると断申せど。二親の命をそむくなれば。是におくられけるも。心懸りのやむ事なし。今おもひあはせば。こなたさまの御約束は姉君にうたがひなし。いかにしても道のため。ざる事なれば何事もゆるし給はれ。わたくしはけふより出家と守刀にて黒髪切を留て。其方形をかへても。世間濟まじ。人しれず内證にて。それがしが分別あり五日に歸るまで待給へ。武士の息女の心底と深く感じて。それより二たび白をも見ずに。隔て。里歸りの時。段々状態にするし。右もらひしは姉なれば。難病は世に有ならひ。たとへむかしの形はなくとも。是非におくらせ給へ。一命にかけても夫妻願ひの所存。とに此たび妹の心入。女ながら道理につまりけると。心中の程いひやりしに。親里にも此事満足して。十兵衛願ひにまかせ。また姉娘をつかはしけるに。うちとけて。ふびんをかけ此中長くもかなと祈ける。女はひとしほ男の情をわすれもやらず。萬心にしたがひぬ。此妻。美女ならば。心のひかるゝ所も有に義理ばかりの女房なれば。只武をはげむひとつに身をかためぬ。此女かたちに引かへて。こゝろたけく淵なき中にも外を語らず。明暮軍の沙汰して。廣庭に眞砂を集め。城取せしが。自然と理にかなひて十兵衛が心の外なる事も有て。そもく此女武道の油断をさせずして。世に其名をあげしと也



◎ 衆道の友よぶ 衛香炉

京都將軍ひがし山殿御時。世のもてあそひ事。はじめて取立させられ。萬人花車風流になりてゆたかに暮しぬ。中にも名香の煙を好せ給ひ諸國より集りて。六十種の名のみおもしろかりき折ふし霜夜の更行まで。此木の御沙汰有しに。明がたの嵐につれて。聞も馴ざるかほりに。いづれも心をすまし給ひ御屋形のうちをたづねさせられしに。御門をはなれて外なれば。丹波守利清に仰付られ。此ゆかりいかなる方ぞ。たづねまいれのよし手まはりの侍二人めしつれて。其匂ひにひかれて行に。柳原はるかに過て。賀茂の川原になれば。次第にかほりも深く。淺瀬をわたり越しに。十一月すゑの六日の夜。いつよりは闇く。物の色あひも見えず。星影のさゞれ水に移り。是をたよりにむかふの岸にあがれば。汀の岩の上に簑笠着たる人の。香炉を袖口に持添。氣を静にして。座したる風情の心にくし。いかなる事有てかく独はおはしけるぞと問けるに。たゞ何となく千鳥の音をのみ聞とこたへぬ。さりとは替りたる境界。是各別の樂しみ。只人とはおもはれず。いかなる御方とたづねしに。僧にあらず。俗にあらず。三界無庵同前にて。六十三に成ける我。いまた足も立けるといひ捨て。岡野邊の並松わけて立歸る。扱も氣散しなる返答やと。なをしたひ。それがしが。たよるは其木のゆかしく。まいるなり。何といへる名香ぞと聞しに。むつかしや老人はしらす。すがりたれども聞分給へと。香わたして行方しらす成にき。利清立歸りてあらましを申あげしに。其身の取置うらやましく。覺しめされて。其人を色くたづねられしに。更にしれざる事をほいなくおぼしめされ。彼香炉を衛と銘をうたせられ。名物と成ぬ。其比關東侍の一子とて。美形都の花にまさり櫻井五郎吉といへる人。今年十六にて。姿ゆへめし抱られ。近ふ御前を勤めけるが。衛の香炉見しより物おもふ氣色。人も見とがめける程に包がねしを。有人ひそかに聞しに。はじめの程はいはざりしが。いつとなく次第よはりの身と成。死は言葉を形見と語りし。此香炉のぬしと

は。兄弟の約束深く出合しに。我出世のためにならずと。古里を出て。都のかたにのぼられしを。わすれもやらず。いとしきに其跡をしたひ。此御家に住事。もし其人にあふ事も有なんとおもふ折ふし。香炉は縁に見しりて。たづぬる事の成難き。病氣におかされしは。是非もなき我身と。袖に玉ちる泪川。しばしもかはく事なし。此哀れを問人は。同じ小姓中間の樋口村之介といへる人なるが。つねにも情深く語りあひしが。自然の事もあらば。よき友ひとりうしなひけるをなげきぬ。かくて日教ふるうちに五郎吉頼みすくなく成て。息も絶々\の時にいたりて。又もなき無心を申出しぬ。我相果ての後彼人にたづねあひ給ひて。其身それがしに替り。兄弟念比かへすくも頼むといへり。此義は少ししんしやく成事ながら。何事も命かけてと。申かはせし義理にせめられ。此事請合ければ。嬉しけに笑て。是を見をさめの貞せかはりて。つるに空しく成ぬ。生死は世のならひとて。なげく人も有。又身にかゝらぬ人は。そこ／＼にかなしみて。鳥部山の夕煙となし。朝は白骨と消ぬ。世にこれほどはかなき事はなかりき。五郎吉がなき跡の事病家の反古までも取隠して。念比に仕廻それより村之介は。五郎吉が遺言にまかせ。千鳥を聞し隠者の事をたづねしに。今出川の籾垣のほとりに。わづか成隠家。組戸さし籠て。夢の心にすみなせるうちにも。東に別れける五郎吉が事ども。忘るゝ日もなく。けふは時雨で。ひとしほ淋しき折ふし村之介ひそかに入て。五郎吉最期の次第を語れば。随分おさめたる。身を取乱し。是ばかりは世の偽になれかしと。男泣の有さま。みるめも。ともになげかしく。しばしは物語すべき事もやみけるが。いはねば五郎吉が草のかげなる恨もうたてく。此隠者の佛を。つく／＼と見しに。六十にあまれる人の形もいやしかるに。若念の契りを結ぶは何とやはづかしき事にぞあれど。死人といひかはせければ。是非なく子細をかたり。五郎吉になりかはりて。今より兄弟分と覺しめして。かはゆがらせ給へといへば。此男なげきの中に驚き。是はおもひよらざる契約ゆるし給へと。中／＼同心せざりき村之介申出しての赤面。さては一分立難しと身を捨る覺悟に。菟角は五郎吉が申残せしにまかせ。又戀をとりむすび。世に長く語りなくさま



んと。言葉をかためて。其後は夜毎にしのびて通ひぬ。わけなき事を頼まれ。心にはそまざれども義理ばかりの念友。村之介が心底まで成哉と是を感じぬ

④ 神のとがめの榎木屋敷

江州淺井殿の時。屋形町のすへに。古代より枝葉のさかへたる榎の木あり。むかしは神やしろ立せけるといひ傳へて。石の玉垣のかたち残り。所はんじやうなれば。人家立つてきて。是も榎木屋敷とて。藏の奉行役諸尾勘大夫といへる人。申請て新作りいたせしに。神のとがめにや世間はしづかなる夜ふけて。醒き風吹かよひ。人の身にあたるいなや。むつける程に草臥つきて。爰に住居の堪忍しかね。子細を御断申あげ。此屋敷をさしあげける其後。是を望みて住しに。間もなく。病死又は悪風にたいくつして。幾たりか替りて今は明屋敷と成て。門は唐葱閉て。みねども此内すさまじ。有時若手の武士ども密合かたりける次手に。榎木屋敷にすむ人なきと咄しけるに。此座に長濱金藏といへる人の申されしは。いかに神やしろ跡なればとて人にたより給ふ子細なし。それは住る人の愚なるゆへなりと。世の人あさましく申ぬ。其座に以前此屋敷に住たる人の親類内縁の方も有て。金藏言葉を耳にかけいづれ。貴殿はあれに住ながらへ給はんとすこし氣をもたせければ。申出して是非に及ず。老中へ内意を申せば。望むを幸に早速給りける金藏此屋敷に移りて第一。此榎木曲物成と枝葉をもがせけるに。神のとがめもなかりき。是を思ふに惣じて。かやうの事は。あるじの氣のつよきにしたがひかならずやむ事と物になれたる人の語りぬ。有雨夜に金藏家來集りて世におそろしき物語にて明しぬ。此内のひとり雪隠に行をみかけて。才覺なる小坊主ふるき靱をさげ出。壁のくづれよりさし入。其ものゝ腰をなでけるに。此におどろき。にげ歸るをおかしく。其後たび／＼おとしければ。誰がいふともなく。毛のはへたる手して。爪といひふらして。暮ては自由に行人絶て。是も又氣味の悪き事ぞかし。是をしつぎ

る人外よりきたりて。かの雪隠へ行しに。くだんの靱片隅より踊出。生たる物のはたらき。をの／＼不思議を立。ためしみるに人さへ行ば。靱の狂ひ出るを。段々申あぐれば。金藏何ともをはず。扱は是にて誰か。はじめの程腰を撫ける人のをぢぬる心たま。是に入て。かくは動きける。をのれは矢がらを入る役なるに無用のはたらき。其科今おもひしれと。焼捨けるに。煙の中にて寐期わかまへ。狂ひぬ。物のあやかし。かやうの事ぞと皆人にあんどさせて。此屋敷にて八十余歳まで。堅固に勤めける。金藏人中の一言その義理たがへず。爰にすましかけるは。天晴武士の一心とぞ。世の人ほめにき

⑤ 死は同じ浪枕とや

人間定命の外。義理の死をする事。是弓馬の家のならひ。人みな魂にかはる事なく。只その時にいたりて覺悟極るに。見ぐるしからず。其比攝州伊丹の城主。荒木村重につかへて。神崎式部といへる人横目役を勤めて。年久しく。此御家をおさめられしは。筋目たゞしきゆへなり。有時主君の御次男。村丸東國夷が千嶋の風景御一覽の覺しめし立。式部も御供役仰付られしに。一子の勝太郎も御供の願ひ叶ひて。父子ともに其用意して。東路にくだりぬ。比は卯月のすへ日救かされて。けふの旅泊は駿河なる嶋田の宿に兼て定しに。折ふしの雨ふりつゞき。殊に其日は佐夜の中／＼をだやみなく。菊川わづかの道橋も白浪越かと思えて。しかも松吹嵐にすへ／＼の者は袖羽合の裙かへされて。難義の山坂越て。金谷の宿に人救を揃へ。大井川の渡りをいそがせられしに。式部は跡役あらため來て。川の氣色を見渡し水かさ次第につのれば。けふは是に御一宿あれと。様さま留まいらしけれども。血氣さかんにましまして。是非をかんがへ給はず。御心のまゝに越よとの仰せいづれも大浪に分入。流て死骸の見えぬもあまたにて。渡りかゝらせての御難義。跡へかへらず。漸先の宿にあがらせ給ひぬ。式部は跡より越けるが。國元を出し時。同役の森岡丹後。一子



に丹三郎十六歳成がはじめての旅立。諸事頼むとの一言。爰の事なりと我子の勝太郎を先にたて。次に丹三郎を渡らせ。人馬ともに吟味して。其身は跡よりつゞきしに。程なく暮におよび。川越瀬を踏透て。丹三郎馬の鞍かへりて。よこ浪に掛られ。はるか流れて沈み。是をなげくにはや行方しれず成にき。しかも岸根今すこしに成て。ことに歎深し。我子の勝三郎は子細なく。汀にあかりぬ式部十方にくれて。暫く思案すまして。一子の勝三郎をかづけいひけるは。丹三郎義は。親より預り來り爰にて寂期を見捨。汝世に残しては丹後手前武士の一分立がたし。時刻うつさず相果よといさめければ。流石侍の心ね。すこしもたるむ所なく。引かへして。立浪に飛入。二たび其佛は見えずなりぬ。式部は暫く世を觀じ。まことに人間の義理程かなしき物はなし。故郷を出し時。人もおほきに我を頼むとの一言。其まゝには捨がたく。無事に大川を越たる一子を態と寂期を見し事。さりとはうらめしの世や。丹後は外にも男子をあまた持ぬれば。歎きの中にも忘るゝ事も有なん。某はひとりの勝三郎に別れ。次第による年のすへに何か願ひの樂みなし。殊に母がなげきも常ならず。時節外なる憂別おもへばひとしほかなしく。此身も爰に果なんと思ひしが。主命の道をそむくの大事と。面に世間を立て。内意は無常の只中を觀念して。若殿御機嫌よく御歸城を見届。何とな病氣にして取籠り其後御暇を乞て。首尾よく伊丹を立のき。幡州の清水に。山ふかくわけ入。夫婦形をかへて。仏の道を願ひ。それまでは子細を人もしらざりしが。勝三郎寂期の次第。丹後つたへ聞て。其心ざしを感じ。是も俄に御隙乞請。妻子も同じ黒衣。式部入道の跡をしたひて。其山にたづね入憂世の夢を松風に覺し。泪を子どもの手向水となし。ふしぎの縁にひかれて。ぼだいに入し山の端の月。心の曇ぬかたらひ。たぐひなき。後世の友。おこなひすまして年月をおくりしに。其人ものこらず。今又世に有人ものこらず

武家義理物語 卷二

目録

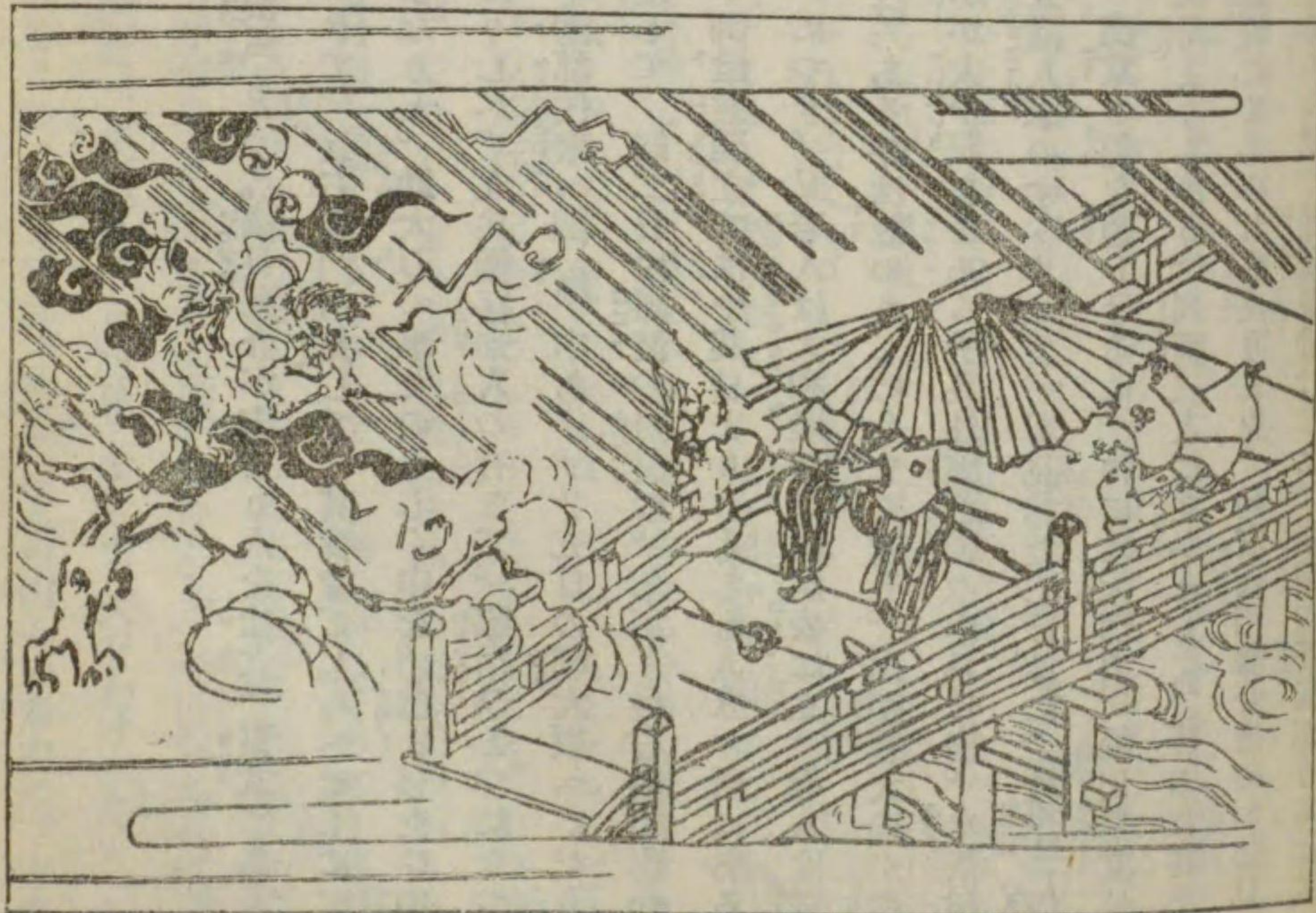
- 一 身軀破る風の傘  
阿波の鳴渡に氣が立浪  
うらみは富士を磯貝氏の事
- 二 御堂の太鼓打たり敵  
東武より飛がごとく鷹書内見  
露は花屋が門に命の事
- 三 松風計や残るらん脇指  
身がな二ツ月の夜雪の夜  
兵者もよはものも御用に立事
- 四 我子をうち替手  
相手をよくもきれとの文珠  
分別の外の屋継の事



○ 身軀破る風の傘

幾春か身をいはる。若松の城主。加藤肥後守殿に勤て。本部兵右衛門とて。武の道けなげなる人なりしが。侍は住居定がたし。奉公さかりの花の時。俄に落花のごとく。會津を惣並に立のき。浪人ほどかなしきはなし。妻子はかゝる節の難義。又身軀をかせぐうちに。兵右衛門病死をなげき。物領はおもふ子細有て。一子兵右衛門と申せしを。三番めの弟。武州にて礮貝何がしの家を繼て。礮貝藤兵衛といへり此かたへ養子につかはし。其身は高野に隠し。二尊院の門前に。幽なる草の庵。うき世の月を余所に見なしいつとなく胸も暗て。廟前の杉むら。心の針のとがりをやめて今は千本槇の露をはらひ觀念の朝勤。夕は岩上にたゞずみ。後の世を願へるの外なし。さて名を岡本雲益とあらためける雲益さしつぎの弟。本部喜介と申せしは。蜂須賀の家有しが。眼病氣にて暇申請。阿州の片里に引籠。世を際にして暮しぬ。一子は礮貝藤介といひて。是も窄人分なり。喜介弟は出家して。同國眞言寺源久寺にすはりぬ。又源久寺弟は。本部実右衛門と申て。是も阿州に安留次左衛門といへるは。親兵右衛門と古傍輩なるゆへ。其よしみにて。是にかゝり人と成て。年月爰に暮しぬ。実右衛門有時。新橋をわたり行に。折ふし雨風はげしく。前後も見へざりし時に。むかふより嶋川太兵衛と申人。是もわたりかゝりぬ。兩方ともに。さしかさかたぶけて。行速ひしに。橋の中ほどにて実右衛門傘を。太兵衛さしかさに振あてしに。太兵衛。是は慮外とつきのけしに。実右衛門慮外といはれては。斷りも申されず。其方何者にて。すいさんなる言葉といふ。すいさんとはいかに。みれば安留次左衛門が家來のふんとして。詫て通るへき事本意なるに。かへつて雑言申段。爰は堪忍なりがたとし。ぬけばぬきはせて。しばらく切結び。実右衛門運命つきて。終にうたれける。其時節礮貝兵右衛門。同名藤介此兩人。太兵衛をねらひしに。又若松の御沙汰にきはまり。うつ事成がたく。是非におよばす。所を立のき武州にくたり同名藤兵衛方に居て。

國元の様子。聞合せけるに。太兵衛事。すこし手を負御奉公成がたく。御斷申上弟惣八に家を繼せ。其身は遠所の山里にひつそくして。名を本立と替て。かしらも散切に成。醫道を心がけ。むかしのごとく。榮花の望み絶て。世のまじはりをやめられける。兵右衛門は江戸に罷有うちに。世間の事どもうち捨。たゞ一念に伯父の敵うちたき願ひばかりに。朝暮武藝はげみ。毎日兵法の師の許に相勤めけるが。何とぞ武運にかなひ。嶋川太兵衛にめぐりあひたき諸願をかけ。しのびく阿州の内證を聞に。國を出ざれば。何とせん方つきて。氣をなやみしに。其里の人。年ごろ別してかたり。殊更内縁のよしみ成けるが。長病にて。所の療治つきて。次第に。たいくつの身と成。上方の名醫にあひて相談有たき願ひ。一門同心して。養生のため大坂にのぼれば。本立も是を見捨てたく氣づかひ絶ざる身なれども。常く念比の義理をおもひて。病人はしんしやくすれども。船中の氣分心もとなしと付添大坂に着船して。南の御堂の前借座敷をとのへ。あるじは四季折くの草ばな商へる見せにして。これも心の慰みなれる所とて。萬に氣を付。本立も随分ひそかに町ありきして。人しれず逗留いたせしに。右の子





細をしる人は無用の沙汰しける

○ 御堂の太鞍うつたり敵

悪事四十里をはしりふね。大坂の様子。阿波に聞へて。鳴渡の浪風もなく。磯貝藤介が方より人を仕立。東武にありし兵右衛門方へ文通せしに。此状貞享四のとし。五月十四日につきて。兵右衛門内見して。其夜身ごしらへせしに。舟越九兵衛といへる浪人聞つけて。兼て語りしは。かゝる時の事なりと。助太刀の事たのもしく申を。色まじたひ申せど。是非同道といひかゝつて。ひかざれば。よろこび兩人のぼりしが。九兵衛存知入の有とて。脇指ひとつになつて。家來ぶんにて。道をいそぎ。廿四日に京都に入て。右の段を御郡代衆へ御断申あげ。廿五日の朝大坂へくだり着。成ほどひそかにたづね見廻はり。六月朔日に藤介阿筋を発足して。同二日に難波の舟着に。あがり兵右衛門藤介に出合。是はといさみをなし。兩人敵打の御帳に付て。首尾よく御屋敷罷立てはや其日より。もしも人立の所にあるべきかと。道頓堀の芝居の果を心がけ。老人は嵐三右衛門が木戸につき。又老人は大和屋甚兵衛が表に立。老人は荒木與次兵衛が追出し太鞍の鳴しまふまで。田舎らしき人に氣をつけ。あるひは笠のうちに心をくばり。出羽義大夫が淨るりのはてくち。又大夫が舞を聞人竹田がからくりの見物。浦水が太平記をよめる所其外濱芝居の小見せ物。水茶屋の客までを吟味して。それより神社の遊山所を見めぐり町筋の立横人家のすへへまでも見わたしけるに。此津の廣き果しなく。いつあふべきも定がたくなを又濱邊へをさがし。御堂の前を通りけるに。物には天理有。嶋川本立。其日國元にくだりふね。幸ひの日和。夕暮の風待人もありて。又舟よりあがり。同道三人に立かえりぬ此ふね其まゝに出行。國里に歸り居ば。時節を待ともしれがたし。菟角は道理にせめられ立戻りしを。兵右衛門藤介ほのかに見付しがしかとはいまだ極めがたく。衆更つれたる人々の迷惑をかへり見。足場見合けるに。借宿の花屋がうちに入

ぬ。いよ／＼見定て付こみ。おどりあがりてよろこび。けふこそ恨みの晴し所なれ。すこしもせく事なけれ。爰は往來のしげし。外の人にあやまちなきやうにと申合出るを待に。ひさしければ。旅宿にふんごみうつべきといふ。是も病人をあはれみ。いましばらく待請大道にしてうつべきと。あなたこなたに立かくれ。とやかく内談をするを。近所の町人ふしぎ立るも有。さる小家に入て。我／＼は待人あるよしひて。水などもらひ。けふの暑さをしのぎ三人とも立替り／＼様子見せなる草花に心をよする風情して。敵はやがてしほる／＼けしのごとし。我等はさかりの菅浦太刀。風に花をちらすべしと。おもふ心の色外に見えて。後には亭主もいな事とおもひ。目を付ぬれば。すこしまた南のかたへよげて。待に日影もにしかたふき。お八ツのしらせ太鞍うちぬれば。浮世をぬすみたる男かしらは夏の夜の霜をいたゞき。もじの肩衣かけて行も有。姫のいやがる祖母もひとつれに七八人づゝ。置綿手拭あふぎに珠救を持添。後世の場にも。座をあらそひ。我おくれじといそぐ足をとおかし。これらは皆行先ちかく仏を頼むも断なり。若盛の男の隙ならば。あそび所も有に。無用の御堂まいり。子細らしくは見へてから。偽りのやうにおもはれける。世はさまざまと見しうちに。大勢の中にまぎれて本立もまいりける。三人氣をつけて。おさんだんなかばに。あまたの人を見わけしに。仏前のをそれもなく。柿の夏つきんをきたる。あたま。來迎柱のじゆんにちろりと見へけるを。北の縁がはにまはりて。能よく見とゞけしに。嶋川太兵衛にまきれなし。をの／＼よろこび客殿にまはり。御寺あづかりの人に右の内通して。さはぎ給はぬ心得のためを申せば。神妙なる付届を感じける。さりながら御仏前にての事は御用捨と。たのまれければ其段は請合。然らば裏御門はさしかためられ。門ひとつの出入と申けるに。其段はまた請合て。はやうらの門はかためをかれぬ。三人は御門前の町に出。三方へ手分をせし。先兵右衛門はひかしへの道筋あれば。其かどにひかへたり。藤介は北のかたの門をかため九兵衛は南の門につきて。是ぞと待請し有さま。天をかける鳥も。のがるべきやうなし。さあ。今はつるところふべき物なり。あなかしこの。声きけば。惣立に人の山みゆる中に。本立



あみ笠かぶり出るを。兵右衛門かけつけ。其方は嶋川太兵衛と見請たり。伯父のかたきやらぬぞと。言葉をかくれ  
 ば。本立も聞もあへず。心得たりと。笠ぬぎかけ手ばしかく。刀拔あはせて。わたしあひぬ。本立身かるく。天晴は  
 たらきけれども。兵右衛門利の劔もつてひらひて。切込兩方ともに。はや業手をつくしてたゝかふ。時に本立あみ笠  
 の緒。首筋にかゝりて。すこしははたらきの。じやまにもなりぬされども中を飛ごとく。かひなく切むすふ所へ  
 藤介かけ寄。切つけ是に大かた利を得て。たゞみかけて切立ける。時に所の町人おどろき。商賣の見世。戸をさし。  
 さはぐ九兵衛是に下知して。さはぎ給ふな。敵うち成ぞ。只今首尾よく。うちとめたるを。をのく見物し給へと。  
 扱も落付たる男なり。其内に太兵衛を切ふせ。心。静に。とどめをさし。其身をみれば。深手淺手二十一ヶ所ざりと  
 は是まではたらき。六月三日の入相の鐘に御堂のまへの花は散けると詠めし。兵右衛門は今年廿六才。血氣さかんの  
 時を得たり。藤介は十八才前髪ざかりの美兒。薄手のちしほを自ぬくひ。太刀を杖につきながら。腰掛にやすらひ  
 三人良を見合。息をつぎて。礼義のべ。諸事のつめひらき見るさへ武士の本意といさめば。其身の嬉しきさきりもな  
 く。先は町に入て養生いたしぬ。藤介一ヶ所。兵右衛門は五ヶ所の疵。平癒して當分何の子細もなく高野の方へ立ける

③ 松風ばかりや残るらん脇差

人の心ざしほど各別。透ひ有物はなし。信長公の御時。すのまた川屋敷とて。夏を棟とつくらせられ。風の松涼しく。  
 御かよひ舟。御寝間のほとりまでさし入。御物好のおもしろく。絹もちの障子の中に。京女藤のうつくしきを。あまた  
 めしよせられ。折節の御遊興所にあそばしける中にも月の夜。雪の夜とて。二人の女郎。美形によつて。ひとしほ  
 御ふびんのかゝり。兩の御手に花紅葉の御てゝあひ。春秋も是ゆへ。御樂しみ深かりき。是をおもふに。兩人姿をあら  
 そひ。御奉公。仕がちの心も有べき事なるに。世間とは各別の事にして。中々御機嫌のよろしきを。はぢらひ給ひ。

殿たびかさなりて。御入ましますば。俄に作病して。雪の夜は。風をうらなく申上れば。是をいたはり給ひ。月の  
 夜に入せ給ひ。明暮御前よろしければ。身にさはりあるなどを申て。取籠りわざと御機嫌をそむき。兩人ともに同じや  
 うに。年をかされて。御奉公をつかふまつる。女のかゝる事はためしもなき心底。前代未聞の名女なり流石俗性いや  
 しからず。雪の夜は。西國の國守のむすめ。月の夜はさる貴人の息女なるが。二人ともに子細あつて。町人の子分に  
 成て。御奉公には出られしとなり。是をみるに。筋目ほどはつかしきはなし。いやしき者の娘は。無用のりんきに我  
 氣をなやまし人の身をいため。又の世のくるしみもかまはず。悪心胸に絶ず。これらは。なさをかけても。うるさき  
 所あり。又松風とて尾筋鳴海あたりの濱里に獵人のむすめなるが。浦そだちには。めいようるはしく。古代須戸の蟹  
 の松風の女にはをとるまじき風義なれば。いやしくも御前勤めを望み。是も川屋敷に有しが。ちかくはめされながら。  
 つゝに御枕をなをさぬ事を恨み。菟角雪の夜。月の夜が。あしくも。申ての事ならんと。女心に思ひこみ此二人をね  
 らひ。時節待うちに年めづらしき明ぼの御謠初。二日の夜。又川屋形に御成とて。嶋臺かざりて。御酒宴かさなり。  
 女中もつわよりは。さ。す。す。前後しらすりき松風今宵とおもひ定め。萩の戸のかげにて身をかため。うち  
 かけ姿は人並に。國づくしの間に居ながれて。夜のふけゆく首尾うかゞひけるに。此女の立ふるまひ。ともし火の影  
 に見させられ。局がしらの梅垣をひそかにめされ。あの菊なかし衣裝の女。懷中に子細あり。とらへて兪義仕れと  
 の上意を請て。松風といへる女を。ばたくと取まき。懷をさがしけるに。あんのごとく肌刀をさして有。是は曲  
 者なり。いかなる存念あつて。かく御吟味の御前へ双物はさし給ふぞ。是非いはずしてはおかじ。身の難義にあひ  
 給はぬさきにと。いろくせめても。無念とばかりいひて。中々申さるゝ氣色はなし。是にはやうす有べしと。此  
 女につぼねをさがして見しに。みだれ箱にうち入て書置あり。次第をせんさくすれば。月の夜雪の夜。ふたりの女福  
 にうらみをふくみ。命をとるべきおもひ立。さりとはをそろしき女と沙汰極りて。みせしめのため。御仕置になりぬ。



是我心からの悪事にて一命を捨ける。其後彼女の執心かよひて。人をなやませ女中は難病請て。是を歎きぬ。いづれの女臈にも頼に。鹿の袋角のやうなる物生出。美形おかしげに成て。外科本道も傳へ聞たるためしもなく。此療治にあぐみぬ。表向の番組の役人はのこらす。取ころされて。其後はひさしく明屋敷にあそばされ置れしに。有時仰出されしは。此川屋敷のうちに。一夜を明して。見てまいれと。世にかくれなき。ぶへん者。大平丹藏といへる男とまぎれもなきおくびやう者。柳田久六此二人を同役に仰付られ。申合て一夜をつとめしに。彼松風の女むかしの形は。良ばかりにのこし身は三丈あまりの蛇躰となつて。二人にとりかゝれば。久六は前後忘して死入けるに。丹藏くみふせて。正しくとらへたりしが。其まゝ消てなかりき。其跡に松風が小脇ざしありて。是をしるべに兩人立歸り。御前へ右のだん／＼言上申せば。御機嫌よろしく。手柄せし丹藏に。千石の御加増。又死入たる久六に。千五百石御加増くだし給はれば。御年寄中此上意をがつてんつかまつらぬやうだい御覽あそばし。丹藏は是ほどの義。仕りかねまじき者なり。又久六は兼てしれたる億病男主命をおもんじ。一夜を勤め死に歸る事。丹藏にはましたるぶへんものと仰せられけると也。其後は此御屋形子細なく女中の難病もつねの面に成ぬ

④ 我子をうち替手

丹後のきれとの文珠に廿五日のあけぼのより。國中うつして參詣す。爰に大代傳三郎一子に傳之介十五歳に成しが。小者一人めしつれて詣でけるかゝる折ふし。同じ家中に新座者七尾久八郎といへる人の子に。八十郎と申せしは今年十三才なりしが。是も草履取一人つれて。此所はじめてなれば。浦めづらしく天の橋立の松の葉越に。月夕影うつるまで。あなたこなたを詠めめぐりて立歸る折ふし。傳之介に袖すれて。たがひに鞆とためして。ぬき合せ。はなやかに切むすび。八十郎首尾よく傳之介をうちとめ。前後を見合せ。立のきける。兩方の小者は。あひうちして。むなしくな

りぬ。傳之介親これを聞つけ。其所に行て。せんさくするに相手の行方しれず。小者も夜中なれば。見分がたく先傳之介死骸を取かくしける。八十郎は屋敷に歸り親にはじめを語れば。是まで歸る所にあらず。寂期の覺悟仕れと書狀添て八十郎を乗物にて。傳三郎方へつかはし。此ものそれにて。何やうにも御こゝろまかせと申入傳三郎請取先座敷に置ば。八十郎が敵とよろこび母親長刀をつとりかけ寄を傳三郎押へ。あれより見事につかはしけるを。むだ／＼とうつべき子細なし。とに我子は十五歳。是は十三にて武道も各別にまされば申請て此家継にすべし。是同心ならずば。其方離別といはれて。男にしたがふ女心傳三郎よろこび。段／＼御願ひ申上れば。ためしなきしかた。大望にまかせ。八十郎を傳三郎にたまはり。親子のむすびをなせば母にも孝をつくしまとの親には二たび。おもてを見あはす事もなく。傳之介と名もあらためて。日毎に武の道に心ざし深く。成人の後傳三郎娘とあはせ。むかしの恨みなく。母もこれにふびんをかけて。大代の家を継て名をのこしぬ



武家義理物語 卷三

目録

一 発明は飄箆より出る

今の世に油断のならぬ物は出家  
言葉とがめは浪に声有事

二 約束は雪の朝食

賀茂山の片かげに隠者有  
むかしの友の身上咄しの事

三 具足着て是見たか

物の氣にかゝるは病中の床  
陣立の物語いさきよき事

四 思ひ密の首途の聲入

親仁殿にけいやくの娘  
執心かよひて助太刀打事

五 家中に隠なき蛇嫌ひ

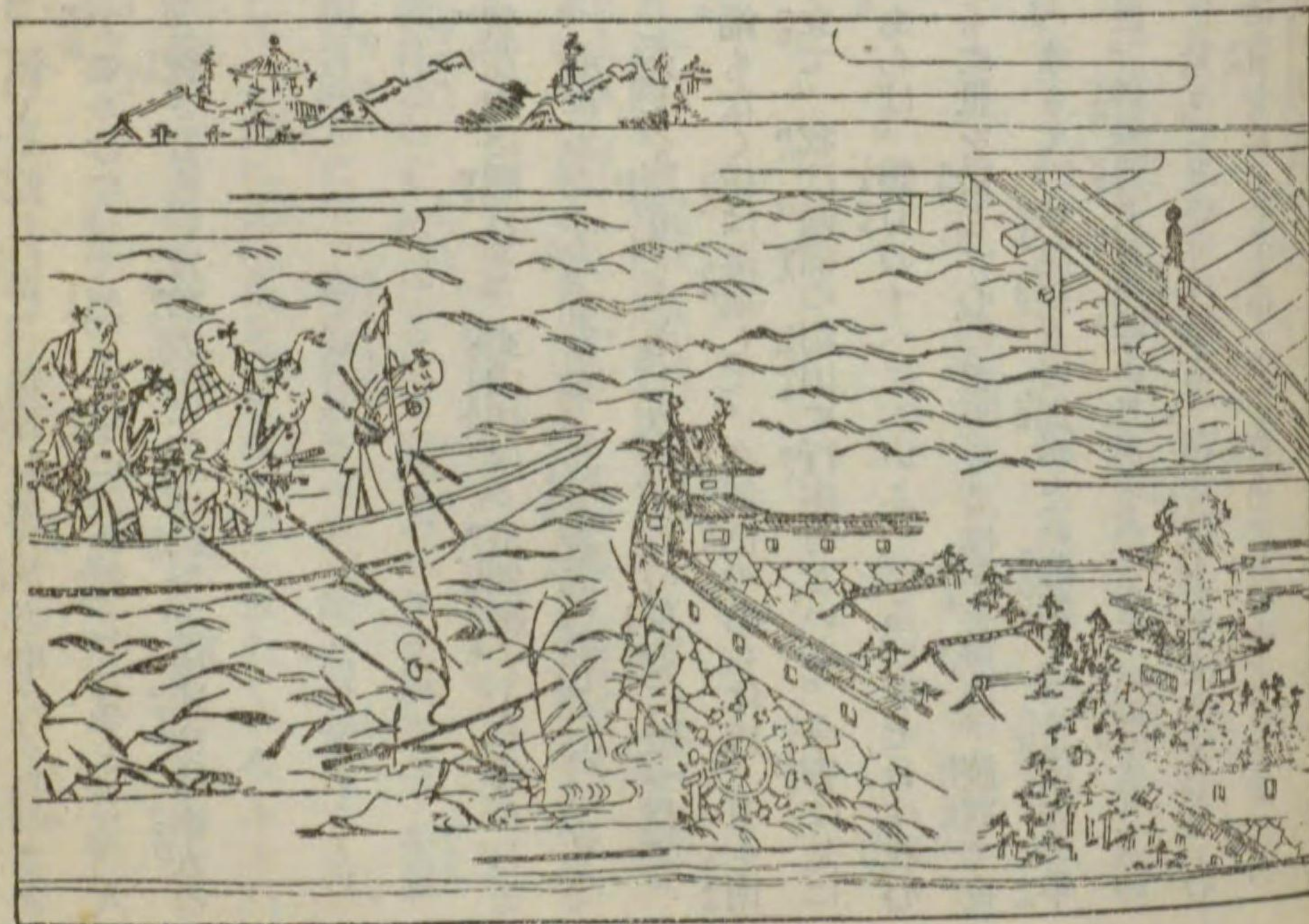
せまじきは武士の座興  
極めては世におそろしき物なき事



○ 発明は瓢箪より出る

近代は武士の身持。心のおさめやう。各別に替れり。むかしは勇をもつはらにして。命をかるく。すこしの鞘とがめなどいひつもの。無用の喧嘩を取むすび。其場にて打はたし。或は相手を切ふせ。首尾よく立のくを。侍の本意のやうに沙汰せしが。是ひとつと道ならず。子細は。其主人。自然の役に立ぬべし。其身相應の知行をあたへ置れしに。此恩は外になし自分の事に。身を捨るは。天理にそむく大悪人。いか程の手柄すればとて。是を高名とはいひがたし。御代静なる江戸詰の西國大名の家中に。竹嶋氏の何がし。滝津氏の何がし。此兩人一所に御役。首尾よく勤て。生國に歸る。道中申合て。たがひに機嫌よく。日をかさね。參州岡崎の泊りの夕暮。水風呂をたかせ。二人ともに入仕舞。明衣を着ながら。折ふしの暑さ。しばし端居して涼み。滝津氏の人。鼻紙喰さきて。灸の蓋をこしらへ。慮外ながら。是ひとつ腰へと頼む竹嶋氏其蓋をしてやる時。すこしの疵を見付。何心もなく是逃疵かといふ。いかに心やすくても。武士はいふまじき事なり。滝津氏は是を氣にかけて此疵は先年狩場のはたらきにて。かくは成けれども其證據なければ是非なし。菟角國元にくだり着。其時分療治いたさせし外科をよびて。一通り申。其うへにて打果せば濟事なりと。心中を極め。其色見せず。道を急。伏見の濱に着て。番所に斷申。五十石舟を借り。荷物あらためさせ。舟を出せといふ所へ。六十ばかりの侍。十二三の美兒をつれて。此舟に乗たしといふ。船頭かし切といへば。残念の貞つきして。彼子が手を引歸る有さま。いかにしても見かねて。逆も先の間は明て有なれば。乗てしんじませいといふ船頭酒手とよるこひ。座をこしらへて乗けるに又三十ばかりの旅僧ゆたん包を提て此舟見かけてはしりくるを。是も情にて乗ければ。出家侍二人ともに救ののお礼を申つくし廣き所に自由にかり枕をよるこぶ。やう／＼淀の小瀬を過。水車の夕浪おもしろく。是を看にして嘔吐取出し。二人さし歸もせはしければ。後に乗た

る兩人も呼ませて。酒事おかしく成ぬ彼少人に小語。出家も座興にはやりぶしの小哥ひとしほ慰みと成。其後深くともし火の影にして。なを扱かはし。いつとなく大盃になし滝津氏の人にまはれば。いかなく是ではならぬと立のかれしに。竹嶋氏袖をひかへ。又逃給ふかといはれければ。此言葉聞とがめ。寂前岡崎にて。にげ疵といひ。今又勘忍ならずと。刀ひつさげ立ちたる竹嶋こゝろへたりと。そばに置し刀を取になかりき。滝津しばらく待て。刀見えぬとはふしぎなり。心静にたづね給へ。それまでは相待といふ。色／＼貪義するに。いよく見えぬに極りければ。竹嶋覺悟して。是武運のつき。一分の立ぬ所なれば。相手取までもなしと。自害をまづさし留。後にのりたる侍の申せしは。此刀の有所。それがしのすいりやう大かたは透ふまじ。私の望みに申所聞入給はらば其刀出させ申べしといへば。竹嶋は元より滝津氏もお差圖はもれじと。誓言にて申ける。其刀是なる出家が盗たるといへば。氣色をかへて。法師をあなどりていふやといかる。彼侍さはかず其方が酒なかばに。腰より長緒の付し。へうたんを取出し。山耕をつみける。其瓢箪ありや。ないにをいては。をのれと。せんぎつめられ。折なく川





中に飛込をのれと自滅いたせり。既に其夜も明て。舟さしもどし。瀬見渡し行に。鶴野、かれ芦の中に。ちいさきひようたん浮て。流れもあえず。見えけるを是と取あげしに。刀のうけに付て酒も半に沈め置しと見えたり。人の氣のつかぬ所をさりと名譽の勳者と。彼侍の事を感じける。彼さむらい寂前刀出たらば頼むと申願ひは兩人の中事と首尾能して別れける

㊦ 約束は雪の朝食

石川や老の浪立影ははづかしと讀捨。今の都もうき世と見なし。賀茂山に隠れし。丈山坊は。俗性歴々のむかしを忘れ。詩歌に氣を移し。其徳あらはるゝ道者なり。さるによつて。心になふ友もなし。有時小栗何がしといへる人。是もへつらふ世を見限。かたちを替て。京都にのぼり。東武にてしたしく語りしゆかしさに。この草菴にたづねて。すぎにし事ども。今の境界の氣散じなる身の程。心にかゝる山の端もなく梢は落葉して。冬氣色のあらは成。月を南おもての竹縁に。つる居詠ながら語りしが。此客何となく。風斗立ち。我は備前の岡山に行事有といふ。今宵は是にと留もせず。勝手次第の別れさまに。又いつ比か京歸りと聞命あらば。霜月のすへにといふ。然らば廿七日は我心ざしの日なれば。是にて一飯かならずと約束して。立行ぬ兩人ともに世を捨て。心のまゝなるは朝を待ぬ。旅衣。夜露を肩に結び。枯野枯葉の藤の森に成時。海道つゞきの人家寐しづまりて。伏見戻りの馬かたの聲絶て。竹田寺の半夜の鐘の鳴時。丈山其人の跡をしたひて。しる谷越にいそかれしに。神無月八日の夜の月かすかなる。松陰より人の足音せはしきに立とまりて。丈山かといへば。いかにもみをくりには是までといひけるに。都に友もあまたなれど。心ざしは其方ならではあらじと立ながら暇乞して別れぬ。其後備前に着し。たよりもなく。日救ふりて。十一月廿六日の夜降し大雪に。寛政へき道もなれば。また人員の見えぬ。山竹帯を手づからに。心はありてむなくも。白

雪に跡を付て。踏石のみゆるまてとおもふ折ふし。外面の篋戸を音信し。嵐の松かなど聞耳立るに正しく人聲すれば。明わたる今小栗何がし。たづねきたるに其さま破紙子ひとつまへ門に入り編笠ぬぎて。たがひの無事を語りあひ。しはらくありて。此たびは寒空に何としてのぼり給ふぞといへば。そなたはわすれ給ふか。霜月廿七日の一飯たべに。まかりし。それよくと俄に木葉焼付。柚味噌ばかりの膳を出せば。喰仕廻て。其箸も下に置あへず。又春までは備前に居て。西行が詠め残せし。瀬戸のあけぼの唐琴の夕暮。昼寐も京よりは心よしとて。取いそぎてくだりぬ。扱は此人日外かりそめに申かはせし言葉をたがへず。今朝の一飯喰ばかりに。はるくの備前より京までのぼられけるよと。むかしは武士の實有心底を感じせられし

㊦ 具足着て是みたか

武士は人をあなどる詞。かりにもいふましき事ぞかし有時嶋原の後陣を。西國の大名に仰付させられ。人教を揃へられしに。五十五歳より老人。十五以下の少人は。赦免有て。此外物忌。病人は各別。残らず出陣の御供觸有しに。爰に中小姓。四人同じ部屋住ひして。勤めし。中に老人長病にて。けふをうき世のかぎりに見へしが。いづれもいかめしく軍立の用意とて。いさむを聞て。たよりなき枕をあげて。我此節かく煩けるは。武運のつきし所なり。先祖具足は譲りをかゝる。鍵一筋ひつさげて。天晴御馬のさきに立。御目通りにて。高名感状取べき。此たび扱もく口惜やと。此事いひもやまざれば。をのゝ耳かしましく思ひながら。一所に住ば是を聞ぬ貞もなりがたく。今もしれぬ病人の無用の願ひはれずとも。息のかよふうちに。念佛申。後世の一大事を心がけ給へ。具足は重き物なれば。是着て死出の山越御太義なり。かるき經帷子と着給へと。三人小話で笑へるを聞て。いよく無念かさなり今一たびの命を。諸神に立願せしに。不思議に快氣して。手もはたらき足も立程になりぬ。時に日外の遺恨やめがたく。段々



筆に残し。具足甲を着ながら。鎧取まはして。相手は三人と名乗かけ鎧着ながら。死出の首途といへば。皆く是非なく。ぬき合とも。おもひ込たる一念の鎧先。嶋原に行の働きみせんと。三人ともに突留。其死骸のうへに腰をかけて。いさぎよき自害。書置の子細。道理至極に沙汰して。此人を惜みぬ。さる程に三人は雑言ゆへに。あたらし身をうしなひ。大事の前の用に立ずと是を笑ひける

④ おもひもよらぬ首途の聲入

治る國の守の弓大将に。隼人といへる有。又鉄炮大将に外記といへる有。此兩人當番同日にて語りあひ。をのづからしたしくなりぬ。ある時隼人煩て。代番頼み。引筆しに。外記はるく屋敷より病中の見舞たびくなり。此心ざし嬉しくおもふ折ふし。又雨風はげしき夕暮に玄關に來て。けふの機嫌のほどをたづねられしに此事奥へ申通じけるに。幸氣分もすぐれ。はじめて枕をあげ。病居もあらため。友なつかしき時成に。外よりひとりも問ねば。ひとしほ淋しく。其御かた。御目にかゝりたき。斷。申。内證迄通し。御見廻の一札申のぶれば。氣色の様子。念比に聞合。すへく養性の身もち迄申されければ。隼人よろこび。勝手口の杉戸あけさせ。妻女呼出し外記に面をあはさせ。親類のかたらひ。同前になりぬ。心の闇からぬ武家のつきあひ。潔し。南をうけてあかり窓のもとに。薬鍋かけて。十四五と見へし娘其さま艶なるうちかけ。小袖ゆたかに顔形色づくるともなく。美女に生れつきたる。手づから火箸取まはし。せんじやうつねのごとくかと。年寄たる女にたづねられし。物ごしのやさしく。あまた見へわたりて腰もとづかひも有に。是は大事と。孝をつくせし心ばせを見請。娘の子も又ありたき物ぞ。病家のあつかひは是ぞと。殊勝に頼母しくおもはれ。又戸をさして。外には人なく只ふたり世の事ども病氣にさはらぬ咄しの次手に。外記は息女の事をうらやみ。私。は男子ばかり三人まで持けるが。此内証人娘ならば女房ともが言葉たよりにも成ぬべき物とい

へば。隼人聞て。世はかならずおもふまゝならず。我等は只今の姉にして娘ばかり四人有。女の子御望みならば。奥の御茶のかよひに。やとはせ置べし琴を好。琴をよむなどいひて。京たよりに中院殿へつかはしける。雀小弓。名譽に一筋もはずさず。女のいらざる四書までも讀て此ほどは古文聞に。氣をつくしける。すこし娘自慢なれども。何がさて。こなたへならばといへは。外記淺からず。悦喪しからばわたくしの物領龜之進。十九に罷なれば。向後御自分の子と。覺しめし。くだされと。外には聞人もなく。祝言いひかはして。屋敷にかへりぬ。外記内證へは。いまだ是を語らず。其明の日の夜半に。同役の方に宵よりはなし居て歸るを門の片陰に三四人立忍び。兩方より。まん中に取込。聲をもかけず。闇打。外記こゝろへて。ぬきあはせ。四人を相手にしばし切むすぶに。覺悟にあらねば。初太刀にいたみ。三人までに手は負せしが。終によはりてうたれぬ。供は小坊主なれば。屋形にはしりて。此事しらせける。龜之進。刀ひつ提追かけしに。はや行方しれす成にき。しかも道筋四つにわかれる辻の事なれば。さまくまよひて。先脇道の根篋を分て身をもみ。二十町あまりもたづねしに。人影もなく。無念の胸をしづめて立歸り。此打手を免義するに。下記軍法の弟子に。隼人有しがおのれがはけみうすく同學の者に極意ゆるされしを恨み。同じ悪人をかたらひ。師をうつてのく。天命何國にかのがるべしと。身をもだへて進めと。心にまかさぬ主命なれば。敵うちたき願申あげしに。首尾よく御暇を下し給はり本意とけての節。先知相透なしと老中仰わたされ。上意有かたく。御前を罷立。屋形にかえらず。母の義は親類に頼み残し。其身は達者なる家來一人めしつれ。外よりの助太刀をさし留。生國和筋を立出る時隼人。病氣の用捨なく。かけつけ。いひわたする子細有とて。我屋敷へ龜之進を申入。其方はしり給ふまじ。御親父とけいやくしての乞聲なり。貴殿女房は。目出たふ歸宅有まで。此方にあづかり置と。娘よび出して。夫婦の盃事をさせて。関和泉守の刀。一腰金子百兩はなむけして。心よく暇乞して別れぬ。兼ての約束人はしらすりしに。此時にいたつて隼人の心底を感じける。龜之進は。諸國をしのびめぐりて。二とせ過ての弥生山。江州の浦



里に身を隠して。ある夜是を付出し。名乗かけて切込。つね々覺悟して浪人五六人有合。又すけ太刀すれば。龜之進あやうく請太刀に成て。武運のつきと口惜き時。相手ふしきや後髪ひかれて。残らす打とめ。本人が首器物に入て。本國に歸りぬ。和筋に有し隼人は。龜之進。首尾事明くれ。心もとなく夫婦いひ出し給ふ時娘嬉しげに笑て。先月廿九日の夜。敵うたれしにうたがひなし。其子細はみづから一心に諸神を祈しに此めくみにや。夢なから其場にゆきて。後詰して殘所なく。うちとめさせ。よろこび歸るとみしが覺ての明の日。寢まきの小袖だん／＼に切て血に染りしと。語りも果す。それを二親に見せければ。心よく龜之進を待かねしに。程なく。立歸り。御前よろしく救／＼の御褒美。先知に式百石の御加増有て。隼人をめされ立出る時の段々。至極におぼしめされ。縁組の事仰付られ。世のほめ草をなびかせ。隼人が家風をふかせける。其後夢物がたりせしに。刻も時もたがはず。目に見ぬ助太刀おもひあたれる事ありと。其はたらきを語り慰み兩家ともに繁昌してかたらひをなしけるとや

五 家中に隠れなき蛇嫌ひ

人によつて。人喰狼にはをそれずして。何の事もなきひき蛙を嫌ふも有。是其生によるるなり江筋田上川の瀬にかはりて。古代稀なる洪水。岸根の松柳もほれて。田地荒野なれば。其比の國の守。これをあはれみ。百姓をすくはせ給ひ。堤ふしんも。里へは掛給はず。手まへの人足。救千人出て鋤鐵の音。湖水にひゞき渡りて。竜女もおどろくべき多勢なり。此奉行役人。家中の利発人さ／＼して四人立合し中に。小林氏の何がし。武家かたきにうまれつきたる人にて。心のたけき事。世にすぐれたれども。常に蛇をおそれて。其咄しを聞きへ身をちゞめけるに。同し奉行。ちいさきくちなはをとらへて。是それへなぐるといへば。たちまち面の色へんじて。刀のそりうつて。弓矢入帳なげてみよ。鹿すもそをのがせじといかれば。をの／＼中に立ふさがり。兩方へ押分。當分。何の子細もなく。濟ぬ。其後いづ

れも蛇。うちかけんとせし人のもとに行て。今日の首尾。其方向の心もなき事ながら先あやまり給へ。田比をそる人。人を存じられての座興よく。思へばせまじき事なり。菟角此義は堪忍と。言葉をさげ。むかしのごとく語り給へと内證申せば。此男流石侍にて。いかにも此方の卒尔千万至極の所なり。をの／＼お詞はもれじ。何やうにも頼入と申せば。いづれも此一言を聞か。神妙のいたりなり。此上は其方の手をさげさす事にあらずと皆々小林氏のかり屋に尋入今日の義は。さぞ／＼御腹立たるべしと。いひもはてぬに。されば。いやものを見せかけ。さりとはこまりたる所。あまりをそろしさに。刀のそりをうつて見せしが。それは何の心もなし。我等はあれほどすかぬ物なしと大笑ひにて此事濟ぬ。心中を色に出さず。つねの事にして其埒を明られける。是ぞ発明なる取さばきと。思案ある人は。感じぬ。其後小林氏。世の無常定がたく。一とせあまりのうちに。妻子残らず。うしなひ何の願もたへて。御前よろしく御暇申請。長劔やめて。身を麻衣にかへて。かくれ家もあるに。人倫のかよひなき。海中のはなれ嶋。笹ぶねのたよりに身を越て。竹生嶋の北なる北嶋といふ所に。草齋をむすひて爰を出ぬ事。三とせあまりになれり。すぎにし比。したしき人々をひあはせ。一夜とまりに定め此嶋へたづねしに。むかしの形はなくて。をこなひすまして殊勝さかぎりなかりき。取まぜてむかしの事ども今の身のうへをかたり。落葉かき集めて茶をせんじ。有合に米うち込て。もてなされ。其日も浦浪に影うすく。三井の晩鐘かすかに。衝もいづち飛うせ。松に嵐のみ是より淋しさ。又何國にか有べし。けふは我人十二人つねは。菴住ひとりにはよく暮されける。をのづから觀念の南窓も闇く成て朽木其まゝのかざりを焼ば。此火のうつりにはひあつまる蛇幾かきりもなく。人ををそるゝともなく。ひき懐に入てうねくり。又は裾より入けるをはじめの程は取のけしが。中々救千筋なれば。をの／＼氣をなやみて。是はいかなる事ぞとたづねしに。元より此嶋蛇ある所と傳へ聞て。身をこらして佛心の大願と語られければ。をの／＼横手をうつて年比は嫌はせ給ふに。今此中に住せ給ふはざとりの眞実あらはれけると。夜もすがら。うるさく明るを待かねをの／＼城下にたち歸りて此事を語りぬ



武家義理物語 卷四

目録

- 一 なる程かるひ縁組  
せまき所をかりの世の中  
一日に二度のかけ梶原増の事

- 二 せめては振袖着て成とも  
元服はむかしに歸り花咲  
犬のかよひぢ心ざし深き事

- 三 恨の救讀永樂通寶  
是そ雨の日の長物がたり  
幽冥身の上を訴訟の事

- 四 丸綿被きて偽の世渡  
京にかくれなき十分一取  
武士の息女にまどある事

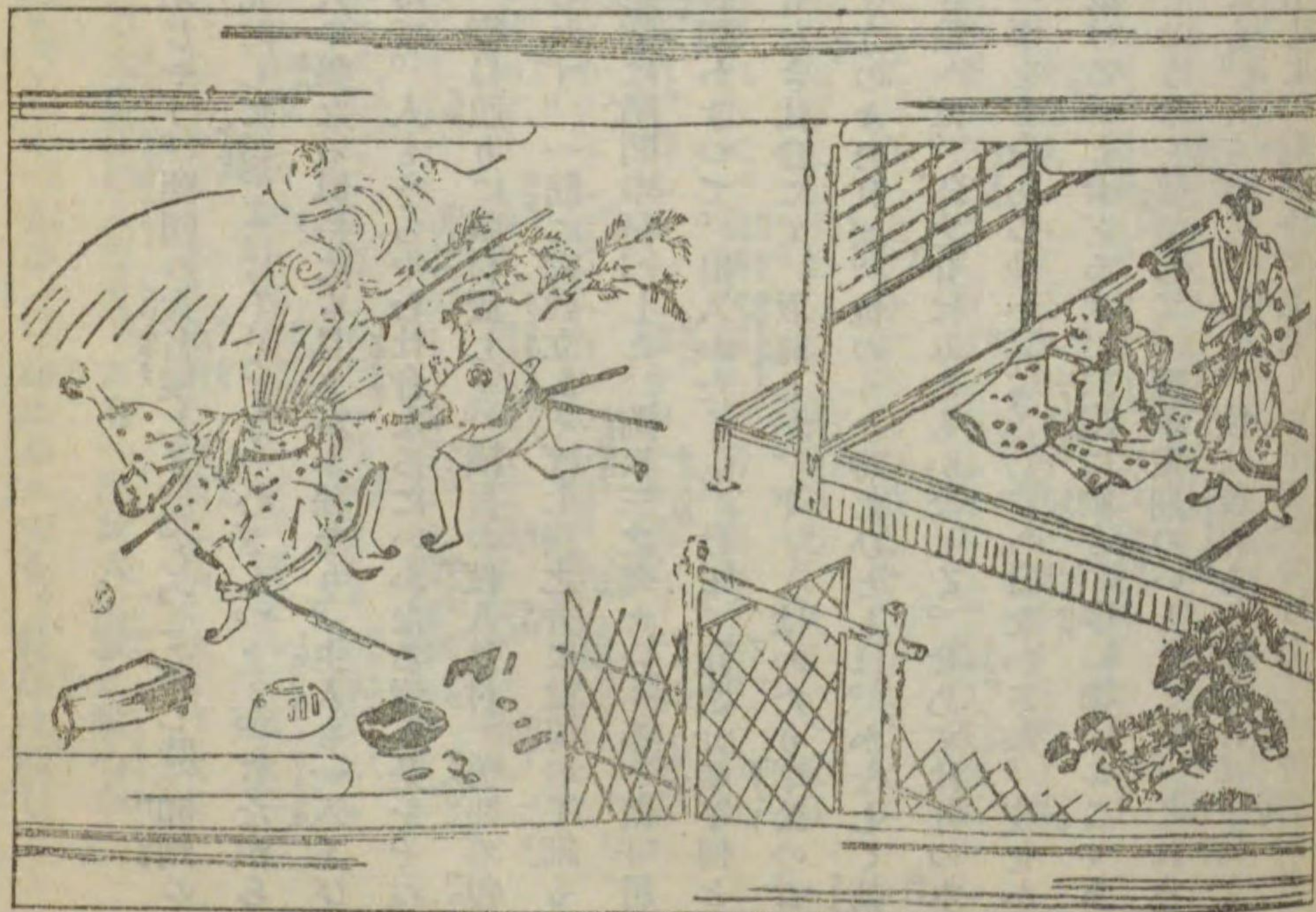
成ぼとかるひ縁組

武士の身程定がたきはなし。生國備中の松山をはなれ。和州郡山に行て。むかしめしつかひし小者。今は町家に住ひして。世をこゝろやすく暮けると。其噂傳へ聞て。ひそかにたづねしに縁はつきず。めぐり逢ば。此男おどろき。是はいかなる御首尾にて。かく御老人爰には御越あそぼしけるぞと申。されば是非もなき義理にて御暇申請。妻子は國かたに預ケ置。身躰かせぐうちに。世無常のならひ。二とせのうちに妻子相果。今はながらへても甲斐なし。いづれの僧にてもたのみ。長刃をもやめて。山居の心ざしをこりしが。浪人の時節。世を捨なば人の沙汰すべき事も口惜く。何とぞ先知に有付。其後は思案もすべし。すこし存寄子細もあれば。一兩年も此所に借宅をもして。世間を見合たき願ひなり。其才覺頼むといへば。だん／＼聞に。涙をこぼし以前に替らせ給ふ御事。さりとは見るにさへいたまし。とかくは御こゝろまかせにと先笹の屋のせまき住ひを。お目につけ。夫はたばこ切さし。徳利さげて酒屋に行ば。女は麻布織すて。茶の下焼付。心一はいもてなしけるに一夜を明して見しに。中／＼氣遣たへねば。何とぞ我宿とさだめて。すこしのうちも暮したき願ひ申せば。幸ひ近所に。此程迄針立の住れし明家。南うけに菱垣の。きれいに詫人に似合たる宿なれば。是をかりつぎて。奈良團の細工をすゝめて。かつ／＼成。渡世もあはれに。たらぬ所は合力して。半年あまりも過ゆけば。所の人もなじみて。住うき事もわするゝ程になりぬ。いつまで。ひとりば寐覺も淋しかるべしと。春日の里にかよひ。商人申出して。よき事あり。後家の娘廿三なるが其形うつくしく。しかも利発者にて。母にも孝をつくせば。人皆夫妻の望あれども。浮世はあきはてしと。此事を取あへず。さては一たび男持けるかと聞に。さもなくば。花の盛をいたづらに振袖留て。人にみられたき風情なかりき。然れば。わけなき病氣もありやと。内證せんさくするにさもなく。あたら日教をふる程に。こなたの事を語り出して。當分は浪人衆成が。すへ／＼



頼みある御方といへば。母人よりは其娘聞届て其をちめなる侍衆ならば。のぞみなり。先様に御合点あらば。身をまかせ。お茶のかよひ。つかふまつり申べしと。したしく我にかたりける。手前よろしき人のいへるは取あへず。貧家を好み参べしとは縁なりと押付わざにと取持。夫婦にかたらはせけるに。此女男の氣をとりて。何事もそむかざれば。今の身にして嬉しさ。限りなく小舛。横槌ならべ枕のちぎり。錦のしとねに増り。たのしみ。ふたりが中に。何か包む事なく。折ふし春雨しつかにふりて。外より尋ぬる人もなく。寐酒吞かはして。つまり肴に。塩鯛のかしらを。なたふりあげて打割。いさきよき貞つきして。此ごとくいつぞ見付出して。つぶやかると聞とがめ。何事ぞと女に問れて。今はかくさず親の御此所に立のけば。それをうつべき大願とくはしくかたれば。扱は大事の御身と。なをく念比につかへて。心中に春日へ立願して。やすくとうち給ふ事を祈ぬ。それより廿日も過て亭主しのびて。南都のかたへ行とて。夜の明がたに宿を出しが。しばしあつて立歸り。件の相手をけふ見付出したり。是は天理にかなふ所と。踊あがり肌に着込。くさりの鉢巻。女は刀の目針をあらため。口に入参をかませ。盃事してうち笑ひ本望とげ給ひて。追付歸宅を待請ると。此時にいたりて常とは各別かはりて。かひなく亭主是に力を得て。いさみ／＼て立出しが程なく立歸りて。首尾残所なく。敵は是ぞと。其首手桶に入て。割蓋にて隠し。あたりの人此事をしらず。夫婦さしのぞけば。撫つけあたまの大男十面つくり。目を見ひらき。無念貞にふくませける。是門田番藏とて。日比は武の達者なるが。利劔にとめける。先祖藏人殿へ手向奉ると。血刀添て観念するをみて。此女泪に袖をひたしぬ。亭主此有さま合点ゆかず。扱は此首によしみありと見えける。ありのまゝに語れと。男は俄に心置て。夫婦の間に物に替りぬ。女はすこしも動轉せず。只何心もなし。手ばしかき御働きを嬉しさのあまりと不慮の機嫌になをせど。男一圓同心せず。その子細を是非に申せと聞かゝる。女迷惑して語ける。わたくしも親の敵を眼前に見ながら。女の身のかなしさは無念の年月をおくりぬ。此度かく。おぬしさま。かたらひをなしけるも。御心底を見定ぬ。

難しや此事を頼み討てもらはんとおもひ入し。折ふし。敵ありとの御物語。それにさし合せては申かねしに。けふ御首尾よくうたせ給へば。我かたきも。あのごとくに。うち取たきよと。心底外にあらはれ。お目にあまれるなみだの袖。かゝる目出たき折ふし。万事は御ゆるし給はれといふ。男も聞もあへず。今は我ためにも親なれば。其まゝに置へきやと。此はじめをつどく語らせて聞届け。其者は今ほど西の京といへる所にまぎれ。白坂外記といへる名をかへ。天原流波とよびて。面むきは。手習の指南して。今も武藝をこたらぬよし語れば。亭主様子をのみ込。茶漬食をくひて。つる宿を出て行しが。其日の七つさがりに此首もうちて歸り。女にみすれば。是ぞこれよ。ひだりのかたの額に切疵。むかしにかはらぬ貞ばせ。悪やと死首ながら。守り刀を切つけ。又此思わすれ難しとよろこび。今は眞言泪にくれぬ。一日に敵二人までうち取事。前代ためしなきはたらきなり。此親類のとがめも有べしと。跡の事は最前のたばこ切にまかせ。奈良にまします母をも。一所に引越。其夜のうちに所を立退。本國にくだりぬ。





③ せめては振袖着て成とも

伏見の城山は。桃林に牛馬の捨置とはなりぬむかし此所のはんじやう。諸國の大名屋しき。たちつゞきし時。和州の内城主にめしつかはれし室田猪之介といへるは。その比の美兒にして。形よはくとして。心ざしつよく。さながら女かとうたがはれ。秀吉公の御女藤の花か。おちよばか。此二人の艶なる風俗にも見まがふ程なり。主人も一入ふびんかゝりて。外の前髪よりは。御寐間ちかふめされ。出頭時を得て。人もうらやむ仕合なるに。いかなる者か是をそねみて。戀によせての落書猪之介身のうへの事。あらはにするし。御目通りに張付置しを。横目の役人見付。善悪事包まず。申あくべき神文なれば。此段言上申せば。御食義もとげられず。一筋に御腹立あそばし猪之介には何の子細も仰渡されず。御國元へつかはされ。母親に御預ケあそばされ。屋敷は閉門申付べしと。岡沢三之進といへる。留守居役人に急度仰付れ。御意の通りに。門を閉きびしく番を付。親類かきつて。出入かたく改ける。猪之介親子何とも。お料の程。わきまへがたく。切腹すべきやうもなく。是非もなき仕合にて。取籠しが。下くはわたり奉公の者なればかゝる時節を見捨身の大事を思ひやりて。ひとりも残らず立のきぬれば。世のうき時にひとしほ。かなしく朝夕の煙も絶く。母は子の事いたましく。手なれぬ米をかき給へば。猪之介はみるもかなしく。せめては井の水を釣あげ。摺鉢の音さへしのびて。せつなきけふを暮し。明日の事をも命あるゆへ。なさけなく。日をかさね。夜をかぞへ月も覺えず。年もわすれ。軒端の梅を唇に。さては春にも成けるかとおどろき。只現に動き。夢に物いふこゝちして過しぬ。今はたくはへもつきて。をのづから。かぎりの身とせまるを覺悟して。親子寂期のいとまごひ。これらは武運のつきぞかし。我は女の身自害の見くるしきも。死後にも。人もゆるすべし。汝は後悔ある身なれば。母より先に死良を見べし。さあ。今ぞおもひのこすなと。いさめられしに。猪之介御意にしたがひ。そゝけし髪を撫つけ

て。随分ゆたかにかしこまり。諸肌ぬぎて。小脇ざしの鞆ぬきはなつ所へ。人の手師と見へて。まだら犬に。むらさきの首玉入て。紙袋ふたつ。左右へわけて。むすび付られ。物いはぬばかり。尾をふりて。ちかく寄けるほどに。ふしきに思ひ母これを明て見られしにひとつの袋には白米入て。命はかるしと書付。又ひとつには種々の菓子を入。糞は重しと書しして。主はたれともしらず。おくられる。是に親子の人。思案して。此心ざしに相果べきは。いづとも成事なり。是は定めて諸親類の。誰があはれみとしられたり。此犬は見しりもなきと。背筋を撫さすれば。嬉しげに立歸る。其行衛をみるに。蕪壘の破れよりくゞりぬ。其後はあけぼの夕暮に人の氣を付ぬ折ふし。萬の食物をはこぶ事。はや二とせにもあまりぬ。光陰矢のごとし。弓馬の家すたりて。五とせに今すこしの程こそたらね。ながくの閉門。たいくつして病氣もさしをこり。やみくくと此まゝに果なん事をなげきしに。諸神御めくみにや。殿御心ざしの時。猪之介事おぼしめし出され御とかめ御しやめんあそばされしに。有難次第とお請を申上。次手ながら御訴訟申上る。逆もの御事に。只今迄閉門仰付られしお科の段々仰渡され。御ゆるしに預り申たき願ひ。大殿此義至極に覺しめされ。寂前の落書ひそかにつかはされしに。しばらく思案をめぐらし兼てふあひの中間。豊浦浪之丞をねみにて有べき事をせんぎ仕出し。則筆者は町家に身を隠し。兵法の指南をせし浪人。岩坂金八に極まつて。兩人とも切腹うち首に仰付れ猪之介。長くの難義ふびんに覺しめされ。げんぶく仰付られ。式百石の御加増あつて。御判役承出頭むかしよりは今をかし。世の聞へ。面目すゝきて二たび國元に歸宅して。一門残らず。參會の上にて。犬をかよはせられし。こゝろばせの方をたづねける。此人更にしがたし。何とも合点ゆかず。さまざま氣をつくしぬ。有時屋形町の末くまで見めぐりに。日比かよひし犬の。いねふりて。さる屋敷の門前に見えける。是はと嬉しく立寄。いかなる御かたの宅ぞとたづねけるに岡崎四平といへる大番組の人なり。おもへば此人は我に執心かけられし事。御前を勤めしうちにも。すこしは忘れもやらず。殊更此たびの心づかひ。一命にかへても。此恩は報じ



がたし。今でも此人の身の上大事の出来ば。神以我ひかじと心底に偽りなし。其夜ひそかに。人つかはし四平を事前に申請。親子ともに涙をむすび嬉しき救への礼義をのべ。母は勝手に入らせ給へば其跡はしめやかに語り。まづもつて犬のかよひの事をたづねけるに。殿御國入の時分はこなたにあこがれ。夜く屋形のうらまで立しのび。かなはぬ胸を暗してかへるに。いつとなく其犬宿よりつきて。戀の道をわきまへけるとかたれば。猪之介赤面して是非もなや。姿の花の枝を折られ。今の古木見せけるも口惜けれど。もは歸らぬむかしなり。心は替らぬ我なれば。いふも耻かしけれど。見捨させ給ふなど常の居間に入て。着ぶるしたる脇明小袖に身を替。枕ひとつに式人の夢をむすびぬ。其年は猪之介二十二才成に。たはふれのあまりに廿一才と年のほど。ひとつかくされしは。武士にはなき事ながら。戀路なれば。悪まれず。これぞ衆道のまご成心ざしぞかし

㊦ 恨の救讀永樂通寶

とらの年にはかならず洪水と語り傳へり。むかし駿河の國。安部川のわたり絶て。十日の雨やどりして。旅人の難義せし事有。其比は諸國の大名屋敷たちつゞきて。商賣人は買取ありて。其時代小判とほしからず。渡世をなしける爰に北國の城主の中屋敷はるか府中をばなれ。はるか西のかたの野末にありしが。是には一年替りの國家の。長屋住ひ。千塚太郎右衛門といへるかたへ雲馬茂介といふ人。降つゞく五月雨の淋しさに。たよりて世の咄しもかさなる。雲間の入日の影。わづかに。こがらしの森移ひ。けふこそ氣も暗けると遠山。ひさしぶりにて詠め。傘ほせ。庭の溜り水かへ出せなど。小者に申付しに。此水竹縁の下にほそく流れ込。千丈の堤。蟻穴より崩がごとく。見しうちにいりて。柱もゆがみ壁もこぼれ是はふしきの事ぞと。此土中ころもとなく鋤鉄はやめ上土のければ死人形もくづれず。見へける式人念比に見届け。是は年ふりたる死骨にあらずをよそ四五年の埋ものなり。いかさま子細有べしと先

兩人心をあはせ内談して。とかく御役人衆を遣申入べし。折ふし参りあはされ。見へわたりたる通り説人と申せば。茂介聞届け。いかにも一所に上屋敷へまいるべし。私宅に歸れば時節うつれば。いざ是より同道申べしと。つれ立御門に出れば。役人鏡しめける。兩人斷を申。私の用ならず。老中まで申上る事ぞといへば。何事にもいたせ。今晚御門は明がたし。各ははじめて此御屋敷入とに。此程御國より御越なれば。かやうにきびしく仕る子細も御存知あるまし。去去年の十二月廿三日に錢賣御門は入しが。其後出されば。色く御兎義あそばしけるに。其有所。しれがたし親類是を御歎き申上。世の取沙汰もよろしからず。ふびんや立嶋の布子着て毎日其男をみしに。金商人ゆへ。ころされけるや。其以後かく改め申と語れば。いかにもく其義ならば。明日の事にと又兩人。長屋に立歸り。彼死人をみるに。立嶋の着物はうたがひなし。扱其年此長屋に住ける人を。せんさくすれば。谷淵長六とて。家中廣きほうばいにも。別して兩人語り合。殊更太郎右衛門とは。縁類なれば。此事ひとしほ迷惑して一思案の良苗茂介見届此段は御自分と。拙者が心にて濟事と申せば。太郎右衛門満足して。然らば隠密に仕と。下くの口を閉茂介は夜更て我宿に歸りぬ。其夜も明て五つ時分に。御上屋敷より横目衆まいられ。此前しれざりし錢賣の御せんさく有べき御事と。ひそかに沙汰有しを。太郎右衛門聞付。其まゝ茂介宅にかけ入。夜前申合せし甲斐もなく。さりとはひけう成心底。かく有べき事にはあらず。まつたくそこを立せじといふ。茂介さはがす。此段にいひわけにはあらず。神以それがし他言申しにはあらずされども外より申べき人なし是程分別にあたはざる事なし。是非もなき仕合。いざ時刻うつさじと。茂介廿七才。太郎右衛門二十三。たがひに聲かけて。相うちにして。首尾残所なく。浮世のかぎりをみせける。此事また下く御兎義有。右の次第委細にしれる。此段茂介申しにはあらず。御上屋敷の小女聞へ男老人あらはれ。わたくし事去々年しめごろしにあへる錢屋成しが。今宵からだを堀出されて。嬉しや十三兩の小判を御取歸してといふかと聞しが。たちまち見へず成にき。是よりの御せんぎなり。さては其錢賣が。ぼうれいなるべしと。此沙



汰になりぬ。此事國元に聞へ。谷淵長六が下々の仕業には極れども。太郎右衛門茂介兩人が心底を聞て。其身ものがれず。今年廿五才の夏の夜の夢物語とは成ける

四 丸綿かづきて偽りの世渡り

房付枕も定めず。きのふ夢。けふは又思ひ川の瀬に替りゆく流れとて。いとしからぬ男に身をこらし。まんざら偽りの泪。待も別もそれからそれまで。いづれの女か勤めそめて。うき年おくるさへくるしきに。此程の遊女は。むかしのごとく。かふき者にはあらずまづしき親の渡世のたよりに身を賣れて。身を賣良とは成ぬ。惣て。いやしき女にもあらず。是に定る筋目にもなく。時節にしたがひかくこそなれ。過にし關ヶ原陣に高名其隠れなき何の守とかやの孫娘。父浪人の身と成今の都北の山里。物のわびしき住ひ。煙の種に拾ひあつめし。落葉の宿。名も埋木の風にいたみ。程なく病死あそばしての後母のいたはりにて。十二の春の花にたとへて。小櫻と名によばれ。里のあげまきにむすびし金水引も。今の風義の髪形になれば。ひなびたれども都の人も見かへる程になれり。有時諸國へ人きもいりの口鼻たづね來り。此息女つねならねば。あたらし美形を。かくいたづらになし給もよしなし。幸ひ難波の大名の御母義さまよりうるはしき。御そばづかひ御尋にて。きのふもさるかたより。烏帽子裝束を着させ給ふ人の息女さへ。行末おぼしめしてつかはされける。此お子もいかなる武家の御前にか。ならせ給ふもしまじと。物馴が言葉にとをふくませて。いひければ。母人同心まし／＼て。娘が後の身のためとや。それをこそ願ひなれ。万事はおぬしさま頼むよし。こつちへまかせ給へと。其明の日はやく乗物さしむけ御供申と物事おもくいひなし。是は當座の御心付と小袖に金判十兩。母に渡して隣家の野夫をまねき。代筆に證文かゝせ。別れは親子の泪なるをやがての正月には家父入とて。あはせらるゝも程なしと。息女を引取すぐに伏見の川舟に移し。岸根つゞきの里めつらしく浪の流れの身と成事は浮鳥か

たらず。口鼻もだまりて。大坂の色町佐渡嶋屋の何がしの宿に是をわたして。其女房は京に歸りぬ小櫻は何の差別もなく。遊女充の大勢見へわたりて。しやれたる姿を嬉しく勤め。かへりの氣晴しに貝合。哥がるた取に花車のまじはりよろずにかしこく。然も心ざし悪まれず。菟角此子は松に極めて。なるべき者と。すへたのもしくおもひ。身の欲ながら外より大事に掛しに。それまでは遊女に成ともおもはさりしに。小林といへる禿を。松山さまといはせて天職に仕たて明日より水あげに出すといふより。我身の事と覺悟して。遊女に成べき事口惜く。それより作病おこし。あたゆる薬をのまずまして。食物を斷て親かたの歎きをかへり見ず。無言になつて。人見る事もうるさく。眼をふさぎ。卯月のすへより床にふして五月闇のころ。まことに心も闇くなりぬ。人／＼是をかなしく。其身流にはなさじ。無事の姿を見立。親里におくりまいらせんといへと。今更それをも聞入らずして。我も武士の子成ものと。これを名残の一言にして太夫に成子を惜しやさて



武家義理物語 卷五

目録

- 一 大工が拾ふ曙のかね  
美女の俄米屋もをかし  
相生みずじ縁組の事
- 二 同し子ながら捨たり抱たり  
心ざしふかき女のおもはく  
情しる武の道の事
- 三 人の言葉の末みたがよい  
花と花とのさかりくらべ  
寂期に分別出る事
- 四 申合せし事もむなしき刀  
同じ心もかはる世の中

- 五 身がな二つ二人の男に  
かたきにあひぼれの女良  
よく／＼思ひ入て寂期極る事

武士は悪名残しがたき事



○ 大工が拾ふ明ぼのゝかね

石田治部少輔。世ざかりに。花蘭といへる艶女を都よりまねきよせ。寝間の友と定て。ふびんをかけさせられしうち。籠城ちかづきぬれば。身の果べき事をいたはらせ給ひ。何となく京の親元へをくりかへさせ給へり。其後主君討死あそばしけると。世の沙汰を聞ながら。元町人の娘なれば。お跡をしたひて。命を捨てやらす。身を墨ころもになし。其御方吊ふべき。心ざしを極めしに。是も母の親なげきて。無理に世を立させける。父の仕馴し商賣。わずかなる米屋を。一条堀川のほとりにて。親子もろともに。けふを暮し。すゑ／＼はいかなる人にも。入縁を取べき願ひなるに。世間のさがなく。此宿を治部米屋といひけるほどに。家主聞をはかりて。此宿をかへさせける。其さきも又聞傳へて追出し。ひろき都に身をせばめて。はや二十五所かはりて。さりとて難儀にあひぬ。せんかたなく伏見の片陰に草薺を才覺して。其所を又人にしらるゝうたてく。京海道を。朝とく諸道具をはこばせけるに。高家に有し時。くだし給はりし。金銀大分たくはへしを。荷物の救／＼にわけ入置しに。銀三貫目寢道具のうちへ人しれず置けるに。やとひ人肩を揃て。道をいそぎしに。松原通因幡やくしの前にて。暫く休しが。此銀夜着の袖よりぬけて落て。堀のはたにあるともしらず。皆／＼伏見にゆきける。其朝大宮の九左衛門とて家大工有しが。この男むかしは筑後にて歴々の武士成けるが。義理につまりて。牽入して。思ひの外成。職人と身はならはしにて。渡世はかしこく。今朝の初霜いとはず。上京長者町へ毎日かよひしに。自然と此銀を拾ひ。ひそかに宿に歸り。我女房はじめをかたり。是仕合の天理なり。親類かぎつて此沙汰する事なかれと。能くいひふくめて。其身はつねにかはらず。細工所にゆきぬ。其跡にて。女つれあひをうたがひ出し。大分の銀。をとし有べき子細なし。いかなる難儀にあふべきも定かたし。我身の外。一門の迷惑と。女心のはかなく。此事を家主に内証かたれば。其女のいふ事なれば。をどろく断ぞかし。宿

老に通じて一町の沙汰と成。九左衛門隠し置所。曲もの也とかく我／＼の恩智にはをよびがたし。近道に御公義へ申上るに極め。九左衛門に兇義をするに。幾たびもかはらず。拾ふたるよし申せば。いよ／＼後日をおそれ此段言上申せば。七口に高札立させられ。此落し手出ぬ時は。九左衛門にせんぎ有。それまでは。一町へ御預けなされける。其二三日過て。治部米屋の親子。御訴訟に罷出。おとしたる袋の中の品を申上此銀主出されば。拾ひて迷惑いたさるゝのよし此難助たき願ひに申上る。其銀は一たび落し物なれば。ひろはれたる人にとらせ申たき望み。前代なき事と。女氣に欲のはなれ。かんぜさせられ。はじめをたんだへさせ給ひ。流石石田の家にめしつかはれし程こそあれと。御褒美あそばし。其後かの九左衛門めしよせられ。まづ銀主出て其方が仕合なり。もし又しれざる時は。思ひよらざる難にあふべし。もと此あやうき事は其方が女房身のうへばかり思ひ。夫婦よしみかつてなく。このうへにも以前のごとく。つれそふかと御たつね有し時。九左衛門此御意有がたく涙にくれて。かゝる無心中の女。何とてすへ／＼頼みがたし御前よりすぐに。いとまとらすよし申上る。さもこそ有べけれ。夫の身の上をなげかざる悪人に極る者なり。又治部米屋の母親に仰出れしは。其方ども女ばかりにて流罕をするなれば。あの九左衛門を擧として。是に万事を頼むべし拾ひし三貫目は。則敷銀なるべしと。御意親子ともにお請を申せば一町の衆中。是を取持。大工は米屋にかはつた入簞。たがひにむかしを語れば。女は武士の家をだち。男は武士にまぎれなくさもしき心ざしなくて。此母に孝をつくして家榮へて住けるとなり

○ 同じ子ながら捨たり抱たり

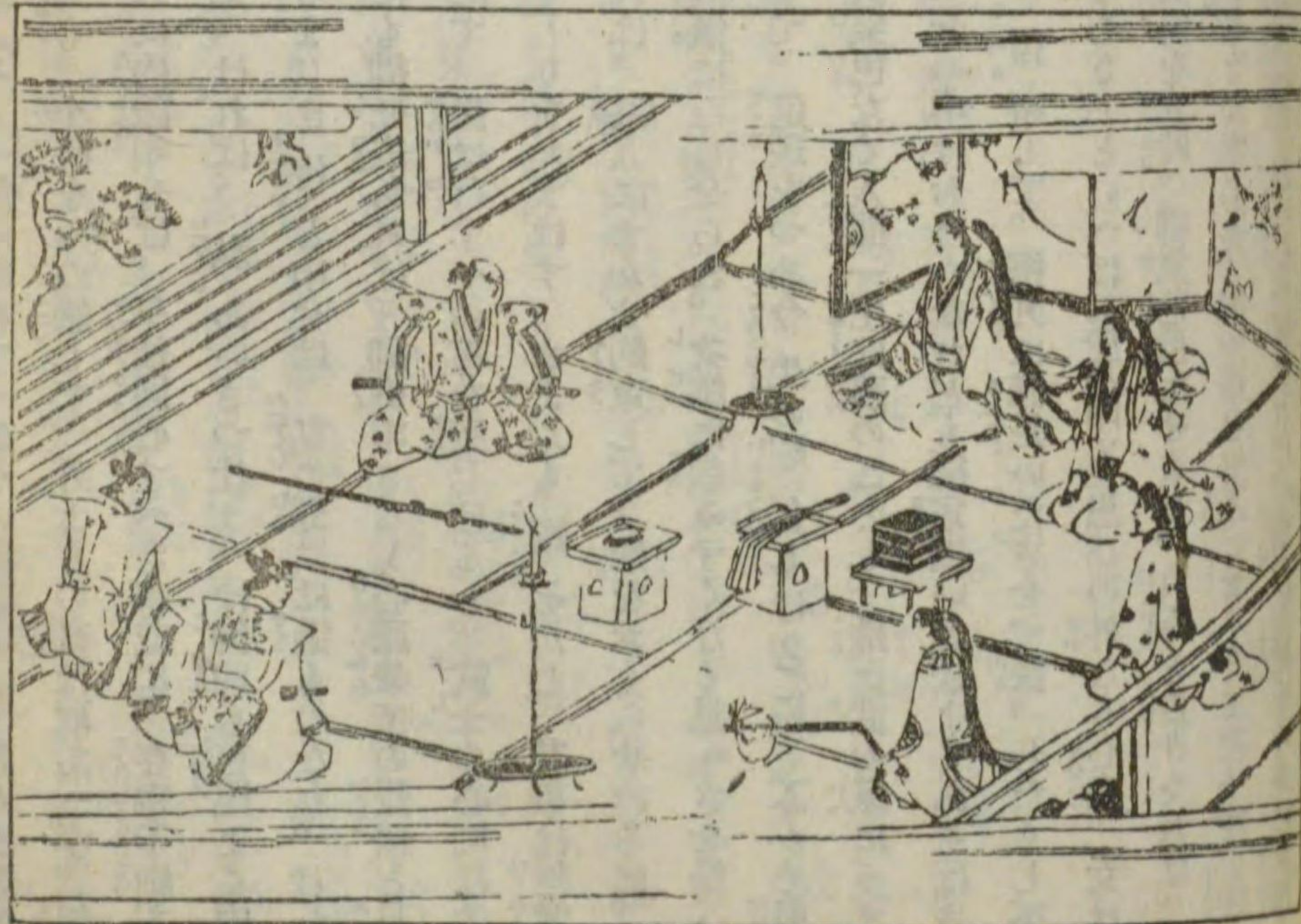
江州姉川合戦。永祿十二年六月廿九日に敵味方暫く。矢留をして。つかれをはらす時。陣小屋の片陰より。夕日の移に見る人の目を忍び落行俤。遠見の役人。木田丹後旗下より是を見付けて。笹しげれる野道を横手に追かけ。其ほど



ちかくなれば。たくましき女のひとつ刀をさして。七つばかりの男子をあゆませ。又ひとりはいまだ乳房をくはへし子を。ふところに抱て。はしり行しが。若者急に見へし時。抱たる乳のみ子を。用捨もなくなげやりて。あゆむ子を肩にひつかけ。式町あまりも辻のびし。捨られし子の泣を此中にもあはれみ。取あげて見しに。うつくしき娘なり。此子を抱ものあれば。先を追かくるも有て。けはしく成時。柳の葉かぐれに彼子をおろし。双物ぬきかざし。男まさりの勢さりとては。氣なげなり。されども大勢かけあはせければ。のがるへきやうなし。中にも物に馴たる人の下知して。其女の命を取事なかれと声かくる。いづれもすこしの手は負ながら。終に生どり。何さま子細有べき女と。あらくあたらず。主人の陣所に引出し。段々はじめを申上れば。丹後此女にむかひ。いかなる者の子なるぞ。有のまゝに申せと。ひそかにたづね給へども。只口惜やとばかりいひて。さしうつぶきて。涙をこぼし。菟角の事を申さねば。いよく不思議に存。もし大將の子息の事もと。しばしためてみるうちに。七つばかりの子が。母の袖にすがりて。とよさまの所へいにたひといふにぞ。扱は末の子とはしれける。汝何もの妻なるぞ。こゝろさしにやさしき所あれば。了簡して。一命を助くべし殊更二人の子を。捨やうに聞事有。ふびんは。いづれか替らざる物なるに。乳をのめるを捨て。あゆめるをいたはりしは。頼て用にも立身のためおもふゆへかと問給へば。時に此女。貞さしあげ。心に有のまゝを語りける。我夫は竹橋甚九郎とて。昔は少知もとれる者なりしが。浪人して後。此里の野父なり。以前の乗馬を牛に引かへ。鑑は鍬の柄となして。ものつくりせしに。此度御下の百姓迄もかりこまれしが。夜前夫のいひ聞せけるは。此軍連も勝手に成がたし。我は軍期を爰に極む。汝一所に命を捨て。何のせんなし。急き立のき。我とおもひかへて。二人の子を随分成人致させ。名跡をつがせよと。さいさん頼まれけるに。是非もなき別れて。かくとりことは成ける又妹を捨て兄を助る子細は。二人ともに夫婦の中の子にはあらず。年月かされても。子孫のなきを。物化しく親類のうちより養ひ得たり。兄は夫の甥なり。妹はわれらが能なれば。結果し跡にても。身をお

◎ 人の言葉の末みたがよい

物には類の集る道理あり。むかし讃州の城主につかへて。細田梅丸とて。南枝若衆の美花。物ごしは初音鳥も奪れ。ちうの声も出ず。まことに梅の風大袖にもれて。行透へるさへ。人に魂なかりきさるによつて。主君殊更の御寵愛ふかく。春にはあへど此梅の匂ひ聞事もならず。見る事猶たえたり。されども人に盛のかぎりあつて。片手の指を四たび折れる年の名残に。元服仰付れ前髪の跡をみしに。美男京細工の。物いはざる業平に同じ。又岡尾新六といへる人の娘に。小吟とて十四歳になれり。いかなる生れがはりにや。かくも又美形なる女の世に有事ぞかし。いにしへの美人揃は見ぬ世の傳へ。よもや是ほど有へからずひとついふにたらず。いづれか身のうちに。毛頭ふそくはなかりき。此男女を牛若丸。淨溜利御前のごとく。世上よりいひなして。夫婦のかたらひせしと取沙汰いたしぬ。娘の年も縁付ごろなればあなたこなたよりいひいれけるは。うるはしき姿





なる徳ぞかし。此息女見もせぬ梅丸思ひこがれ。男をもたば。此人ぞと一筋に極めて。外への縁組中へ親たる人の心をそむき。何とも是にあぐみて此事うち捨おかれぬ。また梅丸も。小吟をみぬ戀して。外よりの縁は取あへず。年月過しを或人聞付。これは似合たる事と取持。娘の親。岡尾新六に内證申せば。早速同心すべき事成に。存子細あれば。かされて此方より御返事申上べしと合点せざる様子に見へければ。私あいさつ仕うへは御前も首尾よく申上。世間ともよろしくすべし。聲にあそばしても。くるしかるまじき侍と申せば。私の聲には過ものなり。じたひ申はよの義にあらず。梅丸事は大殿御恩ふかき人なれば。今にも御死去あれば。御供申さるゝ心底兼ての覺悟と見請たり。然ればいつと定めず。又ひとり身と成事を親のふびんにて。愚に行すへの事を案じけると。武士の心にはすこし手ぬるき申分とは思ひながら。人の親の身と成ては。世のそしりをかまはず。まよふも斷ぞかし。其事は無常の世なれば。無事の身にも愁は有なり。此縁是非にとすめければ。其人にまかせ約束して。姫をおくらせけるに。たかひにこがれし中なれば。ふかく契をこめしうちに。大殿御病氣にならせられ。次第に頼みすくなく見へさせ給へば。今更おどろく事もなく。追腹の覺悟して。妻にも此事かたりて。道理をつめ今生の暇乞しけるに。ふかく歎きぬべき事を思ひやりて。ひとしほふびんなりしに。すこしも其氣色なく人間一生は夢のごとし。殊に武の家にうまれさせ給ひ。主君のために。一命をしませ給ふ御事にあらず。女の申はおろかなれども御策期いさぎよくあそばされ。名をすへの世に残させ給へと。常よりは物靜に。こんくの盃事して。梅丸に満足いたさせて後。わたくし事は女心の定めがたし。御策期の跡にては又縁にまかせ後夫を求る心ざしといへば。梅丸聞て。思ひの外なる心底。女ほどつれなきものはなしと。すこしは恨みふくみ。眼色かはりて其座を立時。御氣色俄にせまり。只今と告きたれば。御城内にかけつけ。物靜に拜顔して御言葉をはし。かぎりの別れをかなしみ。御からを御墓におくりて。一時の煙となし奉り。物の見事に切腹の首尾のこる所はなかりき。流石日比の身の取置世をみぢかふみしに。逆もの事に女房

もたれずは。能事なるに。廢りし女のおもひふかがるべしと。この沙汰せしに。梅丸首尾よく切腹の事聞といなや。腹かき切。夫の供をいたしぬ。書置段々見し人感涙して。寂前名残の時。つれなき言葉に夫氣をもつて。妻の事をおもひ切するためならんと。彼は此人の心中をかんじける

四 申合せし事も空き刀

悪心は眼前に其身にむくふ事有。むかし丹後の國主。長岡幽齋藤孝の家中に。市崎猪六郎とて大酒を好み。作病をかまへ。武士の道をそむきて金銀をたくはへ五十余歳まで。妻子ももたず。世を我まゝに暮しぬ。下人用捨も常にかはりてつかひければ。此家をみかぎり。大かたは欠落して。朝暮人に事をかざれし。手ぢかつかへる者に。勝之介。番之介とて若年なるが。此二人何事をも堪忍して勤めけるうちに。毎日主人恨みかさなり。暇を乞ひ出しもせず。それより殊にきびしくつかひ給へば。菟角は身のつゞかざる道理につまり。兩人内談極め。主人を今宵のうちにつて立のくに成。勝之介いへるは。二人ながら立のかずとも。此彦人は何となく跡にのこりて。のきたる者の科にすへし。それがしうつたる分に極め。金義をはつて後。其方は何となく年内は爰に暮し。正月十八日に都の清水の子安堂にて出合。同道して西國にいたり。名を替。奉公を勤むべしと。堅く申合て。其夜半に子細なく主人を打て。勝之介は立退ける其明がたに番之介さはぎて追かけしが。はや行かたしれずいよく勝之介が仕業に極る所に。方へ御政あそばしけるにしがたし。つねく悪人なれば吟味の役人も大かたにして事濟。後日の御沙汰に成ぬ此猪六郎家に持つたへて。平家侍。越中次郎兵衛かさしたる。こがねづくりの名劍有しが。番之介是を取隠し。はき庭の木陰に埋み置ぬ。御吟味の時不斷勝之介が預り居たるよし申あぐれば。扱は是ゆへ主人をうちけるよと。はつと此沙汰有ける番之介が心入には。兩人浪人のうちのたよりも成ぬべき物と。出来分別成しが。此事勝之介傳聞て。さりとは無



念盗人の名を取事末代のちじよくなり。爰はのがれぬ所とおもひさだめ。京都より二たび歸りて。番之介が親のもとに昼忍び入て。名乗かけて切ふせ其身も即座に相果しが晝置のこして。段々はじめの所存顯れけると也

⑤ 身かな二つ二人の男に

うかれめの身は定めがたく。つながぬ舟にたとへて浪の枕を千人にかはし。紅舌万客になめさせ。ひとつの心を其日の男好るに持なし。笑ふ時有泣折有。さまざま替つた浮世の物語り。聞流せる年月を。なげきながらの哥のふしにおくりて。下の關の勤めも今一とせにたらずなりて。生國筑前の芦屋なる親里に歸るを樂しみに思ふ折節傘人らしき男の。言葉は關東の人めきて。世をしのぶなりふりして。いつの比よりか。かりそめにあひなれ。いとさ又もなく。戀をかさねしうちに。此男今は心底のこさず語りけるは。我本國は出羽の庄内の者。荒嶋小助といひしが。子細あつて。ほうばいの億住源太兵衛うちて。首尾よく所を立のき。今爰にしろべの町人を頼み忍びけるは。一子源十郎我をわらひ。諸國をめぐるに聞かく身隠し遊山所もはゞかるなりと。段々物語して。天理にて源十郎にうたれても有時は。ぼだいをとひ給はれと。春日の御作の守り觀音給はりければ。かぎりのやうにおもはれてかなしく。涙にしづみて別れしが。その後は日々にうとく成て。たづね給はぬは世にうき浪人ゆへかとおもひやられ。いと口惜く。日毎に狀通して。たまさかにあふ時は。枕もさだめす泪にして。一日を暮しぬ。其後又旅人の雨やどりの浮晴しに酒の友と成けるに。此男も又此定家にふかくなづみて。長崎までくだれる舟よりあがり。主なしの身の樂は。是ぞと爰に日をおくり。夜をこめて女郎のためによき事ばかりつりて。定家も又をのづからに氣を移して。小助事は忘れし是不心中にはあらず。つねの女さへ時にしたかふならひなれば。まして流の身として。定家はきどくの女ぞかし。小助尾羽をからし。あふべきたよりなきを。女良のかたより揚屋の首尾をととのへしが今は了願つきて。観かた吟味つよく。しりび

て逢事も絶たり。又源十郎も此所の遊興に路金つきて。脚へも先へも行がたし。諸神に大願かけて。敵打身のふかくぞかし。是も契をかされてから。子細をかたりて聞ば。小助身のうへの事にうたがひなし。定家身にふるひ出で。それも又此人もいとさ替る事なし。何ともさしあつてのめいわく。大かたならぬ因果なれば。先此事小助殿に通じて。此所を立のき給へる文したゝめし時。源十郎小者。小助有家を見出し。はしり來て。けはしくやうすかたり。女良とおもひ何の遠慮もなく内談せしは。其家野ばなれこそ。幸なれ松の茂みに木隠て。人家を出して。名乗かけ願ひのまゝにうづべきと。着込鉢巻して刀の目釘をあらため。けふぞおもひの晴し所。女良も此身をいはふてたべ。敵をうつ縁と成。此程爰に足をとめたる仕合ぞかし。追付めてたふ御げんに入べし。首途盃さし給へといふ。是非なく常より機嫌なる貞にして。三献の酒も心を付て大事の前なればとひかへて。祝儀をふくみて暇乞していさみく。揚屋を出て行。程なふ町はづれの木陰にしらび。小助がやうすを見合けるに時節と借家を出て。何心もなふ松原にさしかゝりしを。源十郎進み出で。小助見わすれはせまじ億住源太兵衛が一子源十郎親の敵うつ太刀成と。飛かゝれば。小助しさつて抜合暫く切むすぶうちに。女のあゆみにはかひなく。定家此中に飛込ば。兩人目と目を見合ける。定家は心のほどを書残して。二人の勝負つかざるうちに。すみやかに自害して果ける。たがひに大事の中にも。是はふびんと涙くみしが。其死骸を脇にみて。入乱て手を負。兩人ともに相うちにして。命をはりぬ小助がはたらき。源十郎が残念定家が心ざしわけて三所に面影残り見し人是を世語りのなみた



武家義理物語 卷六

目録

一 筋目をつくり髭の男

蜷川のながれをにごさじ  
まとはあらはれ出る法師の事

二 表向は夫婦の中垣

年寄男も縁かや京住ひ  
神鳴の夜業平の昔を思ふ事

三 後にぞしるゝ戀の闇打

主命と親の敵いづれか  
西の宮の落馬養生の事

四 形の花とは前髪の時

万里へだてゝ心中の程  
たのもしき侍大坂に有事

筋目をつくり髭の男

山城の宇治の里に。身を隠して住る浪人あり。當分の世わたり。壺の入り日記など書てあなたこなたの氣に入。年月爰にかさねけるに。むかしはいかなる人ぞとゆかしかりき。ひさしく先祖の事を語りざりしが。有時所の人の集て。紫野の休は名僧成けると。咄しのついでに。蜷川新右衛門は文武の人と聞傳へて譽ぬれば。彼浪人すこし哥學有て。其身花車にそだちければ。風与出來心にて。筋なき事を申出し。それがしは蜷川新九郎とて。新右衛門が孫なるとかたりぬ。兼て新九郎と名をよべば。自然の道理に叶ひ。おのゝうたかひはれて。扱は蜷川の流ほど有て。万事しほらしく見えけると。それより後は世間に此人をおろかにせずして。新右衛門孫といひふらしければ。いよゝ新九郎子細を作て。蜷川代々の系圖をこしらへ見せける。此事世に沙汰して。岐阜中納言秀信公に身躰すみて。武藝は外になし。歌道もつはらに心がけしが。是もまどすくなく。蜷川のすゑといへる。名聞ばかりに。面むきをみせかけ。内證は色にまよひ。もとより悪心の侍なり。其比蜷川次郎丸とて新右衛門筋目にまぎれなき人。わがみひとつを浮世と捨て。十八歳より出家して。津の國金竜寺の山陰。古曾部村といふ所に。南を見晴し草庵をむすび。篋の細道わけかねて。木末の夏と成にけり。能因法師の詠殘されし。生駒の山も雲の峯。かさなつて。北は櫻の盛かと。氣色をうたがふ入相のかね。涼しき風に無常を觀じ。あながち仏のみちも願はず。朝暮和歌に心をよせ。折ふしは笙の音をたのしみ。無我にして山居のおこなひ。殊勝さ此人の心ぞかし。其比都白河のほとりに。是も身を歡樂に取置。明日の事をしらず。けふまで暮されける星合主膳といふ人。入道して。星薄坊と申せしが此法師の男さかりに。我若道のむすび。世にあるよりふかかりき。其よしみて。今もわすれず。爰にたづねて。過にし事をかたりなくさみ。落葉は煙の種と成。釣釜に素湯沸して。咽のかはきをやめて。貧家の氣散じ。是ぞと宵の間もなく明かたに別れ。京都に



歸りさまに。宇治に住たる浪人の噂。蜷川氏の筋なき事をいひ立にして。岐阜秀信公につかへて。高知をくだし給はり。我世と心にまかすよしを語り。いかにしても悪き仕方といひ聞せけるに。次郎丸入道何となくうち笑ひて。世の中にはかゝるまぎれ物おほし。我等の先祖の名をかりて。武家を立るも口惜き所存なれどもその者が身をたすかるたよりにならば。あらたむる事なかれと。大やうにいひ捨。其通りに濟ける。其後彼新九郎身を作りものなれば。諸事に。武家の作法ちがひて。一家中是をうとむ折から。天命つきて大寄合の座を惣立の時。岩田外記之進。刀とさしかへて屋形に歸ぬ。外記之進は跡役に。心静に立出。刀かけをみしに。我刀にはあらず。是は誰の腰の物ぞと。茶の番の坊主にたづね給ひしに。革柄に蟹の目貫。無地の鉄鑢に。くり色の刻み鞘。ふだん是を見馴て。たしかに蜷川新九郎殿の刀といふ。然らば汝ひそかに。其斷を申。替へてまいれといひ付られ。既に新九郎屋敷に立越。此有増を通じけるに。あやまつて何の子細もなき事を。此刀さしあつての無分別。それがしが腰の物にあらず。近頃卒尔成事を申けると。存知の外成返事に。使の坊主迷惑して。此段外記之進に申せば堪忍ならず。吟味役人にいひ届て。兪義に成ぬ然も外記之進刀は來國光が作なり。新九郎刀は平安城義國と銘は有ながら正しからず。彼此不首尾に極まり。新九郎義切腹仰せ付られ。皆指をさし。籠乗物に押入らるゝ面影を笑ひぬ。かゝる時此のり物のむかふより。出家一人かけつけけるをのゝあやしく思ひ。中ノ命乞は叶はざる事なるに。無用の法師の出所と。先をはらへば。案の外なる訴訟人。わたくしは蜷川新右衛門が子孫次郎丸といへる者の入道なり。然るに此新九郎。筋目跡かたもなき事を申上。御家に濟事心外ながら此身なればゆるし置處に。此たびの悪事先祖の名をくだす事。末代家のちじよくなれば堪忍ならず。是ぞ我家の系圖と。新右衛門自筆の物をさしあぐれば。また此義御せんさくあるに。是も新九郎悪名にまぎれなく。御仕置替つて。うち首にあひけると也

○ 表むきは夫婦の中垣

文録の比。都のし東寺のほとりに。常にかはりてふしぎなる夫婦の人あり。縁ほどおかしき物はなし。其男は七十余にして。かしらに黒き筋なく。浦嶋がいにしへを。今みる親仁なるに其女は。二八にまたしき春の山。花の口びるより物いふかとあやまたる程の艶女すこし物ごしにこなまりあつて。四國そだちとはしれける。京の女ならば形慢じて男にくみをすべきに。田舎人の律義さ。みぐるしき人に添て月日をおくられけると。是をかんする人はなく。其美形をせめてみる事をなげきしに。此男年はよれとも。行義に暫時も油斷せず。鮫鞘の中脇指。常住反かへして目にかどを入。命をなんとも思はぬ有さま。人おのづからおされて。其内にたよるものなかりき。朝夕のいとなみ。何するとも見えず。米をかしき釜の下焼までも。其女の手にはかけず。男の業には。にあはざる事をもして。女をいたはりける。そもく此夫婦と見えし人の生國は。豫州の武士成しが。金子合戦。天正のみだれに。此息女の父。柳井右近うち死し給ひ。御妻子流浪あそばしけるを。我腰ぬけ役の留守番頼ませ給へば。せめての動に人々隠國いたさせ。世しづまつてのち幡州人丸の里にしるべ有て。一とせを暮しけるうちに。此母。御病死。うき世とは存じながら是ほどかなしき事。身をおもふ日影者の何くへも道せまく。此姫子をつれて。老の浪のよるべ定めず。廻國して。やうく今の都に來て。うき住ひ。世間は夫婦分にいたせしもをそれなれども。姿すぐれさせ給へば。諸人の執心うたてく。戀をやめせんがために。かく夫婦とは申ならはしける。昼は女房どもといへば。息女もかしこくて。旦那といひなし給へり。此心やすきより姫いつとなく。まとの妻のごとくおもひなして。うちとけさせ給ふも此男身をかため。武士の心底を立。ゆめくそれに氣をうつさず。さりとはむつかしきあひ住の年をふりぬ。折ふし夏の雨しきりに。宵より鳴神ひびきわたりて。つねさへあばらや殊更にこぼれて。軒の雫もいたくふり込。南風はげしく板戸もかけか



ねはづれて。外のひかりのおそろしく。内のももし火影消て。女心にはひとしほ物がなしく。頼む人として親仁なれば。ゆたかにふしたる懐にかけ入せ給ひ。こはやとしがみつかせ給ひ。やごとなき御肌の身にさはれば。観音經をどくじゆして。随分心を移さざりしが。神鳴も落かたしれず。おさまり。雨もをだやみて壁下地のしのべ竹に。白玉の取添も。物あはれにやさしく見えて。むかし男の女をだまし鬼一口に。かみころされたしと思ひ入たる。闇の夜も正しくこんな面かけならめと。親仁老をおこして。人のしる事にはあらず。りちぎも物によれとひだりの足をうちもたせけるが。弓や八まんあやまつたり。いかにしても道をそむけり。扱もあさましき心底かなと。我と悪心ひるがへしてそれよりむく起にして立さり。観念のあかり窓のもとにして。其夜を過し。其後はいよくをそれて。此御息女を見立まつりしに其比高家のかたより美女御たづねあそばされしに。都の事なれば。美君有べき物成しに。いづれもすこしづゝのさはり有てみやづかひの望み絶ける。然るに彼息女御たづねの年の程なれば。よそほひつくるふまでもなく。御目に掛しに是につゞきて又有へからずと。余義極まりての後。筋目をたゞし給ふに。父母ともに歴々の武士なれば。是に子細はなかりき。されども此親仁夫婦のかたらひなしけるとの取沙汰。第一のさはりと成此首尾かはりて。彼息女を歸させ給ふに相見えし時。此親仁所存のだん／＼言上申せど。是ぞ縁者の證人と誰か取あけ給ふ御方もなかりし。身にあやまりのなき事は。後日にあひしるゝ御事あり。此たび官女にそなはらざりしは縁つくなれども。下人の不作法とは。世の聞へめいわく至極の所なり。是非に今一たび御取頼みたてまつる。わたくしなき普段成とひだりのかいなを自うちをとして。泪に沈みぬ此心ざしをかんぜさせ給ひ。御うたがひ晴させられ此美女御てうあひの御枕のあした。なを／＼身の曇をさつて月の都の只中に住給ひぬ。

目 後にをしるゝ縁の聞打

何事もさし當での分別はかならず後悔の或人のいへり。けかを明けの沙汰に懸。其道理至極の時是非をたすを。まとの武士といへり。それもことによるべし。其比加賀の國。大正寺の城主山口玄番頭。家來に千塚藤五郎といへる男。十六歳の時。父藤五左衛門を闇うちにあひて。其時分いろ／＼御せんさくあそばしけるに。相手しれがたく其通りに此沙汰をはつて後。藤五郎に仰渡されしは。随分思案をめぐらし。父をうつつたる者。相しるゝ節。此本望をたつすへし。汝が身にしても是非なき仕合なり。すこしもひけたる所なし敵住居見さだめ次第に。暇をとらずし。先それまでは藤五左衛門名跡相透なく。大番組に入て相勤申せとの上意。有がたく其通りに人もゆるして若年にして大役つとめかぬる武士にあらず流石千塚の家を継べき心ざし見へけると各すへたのもしく思ひぬ。程なく六七ケ年すぎて血氣さかんになつて。親うちたる者の行衛を朝暮心がりに過し。是をうたては武士の一ふん立ざる所と。諸神に宿願をかけて。此事ばかりを祈て。今にさだまる妻子も極めず。現にも夢心にも。親の面影をみる事千たびなり。ある時思ひもよらぬ事に。闇うちの相手しれける。我母人相果られし後。父藤五左衛門いまだ流年さかななれば。後婦はもとめずして。美形の妾者を置て老樂の寢屋の友として。おもしろ酒も折ふしは乱におよび。日ごろは武道の男なれども。女にはよはき心ざしをみられ。いづれ智愚のわかちもなく。色道にまどはぬはなかりき。そも／＼此女は京そだち成しが丹波の笹山に縁組して尾瀬傳七といへる浪人とかたらひしに。次第に尾羽うちからして。渡世成難此女の手道具まで代なして。今は了簡つきてむごき仕かたは。暇乞なしに匆書捨て。其身はいづくに行しもしれずなりにき。女心になしく是をなげくに甲斐もなし。道を立てひとりくらせば。かつめいにおよび。身を器染になす事も。一心より発らぬ出家もいやなれば。世渡りのたよりばかりに。又奉公勤めける。傳七二たび丹州にかへり女の成行物語を聞てなを執心やむ事なく。何とぞ主人の手前を出てかへり。縁はつきせねば。此事はやくとたよりをもとめ。忍びて匆つかはしけるに。此女見るまでもなく。かひやりて年比のうらみ。殊更別れさまの難義。思ひ出すさへ身ぶるひして。



さりとは其男うらめしやと。むねをいためけるも道理につまれり。さるによつて返事せざる事をうらみ。扱は今勤めける主人。てうあひのあまり外をせきて。其身を自由させぬと見えたりと。一筋に思ひ極め。段々有家たつね。加州に立越。おもひもよらざる藤五左衛門恨て。うつてのきけるか。此女主人是非も浮世の別れに其なげきやむ事なく。年月の御厚恩わすれず。せめては御ぼたいとはんため。都の下賀茂に。柴の戸をさしこめ。姿のかざりを切て捨。後の世を願ひしに。傳七又爰にたづね入て。かく佛の形の衣をけがし。むかしを今もつてなげく。思ひよらずやと。あらくいへるを取て押へさしころし。其ま、草菴出て行。此女の弟大藏といへる者前髪ざかりの小草履取。東山南禪寺の末寺に奉公せしが。是を聞付。深くなげきぬ。しばらく思案して。此程牽人の傳七。此所に無理入せしと。姉の語られけるが。正しく此者の仕業うたがひなし。扱は藤五左衛門殿うちけるも。傳七に極まれり。命を取事小腕に叶はざれば。是より行て。藤五郎殿に申合て。敵をうつべしと。加賀の國にたつね行はしめの子細をかたり尾瀬傳七生國は。幡州竜野の者なれば。かならず國元に住居さだまつたる事なれば。いそぎ幡州に御下向あ



そはし。傳七うち取。御本望進し給へ其男たとへ身に墨をぬれはとて。それがし目比に目しるし有と。いさめければ。藤五郎よろこびかぎりもなく。今宵のうちに用意して明日は御暇ながひ罷下るべし。旅用意仕れと。ひそかに跡の義申付る所へ。家老中御用ありとの御使早速登城仕れば。備中の福山へ御使者に仰せ付け。はじめての役目有難仕合と。お請を申うちにも。敵の事を飛立ほどに思ひ入ふかし。主命なれば。是非もなく。先此たび相勤て。後日の沙汰と。彼大藏も同道して。備中にくだりしが。津の國西の宮の宿に付ば。所の人立かさなり。落馬して旅人のあやうかりとて。氣つけよ。水よといふ声さはぎぬ。大藏是をみて。あれはかたきの傳七なりと身をふるはして申上る。藤五郎も是はと。さしあつて分別し。主命の御用の時。たとへ無事の身成とも。うつへき所にあらず。殊更かゝる難病なをもつてと。大藏に義理をいひ聞せ。所の人に妙薬をおしへ。此うち身には。鹿の袋角を紺屋の糊にて摺ませて付と。其ま、いたみさる物と念比に病人の事をいたはり。正氣付に子細はあらじ。其時分是をみせよと頼み。文書残し難病はうたずに。命を助置と。右の段々うち付書にいひ置れける。其後病人驗氣の時。彼効をあいわたしければ傳七此心底を感じ。まこと有武は各別なり。世界にながらへてせんなし。もと某が悪心身に覺て。加賀に立越。其身の悪事。西の宮の首尾さりと有がたし。それゆへ御親父様をうつたる所にまかりて。自害仕るなり。とどめをさして給はれと。心中の通り札に書しるしておもひ切たる最期。藤五郎がうたさるは。うつにまさりし武道と理をせめて。天晴神妙成心入と國中に是を響ける

④ 形の花とは前髪の時

人もひと盛は花。木村長門守めしつかひに。松尾小膳とて。形を奉公の種として。衆道時めく十六歳より此家に勤めける。生國は。石州濱田にて杉山市左衛門といへる人と。念友のかたらひをなしけるが。出世なれば。別れを惜き戀



路を見をくりて。市左衛門すゝめて上かたにのぼしける其心ざしたのもし。山海万里はへだてつれども効にて契をこめて。朝夕其人の事を忘れずして。ひとり目はあはず。過にしたはふれ枕ゆかしき折ふし。鳴野宇右衛門といへる侍。執心をかけて状付られしに。情心はなれて存る子細あつて外への念比おもひもよらず。かざねては此義御無用御返事も仕るましきといひやれば。宇右衛門せきて首尾見合。小膳がへやにたづね入。是非を極めて身のさはりを。無理に吟味をする。小膳すこしも驚く氣色なく。我おほしめしての御事。あだには聞ず。然れども國元にていひかはせし人有て誓紙も。是見させ給へ。いかにしても此義理立ける。そも／＼の事ども内證ともに語りて。今より其方さまを頼入。衆道のとてまかなひがたし。誠の兄弟ぶんにおほしめされ。御引廻しに預り度と理をつくして申せば。宇右衛門是を聞分。それよりしては如在なく小膳うしろみ各別なる心づかひをいたせり。又玉水茂兵衛といふ侍。それも状を付てなげくうちに。宇右衛門したしく語るを見出し。以前より執心かくる我等事は捨置給ひ。後に申せし人と。御念比あそぼす事。いかにしても心外なり。何ほどいひわけ有ても堪忍成がたしとかふいふにをよばす。うちはたすべしと。思ひ切て見へし時。小膳も今は了簡なく。さやうに仰せらるゝとて。此方には毛頭くもりなき事也。然れども命を惜むにあらず。いかにもお相手に成べし。しかし小腕なれば。其方の御太刀下に罷成はしれたる事。跡の義は見ぐるしからぬやうに頼みたてまつる扱出合は。いつ比と申せば。茂兵衛いよ／＼すゝみて。十九日の夜こそ宵闇なれ。初夜より前に玉造の芝原に参り合。死出の旅路の二人づれ。浮世の月をみるも。ひとへ二日なれば。身の取置心静にあそぼせと。たがひに礼義をのべて立別れぬ。程なく約束せし。十九日の夜に入て小膳人をもつれず身ごしらへして。申合せし野邊に行てしほし相待ぬれど。人かげも見えねば。すぐに茂兵衛へ長屋に行て。此せんぎせんと忍び／＼に行けるに。跡に人の足をとすれば。竹垣に身添。爰を大事と隠れける。其人を誰そとおもへば。念比せし宇右衛門成が。目のはやき侍。にて小膳と見付。其まゝ立寄是は何とも合点まいらず只ひとり忍び給ふは。茂兵衛に情かたらひ

と見へたり。さもあれば。此男中／＼一分立がたし。其うへは茂兵衛其方兩人を榎手成とすこし腹立道理なり。小膳さはぐ風情なく。是は入組し子細ありと。はじめの段々かたれば。いよ／＼うらみ有念比とはかゝる時の事なり。後づめには此宇右衛門たのもしき山ありとおぼしめし。茂兵衛うち給へと小膳に力をそへて。屋形に案内させて。門に立聞すれば。茂兵衛へ分別かはりて。いまだ書置に取まぎれ。延引申なり。爰にまた相談有。宇右衛門と御念比あそぼさねば。此方に何のうらみもなしそれのうち果し所にもあらず。此方にはすこしも申分なひとといふ。こなたにいひぶんなぎと仰せらるゝうへは。此方も其とをりと。何のせんもなき茂兵衛がしかたなり。それより宇右衛門と大笑ひして立歸り。なをたのもしき侍。外よりおもふには各別。義理一べんのかたらひ。小膳がすがたの若松ちとせの春をかざね。すゑ／＼武の家さかへ太刀ぬかず

してをさまる

時津國久しき

京寺町通五条上丁

山岡市兵衛

江戸日本橋万町角

萬屋清兵衛

貞享 五戌辰歳

二月吉祥日

大坂心齋橋筋淡路町南入丁

安井加兵衛梓



繪入  
新  
可  
笑  
記



笑ふにふたつ有人は虚實の入物明くれ世間の慰み草を集めて詠めし中にむかし淀の川水を硯に移して人の見るために  
道理を書つゝけ是を可笑記として残されし誰かわらふへき物にはあらず此題号をかりて新たに笑わるゝ合点我から腹  
をかゝへて智恵袋のちいさき事うまれつきて是非なし

難波俳林

西

鵬函

新 可 笑 記



新可笑記 卷一

目録

- 一 理非の命勝負  
武士は人をたすくる一言の事
- 二 ひとつの巻物兩家にある  
武士は義理死世に惜む事
- 三 梢におどろく猿の執心  
武士は不断覺悟の事
- 四 生肝は妙薬のよし  
武士は主命に替る事
- 五 先例の命乞  
武士は内證をみせざる事

一 利非の命勝負

古代徳ある人のいへり。天のなせる薛は遠べし。自からなせる罪は遠べからずとなり。時に九州の國主武の政事たゞしく。民百姓をすくはせられ。自然と天運にかなひ給ひ。領地の万木千草までも。國のさかひをかぎつて常にまされるの葉色。千秋の世の中月も清よき時津風しづかなり。其比南都春日の里より舞曲の美童。手貝の胡蝶元興寺の菊若此二人同年にして音聲そろひ。さながらはらからの艶形かと思し人思ふ程に似たり時勢粧をよくうたふに。都とをき目にこがれて花もみぢはいづくも山更にかはらず。これは見なれぬ哥舞の曲なり諸人聞傳へて一詠一樂わたくしにはをよばざる事をねがひぬ。國のかみ是をあはれみ。城内に舞臺をしつらはせ。左は男棧敷右のかたは女中とさだめ土座はすゑ／＼の万人自由に見るためと仰せ出されしは。有がたき世にあへる時しも秋のはじめ。七夕の半天しめやかに。烏鵲のはしかり雲龍の水引冷風にひるがへし。蜀江のしきの掛幕ひかりうつりて銀燭ほしのはやしのごとく。役者も羞明。さしきの松の風おさまつて後。露はらひのおどり太鼓をれより打つゞきて。小てふ菊若ふたりの美兒緋のはかまこしだかに紋羅のかたぎぬ。まくり手の紫紐玉牡丹のかんざし。しら綾のかづら帯紅粉は白皮をいろどり。細眉は雲まの月僅に出るにとならず。唇は丹花を欺き。惣じて面子好姪く。金の團扇をたづさへ足とりに六つの拍子をそなへ諸藝を宵よりつくして是にあかずも。明行名残をおしみぬ。殊更女棧敷は蘭帳ちく簾を心の外にうちあげ。國女腐おつぼね。表づかひの女までおのが善悪の面を恥ず。青眼すはつて覺えず笑ひを催せり。女はさもこそあるべけれ男も邂逅に見るなれば。番所を相役とかはり。後は書院玄關も明て。掟見だりかはしきも。不斷の事ならねは横目の輩も其通りに見ゆるしける。爰に御納戸の奉行四人して相勤しか別して今宵は御用しげく。物の音もはるかに聞て心は空になりぬ。やう／＼囁ちかくなりて役義仕舞。次第にひとり／＼見る事をいそぎ老人もなかり



き。其折ふし御前ちかき人御納戸に入て役者にくだされもの、金子御用のよしにて役人尋ね給ふに。老人もなく勤め所明らるゝ事疎略とさせらるゝ所へおのゝ立歸り御金相渡す時心覺えの五百兩包みひとつ紛失していろゝ兪儀をとげてもいよゝないに極まり。役人迷惑その身ぶさたよりおこりぬ。其夜は明て七月八日に老中御前に披露あつてまづ若殿の御耳に立ける。四人御さし圖うくるまでもなく。閉門して。いづれも申あはせて切腹の覺悟かゝる事身を捨るは口おしき御意をまちけるに先奉行に何の子細もなく納戸に末のゆく所にあらず。しかれば此金の盗人侍ぶんの者に極まれり。武家は前代未聞の悪人天をわけ地を割此科人せんさくをとげ。永代の仕置におこなふべしと御腹立至極の所なり。城下の道すじ人馬の往來をとどめ。一國のわづらひとなりぬ。内談評定さまゝなれ共何をかもとに兪儀の役人たいくつして。せんずる所四人の納戸切腹に極まりぬ。其比宇土の長濱といふ所に。神道の行者浮橋宮内卿橋の正連といへる人。平生眞言の行ききをもつて人相見る事天眼通を得たり。今度國中の難義をおもんじ。此金子の取手は御家中をのがれず。残らず面を見せ給はゞ人相の秘事をもつて其ものをえらび出し。万人の難義をたすくべしと世にためしなき御詔なり。諸役人兪儀に案飽し折からなれば。正連に見分いたせとの仰せを蒙り。明德門の額をかけ。矢藏にあがり。神力此時と觀念の眼をさへぎり。諸人の登城まちけるに。老人より次第に立ならび。つねはあかずの穴門を老人つゝ通されしは身に罪なくても心ちよからず。家中残らず。御門を過して後。宮内ひそかに御目付役まで申せしは。百卅七人めの茶小紋の上下着したる人ぞと正しく申せば老中おどろき。それは何の何かしとてれきゝの侍なり。心得がたき大事と思案せらるゝ時。たとへ何人にもせよ。金子の取手にきはめ。たしかにさしづをせし事はや其隠れなし。此上は了見に及はず寄會所へ其侍めしよせられ。右の段々仰せ渡されし。是非もなき仕合なり。人も多きに悪名にさゝるゝ事。これ武運のつきその宮内に對談のねがひ。尤善惡のせんぎ有べし。大掛なれば二腰は預り。正連に出合。理非明らかなる所なり。それ人相をもつて善惡をしる事。唐の莫天綱。我朝の滑

明こときさへ側中といふ事もあり。いはんや其方の凡慮にて人相の家職は價をうばふの賊なり。我に何の見所有て罪に落すや。尤なり世々の人相者も天理の常をもつて勘へは何の中さる事か是あらん。寔に古語にも人恒の産なれば恒の心なしと。貴方の明德門の象字の見やうは諸人の眼色とは事かはり面躰は仰き見ん共。瞳子にては地を見る事。是第一の目付なり。されば眼は神明の宅にして明鏡のごとし。胸中に邪あれは瞳子正しからず。心爰にあらざれば見れ共みへざるにはあらずや。貴方の惡を掩といふ共其罪いづくに遁れんやと。道理をせめ付骨髄にこたへ魂を刺るばかり落し付て申せば。侍赤面して此上はそれがしを拷問あそばし。其理明か成時は宮内が五躰八割になして世の掟を正し給へとはなれきつて申せば。宮内はひるむ所なく。汝此罪をのがるべきや忽ち顯し國土のみせしめになし給へと。兩方命惜む所なし。其まゝには濟がたく是非なや此侍其役人の手にわたり。引立られて行風情我敷嶋の道ならてと讀し哥に其罪のがれしが。今のうきよの武士かゝる手ぬるき哀をしらず。いろゝ品かへて責つれ共此事しらぬに實定して次第に息も絶ゝになる。今ぞと見えし時宮内をよび密相手は只今絶命にうたがひなし。責ころして後其身の難義と申せば。さりとは武士の心根つよし是程まで申さぬ事の頼もし。され共金はあの者盗なれば。なをつよく責て命を取給へ。其後は宮内が覺悟と申せば此一言にかの侍夢のごとくなる眼を幽にひらき。ひだりの手をさしのべいひたき事のありげに見ゆれば。しばらく心をやすめさせ。役人近くよれば此男正念に起なをり世にはかゝるふしぎもあり。人相を見て大事をする。宮内當國の重寶此御家なを治まるべき瑞相なり。其金盗人我なり。心の外なる事にさしつまり。傍輩の難義をかへり見ずして是を盗ぬ無刀の大賊不仁の凶徒に劣れり。今破賣のくるしみによつて白狀申にはあらず。それがし此まゝ命終るにおひては世の寶なる宮内が命の程の惜まれ哀後にいたつてかくはいひ残し侍る。其五百兩の金子はや百五十兩自分の要用につかひ。残三百五十兩は我住し屋敷の泉水の北のかたなる岩組の根にありゝと申渡し其詞の下より眠るがごとく命はかなくなりぬ此ものが屋かたに行て池をあらためけるに。



申せし所たがはず金子のありしを證據に始終を言上申せば尤大悪心なれ共大事に人の命を思ふ事武士の心底此上ながらかんじ給へり。又宮内事はまことに天眼通を得たる人相見末世にも有べからず人の鑑とそなへ置れしがそれより人の心質直になりて道をまもりけるとなり

二 ひとつの巻物兩家有

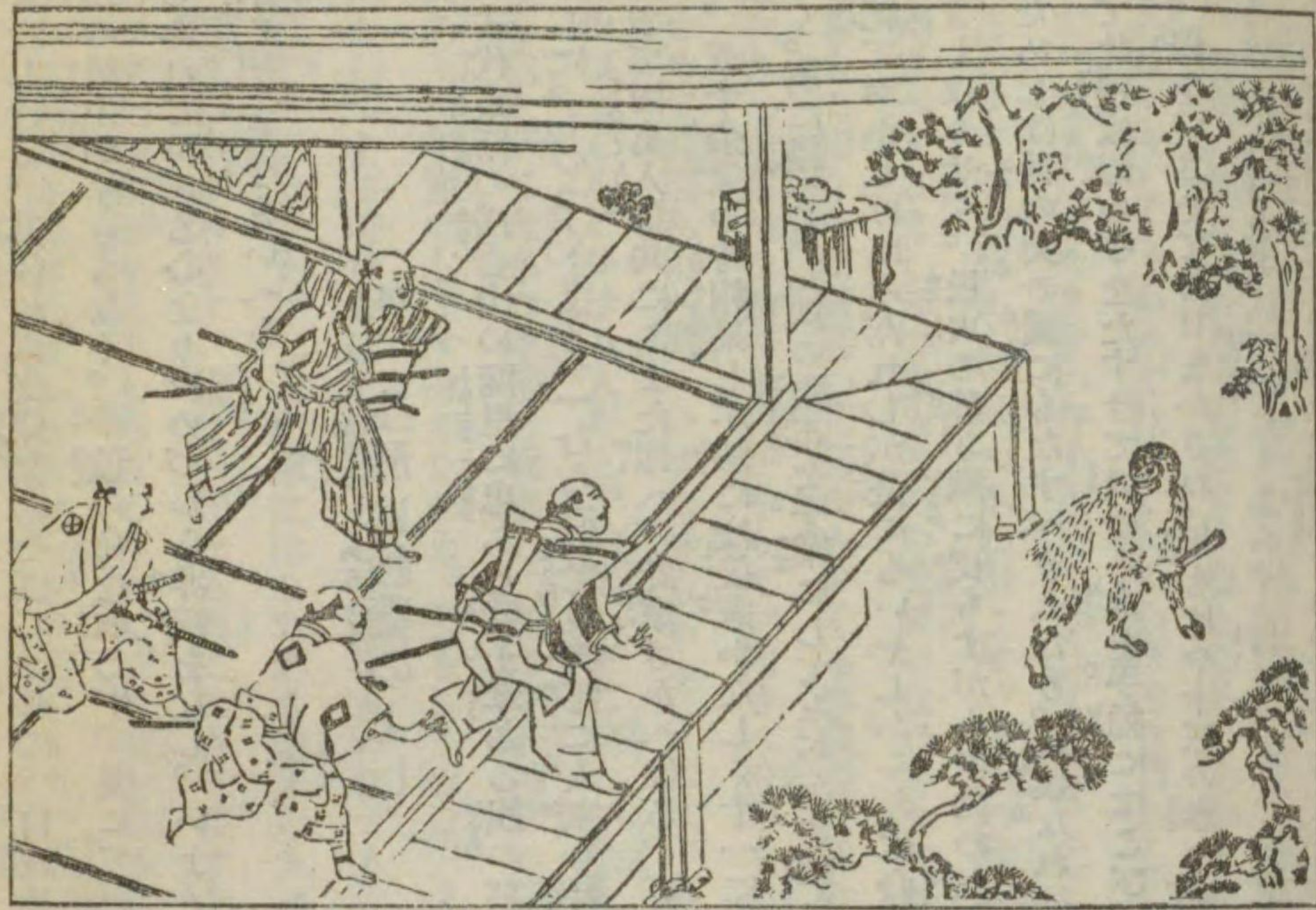
古代賢き人のいへるは義を重んじて命を軽くするは義士の好める所なり。國を治めて風枝に音なき松永霜臺和州信貴の城主なりしが筋めたゞしく諸浪人をめしかへられしに望む所の侍先祖の感狀其身の武藝いひ立此家をかせぎぬ。同國の南山鶴の関ちかき里より。此御家中にしろるべあつて身躰取組しに此率人楠正成が末葉なりとて菊水作りの太刀に添て千劔にて軍中の連哥咲かけて勝いる見する山櫻と自筆の詠草をさしあげしに。又河州國分の里に身を隠せし浪人右の太刀詠草頭相透なきを持參いたされしにいづれも思案におよばず。又此道具をもあづかり置御身に立しに老中立合僉儀になりぬ。御家中の古筆見双物の目利せし人めしよせられ。二人吟味遂られしに一方は詠草正筆にして太刀は後こしらへに實定。一方は太刀楠が名劔にまぎれなく連哥懐紙は移し物に極りぬ。兩方共に取次せし人御前の首尾迷惑いたされしに。家老職の人おどつて評判いたされしは。双方共に越度なし。子細は太刀も詠草うたがはしくは不吟味共いふべし。誰か是を見しらず。其鍛錬の人此さたせられてこそ明らかなれ。此たびの披露武士はまとなりと別条なかりき其後御前より仰せ出されしは。當家を望む浪人親類書におよばず。其器量によつて小知堪忍せば兩人共にめしかへよとの上意取次の衆中有がたく。既に御目見へすみて明屋敷くだし給はり。何の役組も定めなく先御廣間へ相詰ける。家老の何がし大横目の三人内證有しは。大殿御憐愍にて兩人めしかへられしが。かへつて其身のためならずとかく二人義理を立相果へき事追付なり。何とそ末々御奉公勤めさせたまき願ひ。子細は右

の太刀古筆の事随分さたのやむやうに大役から其心えと仰られしが。何とも合点まいらず。その通りに十日はかり過て。一人の浪人今一人のかたへ狀を付けるに。其叙章はすこし御内談申つかはしけるに。身を改め死慶束にて來りぬ兩人良を見あはせ。何の愛移もなく。涙をうかめ扱此たび兩人共に相濟是よりしたしく語らんとたのしみを殘せしに正成つたはり道具親より相わたすによつて。さしあぐる所に同じ二色二人につたはりて然も透はざるのまされ物。そのさた後日に聞とつけ。かへらぬ事ながら口おしき武運のつき。取次せられし人内證申されぬも恨むべからず。是非もなき身躰相すみ兩人ともに一分立がたし。是も先世の縁ぞかし又の世ながく語るべしと。いはぬさきより同じ心ざし。然らは一通殘すへきと。書置刀の鐔下に見せて。二人さしちがへてをはりぬ此筆跡御前にして開きぬ我々素出卑賤而家業亦疎也然而先祖武威不常故媒筆刀而雖蒙於過分之祿筆刀亦不分明嗚呼語則先祖汗屍不言則賈士之罪難遁將就死地遠耻辱而已國主をはじめ諸家中此筆跡をかんじ。其二人をおしみ給ひぬ其後かの家老の申されしは。兩人相果へきと申せし所爰なり。まことに武士の意氣道理いさぎよし。察する所兩人共に楠が子孫に有まじきと思へり。此道具兩方に持ったへし子細は今時世をわたる業として工おそろしき商人。元來は正筆正銘なるを。一方へは正銘の太刀に筆の物をうつし是を代なし。又一方へは正筆に双物を後こしらへにして賣わたしたるにはうたがひなし。彼者共先祖に心にき所ありとさたし給へり是をつたへて金剛山の麓里水分といへる所の地侍の何がし。代々楠か連書家に傳へし武道具の目錄持參して彼二色の道具わたくしの親修覆のために奈良に遣はしけるに。其職人取にげ仕り行かたのしれざる事をなげきしに。今また御家中にまはり合ひ由重代の道具なれば御僉儀のうへくだし給はゞ。有がたくぞんじ奉るのねがひ聞しめしわけられ。其ものにくだし給はりけるとなり。國主に有たきはよき家老ぞかし



三 木末に鬪く猿の執心

古代老たる人のいへるは。他の愁ふる時はその心に愁ふるを正道とぞ。爰に信州の大名國腹の子息兩人もち給ひしが。諸大夫の官位を願はせられ京都への使者男。家中廣きといへ共高家衆とて二人大内の事よく鍛錬いたせしを。不斷は無役にして。かゝる大事の御用のとき御兄弟の御名代として。兩人京着いたされ願ひの參内首尾よく御綸旨くだり頂戴して七条に殿の御屋敷ありて是にたち歸り。京の留主居にも勅宣をおがませまきおさむる時庭山の木隠れより年へし大猿飛來て御惣領のかたの御綸旨をつかんでうせける。いづれも動轉して大勢かけつけ梢をさがし根をかへし愈儀をするに。はやゆきかたのしれざりき。是ぞんじもよらぬ惡難。御名代の何がし是非もなき仕合。前生の因果とあきらめ。切腹の覺悟してよろづをまかせたる家來にあらましを申ふくめ。國なる妻子立のく事なかれ。此たび武運のつきとおもひさだめ。御とがめ次第になり行へし。ふみは歎きに殘る種なれば此とばうつしをかたるべし母には病死となり共。それほとのは天もゆるし給へ。扨軍後御屋敷にては遠慮なれば浴外の寺伏見にてもくるしからず。願はくは眞言宗なれば殊更なり。菟角時節うつらざるうちに先行水といさぎよく申されしを。聞人泪もたしなみかたくて。座中しばしはしつまり大身は世のきよをはぐかり。小身はぞんしなからさし圖なりがたし。時に屋敷守愚案の一通り申されしは是わたくしならず。御家の滅亡すべきははじめなり。まつたく御自分のあやまりなし。ひそかに御國へくだり給ひ。御さたの上にあ否を極めらるへし是忠義のふたつなり京都の切腹御ためならず主命なれば此節あひ延る事かつて其身の申氣ならず。主君の御名代は重し自分の命は輕し。道理は是を至極に教訓つくせば。京役の連座同音に此義御尤とあれば。いづれもの相談にまかせ無念を胸に洗められしを萬におしき侍なりといはずして是を感じき。同役人大かたに挨拶して人の身の上とさのみなげかず。銘々の役目大事といはぬばかりのけしき假に綸旨



の置所を工夫して新しき白小袖の衣裏にくけこみ。其身をはなたす持れし身勝に見えて見ぐるしく。武士はかく有まじき所なり。義を思はど何とぞ分別有べき事ぞかし。又兩人同道して都ををんみつに旅立北こく海道はる／＼とくれて。旅泊の曙は夢のうきはしわたり行心ちして。おもへは國もともちかづき命世のさだめなき事を胸におとしつけて行に。けふの夕べはしなのなるけふり立山の麓里につきぬ。旅のかりねもこよひばかりの名残。所は山水の清きながれのいさぎよく。竈風呂たかせて入相ごろの事なるに。くだんの猿のあらはれいで。挨拶のうへにぬきおきし。小袖の裾をつかみ割綸旨をとりてはじめの綸旨を殘しぬ。相むらの内に入かと思へしが。一聲さげびて失ぬ。是また希代なりそれより歎きかはりて寂前よりの事ども。此時不首尾になつて。思案までもなく。其まゝ自害して思ひよらざる人は果られ死覺悟の人は別条なく歸國して。始終を申あぐれば御不審はれぬ所へ。孤猿さげんで顯はれ國の目じるしの大木永代松のはず多より勅宣なげかへして失ける。是にて御官位子細なく喜悅の御いはひかさなり御家中いさみ



をなしける。其後此事御穿鑿あそばしけるに。自滅せられし人の一子。都の留主をねがひ。知行の山の猿狩して。無用の殺生かぎりもなく。子猿の命を取しが。是にて思ひあたりぬ。そうじてものゝ命をとる事なけれ。世の人あやまぢあれどかざる心よりおのづから非義をなし。いよく錯をあらためざるものおほし。爰を以て孔子も可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>人而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>鳥乎といへり

#### 四 生肝は妙薬のよし

古代東路の淺香山の麓里に忠ある武士孝ある娘の事を語りつたへり。此所は芦菖浦の生しげりてあれたる野はらなりしに。ものつくりする一むらに取立次第に人家も軒をならぬ。其草むすびより久敷里人に弥藤太と呼つて四代まで田島人馬共にあまた抱へ。此家さかへける。五代目の弥藤太不作にあひて鋤鋤までも賣はらひ家まづしくなりて。五十余歳の時相果しが跡には後家かなしく十一になる娘をうきよのたよりとしてけふを暮してあすのたくはへもなく。所に織なれし狭の細布を手業にしてみぢかき煙を立てける。四十にあまる女貞今もむかしの形のこりて髪はすくし絶ておかしげにみだれしが是にもいやしからねば心なき野夫の袖妻うるさく。夕暮はやく戸をさしこめとかくは人のましはりせず。松火の移り幽に夜もすがらの世わたりに暇なかりき。紙窓破りて寒風をいとぬは。隠す事なく身をかためしは世の女の鑑にもなすべき人なり。此娘なればなをまた心ざしおとなしく。振分髪のところより遠くあそばすまして此程は母の手をたすけて沢ゆく水を手桶にはこび。氷をくたき霜をふみ枯野の落穂なと拾ひおさな心に孝をつくし。母をいさめて月日をかさね。年もはや十三の春は面影そなはりての美形つくらぬ色のうるはしく。是に思ひをかけるはなし。され共人木石にもあらず。母につかへるありさまをかんじ戀慕愛執の心をさつて。人みな是をあはれみ。刈柴をわけて肩をたすけ浦人は燒塩をみつぎ荒たる軒端を一村として背かへ。こぼれし壁をしつらひ嵐をよげ。雨をしのぐは是孝の徳なり。母も行すたたのもしくいか成人にもめあはせ浮よを隙になす事もがなと。思ひは是のみ夫の忌日わすれず香花はさゝげしがさる人は日々にうとし。娘が事にまぎれて無常は世の業にかはりぬ。其年も秋山の物あれば。妻鹿の鳴ねは野をうちにくく心となる。むかしをしるのぶ袖の露時雨に下葉色こく。あれがな絹になして娘に着て姿の見まほしく。わけて此夕くれの心ほそき折ふし。旅僧袖かさして入重雨玉を散してやむ事なく。我軒したにやどりて。空さためなき身の行する。いそぐにあらずとまるにあらず。三界無庵の草まくらしばしの夢をかし給へと。垣根にほししてし胡麻から一つかね引よせ。近山の晚鐘つげわたるにもおどろかず法師の身程おもひ出なるものはなし。雨さへすさまじきに虫入ころの鳴神いなかりの移ひ夜のにしきを見る事有。母つくくくと僧の風情をかなしく。男のあらん宿ならば暫時の苦勞をたすくる事後世にもなりぬへきに人のとがめもうたてく。思ひなからねまに入れば。娘はやさしく寂前の僧の事思ひやりて。内さへ秋のそうくしく外面は山風のはげしからん一夜はいかにあかし給はん。せめて涌湯あたへ給へいまた降もやまざれば。其まにましますべし。旅のつれなき事さぞくといふにぞ。母は悦びよくもとひける人ぞと。釣鍋の下に萩の枯柴を折くべ茶具を改ため枕にはこべは彼僧心ざしを有がたく其後ゆだん包を明て金糸の組帯を取出し。是は子安地藏の腹帯なるが。女の大願とかぬといふためしなし。見れば艶なる息女あり。平産まします身のためと。是をおくれば。人の親のならひにして。此うれしきかぎりもなく其夜も更て世けんもしづまる時なれば。出家といひ雨夜といひ。人の情はかゝる折と戸ざしを明てまねき入。何か饗應たよりもなく。御宿まいらすを心にて。出家ははしちかく親子の人はひとつにならび遠慮たかひの物がたり。旅草臥に僧はまどろみ。母は心をゆるさす。娘は一間なる奥にねさせ夜すから松割ての燒火皆いつとなくふして。東明の空鳥のつれ鳴にさめて旅たつ法師を人もしらざるうちに。此宿を出さんと見しに。はや爰を出て行せ給ふは流石出家の境界かろし。わかれに言葉かはさぬはかりそめながら心がより。娘起して此事を語らんと枕に近よりしに。かなしやさしころされ

481



て是はと歎かにかひなし。扱は出家か仕業より外はなし。何とて聲は立ずしてかくは成けるぞ。親ちかく有ながら是をしらざるは大かたならぬ因果なり。まだ其年も差別なきにしかも出家のよこしまなる事に人の命をとりける。我子ながら生れ付たる形に身をうしなひけるよ。無用の情に宿かす事のくやしきよと。泣さけぶに。隣家おどろき人あつまれば。はじめを語りぬ。里人すゝみて其法師何ほどこそと。三里には過まじ。それよこれよと手わけして山道にさしかゝり。柴人に出家の事を尋ねしに野はづれの宮の森より旅駕籠出しより外はと語りぬ。此森から乗物の出し事はふしきと立歸りて行かたしれぬになりて死骸は野邊におくれとて老たる人共手をかけしに。此殺しやう常ならず。腹かき切て生肝を取て歸りぬ枕に金子百兩包み。是を残り置ば。何共わきまへがたし。其中に物なれたる老女の有ていひけるは。扱こそ思ひ當る事こそあれ。此女子は五月五日に生れて然も美女なり。此肝は難病の妙薬になるとかや。もしはさも有べきかといふにぞいづれも掌を拍て一しほ物の哀に涙は袖をひたしぬ。此母それよりは髪をおろし是を菩提の種に先立人を吊らひしは。世上に有ならひとはかはりてなげきし。此金にて娘が像をきませ。草庵を建立して。朝暮の勤行暇なかりき。かくて三年も過行ば一夏に入て山邊の躑躅の花をつんで娘がためと思ふに。我より先にほとゝぎすも鳴出しぬ。冥途の山にみづからもつれ行とぞ歎きし。其曙も暮になりて。爰は海道の外なるに。旅出たちの侍引馬供纏つゞきて人あまたにて通られしが。細みちの熊笹わけて此庵に立より娘が御影にむかひ念比に拜をして感涙しばらくするの者迄も皆うちしほれて見えける。思ひよらざる参詣の人やと心もとなき時。かの侍ひさを立それがしをさために見わすれ給ふべし。三年跡の秋の夜一宿申せし出家なり誠はかゝる姿なるを身は墨ぞめかしらは隠し。心は悪鬼となり。そなたの息女を殺せし事。今思へば身にこたへてかなし。さぞ其時は我をうらみ給はん。是わたくしならず。主君難病世にまれなる御なやみ醫術つくして叶ひがたし。時に京の典薬ひそかにつけて。五月五日生れのいまだ穢せざる少女の生肝妙薬に入れば。國々相たづねしに彼息女の事。それ

ぞとしらせ来れば是をもとむる内談家中にも有しに。新座者のそれがしを人がましく思し召れてや。和理なく御たのみあそはされければ。是もひとつの思とぞんじ。情なき命を取て大人の御難病快氣あそばして後。過分に御褒美請てなをするのたのみも有しに。是戰場の高名ならず。かゝるはたらきにて家さかゆる事天の道にあらざ物悖て入は又悖て出るならひなれ。是以て本意にあらざ殊に息女の最後の事。思へばゞさだめなき世なり。俄かに主君へ御暇こひすて。出家のねがひ誠なりとさしそへぬきて誓をばらひ。流轉三界中恩愛不能断棄恩入無爲眞實報恩者と唱へて殊勝なる身の程。母もむかしの恨みをひるがへし。なを佛道に入ぬ。扱下ゝものほちりゝの別れ其身はそれより奥の海松嶋に隠れて。道心堅固に老の浪立眞如の月七十餘歳の秋のはじめ世を見果給へり

五 先例の命乞

古代愚なる人にいへり。我身の外世の事にかまはねば。何か氣に勞する事なく。おのづから命を延るの徳あり。其比近江國淺井の何がし所の仕置として。古き籠屋をあらため其作事成就して番匠の作法にていかなる科人なり共一人は乞請一命を助くるとなり。折ふし志賀の町人喧嘩をせし相手は堅田の者。所は浅妻の遊女座敷の酒に乱れてぬきあはせいづれの太刀先あたりてやら。うかれめにつかはれし髪切少女老人。老たる女老人其座をさらず相果ぬ。互ひに深手なれば。兩方の親に御預けなされ。養生無事になりての御詮義切れし者は當座に果。外なる者は身をおもふがゆへに立のき。此首尾見とゞけたる人なく。二人があやまり同罪に極り。二年あまりの籠住る形もむかしにかはりぬ。二人の内しがの何がしは大工にゆかりありて此者の命を乞けるに。古例に任せ願ひの通りくだし給はり。役人籠屋に行て御助の段々申渡せば。大工御訴詔申あげられ此たびの赦免有がたし。されども私存寄の一通り二人同し科にて迷惑仕るの處に。内縁あつて一人命をたすかり。相手の所存ふびなれば此難のがれて嬉しからずと身をかへり見す



出ざりき。此段かさねて言上申せば。町人には心ざしを感じ給ひ。二人共にゆるされ己が里々に歸りぬ此大工先例をもつて助けし命を自分の發明にしてかくはなせると。それよりはいらぬ所へ分別出し。公事裁許口論あるひは夫婦いざかひの事までも愛ひにかゝり。言葉ならぶるを人のかしこきは是と思ひ。物にかゝるを次第におもしろく。一筆かくを幸に。無用の目安に氣をつくし。天理をそむき形も悪事をたくみ。非を利につくりなせばとて。奉行の知眼にあらはれざる事あるべきか。諸人に難義をかけて。國士の費をなして。虎落といふ悪名をとり。何の徳かあらん。今時の人間相應の利發なき者はあらず。人の智をかる事は大むかしになりぬ。胸當して乳房喰ゆる子が翫遊びも。合点せねば取がたし。まして横に車を其みちゆく事一足も絶たり。いづれ人程各別相違なるはなし利徳をすて、公事さたきらふもあるに。身のためならを事ぬ物好なる公儀だて。とかく世の中につきぬもの悪人ぞかしかの大工身にそなはりし家職墨かね角水の見やうはおろそかにして。朝暮分別して棠陰比事など枕にし夢にも是をわすれず目安つくりといふ名利にかゝりはりける。ある時さる屋かたの奥座敷の内普請仰せ付られ。さし圖つかふまつりに御内證へ通りしに。御前様の御居間と思しき所は羅綾かゝりて紅井の引綱玉の鈴音なし。廣庭にははなち飼の唐鳥局の入口に其女の名のみおもしろく幾世川紅葉のはし関路の夢琴の助などいふす多の人までも見ぬに思ひやられ。それより御意にまかせ常は男のまいらざる所迄めしよせられ。職人は心のまゝなるは腰かゞめたばかりにし恐れず御前に出しに殿様ひそかに仰せられしは。惣じて此座敷切に万事をさたする事なかれと。世間へ遠慮あそばしける。其後は御心をゆるさせ給ひ角からすみまで見ぬ所なし。御學効所の片陰に今十四五なる美女の命も頼みすくなき程いましめられ。下髪に中程すぎまで焼のぼりて哀れに物かなしく。いか様子細有べき科人とはおもひながら。大工御前を憚りなく。あの女郎の御とがめ。程はぞんぜね共それ人間命を断事天また其身をとがめ給へり。それがし命をこひうけ其まゝ出家となし。うき世すてさせ南都法花寺にをくらんと。長口上段申あげしに殊の外御立腹番匠ならばおのれが手業の難儀

の事こそ假なれ。誰たのむもなき詭譎かほさつするところ此ものめは。かゝる内證の事共外への取さたよしなには申さじ。とかく曲ものなるぞ宿にかへすなど。白洲に引出され是非もなき命をとられける。此大工分別なくは長命たるべきものをとこれをなげきぬ



新可笑記 卷二

目録

- 一 炭焼も火宅の合点  
    武士は道理に命を取事
- 二 官女に人のしらぬ灸所  
    武士とは名別長袖の事
- 三 胸すへし通判の座  
    武士は一戦のはたらき第一の事
- 四 兵法の奥け宮城野  
    武士は其家風太刀先に吹す事
- 五 死出の旅行約束の馬  
    武士は言葉のたがはざる事
- 六 魂よばひ百の樂ひ  
    武士は女も道を立ける事

一 炭焼も火宅の合点

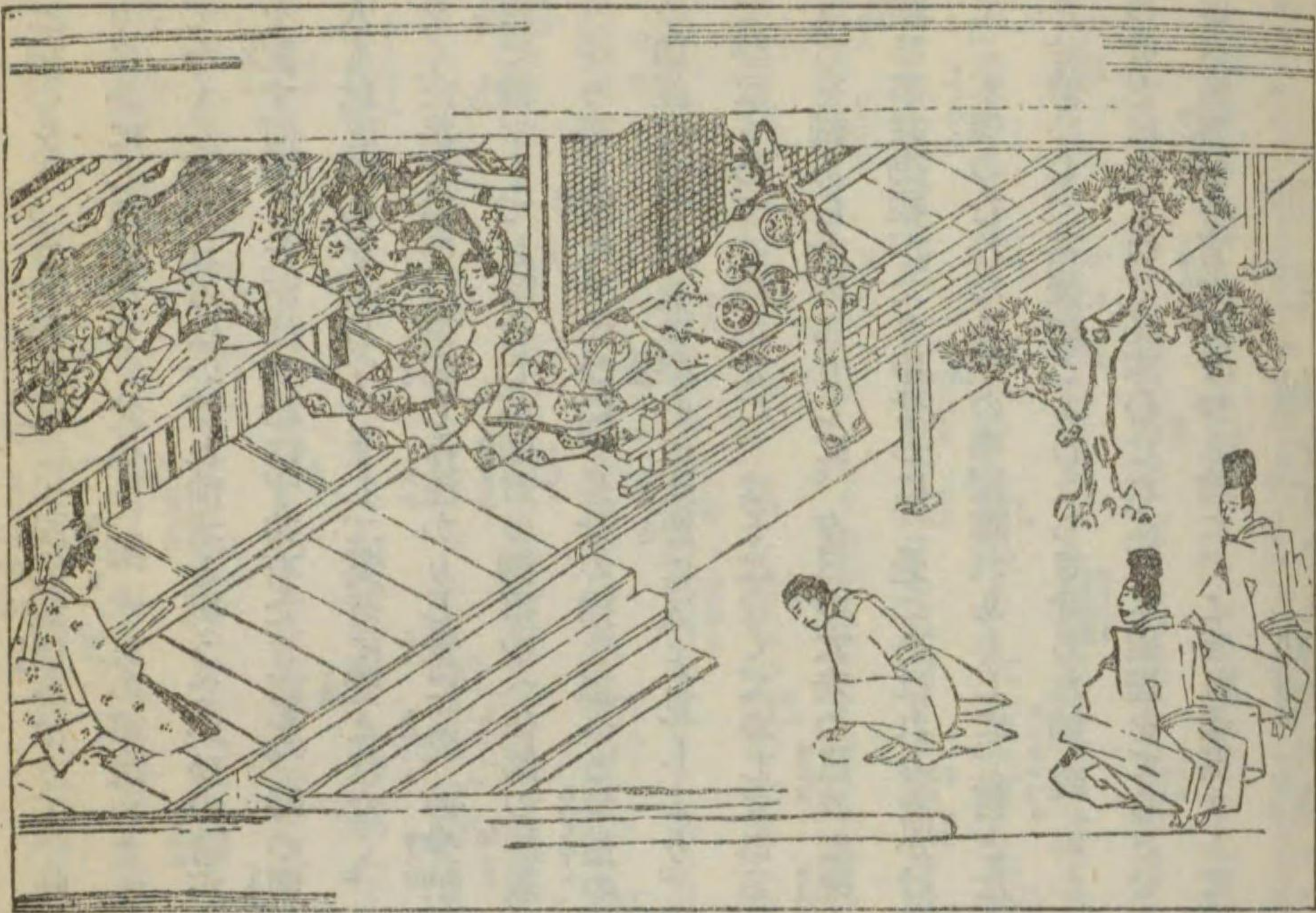
古代より欲心に身をほろぼす事は常なり。幡州飾磨の市立さかりたる野屋づくり。都を爰に見る錦のあけぼの。むらさきのゆふべよき絹きたる商人あれば又割織の藤衣。春の花見ぬ山賤も。相をしるしの宿にいり。一盃のたのしみ晋の劉伯倫が鋤鋤にかへても是はと松林に牛をつなぎ捨。所々の躰立のぼりて。天も多り。又室君をまねきて秋のはじめのかりまくら。是を假令て楓橋の夜泊かと思はれ。心はそらに鳥鳴て。明かたのわかれをおしむも有。かぶき踊かじの武士民も入みだれて自然の鞆あて手つよくとがめて所の商賣人を切すてにまぎれ行を。大勢とりまきつゝにとらへて國里を問ど更にこたへず。いか様曲者とさたして市の奉行に断り。まづ籠者いたせしはおのれが覺悟の所なり。此者の親里は津の國有馬郡なるが金銀十分の有徳にしてそのうへの仕合男子式人するは娘なりしが。此中男子市の喧嘩を仕出し。思はざる外のなげき。母一しほ此事にふしなやめど。父は前世のさだまり事と察らめ人をうらみず。我子をおしまずたゞ常にかはらず。此人むかしは池田山のおくにて。白炭焼てわづかの煙たてしが。正直の頭をよごし。身をけんこにはたらき。世わたりにわたくしなく。是天性の分限。一國壺人と名をさゝれて。なを徳に入道をまもり。貧者をすくひ病者は湯治をいたさせ。野夫には稀なる人ぞかし。妻はおろかにしてのがれぬ子の命をなげきぬ。さもあらば今の世の人心。欲てかためし時なれば。金にて命買する事もあらん。年々つもりし金銀は。かゝる時の爲なりと。式千金二はこに入。十四になる娘に申ふくめ。是にて兄が命を乞請よと人しれず内談するに惣領の何がし聞付腹立して。我有ながらふがひなく妹をつかはされしは。世間の取きたにあふといひ。弟がいふ所も口をし。此事には是非共それがしをつかはし給へとねがふ。母は尤とおもひ入いろくすめ申されければ。無用とは思ひながら然らば妹もつれてまいれと。道をいそがせける。飾磨につきて奉行の屋かたにしのび行かの式千金さしあげ。



父がをしへにまかせ迎もかへらぬ命なれば。切れし人の親類は香はなのために此金をつかはされ。何とぞ御心入をもつて。籠者を御赦免をねがひ。兄弟の事なれば替るへき心ざし女の面にはあらはれ。奉行ふびん發りて千金にてはそれか跡を吊らはせ。又千金は娘にとらせ兄が命をたすけんと。しばらく工夫をめぐらし。先式千金を請とり。其ものゝ命の事我にまかせよ。此事かならず外へもらすなど。みつゝに約束して既に其日の暮待て奉行は城下に向け行世にはふしぎ有。われ高砂の明神とあらたに御聲して。市町は國家繁昌のためなるに。わづかのとがめに籠舎の難義あまたなり。此所衰微のはじめ是なりと磯松風あらく浪さはがしき御つげなりと慈悲の心から此いつはりを言上申せば。人をたすくる天理にかなひ。科人残らず御赦免の上意蒙り此通り申わたせば。万人のよろこぶ所なり彼惣領俄に欲心發り。式千金は過分なり。千金にても濟べしと。然も籠ばらひ極まれれば此訴訟子細あらじと又奉行の許に行て千金はわれく渡世の種となげきを申せば式千金共に返して。我をうたがふ所心外なりと。すでに籠者の出し時此うち有馬郡の何がしは。人の命を取しものを是を御たすけありては。世の捷立がたし。神のあはれみ給ふもさのみ科なき人の事なり。かさねて其道理を申あぐれば御兪義極りて其もの一人は首うちて。かの兄弟にわたせば。妹がなげき兄が後悔かれこれつもの言ばの教。いふにかひなさ戻りみち。いなの小笹を涙にそみ。やうく古里の母にかたれば。身もこがるゝばかりこがれぬ。父は更に歎きなく。はじめより此筈をまつにたがはず。さるによつて妹ばかりと申せしに。いはれざる兄をつかはしかくなる事と。無常を合点せらるゝ心の程いづれもふしぎして是をたづねけるに。兄は我貧賤なる時生じて一錢も世になき物と惜ぬ妹は長者になつての子なれば万兩も瓦石と思ひ。欲をはなるゝより命をたすくる所ありと。此斷りにをのゝ道理をかんじける。人をころして命をとらるゝは職也とそれより万事をうちすて。うき世の望み絶て尼が奇うらの初しまに身をかくれ汀に釣をたれて其日喰ほどのいとなみ次第に老の浪かせ立ちやみし時あし火のけふりとなつて此世をみなしける

一 官女に人のしらぬ灸所

古代武烈王の御宇に。天より火を雨にふらせ万人のなげきやむ事なく。石宮を築き難をのがれぬ。是御政事たゞしからざりし故也。其比御寵愛の宮女に。晴の少納言といへるは。古今の豊容秋津洲の外にも又つゞきて有べからず。此後に御たはふれ軽からずして。白駒の穴隙を過るも惜み給はず。近山美花もあだにちりて。御輿は燕の巢に埋れ榮花はかぎりなく命は定めあり。此美君兼て心痛のなやみもつての外に氣ざし。忽ち世をさり給ぬ帝王永離の愁に沈せられ。なき跡の面かげを自ら御筆にうつさせ給ひ。洛陽の北山に木眼こじといへる仏師の名人に。彼きさきの像を刻ませられしに勅命なれば三日三夜につくりたて彩色地紋に心をつくし。眉墨をかける時。筆とりおとして胸のほとりにすこしの墨の付しを十二ひとへの襟したにかくれざのみ目たゝぬ所なれば。其まゝにしてさしあげける。是を觀覽有てむかしを今また御衣の御袂につながらぬ玉の御涙ひる事もなく。此木像をつどくに見させられ。かの落筆の付





墨に御心をうつさせ給ひ俄に玉眼御氣色かはりて。此灸穴はむねのいたみをやすめんため。自しるしを付てふたりよりほかにしる事なし。此仏師曉が肌の事迄わきまへたりし事はと無理にふしぎをかけさせ給ひ。いかなる内通してかゝる事しれるはいづれ曲者と御うたがひの晴がたし。太公が詞に罪の疑しきは是を輕し功の疑しきは是を賞す何かうたがはせ給はず共有たき事を。時の開白にもせんじなく下官の者ひそかに彼仏師をいましめ繫く番の役人も此とがめをしらず。まして其身に覺えはなく。是非をしらざるうきめにあひぬそれより御歎きはやみて。木像をくだかせ給ひ。御惡しみ深かりし爰に曉の少納言の御妹夕日の太夫といへるも御后にはたせ給へ共。つゝに玉座に縁なくおはせしが姉君の御事ゆへ仏師の難義を思ひやらせ給ひ。諸神に祈誓の七夜まちをけだいななく天子にまみゆる事を願はせ給ひぬ。是身の程を思へる愛着の道にあらず。佛師が科を奏聞のたよりばかりの念願まとは仏神の加護にや。其夜の夢心に玉座に入と見しより。淺からぬ御枕のはじめゆづのつまぐしなげて御心にしたがふと見て夢はさめての明かたに。まとはなくてふしぎあるは腰くれなひの衣裳寝容のごとく有のまゝにおかせられ。宮女のうちを御あらためありしに。夕日の太夫の肌衣に極り。やかてめされて此事御たづねあそばしけるに。はじめよりの願ひ事共御物がたり申せしに。是にあはれみをかけさせ給ひ。夕日がくもらぬ心のまゝに。仏師木眼をしやめんあつて。木像のむねなる墨の事御尋ねありしに。何となく繪筆をとせし事奏聞す。天皇是をおどろかせ給ひ。御心ね自耻させ給ひし。其後御こゝろうちさせられ姉曉のわかれを妹の夕日に思ひをはらせ給ひ。ちかふめされて宮つかひの身とはなりぬ。是本心なれば天も道理をてらせ夕日の太夫と世に名を残しぬ。かゝるためしは唐土にも吳道子といへる畫師の官女のうつし繪に。こぼれ墨其まゝに癩子とうたがはれしも仏師木眼の身のうへにおなじ

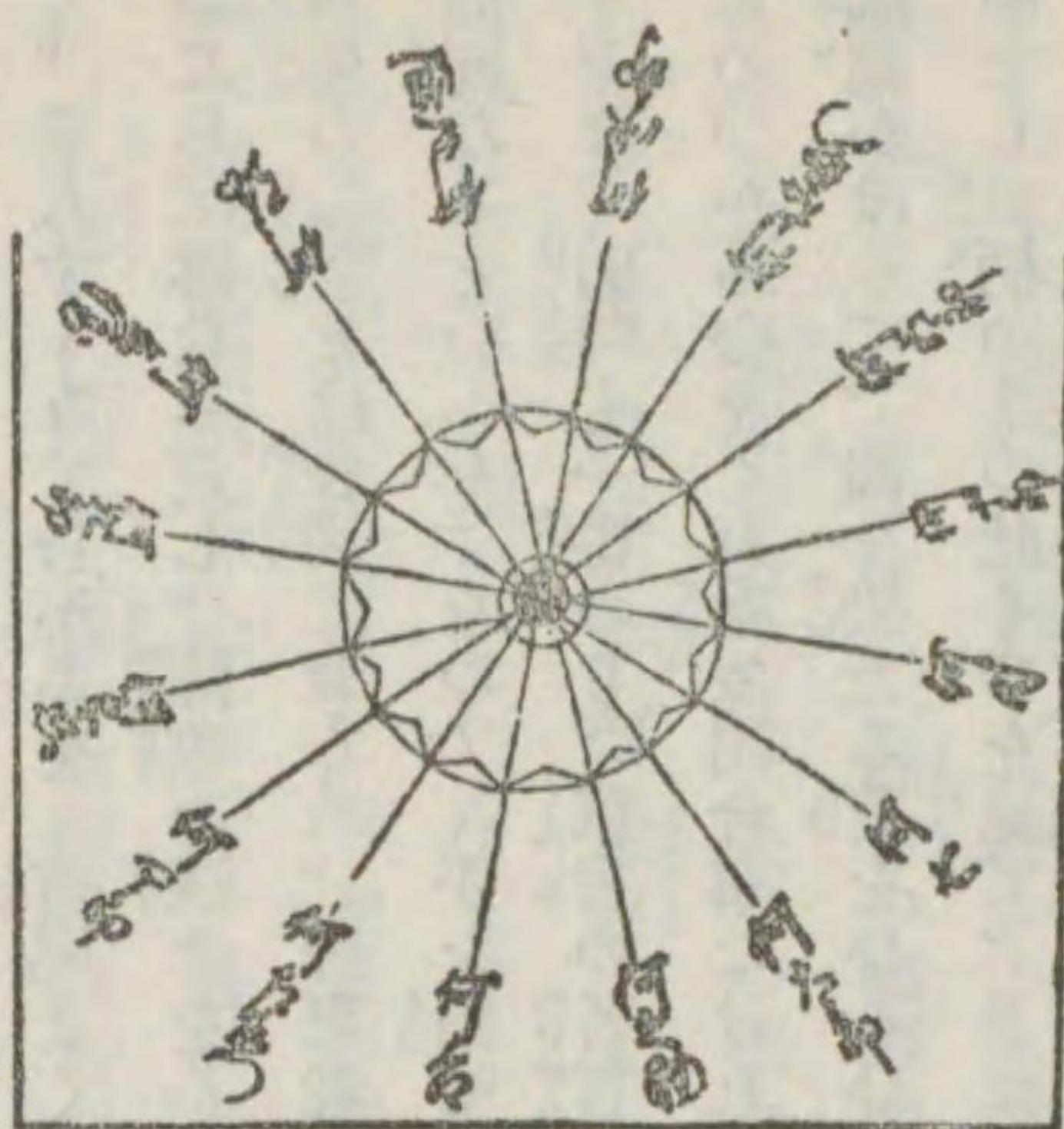
三 胸をすへし連判の座

古代戰場に師なる武士の傳へられしは。鑑さしものは人の目立ぬこしらへよし。いろどりはなほだしきはかける時いさぎよく。引ときすぐれて見ぐるし。敵もこれを目當にして何の益なき事ぞかし。一家中此秘傳同心して一切の武具を用意せしとなり。其中に何がしかや萬をてかしたてに一人ぬきんで。紅井の小旗おどし過たる具足何事も世間に悪うかはりて。人みな是を指さしける。其ころ関がはらの陣立に兼て武藝をはげみ。軍法を脩練して。此家中残らず手柄比類もなし。徒行達の者までも相應のはたらきそなへ外よりびゞしかりき。時に長柄もちの中より小男鎧をさげて。老人すゝみてむかふを。首尾よく六七人突とめ健氣なる事ぞと軍中に是をほめける。かゝる時六十有餘と見えてかしらは雪をみだし。陣笠の淺きをかぶり。素肌の出立其身かろく鎌鎧取のべかけよりしに。鎧あはせずげかへる。衆前の勢とは各別におくれ。殊更老人といひ。あれしきに何とておくれけるぞとたづねしに。あれは若年の時筆道の師匠なるといへり。をのゝ手を拍て一戦のせはしき時節に眼の正しき事を感じける。彼色よき鎧武者は進む時もしりぞき。引時も一番のり。軍者の名言のごとく是を見かけ遠矢を射かけぬれば。紅影ゆへあやうき事たびゝにして。おのづから心をくれ敵に出合事なければ高名すべき行もなく人の感状をうらやみ。長柄の者が突捨し中に。乱れ髪に伽羅かほりて。齒を染たる首をひろひて。人しれず軍帳に留置。かさねて其名しるゝべしと御前よろしく手柄に披露申せし長柄のもの此くびを見て。是は昨日の合戦にそれがしが鎧さきにあはせ四人めに突とめし御人。ちどみかしらの赤眼其出立今もわすれずと。何心もなく其人のためにと題目をとなへける。拾ひくひせし人時の權威にまかせ卒爾も大方の事こそあれ。此武者おのれらが手の下におよぶべき物か。證據もなき虚言其上赤眼も白眼も。眠れる死人の目をあくべきか。段々不届千萬と諸役人ひとつになり。理はくらく非は明らか。御前は願ひのまゝに申なし。後代の捉と長柄の者はせひもなき首うたれしを。みなくふびんにぞんじながら其人の威勢におされて此取きた子細もなくしづまりぬ。此事若手の武者中間に悪み出し。何とそ此非義大殿へ通し悪人切腹させ彼者が孝養になすべしかゝる手



柄を諸人眼前にしてすゑの役人なれば。名を埋むさへ残念なるにまして御僉義うとく高名を人の物として。あまつさへ一命とらるゝ事さぞ口をしかるべし。此義はいよゝゝ惣中御訴訟申あぐべし。いづれも存る處内談はかたりしが流石一方の家老職にも成ぬへき出頭時を得たれば親類ひろき後日の事を此上ながら思ひやりて。連判の發端になる事われ人遠慮と見えし時智ある人のいへるは訴訟の名書前後しれざる仕立ありとまづ一通をしたゝめける

夫勇士及一戰一立一心一則得勝利一速也祿不可依一多少所以輕一命雖爲士卒一守義而戰以功勝者是非武勇之道乎于爰有逆士莅戰場而徒不勞乎竊奪衆之功一嘗將之限於陣所一載一着頭一其諍乎紛然欲決之者還而陷一功士於非義罪一令誅戮一事蓋有奸曲之同士故也冀糾一侯士之實否一者當家之提後代之警者也 時訴訟の連判三十八人。一命捨ての願ひ一大事此た



誰を相手にすべき人なし。有人此連判に氣をつけしに。其名書念の入たるをそもゝといへば墨かすりを見て書おさめと工夫せり又いへるは。中にも墨うすきを見とりて發端とさたしける。子細は一人すぐれてうすく見ゆるは墨の程しれず。書かゝりて薄き時あらためて書と見えたり。墨の濃は二番筆といへり。いづれも道理おもしろく慰みの僉義終りぬ

四 兵法の奥は宮城野

古代武藝にほまれ有人のいへり。人生れながらにして知れる物にあらず諸事の諺其道にいり師といふ者なくては叶ひがたし聞て覺え學びてしるは常といへど。我と工夫して事をはじむは何によらずうとし。世のかしこき人指附つたへて心の寄所をならひ得る事安し。今の世の人さかし過て。一を見付て十に取付。百ながらしつた良もおかし。唐國も末世になり。いにしへの高名にまねたるもなかりき。釈迦孔子老子これらは儒釈道の精隨。軍者には諸葛孔明。勇者に北宮黈詩人に杜子美。本朝にも名僧弘法哥人に定家軍は楠かゝるまれ人の名をいひつたへ聞ふれて残れり。今時の人もすぐれたる人はすゑの世にかくいふなるべし惣して考みるに親より其子万事におとり其孫をろかに親にまされるはまれなり第一人間以前とは氣根おとりて諸事の藝者も極意まで習ひ得る事かたし醫學も一年にたらずして俄剎の天窓をふり長羽織に小脇指藥箱丁寧に掲へ我を見しらぬ他國の大場に住居して名字仰山なる張札門柱にあらはし化粧作りの玄関構押出しての療治するなど人の命は大切なる物なるに此生死のさかひ。ふたつひとつの大事薬師人を殺すとは是なるべし又茶の湯は和朝の風俗人のまじはり心の花車になるのひとつなり。是に入ての徳は常住万事に氣の付所各別なり武士も我役の一腰は其まゝ此付合も手ぬきとはいひがたし。今の町人茶事は榮耀と心得諸道具に金銀をつゝりやし救寄屋長露路に商ひはんじやうの地をせはめ美食を好み衣服をあらため。よろづにきよらをつくし。此奢に家をうしなふ人。かしこき京都にもあまたなりさはいへど此事わきまへなきは。人間ふつゝかにして口をしき事のみ。あるひは欠茶碗にしても其心ざしひとつなり。元是作意なれば一通り手をひかれ其上の道理さへつまらば何事にもくるしからず。世のたのしみなるに皆人心つくせし振舞にあひながら其座を立ば花の生やう炭の形をそしりぬ。是ならひえて茶入の名を付て見る程には。おつ取て十年のけいこなくては成がた



し。惣して連誹立花ひとり狂言かやうの類は銘々の自慢。さしあつて善悪のさたもならざる事なり。手跡鞠音曲などは忽にしれて人に目有耳あり殊更兵法は勝負立所をさらず。一命至極の大事武士の愚に執行するなど故なし其比仙臺に一流の達人ありしが我身ながら未理に闇き所を考へ。宮城野に行て萩の枝折の道ふさぎ請太刀ためなる家來二人の外は親類にも對面絶て十八年のはけみ。今はかうと世間を恐れず。又城下に歸宅して。右の外流長鍊の段々言上申せば。是家の重寶なり工夫極意の所。一家中に傳受して自然の時はいづれにても一分のはたらきをいたせる程に。其指南申べし敵にかならず勝利の事一人の爲になす事はいなしと此上意を請て執心のかたへは心底残さず望まぬ方へも是をすゝめて。昼夜骨をくだきてをしゆるといへ共。極意からは目に見えず。心に遠くなをまた手づまも叶はず。元からたゞせば退屈して中絶する人あまたなり。其比又出頭の何がし取持此御家を望む兵法の名人風俗すぐれて唐作りの大男黄石公か生れかはりといはぬはかりの良つき。家に有たき物とて少知をくだし給はり是も當流を指南新座古座ふたつにわかり。武藝論じ。是より事つにつて師匠の兩人御慰に立合いたさるべしとわか老中の大望なり新座の人すゝみて。兼て願ふ所と御請を申されし。古座がたにはしんしやくして先老足と申殊に十勝流と立られし高名の方に仕相の義御免と再三の断り其通り濟てそれより一家中新座に思ひ付て。古座の門流是を見かぎり。残らずかたつきそれの手うへあり。此人に印可とれとて前後をあらそひける。程なく三年過行家中此一流を習うけ。道理大かたに合点し。眼力あきらかなる時いたり。古座の師匠立合の御訟申あげ廣庭にして御上覽なされしに新座の兵師一刀あがらずして皆請になつて色色三度に及びて興も覺ける程なり。此時埋れし名をあげ國主の御機嫌淺からず。家老中次手に尋ねられしは。何とて寂前は立合遠慮ありしぞ。廣き御家中なれば残らず相手になり指南もなりがたくけいこの足代と申あぐれば此事感じ給ひぬ其後大事をいづれにも傳へて新座者に立合けるに一人も打かたずといふ事なし。兵法の極意より何にても見えぬといふ事なく。徳有興物かたりせし折ふし。參州より名譽の鍊牌

して御慰みになる者來りて。座敷に市の賑かささらせ其賣物盗むに脇から大勢眼を付しこれを取事見出す人のなかりき。彼兵法の師罷出て目をふさぎても取時をしるべしと申されければ是も一興と目なしとちして立出。くだんの術者を先に立大書院を過る時。それとつたと聲を懸られしに。随分はやい所を何として見付給ふと巻物を取りだせば。をのゝ横手をうちける彼人申されしは。取所はしらね共そもゝ左の足をふみ出すより。それに揃て行しに俄に足とりはやく拍子のちゞまる時それと詞をかけけると氣のつく所を語られし

五 死出の旅行約束の馬

古代より祈り傳へて江州多賀の社は壽命神と諸人あがめ奉りしに諸願かなはざると云事なし毎日神前にそなへし御寸御供ともに。其うつは物ばかりになりぬ。あまたの宮人立會是を奇瑞と神に威をましてさせり。年ふりたる禰宜つらゝ此事を思ふに。正法に何かふしぎなし。をのゝ御番の油斷と申せしに。それより氣を付神垣をまもりしに。夕ぐれのさびしき松の陰より老人夫婦まふて來て彼かはらけ鈴などを手毎に手づさへて南のかたの階のもとにして心よく酌かはして立歸るを。大勢立かゝり是をとらゆるに。此二人さらに動ぜず。いかなる者にてかく神前をけがしぬる。其罪ふかし。奉行の役人にわたして末代の掟といふ。老人笑てかたじけなくも當社は命を守らせ給ふ神ならずや。此兩人は家貧しく世をわたるべき舟もなく。老の浪立耻をすつる身に何の病もなく命のおはるかなしさに。しばしの程もを生まれ。きのふもくらしけふもまた御供に命をつなぐと語れば。智ある宮奴是を聞わけ。むかし唐土にもかゝるためし有。天子不死の藥酒を仙人の傳へにまかせ。自ら是を製らせられ又もなき名酒なれば御重寶の第一瑠璃をのべたる壺中につめさせられ。寶藏のいぬみに深く埋み此酒隠して吞る輩は即時に命を断べきとの御添札宮中はおそれをなしけるに。東方朔勅封を切て心のまゝに酌しを。是を預る官人見とかめて忽ちにいましめられ繪言出て



歸らぬ我宿の別れ既に其場に成し時東方朔がいはいく。我まつたく一命惜きにあらず。此酒の科に此身を害し給はゞ。不死の名酒の徳絶て。命の今終る事はといへり。此詞をかにかへさせ給ひ。其難をゆるし給ふとなり。今又此兩人が命をとらば。壽命を守らせ給ふ。大明神の威力うすし。子細なく老翁老女をかへしける。此夫婦の人。もとは遠江の城主に仕へて國民ゆたかに政道正しく文武兼たる侍諸人の惜む身を隠し。今此湖水の東の磯に濱びさしわづかにして。住とは人のしらまじ。何となくけふ迄は夢のごとくに暮されし。其おりふし昔の友とせし人爰に有事聞傳へ。京都の使者をうれしく。尾張の宮より道替てやうく此浦に尋ねよりて。過にし事を語るに身の程いはす。人をとはず命あれは又あふ事もありや。我は隙其身は勤め。爰にとどまる人ならず。いざ行給へと。あるじの方より別れをいそぐ。せめて此人の妻にあひて渡世のたよりの物を送りたくしばし心を付しに。是も以前の奥住あわすれず。人にあふ事を耻て村笹の中に行隠れてつゐに出ざりけり。さのみ暇乞までもなく立行とき何にても我に望みなきかと尋ねしに。此馬は國にて見しより今なをほしき物といふ。それ社やすき事なれ。此たひ乗替引せねば京を勤めてかへさに残し置べしと。假初に約束していそぎ都に立こへ。十日にたゞぬ道を歸り。かの老人を問寄しに。其ひとつ庵は野となし麦の種まく里人に尋しに。其夫婦先後四日の中に相果られ。それなる山陰に人の哀れをかさね。ふたつの塚に一つの桑を植置しこそ老人のしるしなれとこまかに語りおはれは。聞に魂も消るばかり夢とはしる世のかなしやと。彼塚にふして愁歎に日もくれける。是は契約の馬なるぞと塚木に是をつなぎ捨今は死人の馬なれば黄泉の旅の助に追付と主人有みの日救なく本國に立歸る。誠に武士の義理なりと心なき野夫感て木陰に草薺拵て二年餘り飼殺しけるその鞍鐙ありのまゝに露霜に朽行共誰か取ける人もなく末の世の土とは成ぬ

六 魂よばひ百日の樂しみ

古代無常迅速の理りをさとりての詞に人の命は朝露夕電のごとし。鳥部山富士の煙の立替りても同じ。其比駿河の府に京絹の商賣人何がしとかや。町人ながら先祖は高名の武家なり。身袋有徳にして住なせる所につゞきて軒をならふるはなし。然も屋継の一子廿にいとせたらぬ身の。利發千人にすぐれて世わたりをしれば。家財をわたり親たる二人は樂しみを極めぬ。妻女は武家かたより縁組申かはして近き比によびむかへる吉日も定まり此一子朝暮物毎に工夫をめぐらし大々將基をさし得て。是を我宿の亭にしかけ。心の駒立うごきて魂の盤にのりうつりぬ。是は唐土人さへ相手をさだめず。辻堂に拵へ置初手をさし出し置ば往來の好人立入一手さし捨て通れば其跡こなたよりさしかけ。あなから取捨。王手さしつめ置ば。にげ所を思案し。一番に半としもかゝれば随分氣のながい國の人さへ。是には退屈して。かぎりをしてはさゞざりき。まして和朝の短慮なる人の慰みには用捨すべし。彼一子明くれ是にさしかかり。外をわすれ大かた正躰はなく。有時友をあつめて駒をならべて。其まゝ眼色もかはらず自常にしてひざももうごかず頓死する事いづれもおどろき。醫師針立をよびて生薬をあたへけるに。かつて咽をとをらず。はりさすにしろしなく。爰も土にすゆるがごとし二親なげきかなしむ事世の常ならず。かゝる死人は三日まつべき語りつたへといふにぞ頼みをかけぬ。頓作なる人のしらせて。先占を見給へとて。富士の根大宮といふ所に安部の清明が傳およそ三千世界を見とをしめいよの陰陽師をまねき。是をうらなはせしに是までの定命非業ならねば。神力かなはざるといへば。更にまた泣出しせめて寢後にことばをかはしての上なれば思ひ切べきき世となげきのやむ時なし。占の人見るに哀れのふかく。母親の心をしづめ佛神のひかへにして二たびよみがへりのあるまじき事にもあらず。むかし吉備大臣入唐して歸朝の時。天にこゑあつて其人は日本第一の智者生命十八歳とよばる。其時の帝王是をあらはれみ給ひ大唐の權者たちをあつめて生活續命の法を修せられしに。地よりも聲をあげて吉備大臣は日本第一の智者生命八十歳と呼ければ。無事に歸朝して長命たり。是十八をかへして八十と轉じたるゆへなり。されば唐土の魂呼とてむなしき



からだを呼生たるその例おほし。今は末世なれば一たび正氣付ても又百日めにならず絶命とかたれば。かさねての別れは覺悟なり。よみかへりの面影を見る事ならば何か思ひ残さじと陰陽師に頼めば有無ふたつの道理をせめ。心中に祈念して此家のけんそくあまた屋の棟にあがらせ傘をささせ。其死人の名を三時二刻ばかり呼つゞけしに。ふしぎは左右の手を耳に當し。是にをの／＼力を得。其手をはなち天井板を引破りてよび立しに。諸息次第につのつて左の脉有しむかしに替らず。正氣になりぬ。是はといづれもよろこび。かなしき事はわすれぬ。されども百日の立事安し長命を祈らんと國中の諸神に願状をこめられ。此事一子に語りかねしが。其身の心得にもなりぬべきと。とかくはいひ聞せけるに。此一子覺悟して。それ天地は万物の逆旅光陰は百代の過客。爰のかりねの枕の夢なをまた我夢の覺ぎは定つて百日也世の思ひ出に樂みを極め一日一年にあそび。春の花を秋見る事の細工に咲せ淫酒美食に昼夜をあかし。ひんしやをあはれみ。寺社を建立し此うへ何か思ひ残さじと。次第に日を折て天命を待しに。家前縁の契約せし日限もちかづけば。此息女をよび入。各別に氣をかへなば。命のながらふる事もやと。是を取りそぐに。又娘の親のかたには逆も餘命なき人に取くみ。ほどなく後家とならん我子のふびんなりとて中／＼おくるさたをやめけるは。是母親の愚癡なるゆへそかし娘は各別の心ざし。いひかはさせられし夫なれば。たとへ一日のわかれも千とせの枕にかはらじ。是非にまいりて其人の窠後見とゞけ。其後はともかくもといひきるにぞ。此道理にせめられ娘が心入にまかせ。其吉日をまつぐれになりて。夫のかたよりいまだ添ざる女に。暇の状をつかはしける。幸とよろこびしに。娘は泪にしづみ。扱も心ざしかくある人にまみへぬ事。我一生の因果。すゑはしれざる事ながら。死後にいたりて自からなげくべき事をおしはかりて。いとまとて此象のうらめしやと。それよりは取こもりて。かりにも人にあはざりき。彼陰陽師が申せし。其百日に當れば。氣を轉ずるためとて安倍川に舟をかざり鳴物の藝者揃て。いづれ酒にみだれてわざと前後をわすれ。夕日宇津の山邊に影入。けふの暮るをうれしきに。船中いひあはせ

しやうにしばしうちはやししづまる時。用ひ森のうらより。木たまのかよひ其人の名をよぶ事正しく耳にいれは。本人はなを心ほそくなる時。随分氣力を付て舟をいそぎしに。次第にむらからすのごとくよびかけ。其かたへたとりゆく心になりて。魂もうときおりふしをの／＼よびかへせと。こくうのよび聲まさりてつるに息たへにけり。かゝるためしも有物かとなきあとの歎きやむ事なし。是を聞つたへてかのむすめ後夫をもともむる心底なく。黒髪みづから切て其人のぼだいをとひ給へりまことに武士の子なりけるとそ



新可笑記 卷三

目録

- 一 女敵身に替り狐  
武士は堪忍を本とする事
- 二 國の掟は智恵の海山  
武士は發明に悪人しる事
- 三 ほれどもつきぬ石佛  
武士は愚か成沙汰いふましき事
- 四 中にくらりと俄年寄  
武士は工夫のふかきを普請役事
- 五 取やりなしに天下徳政  
武士は善惡の二道をしる事

一 女かたきき身替り狐

古代河内の國守に仕へて其家の仕置者となり。万人此下知を請るは正道自然とあらはれ人の中有。家に杖つく年  
 まで堅固に勤一子に家督を譲りそれより身を隠し世の善惡聞もむつかしく。城下をはなれ。片山里の花月を友とし。  
 秋も淋しからず。春も面しろからず遽々然として一生夢に物いふごとし有時母衣大將の何がし此離庵に尋ねり過に  
 し物語のつゝるに家中子細なく治る事御子息御自分に増りて掟正しきと褒美仕ふまつるに。それがしが忤子ながら。  
 女敵うつ程にはあらずとばかり座興は一言におはつて其人は私宅に歸りぬ。かしこき人のいへるは假初も金言と是を  
 感じける。此人初妻病死の後は年久敷獨り暮されけるが。世に有ならひ家とふふるためとて。一門取持て他國より  
 幸の縁にひかれ。後妻をもとめられしに寂前に増花年わか美形なればこしかたの思ひ晴しにも成ぬべきと人々悦  
 び婚禮の酒くみかはして。千秋樂を誦ひ納めぬ。此息女器用形氣にして舞琴哥道までに携はり然も心ざしやさしく。  
 夫につかふる事をろかなかりき男女の中心のまゝならぬは是惡縁にや。諸事順熟せず。され共疎み果古里へ送る程  
 にもあらず二年三とせ過行ども若無にあひしらひ給へば。すゑく女房共に奥畷といはれたるぶんにて。心かゝりの  
 月日をおくられける。一切の女其夫の心ざしひとつをたのみにして。國里万里をへだてゝもありつく物ぞかし。其男  
 につらく當られなば。女の身にしては世にかなしき事是より外はあらじ。此内方にかぎらず。男情なき時はかならず  
 惡心さはさみ一命おはる事をいとほぬ族は女ごゝろなり。あるひは子の有中は是にひかれ。親のなき人は入まへ案  
 じ是非なき堪忍是ぞ女たしなみといへり。また夫婦あひ別義なきを姑よしなき事に暇いだす天のとがめも有べき科  
 なり。又妻をもとめて兩親に不孝になる輩。また及ばぬひが事。世に人といはれて住るは内外ともむつかし。惣  
 じて武家の内證かたへは從弟までの出入尤の掟なり。とかくは他の心やすきより不義も發る事なり。此人頼もしき



浪人四五人も出入させ。身上取持給へりいづれも御厚恩にあづかり奥迄も出入年月町家すまひにて送りぬ。此中に何の何がしとかやいへる浪人色好み過ぎて是より身の難義をせしに。それにもこりずして作り眠してめしつかひの女などに言葉やさしくかけて。細工の疊紙など出しけるは侍のみだりがはしき仕業なり。かやうの事より内義の心ねおかしげになり。日ごろ夫を恨みさし出腕へ心かよひぬ。彼浪人此色をみて思ひかけそめ隠しふみ遣しけるに。我もはしり書はすれ共外なる人に頼て。こま／＼と書した／＼め。いかにしてかかよはせ。其後は忍ぶ事たび重なれば。人もさたして奥へかよふ男ありと大事をかまはず下よりいひ出すにや。奉公人の出かはり時より名の立ける亭主心もとなく人しれせんさくするに。件のふみかよひ見出し。口惜き事むねにすへかねしかさいぜんかしこき人の女敵うつ程の者にはあらずとの御一言爰なりと落付て思案を廻らし。譜代の侍一人つれて心ざす日なれば。二上が嶽に参詣と朝とく屋かたを出て。牛騎山ふかく分入て里人を招き。年へし狐の入事ありとて金をあたへければ。もとより狩人の手馴し業しばしのうちに取殺してこなたへわたしぬそれをすなはち鷹づゝみにして下人に持せ。夜に入て私宅へ歸り。今宵は霜よのさびしきとて日比うたひの友とせし人あまた集め夜半の鐘を下人と相圖して廊下にて彼狐を斬ふせ。何か忍びし曲者切けるぞ。やれともしび／＼羽織くろし丸頭巾かづきしぞと聲かくるに。座敷をの／＼うたひさしてかけ付さて手燭ふりあげみるに。背のはげたる狐の脇ばらより切ざげられ。是より外にはなかりき。いかさま人にも化へき有様皆／＼おそろしく。其ま／＼捨て何の子細もなし。扱は此ほと申せし事此狐の障礙ならんとさたして。心のとく世よしづまりて後。一年過て女はさとに送り返し。いよ／＼其身は別条なく役義を相勤め諸事的首尾よく御加増まで下し給はりぬ。其後分別するに。此密夫此ま／＼に置事も無念なり。然れ共いづれを思ひあたるもなし。なをまた筆は見しらず氣をこらす程工夫をめぐらしけるに。紫の女清少なこんが作れる草紙の詞ども書まじへて数章のけたかき事大かたならぬこび者の心をはこびし。是をおもふに形學なき人のなるべき事にあらず此家中にて其道熱心の人

二 國の掟はちえの海山

古代大隅の國司に仕置者あり最明寺御修行のごとく。虚病をかまへ親類にも對談せず。まして外人不通になりて御役義當分我にまされる功者に預け其身は廻國の道者にまぎれて。一とせあまり城下はなれて國のすゑ／＼を廻りしに。申せば一國なれどこまかに見る事果しなく君が代の日ものとの海山。おもひしられける拵てさへ旅のかまどはおもしろし。実のある修行いかばかりとぞおもふ。津に入ての舟商人里に行は稍白の音のみ己がさま／＼の世わたり隨縁真如の浪立ぬ時なく。毎日人の面を見かへ山の形も松相栢おなじからず。組つたひの一むらにも一大事の寺を立。林の中に小社あり。薬師らしきの法師の手習の指南又疊を敷たる家居もありて老後の思ひ出に二三人ふしこそあはれ曲舞うたふなど野のすゑ山のおく迄も人の心のむかしとは各別になりぬ。又分別比の男とも高聲にさたしけるは。仕置者の知謀をいひ出し理非はしれる事爰は慈悲の有べき所。是はあまり手ぬるしなどとして。濟たる裁許を評判して石流其役人として兩方言句を絶して。尤至極に濟されけると褒美をするを下／＼の口からは慮外とも思はざりき。



惣じてかゝる捌の理非の二つは明白にして。其所の者ならて子細をしらざる事あり。遠國の出入を都にて聞届け然も非は聞をよく。理は正直を頼みに物ごとくとく。弁舌あり効者有。とかくは疎略にする事にあらずと。野夫がそしりに得道して是ぞ修行徳とよるこぶは。其身正道發明なるがゆへなり。それよりゆきくれて民家の所に一宿せしに。戸にかけ金なく。葎にくるゝもせず心やすき境界は用心の事尋ねしに殿の御仕置よろしく盜賊海賊絶て戸さゝぬ御代は今そと語りぬ。明て又の日は時雨に道もはかどらず。やう／＼三里あまり行て旅泊の夢も結びしにあるしあらけなく門をこちて灯火消すも有に燈宮取まはし山刀枕ちかく置て旅人も夜さとうましませ是程念を入たるうへに其油單包み盜まれ給はゞこなたの御損と氣を付けるいかなる事ぞと尋ねけるに御仕置あしくおし入強盜かりにも油斷はならずもろこしの盜跖と相ずみ同前と申夜前と三里へだてゝ各別なる世のさまなり。跡の宿の豊なる事をかたれば亭主笑て噺有べし。其宿には金銀衣類物貯あるもの一人もなし。誰に何とらるべき物もあらずその日ぐらしの所なり。此所はいづれも富貴にして子孫に譲る財寶を持て世を心やすくわたれば。外より目かけ夜は騒しきとかたりぬ。此二宿の思はく天地の相透あり一國一同におさめずは有べからずとなを山々浦々をめぐりけるに。上方へ渡海する大湊に着て日和待の船けしきみにし。幸なる風に出船の留られ兪義に迷惑するを聞はけふの明ほのゝ事とや京にかよひて染衣商賣せし人金式千兩の用意して一番船に乗合の友あれば。下人もつれす小判は身につけ近所へ暇こひして出しに帆柱立て風をいそぎけるに舟に今一人おそくて時刻うつると騒ぐにいふにぞ舟中皆く腹立して爰にまします三人は其人の同道なれば疾さそひ給へといふにぞ一人残して二人は陸にあら彼絹屋が許に行御内義御亭主は出船に見えぬがと。門口よりさそひけるに。女は立出朝とく立て行れしが。今まで舟に乗れぬ事はふしぎなりとあまた人頼みして尋ねさせけるに舟場に行近邊の眞砂路はるかに茶菓の木はらの片陰に切ふせ肌なる金子なかりし。扱海賊の仕業と形跡をみして驚愕すれともしれはたかく此輩の行も思に及ばず城下へまかりて此兪義とけんと大駭めしつれて

の難義是また諸人の頼ひなれば修行者、衆を騙はし浦津行に群衆あれば驚きいかなるゆへにかゝる御事ぞと尋ねしに。今はかくさず仕置のための廻國と語り。扱此度の穿鑿城下までは万人の迷惑をおもひはかりて是にて悪人を兪義すべし正敷是は其三人の同道人の仕業吟味有べしと内談極め彼三人めし寄られさま／＼兪義に其科あらはれ大法のおきめにあひぬ。其後浦奉行仕置者にむかひ早速其同道人御疑ひの發明いかなる思しめし入よりぞと尋ねけるに。彼二人舟よりあがり御内義御亭はおそひと申せしとや。常ならば亭主の名を呼べきに事をしるが故に自然とお内義亭主はと申。此一言より是を兪義のもととたたられしに。此才智感じぬ。すゑ／＼此心からの一國の仕置。事なく納りけるとなり

三 掘どもつきの佛石

古代越後の大將智をもとゝして國を治められしに。万民其心のごとく隨へるはこれ天性なり。よろづの事にひとつもわたくしなかりき。莊子には吉日良辰に爪をきり耳の垢を除くといへり。此殿毎年正月六日にはじめて手づから爪を切るゝ事吉例なり。双物は鞆におさまり。御爪は扇をひろげさせ給ひてこれを置せられ。御近所使をめてすてよとの仰せなれば立寄しに。先其まゝと外の御用を仰られしに。幾人か御前に立かはりぬ其後何の何がしとかやいまだ若年なりしが扇の上なる御爪をかぞへて。ふしぎがましき貞つきして其まゝは捨に立ざりし。いかにして捨ざらんと仰せければ御爪の切かた九つ有。今ひとつ不足をあらためける時。是にありとて御膝の影より出し給ひぬ。此一つは態と隠しおかせられ人の心み給ふに。誰か救よむ程の氣をつけざりし。惣じて大名の御前へをろかなる人は出し置べきにあらず。是程發明なる大守なれ共世の費をしらせ給はぬは此家に生れさせ給ひ何事も御心になふゆへぞかし。爰に諸役御免あそばされ行年五十を過。善惡のさかひをもわきまへず。只正直を本とする男一生無我なるを譽させられ。





御咄の衆中にうちまじはり朝夕相勤めしが御機嫌にまかせ世のふしんなる事共御物がたり有しに。彼男いひ出しけるは。當國かしは崎の町中に自然石の地藏六躰まで立せ給ふ。此石金輪際より生ぬけたりと古人の傳へと申あぐる。しからば掘せて見るべし。里人役にかゝつて鋤の齒音をそろへ鋤の土車とどろかし。十日にあまり掘れ共其。かぎりしれす後には眞砂は山ならで捨所なく民家をつぶし往來たへて民百姓の難義となりぬ。救万の人足日救ふりて七丈あまりほり入ば。次第に此岩ひろく成ていよ／＼國士の費なれ共。大將の御一言かへしがたくてありける。有夕ぐれに此奉行の中に式人身ふるひして口はしりそも／＼此石は天長地久神代二はしら此かた。神秘奇妙の靈佛なるに。今此時土民けがれたる手して掘せる事故なし。七日七夜の大風車軸のち海中泥波を立。四海くつかへりて一國人種おかしとあらたにのしれば。万民下よりかけあがり政道捉もかまはず一命にはかへかたしと刹那のうちに逃去ぬ驚く事大方ならず。此事言上申。諸山の尊僧をあつめ地祭り執行もとのとくに治めぬ。國守にありたきは永

筋目たゞしきよき家老なり。其後此事密に聞に万人の煩ひ世の費おもひばかりて奉行に申合めて。かくはおさめられしとなり。有時また彼正直男御前に出て男猫に三毛と申事世になき物と申あぐる是も御意にて國中尋ねけるに彼も申せしごとく女猫はあれと男はなかりき。大名の仰なれば民家ごとくさがしける。何のようにも立ざる事に一國の費つもりなき事ぞかし終にないに極まり其通りにしてやみける家の執權評定して菟角この男貴人の御前に出すべきものにあらざとそれより後世をねがはせよのまじはりをやめける。いづれ三毛の男猫ない物かと思へば何程となくつれ來りて御目にかけしとなり

四 中にぶらりと俄年寄

古代人の女の女を見かぎり又其人に見かぎらるる事を語り殘せし幡州の一城久敷なりて修理くはへらるゝ時番匠左官瓦齋諸職人の棟梁の手わけ迄してすてに普請かたに功者の奉行に仰られ。大かたの義は足代もなく万事のやうやすう然もはかどり。物には思案をすべき事といへり物廣く石垣救丈にして此上の高塀北のかた殊にしぶきつよく白土所々そこねに是をつくるふ迄に人のかよひを工夫を仕出して小判なりなる籠をくませ。四つ綱を付てもぢりふり左官を是にのせてあげおろし自由の調ふ手まはし此たくみなる事を人みなかんじぬされ共是に乗は地ごくの上の一足とひ命がけのはたらきなれば随分心つよき人も魂は浮世になかりき。其中に同國高砂の左官年わかなる男なりしが。すぐれて爰をおそれ組籠に足いるゝより忽ち夢中になつて只今寂後と觀念して兩手をすくめ身をふるはせひたいに波をよせ鬢さき雪をかづき。半時に一生の老をあらはしぬ。是ぞ唐土の何の額をうちたるにあひ同じそれより此左官正氣つかざれば。高砂のさとに歸されしに我宿ながらほうせんと人は見ながら。誰を覺えずありしにかはらぬものは此里を出てゆく時の着物しかまのかちん染に。つねの紋所を目しるしに。此外かたにむかしの殘ところなく妻女見かは



しかなしき事は外になりて。しばらく興は覺ける。此左官にひとりの父親有ける。是を見舞來て居ならびしに。中  
 〳〵 老父はそれか子のやうに見えける。此妻そひかねて家出しけるはたのもしからず。惣しての女。世にある時は其  
 夫が心にしたかひしうとめにもおそれて孝をつくし。ながく縁ある事をいのり。萬の始末も心から大事にかけ。人にも  
 よきといはれたきたしなみしもべにあしくあたらず。世の業に油断もさせず。朝とく起て髪ゆふかたちを見せず。夜  
 の行水くらきをおそれ。夫のうたがひをやすめぬ。女かく身をもつからは自然とも家をととのひける。身軀うすくな  
 りては男に殿もつけず世のかせぎをやめて下女とあらそひ長寝のために病をつくり。五節句にも髪かしらを見だし  
 揃へる皿を九枚になし諸道具を手あらく。大黒ばしらにはぐろふきかけ。鳩居におしあて灸はしを削。腰はりまくつ  
 て糸屑をつみ継木の初咲を用捨なく手折書院の軒端は洗濯物の竿もたせとなし。迎も人の物となる賣家と住あらし。  
 肴掛のするめも煎じ茶の菓子に引きさき。何もなければその通りに朔日廿八日も精進して佛粥も書出しの置所となし内  
 證より其家をつぶしぬ左官女房も今の病者を見すてさのみ形も耻ぬうちに後夫をもとめて世を渡らんは淺ましき心入  
 ぞかし。左官は病氣おもりて哀や寂後まで妻女の名をよびて枕に有ぬる心ちして終にむなしくなりぬ。三十五日も立  
 やらざるに男さかりの者と縁をむすびぬ左官が親是をにくみて女不屈の書付國の御法度所へ言上申せば其者共めし  
 寄られ。先今をふ男に何とて夫の有女を夫妻にはいたしけるぞと御せんぎの時前の男は病死仕るの以後にむかへたる  
 段々申上る。其男以前の名こそかはれ今に世にあり。それがしがぞんじたりと左官位牌を取よせられ。是が自筆の隙  
 状を出すべし。さもなきにおめては其もの世になくても存生のうちに家を立のくからは密夫にまぎれなしと仰出さる  
 れ共。前夫の暇のしるしなく女の越度に極る男はまへの子細はぞんぜず親の手前よりもらひ請るのよし身ぬけを申あ  
 ぐる。斷り一とをりは聞えぬ。然らば此取むすびの中立のもの御尋ね有しにのれらばかりのあひたいなり。仲人な  
 らをばはらはれけるまことに御意のときなるかな

五 取やりなしに天下徳政

古代万氏の商賣うすく里人はなを困窮しておのづと道をそむき。人の心虚になつて実をうしなひ。都さへ借錢公事の  
 外はなく。うとくなるは世をわたり。貧者は渴命に及べり。さるによつて夜盗も白日のさたになりぬ。京都の奉行政  
 道にあぐみ給ひ。此旨奏聞あれば。もろ共にせんぎ有ての後古例にまかせ天下徳政になして皆免の時。改めて捉をた  
 せとの勅命。其日平安城入つ口に東西南北早馬にし。徳政の世とふれわたしぬ。八月下旬なるに大年の心ちになり  
 律義に請はらひするも有大帳を焼も有手形取みだして男なきのやどもあり。かたじけなき世といはひ酒飲人もあり。  
 是程各別なる世の有さま。分限は人の爲となり。まづしきものは人の物を主になりて大かた金銀入わたり。萬の事も  
 當分は鳴をやめける。なかんづく伊勢講の錢箱女のさり荷物かへさぬ程もつたいたなくおかしきはなしと。そのころ三  
 条に蒔繪細工せし何がしとや。女不縁にてきのふの暮かた隙状をへて親里にかへしぬ。此女房たゞならず。しかも産  
 月なりけるが。子細なく男子を平産してはまだ乳ぶさにもつかざるを。仲立せし人の許につかはし此子は母親の腹  
 をかしたものなり徳政のとをり此方に損をして父の物といひける。夫のかたへ此事を申せば父親の種こそかし物  
 なれ此かたのそんにして女の物にと申。いろ〳〵 變へとも兩方いぢを立是を更に聞入ず迷惑するは仲人にて此段奉  
 行所へ御訴訟申せば兩方親類までめし寄られ。此度徳政の世となり。わが物とらてなげく事世間にあまねくなりしに。  
 汝らは我物を人の物にして損をかへり見ぬ所おとなしき仕業なり。男女の申ぶん何れにせひを付がたし。其子十五  
 歳になるまで仲人にあづけをくなり。自分のちゑ付て父の種をかし物といふや。母のはらをかしたもの申や。それが  
 とばを證據に申付べし。かならず十五になるまでは子を仲人にあづけはごくみは兩方よりつゞけて。男も女も朝暮



その子がそばをはなれず是をもちそだつべし。自然病死は所のもの吟味のうへ子細なし。万一けがさせるにおゐては曲事たるべしと仰せわたさるゝを承はり。公儀はいはいならず難義ながら毎日毎夜仲人の許に行て是をそだてけるに。世上見る所もうるさく女は悲しく。夫は渡世かけて次第に迷惑していつとなく夫婦和談して。むかしのごとく二人が中の子に仕度旨仲人を頼みかさねて願ひ申あぐれば其通りに濟てはじめにかはり夫婦のかたらひしたしく。其子仁となり世わたりにかしこく金銀まふけ。二親に孝をつくしけるが。有時祇園祭りの山のわたれる中に。月鉦のとをりたる跡にかまほり山とて二十四孝のうちなる郭巨がわが子を埋ぬる鍬の勢ひ京のいづれの細工が作りなしてきてはたらく風情有。人はにさたしていかに親の孝なればとて我子を埋む事や有。こがねの釜が出ぬ時は其命をうしなふなり。是なる人も天下徳政の時父母ふあひにて父の子にあらず母の子にてなしいまだいとけなきをろんじ既に命あやうかりしが天人をころさすいませい人してかへつて二親に孝ある人やとむかしを語り聞せぬ。此一子是より父母に恨みおこりてたくはへし金銀とつていづくへか身をかくしぬ

新 可 笑 記 卷 四

目 録

- 一 舟路の難義  
武士は心の海に油斷せぬ事
- 二 哥の姿の美女  
武士は神主になる身の事
- 三 市にまぎるゝ男  
武士は外なる願ひせまじき事
- 四 書置の思案箱  
武士は其家継へきに見立有事
- 五 兩方一度に神おろし  
武士は越度もせんさくの仕やう有事



## 一 舟路の難義

古代攝津國伊丹の城主につかへて。江方の支配して何がしとて勘定に發明なる人ありける。殿にも御ためよく百姓にもいたまざる納めかた世中はかく有たき物ぞかし。かならず此役人私よくの出来は。皆さと人のなす事也子細は思ざる外の音物人しれずもちはこび無用の出入をしかけ。其村の庄屋年寄の良を見しられける。是自分の物にもあらず。一里の石懸りに割付又は軒役に集めし小百姓迷惑する事かさなり。庄屋の不屈見いだし公事訴訟のたねとはなりぬ。手つからつくれる八木は其國主にさづけ。其食物は雜穀にして渡世する事なれば。憐みをかくべきなり。ゆるせば又方量もなく我まゝをして。所の宮地をせばめ。海道のしるべなる一里塚も松ばかり残りぬ。物にはよいかげんといふ考有べし。世中の秋にはつよくとり。不作の年にはそれ／＼の毛見の大事是なり。定免の取かた用捨有へし。渾て十分の稻葉も田をさからふて毛勝負の有事なり。古へもよい事に物くるゝ人とは書つれ共それは物によるべし。只欲をはなれ一人の心にて万人たすけの道理あり。知行を下しおかれあるひは扶持切米給はり此ほかなる事に願ひして其身を奢らば正しく天是をとかめ給ふべし。惣じて武士は惣應より内證つかひの女過る物なり。これ榮花のあまり世間にしれぬ費ありてけつく表むきの若黨中間に不足ありて肝心の武役をかく事横道なり。此代官諸事に其難ひとつもな。正直をもつて大役をおさめられしが。美女のもてあそびやむ事なく。すゑはこれにて身のはつべきはじめなり。其比神崎の里に遊君を集め中町の長者といへるは。高倉院の御時齋藤瀧口に相馴し横笛が母なり。此女は大かた無双の能者なれば建礼門院のはした者に召あげられ。世に情の深き事盛衰記にみへたり此ゆかりにて今も遊女の波枕契り一夜川の水の心になし。岸の柳のいつなりと人の戀風の吹ときなびくもおもしろし。春の雨の玉にもぬけ道をこしらへ夜毎に此人かよはれしを妻なる人ふかくそねみ。夫に身をはなれずうらみをなせば遊女はかりなる者にして

夢に酒くみ現に哥舞を聞のみ更に誠はなくて氣を噴す間のたはぶれそなたもいざといさめてそれよりは夫婦ひとつ川の川舟に竿さゝせて行ては歸るあだ波の。身は浮草の花にたとへ咲てしほるゝかざりと盤を石火の明かたに見なし。名残の座敷も妻女一所に別れ。かりにも枕は見さりき程執心ふかき女は世に女も有にすくれての因果なり。有時又かよひ船に夫妻とり乗行しに闇をこのめる五月のすゑ。川音閑に瀨ささくだし行けるに。此妻俄に身をなやみ心を取みだし。子を取あぐる婆母よといひけるに驚きぬ折ふし舟には女はなく皆男なれば此時の用には立ずして介杓すべきやうもなく。いそばたにさしよすれ共。里とをくいづれも十方にくれける。此男の身にして一しほかなしく。あたる月ならば何とて語り給はざりしぞ。常にかはりて大事の身なれば其家を出べき事にあらず。耻ならぬ事をふかく秘し給ひてかゝる難義を見る事ぞとやかくなけうちに。其時節来て平産して娘のはつ聲せはしく是はかたよせ其母氣しきりに眠るがごとく世をはやうなりぬ。是非なき仕合沙汰せず屋かたに歸り。宿にてかくなりゆく首尾にもてなし。かなしき無常を見しに。此子は命有てなをまた歎き増なり。これを思ふに此妻はいやくも嫉妬より其身をうしなひける。女の胎前に住家を出る事かりにもなかれ。是ふかくの第一なり此娘乳姥にあづけそだてさせけるに十四の年こへて世けんすぐれておとなしく。しかも生れつき不足なかりき。同じ家中の何がしのかたへ縁の事契約して此年のくれにはかならずをくるとて京にて道具を調へ置ぬ此息女それ迄は母は病死とばかり覺えしに。女は口かましく舟にて難産の寢後つど／＼に姥が語ればこれより狂乱して母の事ざんじもいひやまず。世の聞えも見ぐるしく。いろ／＼の養生するに其かひなし父も是に氣をこらし。程なく相果外に男子もなくして此家絶て自然とその名のすたる事遊興にこのみ入武士のわたくしありし故なり。既に下／＼を見すて。氣みたれたる娘斗になりぬ寢前申かはせし聲のかたより是を引とり。此身になるを願にまぎれなして心よく看病いたされしは是また武士の本意なり其後祈禱さま／＼なれ共母にしうたん日／＼につのりをの／＼あぐみて内談とり／＼の折ふし物ごとにくふうふかき人のい



へり。此病性醫術にはかなはし某がし存するむねありとてかの息女にいてあひ其みだれたる心に我もみたれけるに  
 おのつから此人のいへる言ばを聞入し時。それ程母のなつかしくは難波の大寺の神子を呼よせて冥途の事共口よせて  
 聞給へといへは。大かたならずよろこび。有がたきをしへぞと是をねがひける時に。神子をまねき乱人の様子を内證  
 にていひふくめ梓にかけて呼出す。見ぬよの母にあふ心ちして袖は涙に耳をすませば。此神子わめき出し。実や  
 人の子の習ひにて親の恩愛思ふには夫の心にしたがひ不斷は世を大事に思ひ。命日には精進香花つみて吊ふべきを。  
 朝暮なげく涙の熱湯の玉ふりて身にかゝりての苦みたま。佛果を得て九品の蓮臺に座してうき世を忘れしに。汝な  
 げきてさはりとなり。今よりは子にあらず親にてなし。人間生死は一たびはのがれず愚なる心ざし淺ましいかなとた  
 んみかけての立腹座中も興をさましぬ。此時娘母を恨み心になり其たましる入かはり。正氣になりて此事おほり其後  
 常にかはらねば。祝義を取りそぎよく。此家繁昌となれり。かゝるためしもろこしにも長明子が養生の才智に見え  
 たり

二 哥の姿の美女二人

古代八重垣の哥の種雲州大社の神主何がしとかや。俗性は武家の末子なりしが。世はさまの家の業神職の名跡を継  
 れし常に哥學を好み入。二十一代集を残りずそらんずる程になりぬ。神書考へる程はなけれど。哥道は神主に似合  
 たる心かけとて人皆これを譽ける。過にし世々の哥人に魂入かはり。世上の事業はかつて知ざりき。中にも伊勢小  
 町の哥のさま思ひ付。むかしは女さへかゝる心のたけたかく。婀娜しき人も有けるよと是のみ平生思ひやり伊勢か心  
 は哥の讀かたにて大かたかく有べし。小町が心は哥の風情にしられけるが。伊勢はいかに艶なる良ばせ。小町はいか  
 なる美形ならん。今のうつし繪もいにしへを見つたへて八重櫻の陰に入日くれなひの樹に。十二ひとへの歌からのう  
 つくしみ。又身を草の根ざし心ざしそふ水あらばと打まかせたる面かげに繪あふきをかざしたるは。すがた繪さ  
 へ真向に顔の見えざる事のうらめし。其時節に生れあはせたる世の人の仕合なり。今も此二人の美君むかしの形のか  
 はらず。佛の國におはしますし我もつたへなき哥道の縁にひかれて伊勢小町を見る事ならば只今息たへて往生すべ  
 しと塵の世に命をおします。まぼろしのとく成ぬ。日救ふるに一年も花の咲時春ぞかし。雪に多かと思ふはかり忙然  
 として十九歳其後は居間をはなれ。山屋敷の月のためなる所に。独り住て浮よの人にあふもむつかし。朝夕も養母  
 の心つきて。自ら運ばせらるゝ外は何の願ひもなし。有時召つかひの女に枝ながらの楊梅を賜られせめて汝は言ばを  
 かけかはし。心の付たる様寐をみて參れの上し。御使にまかりて程なく立歸り。ふしぎを顔にあらはし。あなたには  
 目なれざる都上臈の二人まで御入ましますと云にぞ此事心に任せず。其女とつれて立行。しげりたるあやすぎの垣間  
 みしに女のいふにたがひてつねなれば何か心に遮りけるぞとあらけなく呵て歸る時。庭に咲たる夏菊を愛して上臈  
 二人おはしける。母おどろきをんな心のせはしく此事あるじにつけて病氣もかゝるかしく女一人ならず。京より呼  
 よせ是をしのべばとてあらはれぬ事や有と。世の聞をかまひ給はねばそれも見にまかり。是も吹きしにたゞしく見る  
 もあり。みぬも有。又いつれか実ならんと行て見しに正しく古への伊勢小町が。佛にたがはず世の取きたもよろし  
 からずと神職の家ながら心のたけき人をひそかに招き。是はと内談せしにかの人をつ取ていへるは。是誠の女にあら  
 ずその子細は纒に此家の餘慶にして都よりしかる美女二人まで爰によびくだす事思ひもよらず。察する所狐狸のわ  
 ざならんといへば。座中是ぞと一すじに同心して。氣しよくも是よりつのは。此まゝには置れじと勇ある神主是を  
 請とり。木陰に立かくれ。半弓引かけ放ちけるに形ににあたると見えしが。消て草花のみ残りつまり。迄大勢  
 わけ入尋ねしに何とがむる者もなく。只無分別に手柄と覺えつたふる其後まどろみし氣病の人を起せしに。其まゝに  
 相果はやときれて各なげくより外なく。寄妙なる事世の咄になりてやみぬ。是を思ふに唐土にも學文に入。精



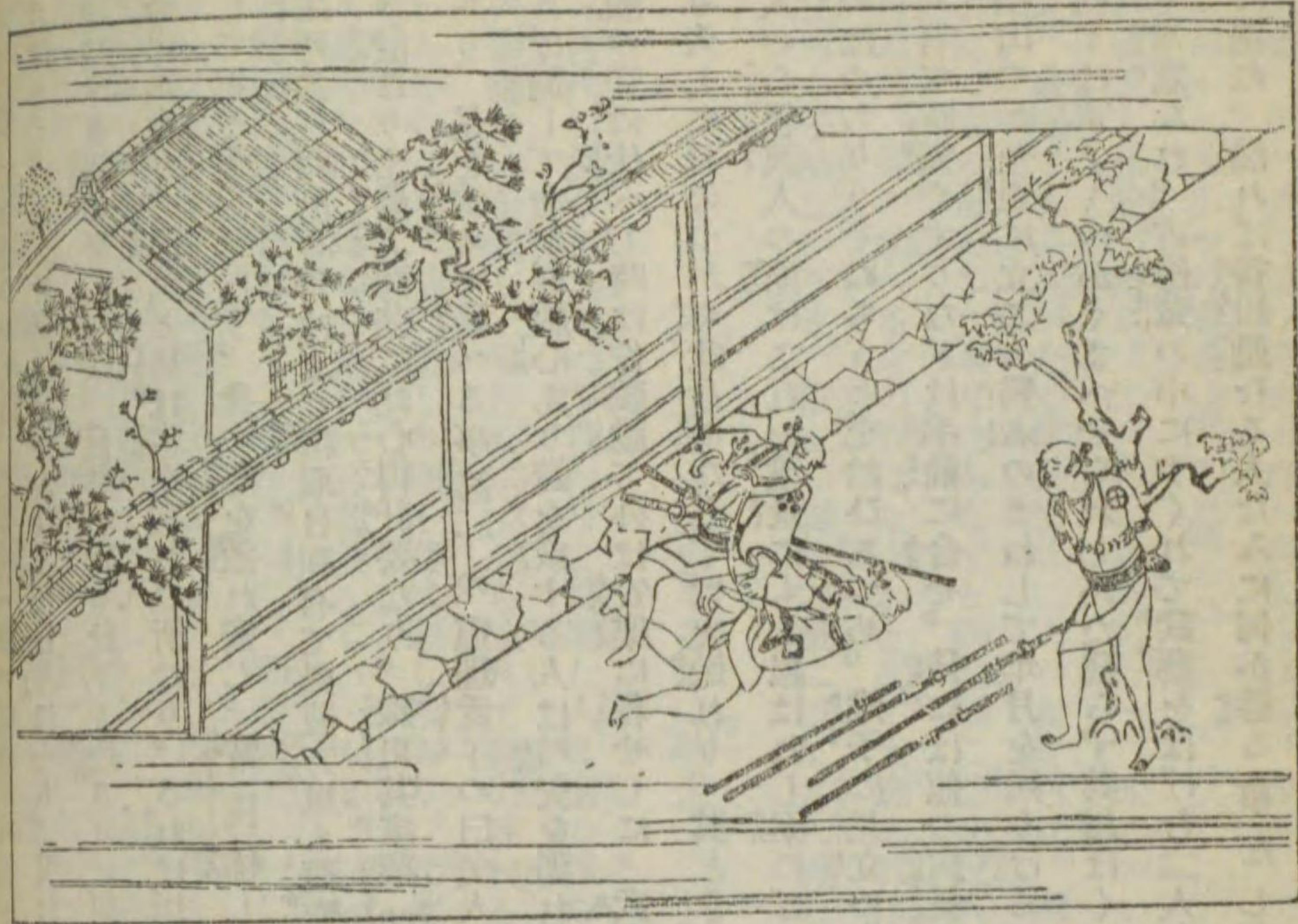
氣盡て己が魂を煩ひ青赤の鬼の形あらはれ。得道して後忽ち失にし例有。是離魂といふ病の類ならん甲州信玄公の家臣何がしとかやの妻女。勞する氣のつもつていつとなく其形ちふたつになりて。物いへば同音立居も一度に動き。何れか前後と見分がたく。二人共に樂をあたへて世にかゝる事聞は傳へてはじめなりと。武家一道の捨る斗に是を歎きぬ。各愈義するに濟がたし信玄公此二人の女を召れ。御見分あそばしけるに。しばらく落着せずして御思案めぐらし給ふに。左のかたの女本身にあらずと御差圖に任せ役人立かはり改るに驗なく。爰はふたつ物がけ也と。各あやふめける時。狸の嫌へる身の責はなきかと重て上意あれば青はの松折くべて。煙らせけるに正躰あらはし逃さりぬ。跡には何の子細なかりき。信玄の御眼力誠に以て名大將なりと万人是のみならずかんじける

三 市にまぎるゝ武士

古代石州の高角山に浮世の月を見果し人丸塚の程ちかく松年ふりて不鬪闘なる所有爰を見立て寂莫の苔の扉を閉。人倫絶て身を隠し。年月おのづから忘れて息引取れるまで。甞に横笛の外はなし。さながら仙家の境界かくなる社心からの心なれ。是に樂しみ極る時は悲しみあり。此身もけふを暮すべき糧につくれれば馬の沓を作りて海邊の市にたつも是非なし。此もの見しれる者ありていへるは。むかしは筑後の國守に仕へし人なるが。今の有様ふしぎなりと假聲の徳屋に招き心ある人の尋ねけるに。常に無言なりしが。意味ふかき市人とや思ひつらん。珍らしくも物語りしける。されば武士の身は何國を住家と定めたし自分の外人の事にも義理の一命を捨るも習ひぞかし。主人の御役にたち武家至極の事に命の果るは毛頭くやむにあらず。或は親類の禍相役又は傍輩の中にせひもなき一味。すこしの事に身を捨るなどざりと口惜き仕合。一分の理り立かたく。其家を失ひける其身分際相應の所領に預り。私事の命を果すは木石同事の心成なり。其働き懸れ相手大勢を打て何の高名には成がたし。誠は自分の意趣を忍して主命の時難

むを侍の本意といへり。是を考へ身の用心すへしとかしこき人此道を示されし。今時の武士身を備るとしてが都に髪月代までいたさせ鬘は氣づかひして自身にそり。又は内義に担任せたるあり様此用心愚なる故なり。子細は家來に氣遣ひする程の身ならば。自然の時も此下と逃さり。何の役にか立べき。不斷に憐愍をくはへをく。大事に及て主人の命にかはり。己れと勇は常を忘れぬ所なり。されは用心の事譬は山賊海賊ありといへは人救を催ほし。夜道は無刀にしてそこをとをらず。身の難を遁れ安し。常住怖しきは疊の上なりと莊子が達生篇にも用心の事をかけり人間の生死通れぬ所も舟はよく楫取日和有て風波万里も渡海す。住家はなれぬ人も不養生にて病死思へば用心わきまへなき故なり士農工商共に此心得肝要なり。殊更其家業疎にすべからず。其家に入指南得るからは心ざし各別の遠ひあり。是を改めて習へる事第一の道理孟子の曰矢人は函人より不仁哉とおなし武道具の細工なれ共。矢をはく人は通して命を取悪心あり鎧を感する人は弓矢を通れ身を助くる善心あり。念は通ずる大事。今此身に覺えたり。我國の守に仕へし時は役義勤て外は安樂に暮せしに。武藝は疎略にしてすゑは閑居を願ひ。横笛の音をたぐひもなく好み入しにおのづから此身になりて世を送れり。其とき小刀細工をえて朝暮慰みながら。要事を達するも重費なり。此人の心根浪人の節はこれを渡世にもと思はれし案のごとく國をのく首尾出來て隠れ家を津の國住よしの里にして松山のかた里に立こへ醫者のまねして年月を送りける。其外廣き家中なれは銘々こゝろくの人々武士は表にたて内は末くのかくまへせられしかた残らず其思はくになりぬ。侍は當分の奉公を大節に始末たくはへはせざるこそ本意なれ。古傍輩の中にすぐれて武藝を上げむ二人ありしが。終にそれとても役には立ず慣ひえたりといふばかりに過ぬ。然れば番組勤むる人なみに何か替る事なし有時中小姓三人不斷心のあふ友として外をかまはず見ぐるしき





程念比にかたりしが。かゝる心ざしより家の掟をそむき若道（道）を好み。たがひに取もち家中を騒（騒）す事横目（横目）より改めしに。是を遺恨（遺恨）に三人として討（討）すて。其屋かたの内藏（内藏）に取こもりぬ。大殿様御立腹（御立腹）あつて三人共に搦捕手（搦捕手）だてと仰出され。髓（髓）に利を得る器量（器量）を穿鑿（穿鑿）せしに。右の兩人ならでさしづすべきかたなし。此二人として相手は三人こもりしを子細（子細）なく生捕（生捕）にせよと上意（上意）を蒙り二人此時と申あはせ彼内倉（内倉）にかけこみ。三人のうち一人は御赦免（御赦免）とのかけ勝死（勝死）覺悟（覺悟）の者とも此とばに命おしまれ面（面）に憤（憤）をやめてしりぞくを。二人とりふせければ残る一人安堵（安堵）して拔身（拔身）鞘（鞘）におさめし所を異義（異義）なく取て搦めぬ。此手がらたくひなしとて即座（即座）に兩人共に御加増（御加増）くだし給はり。武士にかざらず此心ざしは市に立をのゝとて此道（此道）をよくはげみ給ひて。算勘（算勘）日記（日記）をしばらくも懈（懈）り給ふなとかたり聞せて終りぬ。

四 書置の思案箱

古代下野の守護に仕へて武家隨一の人あり流年（流年）盛の時もすぎ黒髪山（黒髪山）も霜（霜）をけづれる齡（齡）となるまで其役（役）を勤め一生

身樂（身樂）にわたくしなし。去程（去程）に老病（老病）此たびのかざりとなつておしませ給ふ事大かたならず。此家（此家）継（継）べき男子三人名跡（名跡）はたゞしくいづれにても心まかせにいまだ存命（存命）の内に見え請（請）べしと是より願（願）ひ奉る事を有がたき御意（御意）なり。存る子細（子細）これあり。某がし病死（病死）の後書置（後書置）のとをりに仰せ付させられてくだし給はれと三家老中をもつて言上（言上）申此者常ならねばいかなる所存（所存）もしれず免角（免角）は願（願）ひの通りと御前首尾（御前首尾）よく相濟（相濟）もとより心にかゝる夢（夢）もなく思へはかりの枕師（枕師）の柙（柙）を嚴れ共夕（共夕）の煙（煙）ぞ形（形）みたる室の八嶋（八嶋）の土にかへる一世（一世）の榮花（榮花）多生輪迴（多生輪迴）のもとひなりと。臨終（臨終）正念（正念）に日比（日比）の覺道（覺道）を顯はし何の二念（二念）もなく終（終）られける。それより百日過（百日過）て諸役人親類立會遺言（諸役人親類立會遺言）の狀箱封（狀箱封）をきり内見（内見）せしむるに書殘（書殘）されし筆跡（筆跡）もなく三人の子の名を付札（付札）の鑑（鑑）のみ残り此外（此外）しるべもなかりき又内證（内證）をあらためけるに桐（桐）さしの枕箱（枕箱）三つあり是に合せて錠前（錠前）明るにまづ惣領（惣領）には大房（大房）付の珠救（珠救）一れん黄金百枚二男には丸頭（丸頭）巾（巾）にそへて黄金百枚三男には脇（脇）さし是も黄金百枚何とも家督（家督）の実定仕（実定仕）がたく此通り御訴訟（御訴訟）申あぐるだん／＼聞し召分（召分）られやう。まづ惣領は出家（出家）になるべし。二男はかねて病者（病者）といへば向後樂人（向後樂人）となるべし。三男親が所存（所存）の通り右の役義相透（役義相透）なく仰せ付られ有かたき仕合（仕合）なり二男長劍（長劍）をやめて置頭（置頭）巾（巾）を人もとがめず惣領は思ひよらざる出家（出家）して無學無分別（無學無分別）の身麻（身麻）の衣（衣）になりて都（都）にのほり北山の近里（近里）に永代寺領（永代寺領）の付し所を敷金（敷金）をもつて後住（後住）となりぬ。今時の上人法印（上人法印）學力（學力）よりいるは稀（稀）なる事なりあるひは六根（六根）ふぐの輩（輩）又は高家大名（高家大名）の末子（末子）かたつけ所なきを是非（是非）なく出家（出家）となせば。世の人をすゝめる事思ひもよらず。其身（其身）の取置さへ覺（覺）つかなし。沙門（沙門）になれる見せしめには。衣着（衣着）して精進（精進）つとむるぶんなり。むかし少年見立（少年見立）發明（發明）なるを出家（出家）になすが故（故）に名僧（名僧）も出來て衆生（衆生）を利益（利益）有しが。今は末世（末世）になりぬ。道心（道心）は大石（大石）のごとし發（發）しかたくてすてやすし。學德（學德）あらずとも其一心（一心）まある時は是仏（是佛）躰（躰）なり。調達（調達）が六万藏（六万藏）の經（經）を誦（誦）せしも奈落（奈落）をまぬかれず慈童（慈童）か一念（一念）の悲願（悲願）を發（發）して都卒（都卒）に生（生）れき。只ねがふへきは後世（後世）の一大事（一大事）と觀念（觀念）の窓（窓）に閉（閉）こもり所有（所有）三千世界（三千世界）の書籍（書籍）を見ひらき尊僧（尊僧）となり給へり是もまた諸人歸依（諸人歸依）をなす事のむつかしくて爰（爰）をのがれる日の岡（岡）の山（山）ふかく閑居（閑居）の徳（徳）を身（身）におほえり。男女の



さかひなければ愛欲の心なし。雑言なければ鬪諍のおそれなし。是非の友なければ齟齬のあやまりなし。人の失を見ざれば他のあやまちを談ぜず人に對面せされは礼義のわづらひなし。是程きざんしなる山のふかきをしらす浅き籠の世けん寺常樂我淨今の身なり。父死去のみぎり惣領なるに出家のさし圖すこしは口惜かりしがかゝる時有がたく此慰忘れず手づから櫛の実を拾ひ山原に蒔せおかれ是大木と成をえて。一字を建立と宣ひしに。若僧共おかしく今もしれぬ命に。いつの世の爲ならんといふ。程なく年々ふりて願のごとく大堂立させられ梅檀堂と申せしもむかしになりぬ

五 兩方一度に神おろし

古代神路山の奉行發明天の理にかなひ善悪二人の穿鑿落着せし事あり。其ころ古市と云所に歴々の浪人身隠してあまたすみける中に。同じ心の友三人他事なくかたりあひて。身躰の事まで内證をつまざいづれにても主とり濟ば合力して取立申べしと互ひに武士はたのもし。其日くらしの渡世も心はくちす時節待しに。巷人丹州に親類有て其人取もち身上すみて。むかしに歸るはるの馬。よき友二人への名残おしくたがひの心は書狀の取かはしかならずわすれななどいひかはし。明日たつ旅の夜すがら乗かけ葛籠を拵際身の手業に觀世ごよりも此たびの用にたつとて笑ひきげんに酒くみかはし。明かたに爰をたつといへば。其時ぶんに來て門をくりせんと二人は私宅に歸りぬ。俄やとひの中間草履とりもそれ々に旅の別れ逆を立歸りぬ。跡にはかの侍ひとり夜のあくも今の事ぞと戸ざし引たてともし火かゞげ丹後迄の道すじの書付天のはし立松もこのたび見る事よと。心よくまどろみ跡付枕にに夢もむすばぬ程過て。寢前のやとひ男二人來て戸に音信明かたとも程はあらし御用意と聲に申せど。内にこたへ給はぬをふしぎに思ひ入しに。禮那と頼みし人は癒すがた其まゝ切ふせ。其身はぬきもあはせず輪に手をかけたるばかりに淺ましく

果給ひぬ。是はと驚き近所をたゞき立人殺しよとさばぐに長袖まじりの町人しばしはおそれて出金ざりし折ふし二人の浪人來て是は思ひもよらず。段々様子を見るに内證しらざるものゝ仕業にあらず。國もとよりつかはされし路金脊に見し物はなんぢらと二人のやとひ中間小者を二人愈義なしに搦めそれより此ざたわたくしには濟ずしてをのゝ奉行所に出ける。いか様やとひ男もうさんもかゝる當座の繩爰にも宿をさだめず東國の道中にくらし。無分別なる眼ざし。人みなこれをにくみかりにも頼みし主殺しやかて御仕置にあふべき者と人こそりて是を見明むる。其後御愈義有てたび用意の物共残らず改められしに路金も有のまゝに諸道具ひとつも分失せず殊に近所へ告しらすも男共なれば彼是もつて別条なし。其繩御ゆるされ御落着まては其宿にあづけおかれし二人の男御意のとをり有がたく扱われゝに理不盡に繩かけられし兩人年月したしく語られしよし。其うちいかなる意趣遺恨もぞんぜず疑ひは此浪人衆より外はなし討れしかたは假そめなれ共主人なれば此愈義遂させられ敵捕たき願ひ申上るの處神妙なり。彼ものとも所存の通り此討手四人をのがれず。一たび二人を誡むるの過意に先兩人を一人つゝ引わけざしき籠に入置。其まゝに何の子細もなく捨おかれし程に次第に退屈おこれる折から。御思案をあそはし御口まねも申されし役人をつかはされ今度の關打せんする所兩人に極まれる證據あり。其段は直に申わたさるべし。されとも二人一所に申あはせてうたれし事や。又巷人してかくはせられし事や。有無のせんさく今日に極まれり假令尋ねたればとて石流歴々の兩人よもや白狀は。然れば神効にて討給はぬ心さし申わけし給へと。硯料紙をわたし。二人共に書せ給ふに上意にまかせあやまりなき心底こゝろに書したゝめ是をさしあげける竊に内見あそばしけるに。何れも効者能書にしてざりとては書つらねし兩方おろかはなかりし。なかんつく一人か書けるはすこしも備紙をおかず十八枚に筆をうこかせ。今巷人が書るより六枚まして然も日本の諸神諸佛。さる程に思ひ出て此事しらざる心中まさに効勢にあらはれ。讀人だに身をふるはせ神罰おそろしくなつて。肝に銘じける。奉行も是をかんがみ給ひ効法はたらき書つゞけたるにあらす。正直あるゆ



へに自然と天のしらするの道理是なり。今卷人のなせる科には極れり然れ共侍たるものを拷問はなりがたし喰物に塩過たる物をあたへ湯水を断べしおのづと正氣みだれ現のごとくなる事なり。時に様子聞べし仰にしたがひ其とをりにしかけるに。五十四五日過て次第に瘦れ大かた乱人形義になつて人のとばは耳にうとく其身のがれぬところにかくながくの難義。侍の覺悟の遼ふゆへなり。此遺恨うたてはならざる首尾の段と申殘し潔よく切腹有べき所なりと書つけてこれを見するに。尤と思ひ込。其身の耻をかへり見ず。此者討たる次第に夢に語りぬかのものがくのくらしにさしつまり。其家久しき重寶三浦代々軍書の十二卷當分の質物に頼みしに勝手よきにまかせ後日かまはず賣はらふ事は武士の道にあらざり評判に及ばぬところなりしかれば此たび身躰すむなれば。追つけ金子調ひ請申べき時何とも申分立がたく非道を存じながら彼者を討事天命のつきなりと今はつゝまずかたりてたちまち舌くひきりて果けるとなり

新 可 笑 記 卷 五

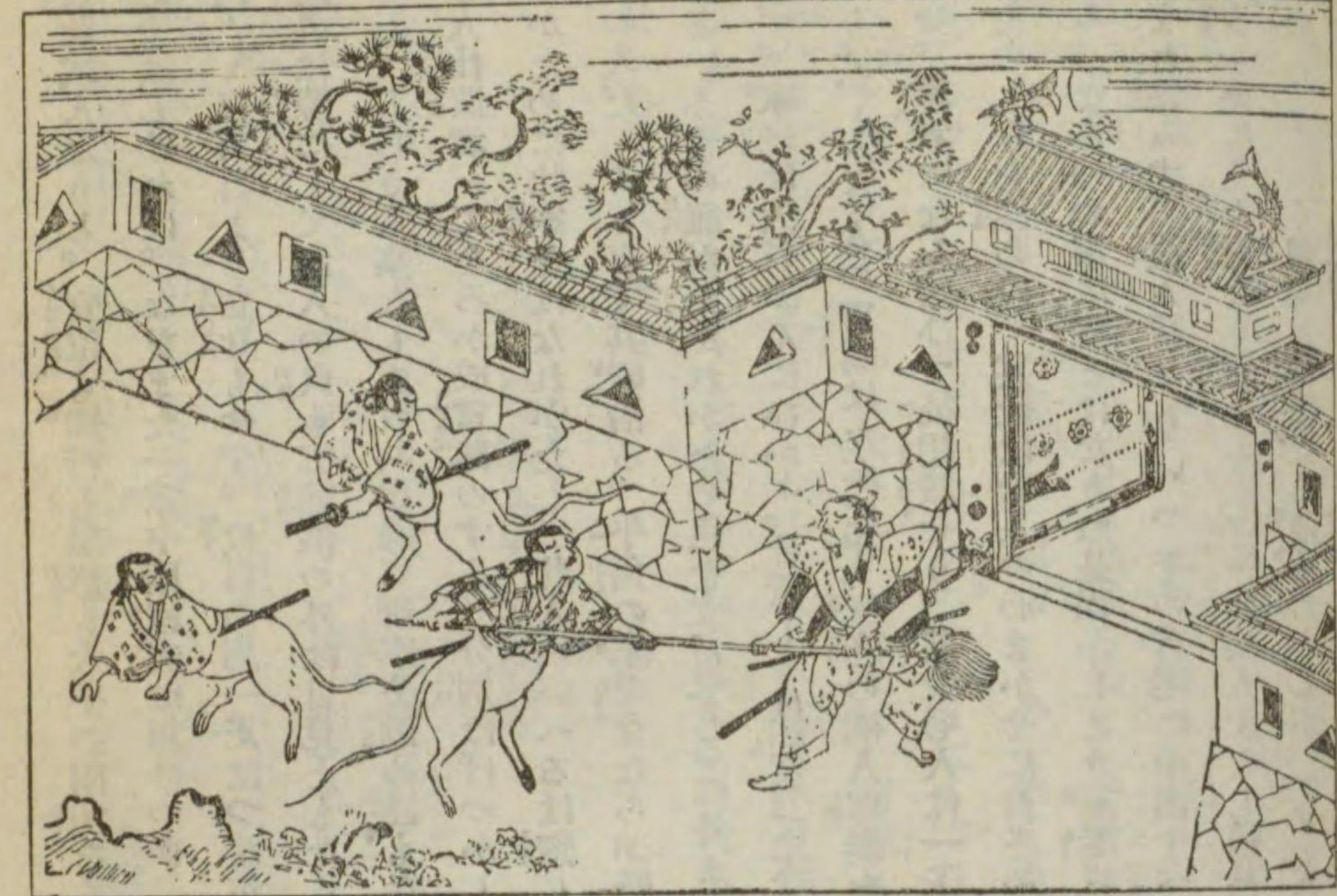
目 ろ く

- 一 鑓引て行鼠  
武士は眼前にまどを見出す事
- 二 みれば正銘にあらざ  
武士ははじめて一座大事の事
- 三 乞食も米成男  
武士は心の朽せぬうき世の事
- 四 腹からの女追剝  
武士は其時にかはる子どもの事
- 五 心の切たる小刀屏風  
武士は心のすなほなるものとしらるゝ事



一 鍵を引鼠のゆくゑ

古代関東のうちに高名の家あり。子孫の末に傳へて武の道はげみ給ひしに。忍び調練の侍十人申合せ。此家に御奉公を望みぬ。是は軍中に入事有とて近習の衆中取もち此段御耳に立しに。然らば其者しのばせ書院に甲をかざり置。取事をえたりや是をためして見るべし。首尾よく仕るにおひては残らず召抱らるべき御意にて既に其夜陰に定め不斷の番組は勿論一家中若さふらひ残らず相詰て所々つまり御番をつかふまつり外は閉て追手の御門ひとつをひらき置左右に目付役同心明所もなく立ならび大簀焼立挑燈のうつり屋のごとく高塀のねぎには壺間はさみに足輕をそなへ支閨廣間長廊下所の諸役人爰を大事と相詰おひし五月闇風まつ夕ながら互ひにたしなみ扇つかひもやめてひそかに申合せ。しろき帷子に黒き衣裳をかけ皆この衣裳は御内ぞと随分氣をつけ大書院の長床に甲立をかざり大納戸衆八人居ならび大横目兩人中程に逆座して書院の入口を改め其一間ぎりに出入をやめて此御番を勤めしに夜の明がたに自然といづれ眼は常にして心の眠りきざしぬ。やうく人只も見えし時甲立ばかり残りて各おどろき通力なればとて是程の諸役人の眼前にてかゝるふしぎを見る事自然の時の御用にたち。いかなる事も是にて利を得る重寶と此評判のとをり言上申處へ。はや忍びの者未明にかの甲をさしあげける。是によつて十人一所に抱へらるゝ時家老の何かし先夜は持病に痛み登城仕らさりしが。翌日あがりて此義きとどけ。其しのびの者をよびて白昼にはなるまじき事かと尋ねられしに。我々が所業は神力の秘術にして夜の事と申上る然らば今宵拙者一人奥座敷に罷りあるの所へ。何れも忍び入て。見えわたりたる武道具何にても取て見給へと所望。其意を得て退出す。家老はなる程靜に不斷の勤所にももし火をかゝけて。毛貫を手ふれて中眼に見廻し。四つ半時の時計を聞に。鼠三疋友つれてくらがりまぎれにはしりゆくそれにはかまはず勝手にたち逸物の猫を氣をつけ見られしに鼯もうごかずゆたかにふしける。いそぎ本座に



立歸りしばし心をすます。鼠前のねすみ又かけいでしを。あとりしたひゆくに次第其かたち大になりて犬に見ます程の時。とびかゝつて我猫の性なりといへるに此一言かたちに應じて位をとられ。さすがのしのび男あらばれる。此事諸人かんじける。其後申あげられしは當家代々御手柄世にかくれなし。先君親殿にもおくれさせ給へる御器量共ぞんじ奉らず。此以後軍法の方便武士の正道にて勝事得るとも。御内に忍びのものありて世とは各別の表裏と此さたせられては高名の御家わづかの事にすたるなれば。この者とも残らず御いとま申上らるゝだん。道理至極におぼしめし其人の願ひの通りに濟ける。菟角武は智勇のふたつなりと軍策を指南し給へり

二 見れば正銘にあらず

古代幡州赤松の家に執權兩人して。武家百姓の事まで仕置致されけるに。知仁勇のそなはり此掟をまもり。五日の風枝をならさず十日の雨にもうごかざる土の車の兩輪のごとく。すぐなる道をおこなはれしを主人も悦喜ありて家の重



寶此式人なりと。官位も知行も屋形も大手の兩角をくだし給はり萬の事を双方ともにすこしも甲乙なきやうに殿よりあそばしければ。なをまた一家中兩家老に思ひつき。礼義をなし諸事音物迄もかはらぬ色を遣はしける。同じ家中に代く三百石より立身もせず。役目の馬一疋はつながせて終に御用に立ず。とし月御廣間を二十人して四番につとめ。此外は隙にして主人の良も五節供の外は目見えもなく外さま俊にて暮しけるが。天性よき侍なり武士の作法ひとつとしてしらざる事なしされ共出過て御奉公勤め達もならず其役目の末座にさがり。いまだ元服の月額青く釣髪跡見し人仕置者とてをろか成言葉のする。分別はげのかしらをさげて何事も御尤といはねばならぬ世上。是非なく子ともかために此家をはなれがたし。此人のいへるは惣じて其家の執權はすくれて其徳をなほりしを老人それつゝき。知勇の人だんく有て其家治る。牛角の家老立ならぶ時はかならず其家乱る。子細は其身は道をまもれどおのづから寄子といふもの誰がたかれかたの色を立。思ざるに外よりみせいをつけ。いつとなく不愛となり。主人の御ためよろしからず。家老は大名ぶんにひかへ。仕置しやは知有て大やうなるを立。郡代鍛錬ふかくて十露盤にうとからぬかよしといへり。かしこき人の言葉はたがはず。家老の兩人邪義をさしはさみ。此家治りがたし。時に男子の有かたへ女子をもらはせ。縁者になし給ひて後相續せり。其後老人は一子若年なれども家督をゆづり。病氣ふんになり隠居の願ひ相かなひたのしみを極めぬ。其後は老人の心まかせにおさめ。相手は聲なれば萬に如在なし。諸事上に好ませらるゝ事をはげみ。よろづの事に奢とはなりぬ是程かしこき家老さへ無念ありて後悔かへらぬ一言なり。豊後よりさがりがたき人に頼まれ望み尤の浪人請とりいつその首尾に申出すべしとかくまへ置れしが。此者正道にしてはなし。相手にも心よく朝夕一座にえん慮なく罷ありしに此浪人すこし道具目利傳受して大方なるは見極めける。有時貞宗の刀銘かへて中心たゞしく細もとに纏なる地荒ありしが。一寸五分あげて式尺二寸の刀。さしぞへに是ぞと下直にとゞのへ我はたらきになせる名御手に入事と武士の悦へる所へ家中一番の目利しや何の何がし見まひに来るに。鞘と此刀を見

せて正銘ならは調へんと自慢にて見せ給へは鞘より四五寸ぬきかけ。心をとめて見るまでもなく正銘にあらず。御無用と申。其座に彼浪人ありあはせける家老其まゝ引あはせ。終にこなたへ御近付ならず。是は豊後の牽人家自今別して御かたり給はれと挨拶扱は此牽人が肝煎にて此刀もとめられし。思ひながら是非なし牽人其座を立行は爰はのがれぬ所と覺悟して玄關をたち門外に出るを浪人切つけしに。心えたればぬきあはせ肩さきにわつかのかすりをひて何の子細もなく打とめぬ。此首尾残る所なし。旨趣を言上申に浪人無用の意恨をさしはさむ所すこしもこなたには越度なきに相すまし。其通りに相つとめ十年も過て此御家御暇申請加増大分の仕合にて大和の國に有付しに。それまで用心ゆだんはせざりし。敵のするとも知れかたく身を安樂にくらしぬ其城下より當年九つと申小坊主をかへ茶をはこびにしてつかはれしに。取まはし利發なれば不便くはへおかれしに。ある夕くれにはしゐしてうしろより團の風をあてさせ心のまゝねふられしか骸ばかり残りて此首なき事をおどろきさまくせんさくするにかの小坊主見えぬ事をふしぎと。是を尋ねそれか親もとは此町わら屋のひとり住の女なるそと。爰にかけつけしに此女とも行がたしれずなりにき

三 乞食も米に成男

古代心ざし実なる武士あり。年久しく南部の城下にすめり。去事ありて同役三人一度に浪人せし事侍のならひとはいひながら。身の行す多定めがたし。妻子引つれ南部の屋かたを出し時。いづくいかなる所にすめりとも三人の入魂はやめじと申かはせし内。松井の何がしといふ人信州松本に立こへしが。ほどなく病死と告來れり。日比のよしみに其跡を遠山氏の何がし。是は武州に立のき親類のよしみをもつて時めく御家に身躰すみて先知五百石むかしにかはらぬ弓大將武運はつきずと悦びを重ねぬ今一人の古傍輩田川氏の何がし上方にのぼるのよし。妻子なき身の心安さは今



に廻國仕るなり。其後は文通たえて一入其人床しく住る所のしれなはわが身躰の事を告しらせて悦ばする事も明  
 くれ是を忘れざる折ふし。近衛の御所へ改る春の大礼代仰せ付られ。年のうちより身拵へして月代も春の色めく三  
 保が崎はをのつと松立て饒る風情ふじの煙の絶ずも大福よろこびなど立つく民家を過て年へぬる身もわかやくと云  
 正月とばに面影鏡山にうつし勢田の道はし君が代の永々とわたり松本といへる宮の森陰に都の春を夢となし躰は湖  
 水ひびき三井の晚鐘を鼻にきかせて入目を歎かず明ほのを喪はず。なければ喰ぬ迄の二つ五器をたのしむ物は燧箱  
 に松かせの音時に編笠ふきまくり。面影をみれば正しく田川の何がし左の方の額にむかふきづをしるし。是はと馬よ  
 りとびおり驚きしさいを聞に田川恒なる顔つきして牽人の時はかゝる身すきも何か耻なるへし。唐國にも伍子胥と  
 いへる者あり主君を養育のため形をかへ屋はふして夜半に出簾をふき腹轍をうつ音をなし。万民をなぐさめて食をこ  
 ひ。後には天運をひらけり。此身は屋を遠慮のしさいあり。我身は昼夜の世間を怖れずと古へにかはらぬ十面顔さり  
 とは氣を凝さぬ待やと不便は外になりて暫し立物かたり過て跡付あけて路銀のうち十兩當分入用につかひ給へと渡  
 せば。田川すこしも悦ぶけしきなく。世の重寶今の我身の何の益にもたちかたし。人疑へば是をくだきてつかふべき  
 才覺なし是よりはたゞ鳥目百文といへり。田川が心まかせにして都の歸さまに東の離れを又爰にてと約諾して遠  
 山の何がし都の使者をあひ勤め。彼松本に行。田川とかずくの物かたり暇こひ。只今頼みし主人自然めし抱へられ  
 ば先知にて堪忍し給ふべきかといへばそなたと又傍輩の願ひあれば。住へきといふをよろこび急き東武にくだり。  
 御返事をさしあげて彼老中諸役人のつきあひにて。田川心底流石の侍とよしなに物がたりせし事。誰が申上るとは  
 なく大殿の御耳に立て其者の心ざし床し。若此家に濟ば右の三百石にてつれ來れと。上意有がたく遠山ふたゞび松も  
 とにのぼり。田川に此事聞せければ。此義は偏に貴殿の取持と心から勇をなし。此身になりても一腰は捨じと三条  
 御町長殿所愛の何かしに懸け置し具足一領一徹大かなど取に遣し同道して東に下るに。遠山神官をあけて當分は

是なりとも。小袖を遣しけるに田川一圓言はず。存る。子細もあれば某は此まゝとさまゝの了簡をうけずやぶれ  
 簡を身に纏ひ。江戸にくだりぬ。直に御目見への用意遠山が屋形にて翌月代も改めんといへば田川苦しくしき貞つき  
 して某が事御前へ非人の境界を申あげられずや。然らば此まゝにて御前へと申。遠山興覺て色々諫言するに更に  
 是を用ひす是非なく此義言上申せば。其者が願ひの通り目見え請べしと。仰出され非人を有しまゝに廣庭にまかり  
 出首尾残る所なく御目見え相濟てのち身をあらため御奉公を相勤めけるに。流石一利屈ある武士にて勤次第に疎から  
 ず其御家の重寶となりける

四 腹からの女追剝

古代の人のいへり物には同氣相もとむる事善にあり。惡に殊更なり。其比は東の奥道奉行の仕置を用ひす。追剝夜盜  
 のさたやむ事なかりしに。今君が代の道すじ廣く捨置ても取あげざるこがね花咲海山まで。松に風たえ浪に音せず人に  
 邪なかりしに後奈良院大永二年の春。陸奥にかくれなき盜賊の名取川瀬越の何がしとて往來の人をあやめて金銀荷  
 物押領して。世の外なる分限と成身の程しらぬ奢を極め都を見るはじめとて人あまたにてのぼりけるが。遊興のあま  
 りに美女を見出し。是戀わひける其人はむかしに衰へる人の息女なるか邪なる人共しらす渡世の心やすきは都より  
 東も住よかるべし。女に定る家なしとて其盜賊に給はれば馬乗物をいそがせ古里に立歸り。彼美女を愛して世は世さ  
 がりとくらしぬ。此息女何となくくだりて次第によしなき世わたりを見て淺ましくかなしく女かへる道もしるべなく  
 菟角は身捨是までと極めし日救もふりて。なじめは其血にそまり剝とる小袖の今宵は仕合といふをうれしく。むご  
 き物がたりも心よく切刃を付し山刀も怖しからず。自から夫の悪心に同じ。それより年経て娘をふたり儲て行すゑよ  
 るこひし。此夫病死してたよりなき後家となりて又東に住もうるさし。家に有つる諸道具を夫の同類なる人取貪て。



残る物とて鑑長刀かりながたなすぐなる心を今はゆがめてけふをくらせる便りもなく。男のすなる夜のかたち海道かい道に出て手にあふ旅人の物をうばひとり一日を送りぬ。二人の娘もおとなしくなれるに。里ちかき今日の細布織ほろのりならはせる業はなくて夫の悪事を是にまで傳へて怖しく拵こしらて武士はよけて町人里人をおとして何にはよらずとりて参れと勸めける。かたち婀娜ななめければ情の道も知へき娘共むすめどもはもとをあらはし父の心にかはらず毎夜ちまたにて母を羽護はご込ける有夕暮ありゆぐらに野沢のさわのひとつ道ゆくに。誰かは爰こゝに置おわすれぬ。續つづきの絹きぬの十疋有しを天のあたへと悦よろこび。兄弟の中なれ共ともどもいろのよき絹をあらそひ五疋つゝ引わけて。花見る春もちかづけば。紅梅こうばい藤色ふじいろにもそめ。夏はひとへを卵たまごの花衣はなぎにたち縫ぬして女風情おんなふうせいつくる事を姉も妹もたがひに欲心よくしん出来て今宵は姉をともなはずは。自みづから独りの物なるに。かへさの廣野ひろのにならば。姉を殺し絹を丸めんと思ひし。姉もまた分たたる絹をおしみ。妹の命をとりて残らずわが物にと。二人の悪心同しくして機嫌きげんよく道を急いそぐに野墓のぼかの燒るを見て姉無常むじやうを觀くわじ。扱あり口惜くちやくき所存しよぜんや。思へは纒つづ絹きぬ五疋に現在げんざいの妹を命を取べき心入。去さ遣とは世に有べきさたならずと。心中こゝろに觀念くわんねんして。とかくは是ゆへにさもしきと彼絹かきぬを人燒煙ややくいの中へ投な込こば。妹も一度に打くべ同じ灰はいにぞなしける姉ふしぎに思ひ。何とて絹は捨けるぞと尋たづねしに。妹涙いもなみだぐみ今更申も耻はかし。無用の物を捨てそれより心の外の欲心よくしん發はり。そなたの命とりて母には旅人の働はたらきにて是非せひなく殺されたると語り。其歎なげきかへり見ず五疋の絹ゆへ淺あましき心ざし申せば。姉も横手よこてを打て我が思ひ入おもひいれに同じ。永ながからぬ世に生れ殊ことに女の身としてかゝる惡逆あくぎやく後世ごせいの程恐おそろし人を威おそせし双物ふたものを燒捨て是より菩提ぼだいに入母にぼにも勸すすめて佛の道うとからず。心にくき三人びくと成ぬ。誠まことに無明むみやう無寐むみ全ぜん依い法ほつ性じやうとやらん聖ひじりのいへる氷消こほりかへては清きよき水みづとなるためしそかし

五 心の切たる小刀屏風

古代家下に神變しんへん有事うじを語り傳へり。菊酒きくしゆは加賀かがの各物おのづかにして重陽じゆうやうの御祝みいひの水。久ひさしき代よのためしそかし。大書院だいしよゐん

は仙人せんじん畫えのすみ繪え。くれなるの雪ゆきの洞ほらに。四季しきをわかたず花咲はなざ実みのなる桃ももの立枝たてえだのこのもしき風情ふうせい。いづれか大名の御物ごぶつずきこそらぬ事をこそ豊とよなる誠まことめなれ殊こと更さら近年こゝろ小刀屏風こたなびやうぶとて世に有程ありほどの正銘せいめいをあつめ。小柄こがらのつくり物美ものうつくをつくざれしに。其いさぎよき事此ことうへ何かあらじ。惣おんじて人は移り氣いきなれば。諸家しよか中共ともどもにきよらなる小刀箱こたなばこを拵こしらへ其相應おのづかにたしなまれしは。武士ぶしに似にあはざる事にはあらざりき。其比家きひか老職らうしやくの家にして秘藏ひざうの小柄こがら兩度りやうどまで見えざる事有あり。ひそかに詮義せんぎし給たまひけれ共ともども。其ありかされず行ぬ。又有時また御月ごげつ待執行まちぎやうぎんあそばされし夜半よるなに御指領ごさしりやうの小柄こがら紛失ふんしつせし事度ことどかさなつて御腹立ごはらだち。此たびはつどゝに御詮義ごせんぎ遂つひられしに。宿しゆくり番組ばんぐみの小姓衆こせいしゆの寢道具ねたぐし茶堂坊主ちだうぼうしゆの役やくにして。葛籠くわらごにたゝみこむ紫むらさぶとんの下より御たづねの小柄こがらあらはれ出。此事ことつゝまず横目衆よこめしゆに披露ひやういたせし。此小姓こせいの身に覺おぼえはなくて武士ぶし一分ぶんの立たがたく。是非せひもなき覺悟かくごにおよべる時。召まつかひの小者團八こものだんぱちと申せしが供部屋きやくべより直ただに欠落かけおせし事其ことかくれなく御前ごぜんの御耳ごみみに立たける。諸役人しよやくにんのおもはくにも扱あは此者こゝろが仕業しごふなるべしと極めての御さた有て主人しゆじんは當分あたふた遠慮えんりよして御奉公ごほうこうをひかれける。其上方かみかたへ追手おいてをかけられしに。いまだ國中くにちゆうをはなれず。小松こまつといふ所の片里かたさとにてからめ來り早速さつそく註進ちゆしん申まぐれば。其者そのもの吟味ぎんみ役人やくにんに仰付おほせられ様子ようす段々だんぜん尋たづねられしに。團八だんぱちすこしもどうせず。私わたくしの心から小柄こがらを忍しのびて盗ぬすむと一ひとすじに申まぐれば。幾度いくどの詮義せんぎも是こゝに極たぎまり。團八だんぱちを成敗せいばいの庭にわに引出ひきだす。時に大横目おほよこめの何がし團八だんぱち寢後ねごをあひ延所のびどころ存ぞん一ひととをり申まぐられし子細こさいは先下人せんかみとして御腰ごこしの物かゝりし御居間ごゐままで参まゐるべき故ゆゑなし。又主人またしゆじんは大分おほぶんの祿ろくをくだし給たまはれば何か金銀きんぎんの小柄こがらなればとて乏とほしくは存ぞんぜざる所なり。しかれば團八だんぱちみづからぬすみとるといふ共其まゝに成敗せいばいなりがたし。是をさつする所主人しゆじんの面目めんぼくすくはんため其科かを我身われみに引ひうけ。一命ひとことに立たかはる事下人しもぢにはやさしき心底こころなりと。かいつて其道理そのことわりを申まされければ。皆みなもつ共と評定ひやうていあつて此事こと御前ごぜんへ申まぐげ團八だんぱちが命いのちをこひうけ。かさねて心中こゝろを聞給きこふに。各おのづかの推量すいりやうすこしもたがはず。末すえには奇特きせきなるものと世上よこしまに其名なをふれける。されは悪事あくじ千里せんりをはしる。虎林こりんといへる掃除坊主そうじぼうしゆ前後ぜんごの小柄こがらをぬすみとる事自然しぜんとあらはれ世の掟おきてと



はなりける。かの團八年久しく武士のつとめを退屈して大正寺の門前なる民家に身をかくし門はしるしの杉をなびか  
 しわづかなる酒商賣をせしに。正直をもつて世をわたる事行水に救かくかよひ樽もつどひ来て十年あまりに富貴の  
 家とはなりぬ。つれたる妻に独りの娘ありて今は三歳の春もすぎ。卯月のはじめ比より團八大病を引かけ。次第に枕  
 あがらず生薬をあたへつれどもさらに。驗氣のなき事をかなしく。夫婦のよしみ此時なれば其ころにまかせ屋夜  
 の取あつかひ残る所もなかりき。今は世のかぎりで見えし程に。自然なき跡にても此家のたへず娘がための書をきと  
 さま／＼にすゝめけるに。日比はかしこき團八も浮世の欲といふ物大分の金銀に心を残し。浮雲命の内にも書置はせ  
 ざりき。妻たる人此心中をうらみながら。身をくだき看病つくしけるに。いまだ時節の來らんや。二たび驗氣得てむ  
 かしの團八になりぬ。よろこび日をかされて後。親類縁者酒事をしてよび集め蠶月代をあらため。其座敷におひて猶  
 五百八十までと長命を祝ひ。千秋樂をうたひてのち内義立出て右の段／＼うらみの旨をいひ破て是非のいとまをこひ  
 けるに。各をどろきいろ／＼なだめけれ共。寢後まで妻にをしまるゝも夫婦のかたらひせしかひこそなけれ我一生  
 のいとまとふり切て出て行ける。團八立腹してやがて思ひしるべき女心とほどなく後妻をもとめかたらひをなしける  
 に。三年ばかりすぎて又大病におかされ今をかぎりのとき過にし妻の事思ひ出して。しるべ有人に尋ねけるに。それ  
 よりは髪を切て世をひとりあだに暮せしとかたりければ。團八かんるいをながし後妻にそれ／＼の所務分して。財寶  
 のこらずむかしの妻に是をゆづり。すゑ／＼さかへておかた酒屋とてさゝの小さゝを國中になひかしかける

元祿元戊辰稔十一月吉日

江戸日本橋青物町

萬屋清兵衛板

大坂眞齋橋筋吳服町角

岡田三郎右衛門行

# 本朝櫻陰比事



本朝櫻陰比事 卷一

目録

- 一 春のはしめの松葉山  
神鳴落て地かたまり  
むかしの縁者しるゝ事
- 二 曇りは晴る影法師  
年はよれども夜の淋しさ  
念佛斗も申されぬ事
- 三 御耳に立は同言葉  
血て血を洗ふ去所川  
牛よりおとりの京の事
- 四 太鼓の中はしらぬが因果  
掛ながら無頼母子の寄  
婦夫中荷ひ棒の事
- 五 人の名をよぶ妙薬  
身にあまつて金持有  
それゆへ命を捨る事
- 六 孖は他人のはじまり  
願ひにあまる物だね  
法花信心深き事
- 七 命は九分目の酒  
腹中はからくり久形や  
うき世の糸きれ果る事
- 八 形見の作り小袖  
むかし山の花談義聞程  
後家は殊勝成心底の事



一 春の初の松葉山

夫大唐の花は甘棠の陰に召伯遊んで詩をうたへり。和朝の花は櫻の木かげゆたかに歌を吟じ。此時なるかな御代の山も動す。四つの海原不斷の小細浪靜に。王城の水きよく流のすゑの久しきひとりの翁あつて。百餘歳になるまで家に杖突事もなく。善惡ふたつの耳かしくく聞傳へたる物語り。今の世の慰さみ草ともなりて心の風に乱れたる萩も薄も。まつすぐに分れる道の道筋の廣き事。筆のはやしにも中々書つきずして殘しぬ。むかし都の町に高家の御吉例を勤むる年男あつて。毎年十二月廿一日に定めて丹波界なる里の山入して。御かざりの松をきりける。此山の東の麓に里有西のふもとにも里有。此兩所の入組の山にして年々庄屋出合山さかいのあらそひやむ事なし。爰をかざり山とて古代より切所に極まる記録を持傳へ。此山は我しはいの所といふ。又一方の庄屋も卷物を出しけるに。双方一字一点違ひなくなを此事すみ難し。扱又高根の景地に大同年中の建立といひ傳へて。楠木作りに一間四面の觀音堂あつて。ないじんの戸ひらは昔日より釘付にして。本尊拜たるためしなし。つるに灯明の影もせず參詣の人もなく。柴男の休み所となつて御佛前は木の葉に埋れおはしける。此堂の事第一あらそひ訴狀さしあげ山公事に取むすびぬ時に兩里の庄屋を京都にめされ。同じ記録を持つたへし事細あるべし。此卷物に觀音堂事は何ともしるし置ざり。記録は大同一の年号也。秘佛といへは誰か拜せし者もあるまじ。然とも我々どもは様子をしるべし。何觀音の尊像なるぞ兩方より申出べし。云當しかたの堂に申付べきとの御意なれば。爰ぞ思案大事の所也。一方よりは清水寺の御同休千手觀音と申上る。又老人はしばらく頼つかえして分別極め如意琳觀音と申上る。兩方極めさせての後丹波に御役人をつかはされ彼堂の戸ひらを引明しに。各別なる事にておのづから横手をうちける。すさまじき神鳴の形を八方へ鉄の鑊を擲ていましめ。目を留て見るも身のふるへる事也。京都に歸りて此ありさまを言上申に。さのみ不思議にもおぼ

しめされず洛中の佛師を獲らずめしよせられ。もし此神鳴の像を刻みたる事を聞傳へたる細工人はなきかと御たづねの時。其比五条の大佛師法橋民部といふ者。六代の先祖是を作りたる家業のまき物さしあげしに。後小松院應永元年霜月十八日の夜大雪ふつて。富なり出し其救しらす落かゝつて。諸木をくだき里の屋を破り人の命をとる事男女に式十四人。万民のなげきなる時北國がたより眞言の旅僧きたつて。是をふうじ籠られし後此山里に虫出しの神鳴さへ音なく。是をよろこび其像を作りて此所ひさしかれと視ひ籠。兩里より是をあげ雨乞の願ひをせしに叶はざるといふ事なし。其事里人すゑになつてとめこしいとそんじたてまつりい私先祖是をつくり申ひ證據には。則岩座のうちに。書付殘しいと此卷物に見え申ひ段言上申せば。臺座を改めさせ御らんありしにひとつの折紙あつて。佛師が申せし通りすこしもたがはず。願主は兩里の庄屋なり。其比は掣舅の中なる事しれきたれり。扱は記録一方より書移して遣はしけると見えたり。昔日縁者なれば今もつて外の儀にあらず。自今以後は申合て。此堂をかぎつて東西の山を守るべし。松





は先例にまかせ一方の山にて十式本づゝきつて。十二門の松をたてまつるべしと仰せ付させられ。永代かはらぬ松葉山ちよに八千代と祝ひおさめける也。

二 曇は晴る影法師

むかし都の町に夏を棟として、軒に木曾山を引請し材木の問屋有。二葉より家業にかしこく松はちとせ藏とて。鳥の孫曾孫まで居喰にしても此たくはひつくる世あらじ。亭主は八十歳余まで一子に財寶もわたさず。大暮の勘定をよろこび。かしらは霜を振り額に不斷の浪立腰は反橋のごとく。わたりかねざる世界をさりとは無用の勤め。今にも死れたらば火車のつかみ物と。人の取沙汰やうく耳に入てお入つ太鼓におどろき。俄の御堂まいりの暮て後世をいそがるゝと人皆又笑ひけるが。あしき事にあらねばいつとなく佛心発りて其後は常精進になつて以前に替る事天地也。乾坤の箱入にして千貫目萬事男子に渡して。樂隱居を岡崎に見立。作事は手の物の嵯峨丸太かるひ取置の窓蓋。明れば諸山を見わたし老後の思ひ出爰に極め。とく捨ぬ世を今は残念なり。然もつれあいは二十ヶ年前にはなれ。ひとり法師になつても心かゝりはなかりき。男子は有徳なれば自由に孝をつくし。毎日世の初物をはこばせ。殊更お茶のかよひのためにやさかたなる女四五人付置しに。寝間のあげおろしも人の手にはかけ給はず。墨衣をきぬはかりの出家形氣になり給へば。めしつかひの者どもおのづから信心のおこし年ふるうちに。下女の中にも其さま見くるしき。庭はたらきの女腹形おかしけになれるを。人くがめて笑ひけるに旦那のお名を立けるは。大かたならぬいたづら者と是を悪みて。此事親仁さまに申せば夢にも覺のなき事とて。下女は此内を追出され小宿にて産をいたせしに然も男の子也。随分大事にかけて守をだて。親子の忌明て此男子を親かたの許へわたしけるに。是を取あへる人もなく是非におよばずかなしさのあまり。子を抱ながら御前にはしり込右の段申あぐれば。親仁をめし出され色く御食議あそ

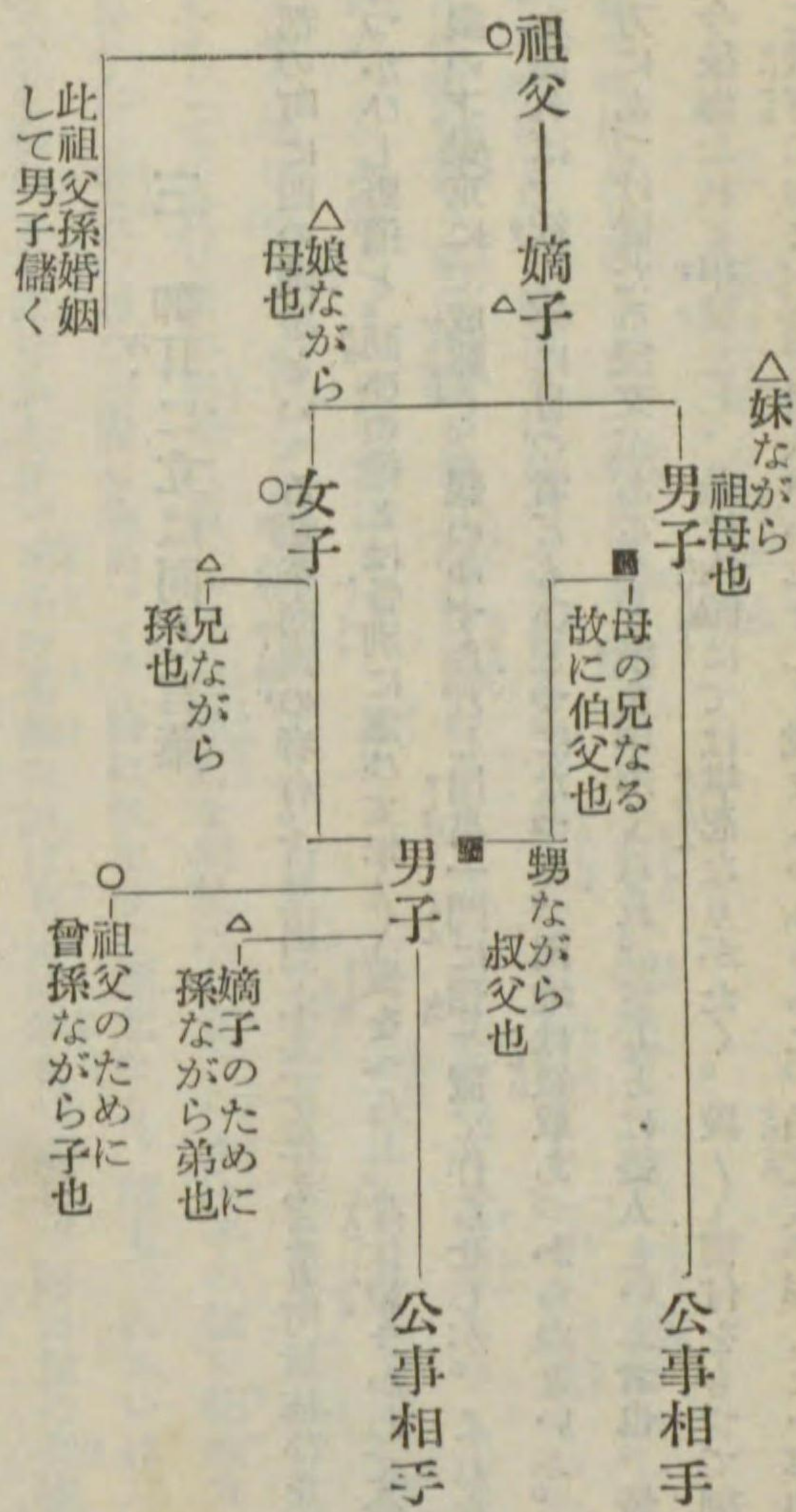
はしけるに。すこしも身の上に覺へなきよし申あぐる。然らば明十四日の朝兩方ともに出べきとの御意。いづれも早天より相つめける。時に仰せ出されしは唐土にもかゝるためし有。八十歳に成ける人の子は日影にうつして其影なし。面影うつらば親仁が子にまぎれなしと仰られ。白洲立てて朝日に移しけるに。此子か影法師見えざり。今は親仁ちんじ難く私世間を恥入包み申ひ得とも成程拙者の忤子覺へ御座いと申あぐる。時に母親すゝ願ひ申上れば。其子かならず百日は生ざるもの也。もし長命ならばかさねて申出べしとの御意を請いづれも御前を立ける。その後親仁も此子にふびんをかけ。昼夜大事によういくいたせしに。次第によはりて仰せ出されしにたがはず九十七日目に相果けると也。

三 御耳に立は同じ言葉

むかし都の町に西の岡屋といへる葉茶商賣の者有。古里出て十三ヶ年あまり町屋住ひをせしが。先祖より手馴たる鋤鍬うしをつかひし野道と。商ひの道とは各別に遠ひて年々質をへらし。身体継きかねて今一たびふりを替る相談極めしに。金銀の才覺京にて成難く。親のゆずられし田畠一門に預け置て作らせしが。これを代なす胸算用して。里の親類に子細を語れば。欲の事に目の者どもひとつになつて。田地は買取あづからぬといふ。然らば其證文があるかといへば。其方にあづけ置たる證文があるかと横を申かゝられ。さりとは盗人といふ者也。皆のかれぬ中なれば手形も取らずして。今後悔なれど甲斐なし。是は内證にては堪忍なりがたく。段々書付をもつて御訴訟申上。相手の百性めし出され既に裁許におよべり。里人声かしましく我まゝいふうちに。伯父人形もない事申されなといふ。京の者腹立して伯父ない事が御前へ申あげらるゝ物かと。兩方より伯父といへることば御前の御耳にとまりて。先公事は外に成ておのれら畜生同前なり。先祖の祖父目世にあらば急度申つくへき曲者也。此出入かさねて聞事にあらず内證にて和



談すべし。世間の法を背けば。おのれらがつり書して其町の者どもに是を見すべしと仰せ付られしを。いづれも合点  
まいらす色く思案いたしても落着せざりしを。御前には良座にきこしめし分させらるゝ事諸人かんじける。



四 太鞍の中はしらぬが因果

むかし都の町西陣に織締屋門をならべ。是を渡世としてけふを暮せる中に。家職人にすぐれながら内證さしつまり。  
年久しく住なれし所を立のくに夫婦相談を極め。諸道具のびくくに賣拂ふを聞つけ。兼て念比せし職人中間十人申合  
せ。此亭主は身すぎに油断なく萬事りちぎにかまへ。然も佛神を信心深くひとつとして悪事なく。人のためにもなれ  
る男にていづれも是を惜み。是非に今一たび身体取持べしと内證さしければ。わづか四貫目にたらざる借銭。是にて救年

のしにせをやむる事あるべきか人の身の上にはかゝる事のあるならひ也。我く万事請合上げ春の事ども調へ。嬉しが  
る子ともに餅花を見せ下々の仕着は紋なしの淺黄にして今からもなる事也。お内儀こんな時が大事也。髪かしらも取あ  
げおちめを人に見せぬが女房のたしなみ。鯛は三本まで手前であれば是を一本越べし。我人いそがはしき十二月廿六  
日の夜に入。申かはせし十人老人に金子拾兩づゝ持參して。頼母子と名付合力にいたし一升辨にひとりくなげ入。合  
て百兩の小判近年のうちに千兩になるべしと。中にも分別らしき男是を喜びす棚にあけ置。隣の大黒殿も來年からは小  
籠のつゞく程はうち出し給へ。さもななくば紙屋川へ流しますと大笑ひして。其後は酒になしていづれも機嫌なれば亭主  
もよろこび。是はめつらしきとしわすれとひとつ呑人皆目の下戸までも。我を覺へぬ程の酔のまぎれに順の舞の鑿づく  
し。何をいふにも前後しらず千秋樂に草履はきかへ。羽織を残し扇をおとし礼儀なしに立歸る時は。七つの鐘突鷄も  
鳴て亭主は宵よりの氣あつかひ。血箱枕にしてふしければ女房戸さしをしめて。常よりも用心して下くを寐せて。心  
嬉しさのあまり男を起し。大かたに拂ひ算用をして見給へと。大帳十露盤をあてがへばあるじ目覺して。此節季には  
借銭乞ども目を秤てつらくはすべし。殊に米屋の八右衛門は縁者のはしなるに。外よりせはしく乞立し。さらりと濟  
して年取物から限銀にて脇で買と。諸事胸さん用して棚より柵をおろせば中に小判はなかりき。夫婦是はと驚き裸金な  
ればよもや鼠は引まじもしは神隠しかと喜びす柵を幾たびか見るに。いよくないに極まり中くははじめ今のかなし  
さ増り。兎角は我等が因果なるべし。盗し人も恨むまじとおもひきれども口惜く。なまなか合力請て結句身の難義とな  
れり。世間の取沙汰もいかなればながらへて何のせんなし。いざ子どもをさしころし果んといへば。女房も取乱さ  
ずいかにも生たる甲斐はなし。死姿は人の見るぞとたしなみひとつある白小袖に身をなし。扱鏡に向ひ不斷よりは髪  
かしらうるはしく。男の鬢撫付てまことに十九年のなじみ此明ほの夢かと泪に目もくらみ。持佛堂に灯あげて。二人  
の子どもをしづかに引起せばけふは餅花をする日かといへば。又弟は破魔弓の事現にもわすれもやらず。さりとはふび



んにおもわれし時。久しくめしつかひの女この首尾を聞付て起あはせ。子細も聞ず泣出して御夫婦はともあれ。いまだわきまへもなき子達の命とらせ給ふは。いかなる事ぞとなげきて何とぞ御分別のあるべき所。此おふたりはわたくしの手に掛てそだてますと。大声あぐるにぞ皆く起さはぎて。とかういふまに夜もあけておのづから自害もとりぬ。此事策前の二三人聞付衆中へしらせて又十人寄合愈議するに。何とも合点のゆかぬ事はなり。合力する程のいづれもなれば是を取べき事にあらず。といふてから此盗人は外になし。面々の身晴に神文鉄火といふ人有中にも一分別ある人其分にては濟難し。兎角は御前へ言上申御沙汰次第と相談極め。右の段々書付を以御訴訟きこしめしわけさせられ。年内余日もなく皆く渡世のさはりなるべし。正月廿五日にせんさくすべし。其内壱人も他國仕るなど仰せわたされ罷歸りぬ。春になりて右十人の者ども妻めしつれて御前に出べし。もし女のなき者は姉妹にかぎらず。あるひ姪妹にても女を壱人同道申て出べきとの上意。迷惑ながら御白洲に罷出れば。一二の圖取あつて番付を書付。大き成唐太鞍に棒を通し。夫婦づゝにさし荷はせ御屋形をはなれるか西にあたつて宮の松原をまはらせ。是を諸見物ちかくよる事かたく御法度也。頼母子の金子見えざる過意とて。一日に一組づゝ十日が間に此事おはりぬ。洛中の万人見附して是は各別なる御過意といづれも不思議を立ける。されば此太鞍のうちに発明なる小坊主を安置れし事。誰か存知たる者なし。毎日事御たづねありしに。いづれも女はなげく中に。八日目にかたげまはりし女房すぐれて我男をうらみ。金子合力しながら諸人に面を濡させ。かゝる迷惑は何の因果ぞといふ時。男小語て是はすこしのうちの難義。生金百兩只取事と申せし事申上る。其者めし出されつよき御愈議にあらはれ。右の小判を取替され彼者にくだされ有難仕合也其後仰せ出されしは盗人ながら一たん合力の衆中なれば。命は助て都のうちを。則これより拂へとの御意にて夫婦を東西に追うしないけると也。

五 人の名をよふ妙薬

むかし都の町に佐渡の嶋國よりわたりて住京五条塩籠丁に定め。物さびしきを態と好みて然も借宅して。古里よりめしつれたるおとこ壱人は是に臺所をあづけ。年中只居して銀八百目にて萬事を仕廻るゝ身体。是程かるひうき世の樂人我也。今年五十にあまれば長生してから今二十年。こゝろにかゝる親もなく行すゑおもふ一子もなく。木から落たるさる程に頼みすくなし。佐渡より金子式千五百兩持參せしが。今の費用なれば二百年のたくはへ有。俄に榮花仕やうもしらねば。明暮札錢出して芝居見るより外はなく。いまだ遊山の同道もなく半としあまりも暮して。京とてもさのみおもしろからぬやうに思ひぬ。其相借屋に是もひとり住して日をおくれる男有。何商賣とも定めなく。洛中の分限なる人の男子達の機嫌を取。世を夢のごとく渡りて。夜を昼になし世界の圖はづれなる者。都なればこそ人も是を見ゆるしける。我籠は稀にも焼たる事なく。火の用心ばかりは氣づかひなし其外は何とも見えぬ男也。いつの比か隣に金子の有事を見出し。さまざまにして取入心をゆるさせ念比になる時。六条の遊女町にさそひ行て歴々衆に引合せ。太夫まじりの遊興の後此田舎人大分金持と語り聞せけるに。利銀は月七割にても先借たがる若ひ者五人内談して無心を申かゝれば。此男即座に合点して手前に有あはすこそ幸ひなれ。利銀におよばず御壱人に五百兩づゝ五人に式千五百兩。有切出し預ケ手形を請取其上に申渡しけるは。此金子は我一代の渡世のためなれば。一とせの入用程五人のかたよりまはり番にして歸し給へ。其内にあい果たらば誰にゆづるかたもなければ。跡の儀吊ひ給はれとすこしも残りぬ心底。天から降たやうなる金の借手。おのゝ當座のよろこひ末に濟すまじき覺悟のひとりもなかりき。田舎人も宿に置ての氣遣ひ絶て其後はいづれも參會して先に一夜を明せし事も有。折ふしは霜月中比殊更さへわたりぬる夜あそびに。かの相借屋の機嫌取男其一座にありしか。兼て悪心をたくみ此田舎者さへころせば。預り金はいづれもの徳



になれば。五人の手前より大分取へしと無用の欲心発りて。其人に毒酒を拵へ酔のまぎれに一盃吞せける。其座は何の事もなく私宅に歸りてなやみぬ。惣身動ずして口籠り目ばかりうろ／＼と見まはしければ。下人おとろきいまだ息の通ふうちに罷出段／＼言上申。五人の手形を御前へさしあげ夜前の一座も此衆中と申上る。其五人外の同座せし者までも残らずめし出され御兪議さま／＼なれども。本人夢中なればいづれをさして御吟味成難し。しばらく御思案あそばされ御手前醫者仰せ付られ。かゝる時申傳へし妙薬を世のためしに吞せ見よとの御意にて俄に拵へける。ふるき鞍の破れ革を黒焼にして。彼病人にあたへ給へば腹中に入と。毒を吞せし相手の名をおのづからによぶといふ事。唐土の醫書にあるゆへ今此不思議を見る也。大事の聞物ぞと仰せ出されし時。是はと驚く者有又何をかとうたがふ者も有。銘／＼心／＼に耳をすましけるに。しばらくあつて病人口ひるに動き有て咽うちにてそれが名をさして太鞍の茂六／＼といふ事あり／＼と聞へ。何も奇の思ひをなしける。此者をからめて御せんさくに悪事あらはれ御仕置にあいけると也。

六 孖は他人のはじまり

むかし都の町に一子相傳の妙薬神教萬病圓と看板出して賣薬有。是洛中の外近在迄廣まりて此家四条通りに隠れなし。此人五十余歳まで屋継のなき事を悔みしに。本妻懐体をよろこびしに。此亭主相果られ三十五日のなげきのうちに平産いたせしに。是つねに替りて孖然も二人ともに男子也。父のなければひとしほふんにおもはれ。面／＼に乳母とりて此子ともをそだてさせ。名も梅松竹松と呼て十三に成ける夏の比又此母親頓死いたされ。定めなき世とことかなしきは跡を見立る一門もなく。只ふたりの乳母ども銘／＼に抱守いたせし子に此あとしきを望み。惣領末子の論をする事やみ難く。町中の異見をも聞入ずして兩方より同じ願ひ訴詔をあげける。時に此家ひさしき手代外に書付

を言上申は。此家ふたつに罷成いへば一子相傳の名方のわかる事。家財よりはなげかはしく存たてまつりいと御願ひを申上るは。いづれにても孝人に家を継せ孝人は相應の敷銀を付他家へ遣はし申度所存。尤にきこしめしわけられ。京都に名高きちどみかといふとりあげ祖母をめされ。ふた子の事前後出生の中にいづれか惣領に立けるぞと御たつねなされしに。古例にて跡より誕生仕るを惣領に立て申ひ。此子細は胎内にて母に取付縁のふかきゆへなり。先に生れは其子が後に乳房もそのあまりを吸がゆへに。五体もすこしは大小御座いとつまびらかに申上る。此祖母が申通り後生れの竹松を惣領と仰せ出されしに。梅松が乳母合点いたしかね母親心ありて名をば梅松とは呼申ひ。是花の兄には極り申ひ。兎角は此身体ふたつに甲乙なく仰せわけられくだし給はゞ。ありがたく存じたてまつるの願ひ言上申。御前には手代が申分至極におぼしめせとも。是の愚知と御ゆるしあそばし。然らば諸事まふたつに分とらすべし。先宗門を御たづねあそばされしに。此家代／＼日蓮宗にてめしつかはれの下／＼までも同じ宗旨のよし申上る。然らば持佛堂をひらき高祖の御影とつてまいれとの御意にまかせ佛を御前にさしあげし時。諸道具を二に分るはじめに。兩人の乳母ともが手に掛て此佛をまふたつに割て。かさねて罷出べしと公事を殘して御歸しあそばされしに。いかにしても後世を頼みし佛をくだく事はと兩人ともに身ぶるひし。町の人のいへる事を一圓開入ざりし女どもおのづからじゆんじゆくして。無用のあらそひを悔み。いづれもを頼み手代が願ひの竹松に家を継せ。梅松は弟に定め歴／＼に仕分る内談を極め。此段御訴詔申あくれば御心入通りなれば。其通りに仰せ付させられ無事相濟けると也。

七 命は九分目の酒

むかし都の寺町通りに。十分盃を和朝にてはじめて工夫の細工人有。唐土の偃師が繰にもおとるまじきものといへり。朝暮此うつは物をつもる毎に大酒におぼれ。是より長病に成て相果し跡に。男子二人十八十五になりぬ。百ヶ日



の精進あかりて後町中立合見るに書置通もなし。金銀諸道具物を改め大かた世間の法に沙汰して。兄に六分弟に四分といひわたし母親の儀兩人として孝をつくし給へといへば。弟いづれものさし圖承引いたさず。家屋敷にかきらず萬事を半分とるべしといふ。それでは兄の甲斐なし迎さまく、愛へども弟聞入らずして既に御前の裁許になりぬ。段々御聞届けあそばされ。町の者がさし圖尤に存する也。其方當分に取べき子細あらば申せと仰せられし時。私事末子ながら惣領なるべき儀は。お恥かしながら是なる母親は。元父のめしつかひの者成しが懐体して兄をよろこびしより。諸親類取持本妻になされて後。わたくしを平産いたされし事まざれなく。然ば末子ながら筋目各別ぞんじたまつり。跡をも継申べき事御座。かやうの儀お武家にも先例の多き御事と申上る。あの者申所も一通りは聞へし也。其屋敷は此母下女の時より持傳へたるか。又近年に求めけるかと御たづねなされし。成程下女の時分よりの家屋敷と町中口を揃へ申上る。然らば弟が願ひの諸色ふたつにして渡し。家の儀は惣領に名跡を継せ。母は此家にて養ひ申せと仰せける。

八 形見の作り小袖

むかし都の町に和漢の織物の商賣して其身利発にて一代の分限式千貫目をたくはへ。家の榮へる世ざかりに此亭主四十二にして相果ける。今年二歳の娘に財寶残らず是をゆずりぬ。此母親三十三にて後家を立髪を切捨うき世を恐るゝ形と成。ひとり子の成人を願ひ後夫を求むる望み絶て佛道に立入。其後家職をやめて諸事親類のさしづにまかせ。金銀は兩替にあづけ置世帯は人づくなして。男女七人めしつかひ何のふそくもなかりき。有時東山の花談義に一家残らず參詣すれば。門の戸外よりしめて留守なしに出てゆき。其暮かたに歸りしに奥座敷に人影見へければ。皆驚き屋敷人よと声に取まはし片隅に追込とらへ見しに。南隣の一子いまだ十七になる角前髪の若者也。出合し町衆

も手首尾わくるく何とぞ沙汰なしにと談合すれば。此男子各別に進て我愛にしのお事後家台点といへば。扱はとおのうたがひかゝりて此儀何とも言葉なし。後家泪を洒してさりとは。毛頭覺へもなき難義を申掛られて口惜。自が子といふても恥かしからず。我不義いたさば世間にしらせず相手有。此事におゐては身を入割にあいても僉議とげずには置まじ。女も女によるべしと一筋に胸を定め。人の異見も更に聞いれずして御前へかけ込。右の段々御訴申せば其男をめされて。後家と蜜通ならば文通の證據を出べし。女の筆跡なきにおゐては盗人の沙汰のかるゝ所なしと仰せられければ。たがひに忍ぶ事に御座。其たびに火中いたし申し申上る。其分にては科をのがれし其外何のしるしもなきかと重て御たづねありし時。男しばし思案して肌着の淺黄小袖に三つ蝶の紋所付しを。恐ながらぬぎかけて御目につけ。是はあの後家の下着にて御座。風の吹夜の別れにきせて歸し。是より外にはさし櫛香包みなどくれられ。かやうの事なるに盗人の沙汰は是非もなき仕合と泪眼になつて申上る。其風俗見させらるゝに衣裳の様子定紋まで替る所なし。あの小袖は後家がとらしたかと仰せられし時。此女房すこのうち物を申さざりしが。世の外聞おもわれ随分つゝみへども。かくあらはるゝは大かたならぬ因果と存。いかにもあの若年者と蜜通仕と申上る。然れば何の子細もなし。後家無用の云分にあまたに難義をかくる曲者なれども。是女心也罷立と御意ありし時。此男首さげ今すこし言上申度御事。後家蜜通と申上らるゝに付。まつたく蜜通にて御座なく。皆わたくしが悪事をたくみ申。此儀はわかげにてよしなきことに親の金銀大分につかひ捨申。此程吟味いたし勘當つかまつられいをやう。一門中訛言にて相濟。それより内證きびしくいたされ。次第に不自由に罷成。隣の有徳なるを兼てぞんじふと出来こゝろにて盗に入。此小袖も手前にて拵へ置自然せんさくの時。身をのがるゝいひわけのためばかりに。是程迄たくみ私悪人に相極り申いと心底ありのまゝに申上る。此段御前にきこしめし分られ。先後家がこゝろざし我身を捨世の聞の恥をかまはず。蜜通にして人の命をたすくる事。都廣けれども又あるまじき女と此慈悲しんをふ



かく感じさせ給ひ。これらは女のかゝみなればすこしも曇らぬ心入。自今はいよく諸親類うしろ見を仕るべし。又男の段は悪事かさなり此たび仕置者なれども。後家がこゝろざしを恥て助かる命を捨。即座に相手の難を申わけいたせし事。若年ものには神妙におぼしめされ、是によつて極命の所御しやめんなしくだされ。京都を御拂ひあそばされけると也。

本朝櫻陰比事 卷 二

目 録

- 一 十夜の半弓 黒谷の森掘出して是二たび死人の良見る事
- 二 兼平の謠過 利に聞き者どもはひとつ松の月にもまよふ事
- 三 佛の夢は五十日 家主の寢所は極樂 鍬に金色の光りさす事
- 四 恨み千万近所の縁付 腰やつて悔しきは小袖箱 女の情は世にある時の事
- 五 俄大工は都の費 鋸引もどされて無分別 うち家斗のあたいに成事
- 六 鯛鮓すゞき釣目安 今時の世間寺昼の衣 夜は長羽織に替る事
- 七 聾も爰は聞所 親のしれぬひとり子 物いわぬいし佛がしらす事
- 八 死人は目前の劔の山 扱もはや桶を取出し 双物はふり袖に包む事
- 九 京に隠れなき女去 家をしらぬ浮世の事 女の利発用に立ぬ事



## 一 十 夜 の 半 弓

むかし都の町に時花念佛。嵯峨の安樂坊とて声細長ふ節を付て。つねとは各別世界の人心後生の昼となりぬ。折ふし十夜なれば僧俗ともに扣鉦あけかたまてひびきわたり。目にも見えぬ極樂を願ひ無用のねんぶつ講をむすび其曉の雲ひかし山に晴て松原通りの門並にみせ戸を明ければ。年の比四十二三の男ひだりの手に淨土珠救をかけながら。胴骨矢の根を通をされ死白見しる人あつて。是は大佛のまへなる煙管屋といふにぞ。いそぎ其許へ人遣はしけるに。女房おどろきかけきたつてなげく事淺からず。夜前は宵に宿を立出因幡やくしのほとりへ念佛講にまいられしが。是はいかなる因果ぞと彼同行衆へゆきて此事を語りけるに。講中のおの／＼皆老人といひ殊更後世の縁をむすばれし人なれば。此男の若死を惜み其人に我／＼が跡の儀を頼しにと。俄にみあかしをあげて香花を取給へば。此人／＼をうたがふ事なく。奉行所に罷出御訴詔を申あげしに。様／＼御僉議あそばされ日比心掛りなる者はなきかと御たづねありし時。女房思ひ付以前別して念比なるかた二人御座ぬが。此四五年不間に罷成り人の名をさしける。其二人御前にめし出され此參會仕らぬ子細をきかせられしに。一人は鞠の友にて互ひに藝をはげみ。あいもおとらぬ程につかふまつるうちに。私はお家に立入。紫腰を御免くされしを。彼男是をそねみ其後鞠を蹴とまりおのづから出合も絶いと申あぐる。又一人は六条の遊女町にて花月と申女郎を二人してこれを買論つかまつり申ぬが。當座の事にてすこしも意根にそんぜず年月罷過ぬ。今にその女勤めいたし罷有ぬ。是を召寄られ御聞あそばされくださるべしと申あぐる。此兩人命を取べき程の事にもあらずときこしめしわけさせられ。彼男と語りあいし中なればかゝる身の果を我／＼も外のやうにはおもふまじ兼てのよしみに吊ひ料として銀幣賞めづ。女房に合力仕れと仰せ出されける時。一人はお請申又一人は罷成よし申あぐる。其子細を御たづねなされしに。私は内証かつ／＼にて手前の暮しさへ迷惑仕るのよし言上申。

今一人は早瀬合力仕るべきと申所を御うたがひあつて。此儀御せんさくありしに私は身体よろしく。銀幣を渡世に仕る事町内浴中にも隠れ御座なく。銀一貫目など香奠に仕りてもくるしからぬ御事。御意なればお請申せしと申あぐる。兩方の云分段／＼道理至極にきこしめしわけさせられ。別条なく相濟是等は宿に歸りぬ。其後女房に仰せわたされしは此上に何とも僉議なりがたし。兎角は時節の最後とあきらめ。死骸は鳥部野におくり夫の敵は其矢なれば死人とひとつの壺に入れて埋むべし。後家は子もなき者ならば百ヶ日過て勝手次第に後夫を求むべしと仰せつけられ。いづれも御前を罷立其通りに其年もすぎぬ。明る春になつて世間も閑き夜中過に。彼男射ころされし松原通りの其町に女の声せはしく人の門／＼を打起し。やれ物取よかなしや出合／＼といふにおどろき。手毎に棒乳切木をひらめかして立出る中に。半弓取持いかつがましくかけ出る者ありしを軒陰より隠し役人とりまき此男に繩をかけ。子細は奉行所へまいれと引られ町中残らずあいつめける。時に仰せ出されしは夜前の女は去年汝等が町にてころされし男の妻なるが。存する思案あつてわざと是より夜中にはつかはしける。然る所におのれ町人に似合ざる飛道具持出る事ゆへなし。此いひわけありやと仰せ出されしに。此男すこしもどうてんいたさず此半弓は親代より家にあるにまかせ。枕もとちかく掛置申す所に盗人よといふ声寝耳に入。何の心も御座なく持出ぬと申あぐる。申せばさもあるべし然らば最前の矢に此矢をくらべ見るべしとの御意まかせ。土葬の壺を掘出し見あはせけるに。右の矢に違ふ所なし。いかなる意根あつてかくはころしけるぞと御たづねありし時。此男のがるべき所なく。私近年弓のけいこを仕り。當りこまかに罷成狐猫などを射留申す事たび／＼にて御座ぬ。是によつて人間を射て見申度出来にて。何の事もなく夜更て通り申す者を幸ひに射かけ申すと段々はじめを申あぐる。町人無用の武道具を持あつかい然も人の一命を斷事。廣き都に又あるまじき曲者と御沙汰極まりて。其弓矢を高札にかけて御仕置にあいけると也。



二 兼平の諷過

むかし都の町に沙汰しけるは。勝公事になるべきを無用の言葉質をとられて。即座に眞に成ける。江劔志賀の浦ひとつ松の陰にちいさき宮の立せ給ふ是山王の末社とて。古代より叡山のさばきなりしが。近年は祭の外に參詣ありて。散錢箱の重きより人皆欲にまよふ世の中。滋賀の里人内談して所にありける神社を。比叡法師の自由にいたさせるゆへなし。自今は此里の物になすべしと俄に虎落を頼み。此事京都の奉行所の御判定となりぬ。何とて先年より叡山持の宮所を。今度改めての申分其子細はと仰られし時。里人に口かしくき者罷出。世々の本哥にも志賀から崎のひとつ松とこそ讀殘されしに。叡山のひとつ松といふ事傳へも聞ず。此松陰にいわるはじめし社なれば志賀唐崎の宮居に極り申いと言上。是も一通り聞えて諸法師のかたには古例の正しきをもつて。此返答を申うちに里人の何がしなをなを進みて。其外兼平の諷にもさゝ浪や志賀からさきのひとつ松とうたいと申あぐる時。當話のよき法師罷出。あの者は隠れもなき音曲の藝者に御座。只今の諷のすゑを是非に御所望あそばされくだされいと申あぐる。御奉行はやくも御合点あそばされ小鞍をめされ。爰はそれがしが一挺鞍にて此公事を聞べし。今の先をうたへとの御意いやがならずして。御白洲にかしこまり小細浪や志賀からさきの一つ松七社の神輿の御幸の梢なるべしとうたへば。鞍をうち捨てせられ。然らば山王の影向の松なりと同じうたひにて叡山の勝に成。山法師声を揃へて今の諷の拍子いやくと御前を警て立ける。

三 佛の夢は五十日

むかし都の町に不思議の夢を見し人有。世わたりは時計の細工人此鐘の音に浮世の眠りをさまし。明暮後の世を一大事と願へば。異名を懸て迦右衛門といへり。自然と細頭にて其形殊勝なり。年ひさしく烏丸の下に借宅して住ぬ。其家主は一向宗にて隠れもなき精進嫌ひ。霜月廿八日もかまはず杉櫓のまはり振舞して町衆四五人參會の折ふし借屋の釈迦右衛門腰をかゝめ。わたくしめいよの夢を夜前まで五十日つゞけて見えさせ給ふ。御つげありとさながら夢とおもはれず。御長九寸はかりの金佛。こなたの御寐間の下なる土中に埋れます。是弘法大師の御作なるか。我等が枕もとに金色のひかりをさし給ひ。汝ぶつゑんのかき物なれば後世のために掘出すべし。然らば衆生すくひ諸の難病を助けんの御事。是万人の慈悲なり。番匠人足の入用は此方より仕るべし。今日掘せてたまはれと申せば。此家主佛とも法ともまきまへなく。手を拍て笑ひ世の中の夢といふ物がある事ならば。其夢を判金千枚ばかりにして掘たき物といふ。此座に分別良なる人ありて。是をきながら其まゝ置事心よろしからず。あのかたより入目をせらるゝならば掘せても見給へといふ。時に亭主も同心して俄に諸道具を取なをし。板敷をうちはずし鋤鎌をならし。其日の暮かたまで五尺たらず掘ぬれども。佛らしき物は見えずして口欠の茶壺又は消炭螺がらより外は何もなかりき。興覺て元のごとくに埋ける。はじめからかくあるべき事成と。亭主は腹立借屋の者は何とも言葉なくて歸りぬ。又明の日家主へいひけるは夜前又正しくまほろしにおかまれさせ給ひ。今二三寸下の辰巳角にありけるを。今すこの事に出現せざるは念なし。是非に掘出せとの御願ひなれば。逆もの事に御掘せ給はれとのぞみ。今一たびほりて見しに。御つげにたがはず佛像あらはれ給へば。各々有難拜し先水にそゝぎて見しに底びかりのして。いかさまにも古佛と見へさせ給へば。家主欲心発りて此本尊我等が物といふ。借屋の者は此事合点せず万事入用を此方から拂ひぬる上はわたくしの佛といふ。いかにも掘たき大願なれば其段は此方も同心也。然れども仏を其方の物する約束はいたさずと云分つにつて。既に御前の沙汰に成はじめは聞せられ。其佛に兩人の封判をいたさせ三日預り給ひ。洛中の佛具師をめしよせられ。此金佛年救何程か埋もれし物ぞと御たづねあそばされしに。いづれも吟味の上に申あぐるは。



およそ五七年も土中にありし物と申上る。其後彼者どもをめされて其町の者に仰せられしは。此家普請は何程になるやと御たづねありしに。四十年余に罷成ひよしを申上る。時に釈迦右衛門をめされおのれ世間へは後生願ひと見せかけ。心中は浅ましき曲者なり。此事兼てたくみ前日堀時本尊を埋み置。明の日それをあらはし京都の風聞いたさせ。いづれの僧賣とか馴合て。散銭取込べき仕掛うたがひなし。ありのままに白狀申べし此時偽るにおゐては。さま／＼兪議の仕やう有と仰出されし時。釈迦右衛門驚き貧より悪事をたくみ申よし心底残さず申上る。おのれ世の費男殊に佛の眼をぬく事彼是もつて悪人なり。急度仕置に申付べき者なれども。いまだ外の者をたぶらかさざれば。命は助置也此過意に其佛を鐵の柄につけてかたげさせ。右の次第を札にしるし洛中三日が間まはらせて。後生盗人の良を諸人に見しらせ。其後京都を追拂ふべし。又家主の儀は無用のあらそひ仕る事悪人ちかし。是によつて袴かたきぬを着し高札を持って。釈迦右衛門同事にまはるべきと仰せ付られけると也。

#### 四 恨み千萬近所へ縁付

むかし都の町に鹿子屋女の名取大宮の小林とてさながら六条の太夫めきて。出立姿に戀れ泣をさせけるが。此女情心ははなれて欲に目の見えぬ浪人を男に持ける。子細は此人其以前歴／＼にて一生の暮し程はたくはへあつて。樂しみを京住ひと思ひ定めて東寺の片陰に借座敷。心まかせに月日をかさねしうちに。有人の物語りに彼女のうるはしき事を傳へ聞て。金銀にてなる事ならばと頼みしに小林合点して夫婦の契をなしぬ。五三年は萬あるにまかせて。美食衣裳をかさりしが。此女日夜の奢ゆへ程なく内證うすくなつて。目の浅ましき男につらく當りて。暇とるべきしかけの折ふし。近所に若ざかりの浪人の友ありけるが。然も手前よろしく暮しける。女此男に心を移し忍び／＼縁の約束して。其後は作病発して暇の状をさそくして。代筆に書せて其身を自由にしていまだ十日も立ぬうちに。彼男のか

たへ仲人なしに行て世間をはよかる事もなし。外の見てさへ此女を悪めば憎てやはじめの男の身にしては堪忍のならぬ所。うちはたす程にも思ひ立しが暇やりての事なれば。死後にも世の沙汰に成ゆく事を口惜く其成けりに濟しぬ。是さへ無念の折から有夜門の戸に張紙して。此浪人此町におかるゝにおゐてはいつによらず町中を切立。一人も命の種あるべからずと書しるせり。時に此浪人申せしは我事は身にかゝる事難義もくるしからず。いかなる意根とも覺へは御座なくいへども。各／＼に氣づかひかくるも迷惑なれば兎角は爰を立のけば濟事といふ。いづれも此浪人をあはれみ。此儀は沙汰なしに談合して今までの通りに。そのまゝ所に居るゝやりに申渡せば。御心入の段は身にあまつてかたじけなし。然れとも侍ひの心にかゝる事此まゝには置れじ。何とぞ町中に別条なきやうにとそんじ。右の段／＼御前へ申あげしに。其方向にてもおもひあたる者はなきかと御たづねのありし時。外には心かゞりも御座なくい。わたくし此程までの妻女兼てはぞんじもよらざる病氣と申出し。俄にいとまを乞かゝり申ひ是までの縁とそんじ願ひの通りにとらせ申ひ處に。それより九日目に近所へ縁に付申ひ。此男右より別してかたり申ひが。其後はまいりかね申ひ。是より外は何にても御座なくい段申上る。様子きこしめされ其夫婦めしよせられ。此儀は蜜通に極まる女は大悪人也。又男も日比語りあいし中。此たびの縁組たとへ子細なくとも世の義理おもはと取結ましき道也。男の手に罷ある時よりなれあひたるにはまぎれなし。ありのまゝ申さぬにおゐては拷問と女に仰せ出されし時。これなる人に狀文付られかく罷成ひと申上る。おのれ世の仕置ものなれども一たん暇の狀を取ての上なれば命はゆるして女は鼻をそぎ男は鬚を拂ひ。京都に置まじと仰せ付させられ。其後此浪人をちかふめされ。此たびの張紙はせんぎの種に其方が立しと見へたり。かふならてはならぬ處と御ほうび有難く。御見通しの御眼力を感じけると也。

#### 五 俄大工は都の費



むかし都の町を清水の西門より見れば。民家たちつづきてはてもなく。諸木茂りて三階蔵の白壁夕日移ろひ。皆内證はともあれ蔵は長者の花といへり。次第に下京までもはんじやうして。野末も今は人家かと成ぬ。其比七条通りに米商賣して萬事に手廣く。近年に分限其町のひとり也。面屋は以前のまゝにして裏に屋敷を何程か建出し。後には明地もなく隣町の堺目に。火用心のために三間に五間の二階蔵を普請して。窓にはあかかねの火蓋針かねの網を張軒に金樋までも掛て物の見事に仕舞しに。隣町の家主より急度使を立けるは。此方の地のうちへ藏式尺四五寸も出過いやうに相見へい。自由御普請と付届に驚き。町並と見合ば三尺ばかりたて出すにまきれなし。いづれも寄合沙汰するに今の亭主が横道にはあらず。是親仁の欲心と死れし人をそしりぬ其比までは此あたりの裏は野島にして堺目の吟味もな。生垣を人の地迄仕出されし也。此たび改めずして藏をたつる事町中までも越度成と。隣町おのゝを頼み託言いたしけるは。あの藏しゆりの時分に罷り成ば改め引込すべし。其内地入用の儀出来れば何時によらず相渡させ申べし。こなたにも當分は島にいたし置るゝ事なれば。一年に銀五拾目づゝ地賃出させ申べしとさまゝ。愛ひけれども。中々堪忍いたさず永々地の盗人此たび世の見せしめになすべしと。有徳なる身体を見かけ大分金銀取べき覺悟にてむつかしくかゝれば。いよゝ難義に思ひ銀式貫目に色々詫でも聞されば。是非なくうち捨置しに云かゝりてやめがたく。右の段々繪圖につくりて御前へ申上れば。兩方めし出され作事仕るかたを曲者と仰され。仕置にも申付べき者なれども。親が仕業用ひ何心もなく。普請仕るよし。先町人の不念も有。たとへ地尻田島にても其屋敷ばかり町並はづれて出べき子細なし。今日の中に高繩引て其藏を切入べし。相手の申所道理成ほこりの儀は是非なし。あの者がつくりものすこしもそこねざるやうに仕つれと仰付られ。俄に大工日用を救百人やと二時斗にうちこぼち軒端を世間よりうちばに切入。さりとは物哀れに亭主が借むべき心底思ひやられ。是を見る人泪を洒し堪忍せざる相手をふかく悪みぬ。其後藏引こましたる段々御前へ申上れば。此たび萬事入用を勘定を仕立まいれとの仰せ。帳面づく

つて銀高八百七十四匁式分と申上る。時に此入目只今請取藏切たる者に相渡すべし御意。さしあたつて迷藏仕る段申あくれば。おのれ都の費といふ悪人也子細は此ふしん地筑石垣の時も見えわたる事を。から木だて時はいはずして。屋敷を齊上ぬりまでもしませ。間もなく是をこぼたす事まだあるまじき曲者なり。手前に銀子用意なくば家屋敷買拂へと仰せ出され。其日入札にして巻貫式百目に賣立。此内八百七拾四匁式分相渡し。残る三百余も町内の借銀に引とられ。やうく残る銀七匁三分救四つ女房が珠救袋に入て。ひさしくすみなれし町内を立のきけると也。

六 鯛鮓すゝき釣目安

むかし都の町を春は櫻鯛秋は紅葉鯛とて。魚賣の利発者にしきの棚に住けるが。近年の賣掛かさなり身体つゞかざる事を迷惑して。釣目安を調へて銀高ばかり書付。相手の名もなく三十八所として。御番所の御門に張付置しに。役人衆是をとつて御前へ此段申上れば。表書之通相違なきにおひては相濟し申さるべしと御裏判出され。又門柱に張付おかれしに。則其夜に取てかへり。それより十日斗過てから御威光をもつて。賣掛残らず請取ありかたく存じたてまつりいと添書して御判を返進申あげける。諸役人は是を不思議にぞんじられ。御機嫌の時分御たづね申上れば。此目安は寺々への賣掛なり今時の世間寺皆醒さ坊主と御笑ひあそばされけると也。

七 聾も爰は聞所

むかし都の町はづれ北野の片陰に。質酒兩見せの商賣して俄分限の者有。家榮ゆるにしたがひめしつかひもあまた有中に。物縫に置し女風俗花車にそたちしが。いつの比よりか青梅を好み次第に懐体うたがひなし。内儀吟味仕出して男はいかなるぞと。さまゝに問給へども色深く隠して申さぬ事を悪み。兎角家の不作法者連。其まゝ暇出して親の



許へ歸されける。それより半年あまりも過て此亭主。目まい心になつてうちふしけるを。皆く声立て呼どはや息絶てせんなし。いまだ一子もなく跡に残れ内儀別してなけきふかし。然も此人は生國出羽の人にて京には親類もなかりき。やうく女房衆の一門集りて野邊に送る用意する時。彼物縫の女乳呑子を抱てはしりきたり。此あと取は此男なり且那の御手掛られて。平産せし事まぎれなし。此首尾手代かしろの何がしもよく存じられしと。無常の中もいはずわめく時。手代罷出て此方はゆめにもしらぬ事と申せば。此程も且那殿より此子の養ひ銀を持てまいらぬかといふ。我等は其方が親許さへしらすといへば。此女手代にしがみ付いかに東西わきまへなき子なれども。おのれが親かた筋なるに内證しりながら今又しらぬとは。天のとがめもあるべし眼色替て泣かれば。白衣はぬげて烏帽子は落てそうれい出立の男をつがみさがし。死人押へて難儀なげきの中の訴詔事。右の段く御前へ申あげしに。手代をめされあの悴子は主人が子にてあるか偽りなく申せと御僉議の時。且那の儀ながら内證の事はぞんぜずい。あの女の親許藤の森へ親かた申付られ。毎月晦日に銀子五十目程づゝ持てまいりゆより外の子細はぞんじたてまづらずいと申上る。何の儀もなく毎月銀子遣はすゆへなし。本妻せんさくの時主人の儀なれば名を隠して。我ばかりの科成て里に歸るといふも一通り聞へたり。是は死人が子にして其名跡を継せ。それが母は乳母分になつ我子ながら主あしらいして是を守そだつべし。後家は其子が母になつて勝手次第にすゑく樂隠居仕るべし。金銀財寶は一門町中として毎年勘定聞とらせ。手代に商賣の儀相さばかせ十五歳に罷成時。是を相わたすべし萬事は後家が心まかせに仕るべし。其日あのせがれに付うたかはしき親など相するゝにおゐては。何時にても後家申出べしそぎ死人を取をけと仰付させられ。其子跡取の礼儀にして野邊のおくりを仕舞ける。つれあいの別れかなしき中にも後家は下女が子の事うたがひけるは。年月ふたりが中に子のなき事をなげぎ。夫婦合点づくにて幾人か色よき妾女をおかれしに。これらにもつゝるに願ひの咄はざりし。幸がかく有事を隠し給ふゆへなしと。是よりいよく心とけずしていつとなく作り置になつて。

浮世を隙になして佛棚の勤めばかりに月日をかさね。隙分人の氣のつかざるやうにしかけて。程なく其年も暮て明れば春の彼岸にあたり。なき人の祥月連一家残らず且那寺へまいり。香花を手向石塔に立寄。皆く拜したてまつる時後家はひとしほむかしを思ひ出で。袖行水はしばしひがたく彼子が手をとりにて。我阿爺さまは此石にならせ給ふ也。よくく水まいらせよとありし時。子が母親心おかしく本のとさまは鼻の先に立嶋の羽織着て。いまだ此世に達者で御座るに。かな聲に何をいふぞといへと手代と良を見あはせける。後家は是を聞すまして宿に歸り。明の日はやく御前へ罷出私財寶にさらく望み御座なくいへども。筋なき者を屋継に仕ひ事草葉のかけなるつれあいの所存。かれこれ口惜くぞんじたてまつる段く申あぐれば。悴子が母手代をめして既に裁許になつて。それなる女何とて手代を其親とは申けるぞ。今日石塔の前にて慥に聞届けての申分と御たづねなされし時。手代も女も口を揃へ是は何をか聞れて跡形もなきいつはりを申あげられい。是は一門中の内談にてわたくしに難儀申かけ。親類より跡継を立金銀自由いたすべき願ひとぞんじられい。其子細は後家事去年四五月の比よりふつうに耳聞へず。幾薬かあたへ因幡と鮪薬師へ土器の千枚も掛奉つる甲斐もなく。諸事筆談申事家内町中にも其隠れ御座なくい。耳が俄に聞えいか御僉議と申上る。時に後家打笑ひいかにしても兩人が心底合点まいらず。よしなき罪をつくり置仕ると去年よりの事どもひとつく申あぐれば。手代も女も赤面してとかふの返答もなかり。いよく手代が悴子にまぎれなき御せんぎとけられ。二人ともに御仕置に仰出されし時。後家夫のきやうやうに命の義は願ひたてまつる。手代が儀は御免ならず女は御助くだされ。五条の橋にてかしらに摺鉢を被かせ。兩の手に火吹竹しやくしを持せ下女にまぎれなき形をいたさせ。主人筋なき事を申掛し科人三日瀑れし。其悴子は女の親にくだされすゑく出家になすべしと仰せわたされけると也。

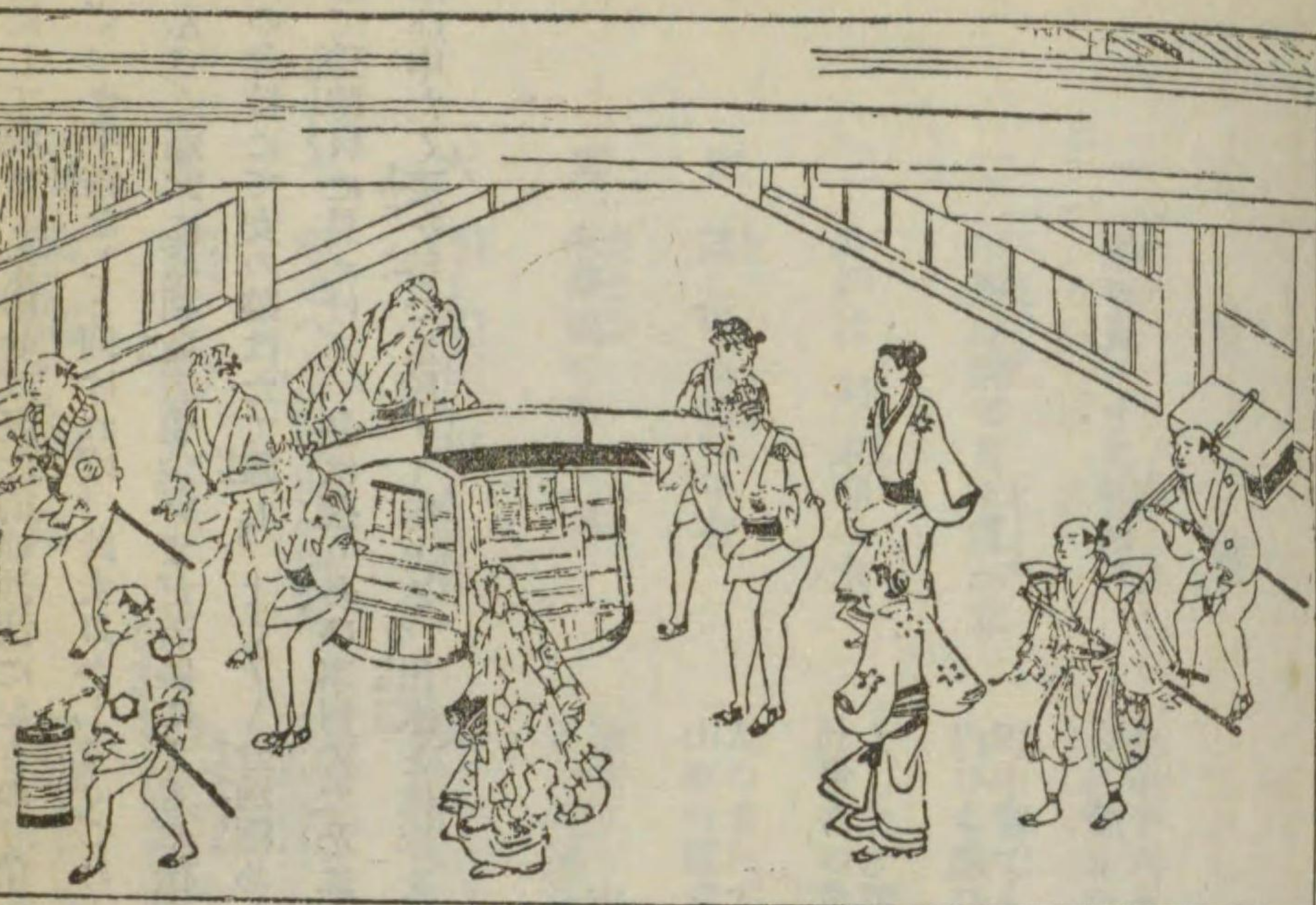
八 死人は目前の劔の山



むかし都の町に其身一代後世の事をわすれ。金銀の溜るをよろこび家業へる時。此人欲心より銀子借たる人に無理を申掛しに。相手もみぢかき者にてひとつふたつ云分の上に切ふせ我も即座に相果ける日比の心入をしかりて天命のつきとて。沐浴するまでもなく其形のまゝ棺桶に取置。千本の三つ鐘を聞ば心ほそく煙になして歸りぬ。其子は親と各別佛の道を願ひ殊更此たひの別れ浮世と思ひ定め。すゑくは出家にもなりぬべき心ざし。此母親は當座に髪おろし毎日香花をとつてなげきに沈み四十九日にあたる時。三十ばかりの旅僧きたつて其家名をたづね。ひそかに内に入越中の立山より物をこずてられしと。死人の事をありくと語り此脇指をしるべに我を吊ふべし。年月たくはへし金銀後の世のさはりとなれば。残らず是をほどこすべし今のかなしさ以前の欲心後悔也。何とぞ佛縁の願ひ成とさまぐ哀れなる物語りに。いづれも魂消るばかりの思ひをなし。兎角御出家さまを爰に引留都の巷を取立。なき人のために万日を申べし死人願ひのごとく金銀此たび残さじと。親子の人思ひ定め旅僧色く頼めば。爰にとまるとる事大かたに入ておくりし物二たび歸るは不思議なり。是を此まゝは置れしと此段御前へ申あくれは御聞とけあそばされ。亭主相果し後下人下女によらず暇とらせし者はなきかと御たづねあそばしける。三十五日過て幸ひ世間の出替り時に罷成。勝手も人すくなく仕るべき覺悟。六尺老人腰元づかひの女老人隙を出し申ひ。六尺は奉公をとまり則同町借宅仕り罷有り。又下女は親里澁谷の者にて是へ歸しいと申上れば。町の者に仰せ付られ其坊主大かた此女の許にあるべし。是よりすぐに立越吟味いたせと仰ければあんないしる人をさき立其宿にゆけば。くだんの法師衣ぬぎ捨て近江鮎の焼つかざる時盗隠し其後あつた坊主となれあひ。妻子がなげよくくはたくみて金銀大分取べき心根。主人に悪名をあたへる曲者と御金取あそばすにすこしもたがはず。二人ともに御仕置にあいけると也。

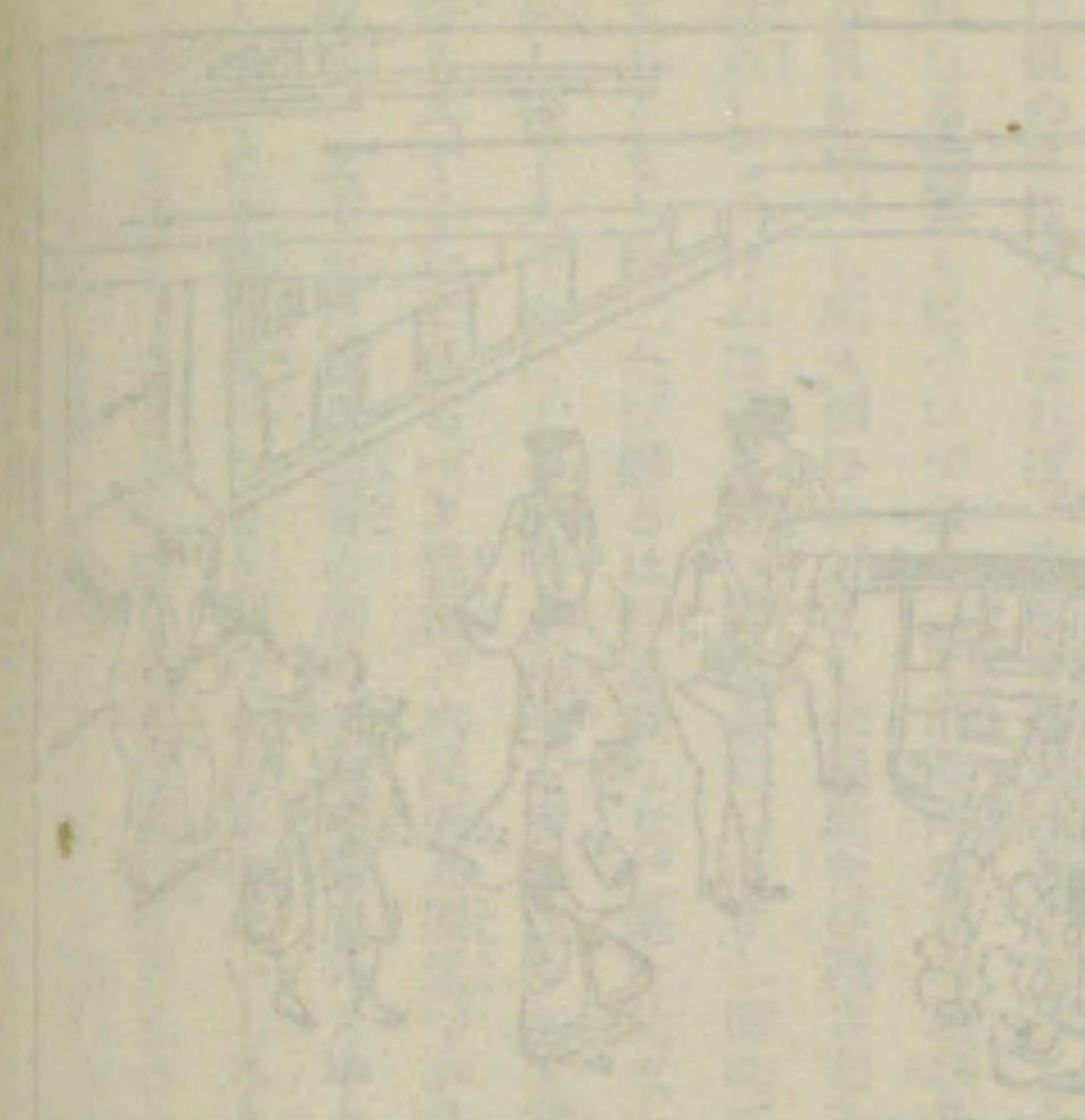
九 京に隠れもなき女房去

むかし都の町小川通りに車うち連名とりの糸屋有。此見せは女をひとつはかざりなれば姿の花車を好む中に。此ある別して色ふかく一代に女房さる事二十八人までは。世間の人も救へて笑ひ是程悪敷事も後はいひやみて。なを又十日も尻をためず追出と京の廣きゆへ此男をしらず。姪入して来る女はつきせざりき。されども淫酒のふたつにせめ付られ。あたらし身を無分別に持つて此事をなをやめず。一夜のうちに去荷出せばおくり荷はこび後には仲人なしに祝義を濟しぬ。是もつくる時節あつて次第に身いらのごとく成。つゝに眠れるやうに命おはりぬ。此時の女房は宵に縁組して明の日後家なりぬ。此死人に一子もなく弟にかしこからぬ者同じ家に有けるが。町中是にふびんを掛後家とひとつにして跡を継する内談せしに。後家が虎落者にて中く人のさし圖を合点せず。財寶すこし分て追出す思案して。萬事は後家にゆづるなり我衰期の時にかくなるこそ縁ふかきといふものなれと。くれくれの云置と死人を證





據にして我まゝを申せば既に御前沙汰になりぬ。弟に家を継せ後家には相應の心付しておくべし。何か後家の家をつぐべき子細なしと仰ければ。此女口かしこくごけとは後の家と書申ひへばしるましき物にも御座いと申上る。文字せんさく迄女には利発者也。いまだ若盛にもはや後家立かね申べきと其方が身のために。又縁付の心得を申事ぞ大かたの身持にて女の跡はたて難し。よくよく分別極めかさねて出べしと仰わたされ。又裁許に出し時後家は黒染の衣を着て殊勝負に見えける。是は残り多ひ事何のためにかくは成けるぞ。後夫求める覺悟に御座なく。つれあいのぼだい吊ひ申たく姿を替たる段々申上る。出家とは家を出ると書ば其家を追出せと仰せけると也。



本朝櫻陰比事 卷三

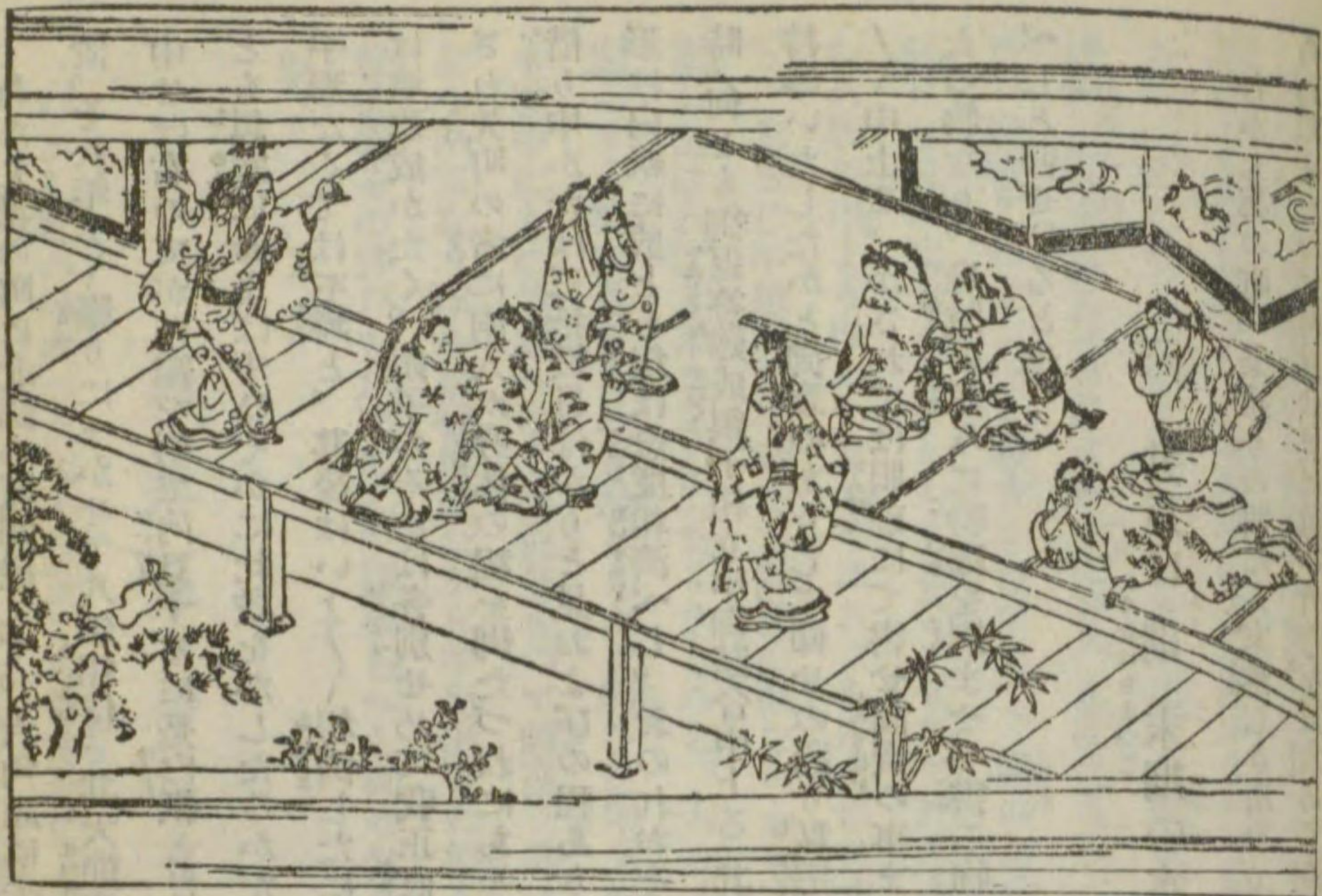
目錄

- 一 惡事見へすく揃帷子  
女中十六人同じ枕の夢身に覺あれば目のあはぬ事
- 二 手形は消ても正直が立  
町中寄ても濟ぬ貞付白ひも黒ひも埒の明事
- 三 井戸は則末期の水  
よしなき罪をつくり鬼此世あの世の堺目見る事
- 四 落し手有拾ひ手有  
たのまれて無分別もの山家の道者貞をする事
- 五 念佛賣てかねの声  
嫌はるゝ中のひとり住ひ思ひ入後生大事といふ事
- 六 待ば算用も相よる中  
縁つきは身過づくぞかし男吟味はざりとは無用の事
- 七 銀遣へとは各別の書置  
見通しの親仁がしよぞん若ひ時はとおもひやり事
- 八 壺堀て欲の入物  
あいやい井戸は水汲ため金はわかぬに極まれる事
- 九 妻に泣する梢の鶯  
天理をしらぬいたつら女浪人してもむがしの残る事



一 悪事見へすく揃へ帷子

むかし都の町に身体かろき者生れ付能娘を持ば。諸事風流にそだて姿盛になる時。大名がたの國女藤につかはしまは高家のみや遣ひをいたさせける。爰に姉が小路の針屋のひとり子にならびもなき美女あつて。さる御かたへ御奉公に出るより月にも花にも詠めかへさせ給ひ。名を鶯とめされて初春の色深く御氣に入事大かたならず。世間のおもわくもかへり見たまはず。御前様と言葉をなさせ女は氏なふて乗物。其後は此面影を見る事も成難し。有時夕御膳居まいらせて。あまた通ひ女痕下を驚かし行につねよりは心よくめしあげられて後。にわかには御胸先いたみて御眼色うとく惣身むらさき立て。御手あしすくみ息も絶へに湯水半も通りかね。露といふ命其まよしほめる朝良のごとく。是はと惜み泣に女中取亂して。醫師にはじめを語りけるに。何をかあがりけるぞ喰あはせにはうたがひなし。先氣付あたへしに更に其甲斐なく。二時あまりなやませ給ひ。うき世のかぎりとなり給へば主人の御なげき淺からず。死骸かたつけ置て。食物の御吟味ありしに不斷の湯取めし。汁は鱸の白煮鱈にきすご。燒物に一夜塩の鯛ねりみそに竹輪の蒲鉾。五香木のしたし物扱は當座漬の香の物。此分にさし合はなかり。いづれ不思議とひとつ改められしに。みその色の薄青き事を心もとなく。手飼の猫にこれをあたへさせて見させらるゝに。しはじのうちに狂ひ出四足立すくみて死にける。扱は毒藥の入にまきれなしと。臺所を御兪議あつての後うたかはしきは女房とも。思案めぐらし給へどもいづれをさして沙汰も成難く。発明なる御かたに此せんさくを御頼みあそばされしに。皆く女中の儀なればきびしくもならず。殊更罪なき者を難儀にあはせる事もいかとなり。爰は外のいたまざる事に悪人あらはるゝ分別ありと。俄に箱のかたびらを女教程こしらへて。ひとり／＼に是をきせ以上十六人同じ座敷追込。此たびの科人此内にあれば明日残らず拷問すると申渡し。ともし火漕て戸には外より錠をおろし。折ふし夏の夜の吳竹まどより飛



入敷の声。身をささるゝくくらしみ拂ふへき圍もなく。かなしげなる声して是はいかなる因果ぞと泣も有。題目となへ観音經よむも有。ふる里の事ともいひ出してなげくも有。浮をかまはず小哥哥とふもあれば。化物のまねして人を懼此なかにも大膽なる女房も有。世の人心程さまざまに替れる物はなし。既に夜も明て兪議の役人立合て。つぼねかしらの柳にたづねて年かさより女中の女を呼出しにして姿を見るに。いづれも寝みたれ髪けうとき中に。縮帷子にすこしも皺のよらざる女一人有。それぞとらへておそろしき御せんぎあれば。女心のあさましくつる白狀して。是は此以前御家におりし御妾女いかなるそねみや此事を頼まれ。人の御命を取ける段く申上れば極めて此同類御仕置にあそばされ其後女の曲事しれたる子細御たづねあそばされけるに。身に覺なきはおのづから樂麻仕り衣裳付自墮落になりぬ。又おのれが身に氣遣ひあるがゆへ夜もすがら心やすからず。すこしも寐ざればすぐれて老人帷子に皺のよらざるを吟味の種に仕いと申あげられけるとなり。

二 手形は消て正直か立



むかし都の町に北國の買問屋して。六角通に手前よろしき有。親代より念比せしかたへ銀子五貫目借て預り手形取置、それ年々斷りにまかせて八年相侍。其大節季に入用とて人遣はしけるに。手形もたせて御越あるべし銀子返進と申せば右のてがた箱を明て内見するに是白紙となつて不思議晴がたし。あまたの證文吟味いたせしに外の別条なし。何とも思案におよばすひそかに此段をかしたるかたへ申せしに。いづれ其銀子は濟したやうに覺へたり。何分にしても手形なくては不埒と。其後はいよ／＼相濟したに極めて結句かしかたの人悪敷沙汰せられて。世上に外聞うしない爰は堪忍成かた。銀子のそんは各別せめて我正直を世にしらせたま願ひ。ありのまゝに書付申あぐれば。兩方めし出され先町の者に兩人が身体の程を御たづねにあそはしける。財寶かけて八百貫目とさして相違御座なく申上る。又借り申かたは三拾貫目ばかりと見およびの程ありていに申あぐる。然れば此銀子は借つたにはまぎれなし。たとへ手形は白紙に成とも銀は急度相濟べし。おのれおそろしき所存世の仕置者なれども相わたせば子細なしと仰せ出されし時。何とも御返答難成銀子相立申御請合申上る。其後借かたの者をちかふめされ定めて此手形はあのが者が宿より書調へ持参いたしたかと御意のありしに仰せの通り私宅よりしたゞめまいり申ひ。印判は見覺へ別条なく存じ請取置段／＼申上る。かさねては眼前にて書せ商賣の事まで念を入べし。都にもあのごとく成悪人有此たびの手形は兼て拵へたる物なり。烏賊の黒みに粉糊を摺ませて書る物は。三年過れば白紙になるといふ事本草に見へたり。正しく是なるべしと仰せけると也。

三 井戸は 則 末期の水

むかし都の町一条通りの西に人家淋しき所有。老て世をわたり兼たる夫婦。子も持さればゆく末物かなしく。今もしらぬ年になつて毎日伏見に通ひ竹籠を買求めて浴中買まはりてけふを暮しけるが。是も次第にあしよは車の身をうし

と思ひしに。世は案じまじき事なり此住所のうらに年ひさしき埋れ井ありしが。隙は岩層葉といへる草のしげり。筑山好める人是を所望して其次手に。浮藻かきのけ年／＼の泥をあぐれば。俄に水涌あがりきよげに冷こく夏をしのぐためには是ぞと。京中より聞ふれ抜に遣はし祖父が清水といひならはし。後には水代にて世を樂／＼とわたりける。其西隣の家主是を見あはせ水筋に井戸を掘けるに。是又清水涌出れば泉前井は水絶て。老人夫婦の渡世のさはりとなつて。明暮これをなげく事大かたならず。隣のあるじをうらみしに何とすべきやうもなく日をかさねけるに。隣の水を錢になせばなを／＼やしんに思ひ。せめて此水人の抜ぬやうになすべしと悪心発りて。赤熊をかづき鬼のおもてを當むら竹の中よりほのかにあらはれ。あけぼのに水抜人におどしかくれば。是を見し人語り傳へてその後は水買人絶たり。あるじ不思議して定めて狐狸の業ならんと。親類をかたらひ物陰に立かくれやうすを見とゞけしに。くだんの面影又出ればとかふなしにたゞきころし。おの／＼てがら達にて夜明て是を見るに。正しく隣の親仁にて後悔すれと歸らず。妻は是をなげき敵とりたき願ひを申上れば。段々御聞届けあそばされ。是はつねに替りたる形をして。然も夜中に人の屋敷へゆく事彼是もつて越度。是はころされそんたるべし。一方の家主も世間をおはぬ大欲人。老たる者のかてをうぼふ事我屋敷ながら手を出さぬ盗人は也。老人水ゆへ命をとられければ其者の墓所を。隣屋敷のうちに筑込則その井戸を水向にして跡弔らへと仰せ付られ。御意の通りに死人を取置ぬればおのづから此井戸も捨りけると也。

四 落とし手有拾ひ手有

むかし都の町はづれより賀茂川の岸傳ひに。北山へ歸る老人有。折ふし十二月廿八日の夕暮。世間は春の事ども取いそぎ心せはしきけふも。御堂下向の道芝に紙包見えけるを拾ひあぐれば。小判三兩と書付有いかなる人の節季をしま



ふ心當にもやと。跡先見しに往來もなく。はるか松陰に柴賣と見へし人の立休むに追付そなたは是を落し給はぬかといへば。いかにも我等おとしたれども其方の手に入からはそなたの物といふ。是は近比めいわくなる申され分なり。たとへ此ぬしのなき迎取ては歸ららじ。まして主ある金子をとりて歸るへきかと。其者に渡せばひろひし者に歸しぬ。なげやればほほりつけしばらく此論やむ事なし。後には黒木賣牛つかひ立とどまりて。今の世の中にはためしなき事ぞと兩人の心ざしを感じける。いよ／＼互ひに道を立此小判おさまり所なく。兎角此論下にて濟難く兩人御前へ罷出右の段／＼申あくれば。當番の役人衆聞給ひて前代になき事は都の今聖人なるべしと。此段御取次申あげらるゝ折ふし御前には御氣色悪敷。前後に京中の醫者衆相つめられける。時に御名代の家老職をめされ。智恵ためしに此さばきを仰せ付られしに。爰を大事と思案して其拾ひし三兩の小判を出させ。御前の小判三兩合て六兩を取ませ三所に置て。先おとしたる者に式兩渡して卷兩のそん也。又ひろふたる者式兩とれば是も卷兩のそん也。御前の金も卷兩御失墜也。兩方ともに罷立と申付られけるをいづれも発明なるさばきなりと是を感じ。此段御耳に立るに中／＼御同心なく其方どもが氣のつけ所相違也。此式人内談にてかく取むすびし作り物也。其子細は拾ひし者其ぬしと論におよばず捨やうはさま／＼ありしに。爰に出ける所第一の聞也。正直ものと都に良を見しらせすゝ／＼人をかたりのたくみせしには違ふまじ。其二人呼かへせと又御前にめし出され右の段／＼仰せわたされ。有のまゝに白狀申さぬにおゐては拷問ときびしく御せん義かゝれば。山家の者驚きあゝの者に頼まれ。何心もなくいひふくめい通りに拾ひ手に罷成あらそひいと申上る。然ればあくじは落し手目が工み成。見分家に杖突年をして無用の心根仕置にもすべきなれとも。おのれが身の上ばかり外にさはらぬ事なれば。浴外までも拂ふべし。又たのまれし者目は久しく住所の鞍馬にちかき麓里を追拂ひ給ひけると也。

五 念佛賣てかねの声

むかし都の町に余宗まぜずに一町残らず。法花の宿札を出して朝暮題目を唱ふ音。耳かしましき中に淨土宗只卷人ありしが。大鉦うち鳴して掛念佛申を法花のかたより是を嫌ひさま／＼進めて。ありがたき事ども聞せけるに中／＼思ひ付心ざしもなく。各／＼腹立して町内にはばかり置事家持なれば是非もなし。借家ならば置まじきものをと。自由になりがたき事を悔みいづれも内談して。此者まづしければ銀子とらせて同じ宗旨にせんと。ひそかに此段を聞せければ欲にて同心いたせり。講中よるこび銀子三十枚集めて是を遣はしければ。いよ／＼珠教を切て町並に成ける。折ふし七月十三日此祝ひに題目踊をはじめて。其者の門に人の山更也。其後は夫婦ながら御影講にも寺まいりして。ひと／＼の法儀よろこびしが明年の春に成て。彼岸の入より又念佛を申叩き鉦におどろき。町中立合はいかなる事ぞといへば。亭主十面つくつてもはや題目いやになつて。以前の念佛申弥陀を頼むといふ。扱も我まゝなる申分。兎角右の銀子を戻せといへば歸すべき子細なし。法花にならば銀子合力申との事なれば。約束の通り一たびは成けれども。にわかには嫌ひに成淨土願ふ也。死るまでの手形はいたさずそれがしが心のまゝと。なを責念佛を申所悪し連此儀御前申あくれば。兩方めし出され御聞あそばされ。無用の法花にすゝめ事とおぼしめされ。此銀子は歸すべし請取べし。然ども親代より今に淨土を法花になしければ。其間の勤めおこたるべし。右の念佛を勘定して町中より申て歸へし。其後銀子請取申べしと仰せ付られ罷立て宿に歸り。色／＼内談いたせども町中念佛申事を迷惑いたし。銀子そんにして濟しけると也。

六 待ば筭用もあいよる中



むかし都の町にうなぎき祖母とて仲人口のよき者有。年中是を身過にして首尾させぬといふ事なし。爰に三十五に成男の年を隠して。十五に成むすめと縁組取持頼みの祝儀おくらせ相濟しける。其後娘の親聲の年ふけたるを聞出し。身体はふそくなけれどもいかにしても二十の違ひなれば。中へ娘をやるまじきといふ。又男のかたにはよばねば堪忍いたさず。仲人迷惑して此段御前へ申上れば兩方めし出され。男の儀各別なる悪事あらば申べし。年の違ひの分には約束のしるし取ての上。急度娘をおくるべしと仰せ出されし時。此儀は中立の者あまりなる偽りを申。むすめは十五に罷成ゆに三十五の男は年二十の違ひ御座ゆ。せめて半分の違ひなれば娘をおくり申ゆ。此儀はきこしめしわけさせられ。似合ざる縁組たのみを歸したき御願ひを申上る。時に仰られけるは其方が望みの通り今年過て娘をおくるべし。聲もそれまで相待べし四十になれば女は廿。年半分違ひ時ありと仰せ付られけると也。

七 銀遣へとは各別の書置

むかし都の町衣の棚に利発なる商人有。内證よしと世間の見立違はずゆるりと世を渡りけるか。持病に筋骨をいためしが。年にしたがひ氣力おとろへて死覺悟を極め書置を残しぬ。當年十五に成男子より外に子といふ者はなし。此子が母親は九年跡に相果。其後よびむかへし妻には一子もなく継母ながらひとりの跡取をかはゆがりて。万事のしかたに如在なく自子にすこしも替る所なし。親仁もこれを満足して世に思ひ残す事もなく。有銀式百貫目は一子にゆづり。銀式拾貫目後家一代の遣ひ銀に。扱又手代兩人に銀拾貫目つゝ甲乙なしにとらするなり。今迄の通りに此家を見立申べし。此外するの親類中に所務わけ旦那寺へのあげ銀。残る所もなく書して置いた息のかよふうちに此銀ともを相渡すべしと。婿の明たる取置して次第に命のせまる時。一門手代を呼集め我等家期はけふに極まる心覺有。此時只一言いひ残す事有。忤子當年十五歳なれば今より二十五に成迄十年のうちは。何やうの儀にても異見する事無用なり。殊に女若の遊興たとへ何程の事にもかならず留る事なかれ。心まかせに金銀を遣ひすてさすべし。扱二十五歳を過て一錢にても遣ふ物ならば御前へ申上此家を追出すべし。云置は是ぞと段へ申渡し其後相果ける。銀遣へとのいひげん前代になき事也。日比は利発なる人なりしが死前に何をか申けるそと。京中に取沙汰して是を笑ひぬ。今時の若ひ者吟味するさへやまざるに。此忤子十八より銀遣ひ出せしに誰か異見も成難く。自然にいふ人あれば御ぞんじの通り親仁の云置なりと。世間かまはず奢て六七年のうちに右式百貫目の銀百七十貫目勘定たらす。いづれも迷惑して内證にて色へ申せと是を聞されば式人手代思案におよばす身体つかさざるを見極め。右段へ申上向後金銀遣ひやみ申御願ひを申上れば。御聞とゞけあそばされ親がいひけん今二三年なれば其通りに随分遣はせと仰せ出されし時。今すこしの所にて此家立ざる事を御なげき申上る。其段は髓に家の継ぐ事あるべし。手代とも氣つかひなく商賣手廣くいたすべし。忤子も二十五の以後云置をむくにおゐて申來るべし其家を追拂ふへし。第一母親に孝をつくせと仰せ出されし。兩人の手代何とも此御意承りかねたる良つき御覽あそばされ。其方ども合点ゆかぬと見へたり。所の沙汰にあへる程の我へが主人はまで無分別は申さぬ儀也。早速宿に歸り親るい町中立合内藏ゑんりよなしに吟味いたしに見るへしと仰出され。いづれも罷歸り藏へ相改めけるに。人の氣のつかぬ片隅にむかし長持ひとつ有て。其蓋に書付おかれしは是我等が御影の金佛也。是を十三年忌に明て吊ふへしと有。鏡まへうちはなちて見るに又ひとつの筥有。此中に壹万兩包籠皆へ是を見とゞけ又御前へ申あぐれば。其まへに念を入二十五の年相渡すへしと仰せ付られ。御推量のたがはざる所を感じける。其後金子を請取しが御前へしれての事なれば二十五の以後は一錢もあつかはず此家立けると也。

八 壺堀て欲の入物



むかし都の町西の洞院のするに。三間口の賣家有同じ町内に借屋住ひして年ひさしき、衣裳のうわ繪を書る人此家屋望みしが。然れとも老人しては調い難く同職の人をかたらひ。一間半つゝ買取其家に二人ともに移りて勝手の諸道具をなをすに。今すこしせまき事を極み殊更井戸の有所兩方の氣に入されは。兩人申合して三間の堺目に堀へしと所を見立水筋を吟味して。宵より鶴の羽を蒔ちらし置。其はねに朝露ふかくくむ所かならず清水成と。古人の傳へにまかせて所を改めすまして堀掛。上土四尺はかりもあくる時鋤鐵の羽にさはる物有。何そと見ればふるき壺の口を油石灰につめて。木札に印判ありく〜と見へて年号は消けるが。辰の十月二日に是を埋むとはかり見えたり。井戸堀是はといさみて金子をほり出しました。我等も大分お祝ひ給はれこんな事にはむかしの例御座ると。堀あけもせぬ先より身勝手申せは。一方の亭主歎き壺の有所我等がかたの地なれば。かたつけて取べしといふ一方には此家我等か申出して買ければ。此方へとるべき物と此論やむ事なし。はや世間に沙汰して金堀出しけると見物あつまり。町の者ども立合中く下にては濟し難しと。右の次第を繪圖につくりて井戸にはあまた番を付置。町中御前へ罷出段く申上れば。御直にきこしめし其家屋敷賣てのきし者は。茶の湯者ではなかつたかと御たつね有し時。年寄罷出御意通り隠れもなき茶の湯好にて御座り。是は十四年以前に頓死いたし此跡一人の孫請取。此たび賣渡し東國へくだりいと申上る。其靈別の事あるまし前の地主埋み置て。新しきをふるためか又は油けをぬく事なるべし。此壺兩人にとらす也隨分大事に堀出し汝等が欲の入物にせよと仰せくだされ。皆く罷歸りて是を明て見るに中にも何もなかりけると也。

### 九 妻に泣する梢の鶯

むかし都の町千本通りに俗性歴々の浪人ありしが。武藝の外音曲の名人是ゆへ高家がたに立入。人の御機嫌取て日を暮しぬ。有時さる御所に宵は松はやしあつてすぐに泊り。明ぼのに大書院の梅垣を見渡しけるに。例年より花も春

めきて咲初鶯殊更に轉る中に。三光あり〜と聲のあやぎれしたる鳥の。柳の枝に留高ふとまつて日毎に愛をさる事なし。此鶯を飼鳥にあそばしたきよしの御望みなれば。幸ひなる御物語り申あげしは。私別して仕るゑさしの上手西の京あたりに住よし申あぐれば。それよと仰せられしに浪人ゑさしの許に行て。同道して御屋形にまいり木末の鶯をさし留させあげしに。早業の手づま御褒美救く給りて私宅歸りぬ。其次日彼浪人ゑさしの宿へきのふの首尾よろしき一礼にまいりしに。女房浪人に狐付我夫はいづかたへつれゆかせ給ひ今に歸し給はぬ事ぞとなげきぬ。此儀何とも合点ゆかず成程昨日の暮かたに戻られしといへど。中く此斷りを聞入ずして亭主の有所はそなたならでしる人なし。是非に歸し給へと大声あげてなげく時。隣近所の人犬勢立合おつとて先浪人をうたがひ。兎角宿を御同道なされ御出い事まきれなく。それより今に歸へられねば内儀こなたへたづねられしも尤に存いと。いづれも道理をせめて申せば。浪人も此いひはけにめいわくして。是非なくきのふめしよせられし御かたまていひ聞しても女房一圓合点せず。既に御前へ申あげしに浪人をめし出され。色く御僉議あつて扱昨日同道いたしたるかたを御たづねあそばしけるに。大事節武士形氣を出し私宅にて一日語り申いと別の事もなき事に先様の御名を包みける。寂前又町の者に申せし御かたはと御たづねあそばしけるに。何とも先の儀は申さぬよし是に御うたがひかかり。段く其方に越度有まつすに申さぬにおゐては其方拷問して聞かと仰せられし時。浪人眼色かはつて扱も是非なし私のころしまして御座ると申上る時。此一言に女房は身を燃し扱も〜情なや。日比別して語られし中を意根にもせよ欲にもせよ。さりとはうらめしき浪人殿となげく時。先女をしづめさせられ。其死人は何方に有けるぞと御たづねありしに。浪人驚く氣色なくそこはぞんせぬと申上る。然らばころしたといふはいかに。いはねば拷問との御事武士のせめられては末代までも口惜く存じいと申上る。扱は此者はつかまつらんときこしめしわけさせられ。先浪人は其所へ御預けなされ大小まで御渡しあそはし別条なく御歸しあつて後。其ゑさしの行衛たづねかさねて罷出べしと仰られ。おの〜宿に歸り手分



をしてたづね出し。そんじの外なる竹田道に切られて死骸御座いと申上る。扱は追はぎの仕業なるべし早く是を取置べし。さて又女はなしみの事なればひとしほなげく所至極せり。さりながら何ともせんさく成難し。此上はおもひを晴し夫のなき跡を吊ふべし。子もなきものといへばひとしほふんにぞんする也。所の者もいよく目をかつめいにおよばぬやうに仕まつりとらせと。御慈悲なる仰付られ本人其外も泪を洒し有難そんじたてまつりぬ。扱明後十九日は我等心ざしの命日なれば。其男の吊ひ科としてすこしの金子をとらすべし。其女房の一門又は別して者を玄關まで取につかはすべしと仰られなをまたかたじけなき次第と皆く御前を罷立ける。扱十九日の早天に年の比二十四五の男金子頂戴に罷出ける。此段申あぐれば其者をめされ女のために何程の親類成ぞと御たづねあそばされしに。只亭主と念比いたしゆよしみに頼まれ申ゆよし申上れば。おのれ其分にて今日の使は物好成と。是より段く御兪議つものり。女と密通あらはれかの男を内談にて切ころさせし悪事極りて御仕置にあいけると也。

本朝櫻陰比事 卷 四

目 録

- 一 利發女の口まね 誓願寺前の珠敷屋  
声なふて人をよふ事
- 二 善悪二つの取物 童子に小刀持す人は  
安房銚をつくれる事
- 三 見て氣遣は夢の契 人の身上は何にもよらず  
噂咄しさせましき事
- 四 人の刃物を出しおくれ 座興にも人の迷惑は  
用捨するが本意の事
- 五 何も京の妾女四人 世に替りたる書置状  
あとくの大笑ひに成事
- 六 枯木に花の都の参り 薬師さへなをさぬ病  
行力には成間敷といふ事
- 七 仕掛物水になす桂川 なき不思議のない世  
智恵の浅瀬を渡る事
- 八 せぬ事を隠しそこなひ 無分別はわかひ時の物  
萬ありのまゝにすべき事
- 九 大事を聞き出す琵琶の音 方角しれぬ夜の乗物  
晝のない屋敷すみの事



一 利発女の口まね

むかし都の町誓願寺の前に。大珠救屋の内儀迎自然と艶女にうまれつき。洛中の是沙汰目のこへたる人さへ幾度か同じ見ばせを見る事ぞかし。ましてや田舎人は聞傳へて京都にのぼれば。宿の亭主を同道して先祇園清水のつぎには此女房を見にくる程の姿。僧俗見せに絶ずおのづから商ひをして次第分限になりぬ。世には仕合の折ふし夫にはなれ二十五のとしより後家立すまして風俗はありしに替らず心はむかしに入かはりて。後の世を願ひ人のおもはくとは各別に身をおさめ。ことし髪置したる一子に頼みをかけて。此成人待て外には何の願ひもなく。あなたこなたより入縁の望みありて取持けるに一圓合点せず。女ばかりにして埒の明ぬる家職なれば。夫婦ありし時にすこしも替らずなを又内證よろしくなつて金銀溜るもひとりある子がためとおもひ暮しぬ。其近所にわすがる借宅して生國は駿河浪人ありけるが。諸事に利発なれば所に置ての重寶。問談合のため迎おのづから取立謠屋にして。小者一人つかひかすかなる渡世に年月かさねしうちに。おのづから町人形氣になつて人皆心をゆるし。勝手までも出入するに何か見かぎらるゝ事もなし。殊更珠救屋の亭主とは外より念比にして。二度のかならず賣掛の書出しをも頓筆ゆへたのまける。其後も以前のごとく物まへには見舞て書事を手祓ける。折ふし七月七日星見るまで爰に居て。若ひ者まじりに舞用して。大かたの仕合と盆の請拂ひの帳面仕舞て。心祝ひとて酒出されいつよりはすごして。世間咄しもおもしろくなつて御家つねなき大笑ひして。彼浪人を嘲こなたも歴々の男星ながら年に一度あふかたもなく。織女殿にはおとり給ふと又笑ひになりぬ。此男それまでは道を立けるが。座興の一言より俄に心をかけそめて。此宿を立歸る姿には見せて門を出さまに立忍び。板敷の下に隠れて家内しづまつて後。身をちよめて奥に入。後家が寐間に立れば蚊屋越の面影世に是沙汰の女。屋見る貞よりはうるはしく戀もひとしほまさりける。すこし高枕して帯紐とかすに手ちかへ刀を反ま

はし。用心深く夢も油断はせざる風情。浪人も此女にはおそれしが是まで乗かゝつたるふねと思ひ。づか／＼と近寄ば後家おどろき起あがり。されども声は立ずしていかなる御心入にてしのびたまふぞ。人きけばよろしからず首尾のよき時付やくお歸りと申せば。かく思ひ入ての上は命をかけての執心とわりなく申さるゝ時。後家は非におよばぬ分別極めて。かならず後悔したまふなと刀をとつてひざを立。中々浪人の心にしたがはず色々道理をつめ言葉をつくせども。此男聞わけずしてつめひらきあしくなる時。下々起あはして何者なるぞと立さはぐに。浪人灯火消てにげゆくを大勢取まはして是をとらへ。ざりとは悪きしかに也年々万事を人かましくぞんじて頼みけるに。女の寐間といひ金銀の有所をしりて夜中の忍び入。主人は各別此家の手代ども一分立難し。此儀は我々堪忍ならずといづれも愛ひをも聞入ずして既に御前に申あがれば。兩方めされて子細を御たつねあそばされけるに。浪人すこしもさわぐ様子もなく。此儀はあの者亭主相果申後私も妻子なき身にて御座いへば。たがひに申かはし内證にて念比仕申うらちに。後家外に又男を拵へ申いと相見えは。日比よしみの私にかゝる悪事をたくみ迷惑いたさせは。流石女こゝろの淺ましや此子細にて念比切とひそかに申せば濟事なるに。手代など談合にて盗人の沙汰になす事ざりとは恨み。おそろしき女と口上つゞけて申せば。後家は各別腹立して跡形もなき難義を申人也。女も女によるべしとたがひに證據のなき論になつて。しばしは埒の明ざる時。後家涙を洒し申上るも近比御恥しき事ながら。わたくしにおゐて不義つかまつらん子細御座い。若ひ時より身に開葺と申難病を請申い。是は縁づきいたし二三年後わづらい出し。夫婦の中さへめいわくに存い。なじみの事にて御座いへば情にて世間包まれ。かたらひをなして心がよりの年月をおくる處につれあい病死の以後は。ふつ／＼と浮世の事ども思ひ切申いに。此たびの儀に是非もなき身の難を申あげは。大かたならぬ因果とそんじたてまつりいと涙を洒す。時に浪人罷出あゝ女の申上り通り身の難病もたがひに語りあい私の手にかけて過し年の寒中養生までしてとらせいと申上る。其時後家大笑ひして我等の身に開葺と申わづらい御座い。隨



分人並に生れ付ひだりの肩さきにちいさき猿子ひとつ相見え申ひ。此外に毛頭子細御座なくひ。此上は何様にも御吟味と申上れば浪人赤面してかさねて言葉はなかりし。さりと曲もの也然れども盗人の沙汰にあらず。夫なき女を戀しのおよりの悪事なれば命は助て本國駿河におくるべし。然れば人の難義を申かけたるくわたいに片小鬘剃て追拂ふべし。扱又後家は即座の利発感じ入せ給ふと也。

二 善悪ふたつの取物

むかし都の町に車の音玉鉢の道筋をせばめて。祇園まつりのまねして童子集り山の形をつくりなせるに。守りもない子に無用の刃物を持せける。其中に七歳の童子あそび所をあらそひ。九才になる子を大小刀にして口を突割立所をさらず相果ける。死せたるかたの親のなげき。ころせし方の親の迷惑。一町の僉議にもいまだ智恵なき者の仕業兎角は堪忍した給へとさまざま嘸ひしに。中々合点いたさず是非に敵をとるへしと。人のいふ事聞入ず殊に母親わきまへなく御前へかけ出るを引とどめ。神主出家衆を頼み一代坊主にいたし。其子の跡をとすべしと二親を詫ても取あへずつゝに御前に出ける、いまだ七歳ならば何のしやべつも有まじきと仰ければ。人をころす程の存立つねくも外の悴子とは各別と申上る。時にからくり細工の人形金子一兩御出しあそばされ。此二色を明日其童子とらして見る也。金子をとれば心あるによつて命をとる也。人形をとれば命を助る也、悪と善との大事爰に極むる也いよく明日つれ罷出べしと仰付られ。いづれも罷立宿に歸り。一門念比の衆中集まりて御前で見たに替らぬ人形を調べ。是を小判とならべ置金二とこいば命の長るとおどし。夜中同じ事を百たびもおしへて又其朝もいひ聞せて兩方御白洲に出ける。時にくだんの二色を御出しあそばされ。人形とればたすく小判取。命をとるぞと御意ある時。此童子立行小判をとればころされし方の親類進てかやうのふてき者と申上る。又一方の一家は只かなしくて覺べす戸をこえてなげく。

仰出されしは扱は智恵なきなき悴子に極まる也。命を取といふにかまはず小判をとる所儚りなし。命の外大せつものありや爰をもつて助置と仰せ出されけると也。

三 見て氣遣は夢の契

むかし都の町猪熊通りより染帯を拵へて。丹波の山家にかよふ商人有。此者の妻元は御所かたのすゑの女臈役してありしが。流石風儀は花の香今に残りて人皆目に掛ける。身體かるき者なればひとりの留守を氣つかひながら渡世は是非なし。殊更此男りんき深く旅立折ふしは女のしらざるやうに。宮守の血をとつてひだりの腕に付置ぬ。是を虫しし迎其女男にま見へぬうちは何程洗ふても落ざるためし有。昔日いかなる好色人か是を工夫仕出れける。此商人の同町にうき世男ありて此女を目にて忍び。物はいはずして戀れけるに女も自然と此男を思ひ入しに。有夜枕ならべし夢を見しに。男も又其夜忍び入てちぎりを籠し夢見る事。たがひに不思議なる縁とおもひける折から。若ひ者大勢語りぬる中にて何のゑんりよもなく。此事を夢咄しの種として大笑ひ扱も世間はさまざま也。其後彼夫丹波より歸り心ためしの虫しるしを見るに。消て跡なき事をうたかひ出し。我女房の自由はさまざま無理にかゝつてつよく僉議すれば。罪なき身にもかなしく留守中事はすこしも包まじと諸神をせいもんに立。彼夢の事までも語り聞せければ。それは隠なき美男にていよく氣をまはし。世上を聞あはずに彼男の夢物語り。あなたこなたに沙汰あれば扱は二人が不義外にしられて其口とめにかくはいひけると聞へたり。是は吟味すべき所と分別して。たとへ夢物語にもせよ男のある女の事を。身に添たるとの風聞堪忍ならず。女も夢に出合しといへり此分にては不思議暗ず。是蜜通にまぎれなしと此事御前へ申上。兩方めし出され御聞届けあそばされ。是は不義のしやうせきなし。然ども夫のある女の事たはふれし取沙汰する事越度也。又女も夢なれば迎無用の申事也。愚なる男のうたがふもことほり也。蜜通か夢の契か此